

かわりゆく地域とともに生きる —富山県朝日町の文化と社会—

地域社会の文化人類学的調査 22



2013

富山大学人文学部文化人類学研究室

目次

はじめに（藤本武）	1
1. 朝日町の概要.....	2
2. 宮崎の稚児舞の存続 —その源泉となるもの—（林日登美）	10
3. 祭が形成する地域のコミュニティ —草野の事例から—（前田あさひ）	27
4. 宮崎村における魚が形成する行事とコミュニティ（伊藤心之介）	40
5. 過去と現在における炭焼きの役割（田村史織）	49
6. 笹川における稲作の変遷と稲作グループが地域に果たす役割（土井冬樹）	66
7. 朝日町における伝統工芸の現状 —蛭谷和紙の事例から—（趙允溶）	86
8. 蛭谷におけるバタバタ茶の役割（長友増美）	99
9. 笹川の地神信仰のあり方と役割（東福寺薫）	121
10. 限界集落 朝日町 ^{だいら} 大平における生活（阿知波理子）	137
11. 地域の自然、文化資源を活用した教育の試み —蛭谷の夢創塾のあゆみ—（野田美貴） ...	152
12. 泊に住む子供達の生活から見る文化の変遷（松元湧樹）	161
13. ビーチボールが形成する朝日町のスポーツ文化（清水隆広）	170
14. 朝市の変遷とその役割（木谷祥）	189

地域別目次

・ 泊

12. 泊に住む子供達の生活から見る文化の変遷（松元湧樹） 161

・ 草野

3. 祭が形成する地域のコミュニティ ―草野の事例から―（前田あさひ） 27

・ なないろ KAN

14. 朝市の変遷とその役割（木谷祥） 189

・ 蛭谷

5. 過去と現在における炭焼きの役割（田村史織） 49
7. 朝日町における伝統工芸の現状 ―蛭谷和紙の事例から―（趙允溶） 86
8. 蛭谷におけるパタバタ茶の役割（長友増美） 99
11. 地域の自然、文化資源を活用した教育の試み ―蛭谷の夢創塾のあゆみ―（野田美貴） ... 152

・ 笹川

6. 笹川における稲作の変遷と稲作グループが地域に果たす役割（土井冬樹） 66
9. 笹川の地神信仰のあり方と役割（東福寺薫） 121

・ 宮崎

2. 宮崎の稚児舞の存続 ―その源泉となるもの―（林日登美） 10
4. 宮崎村における魚が形成する行事とコミュニティ（伊藤心之介） 40
13. ビーチボールが形成する朝日町のスポーツ文化（清水隆広） 170

・ 大平

10. 限界集落 朝日町^{だいら}大平における生活（阿知波理子） 137

はじめに

富山大学の文化人類学研究室（現在正式には人文学部社会文化コース文化人類学分野）では 1979 年の研究室創設以来、北陸の一地域で調査実習を行い、得られた知見を報告書『地域社会の文化人類学的調査』にまとめてきました。2 年次から 3 年次にかけての 2 年間にわたり、調査地の選定からフィールドワークを主とした調査、そして報告書の作成まで進めていく「文化人類学実習」の成果です。本報告書はその第 22 巻になります。

新潟県との境に位置する富山県北東部の朝日町を今回はじめてとりあげました。昨年度いくつかの候補地を訪れ、そのなかから最終的に朝日町を選びました。これまで一度も研究室でとりあげられてきていなかったからだけでなく、二度下見に訪れるなかで地域の魅力が感じられたことが大きかったのではないかと思います。海と山の雄大な自然に恵まれ、その間にわずかに平野が広がるいわば富山県の縮図といえる朝日町にはいったいどのような人々の文化と社会があるのか。学生たちは果敢に調査に挑み、関心を抱いたテーマについてそれぞれ報告してくれました。祭りや年中行事、信仰や生業など文化人類学の伝統的なテーマはもちろん、より現代的なテーマにも挑戦してくれました。伝統的なテーマをとりあげる際もそのみを固有で不変のものとして扱うのではなく社会における役割やその変化といったことをむしろ中心に考察してくれました。

じつは私は一昨年本学に赴任したばかりで、地域に深い理解があるわけではありません。またこうした長期におよぶ調査実習の授業を担当した経験もありませんでした。そのため出だしが例年にくらべてやや遅れてしまいましたが、学生たちは途中から多いに積極性を発揮し、遅れを挽回してくれたように思います。一週間集中して調査を行う夏合宿までに、平常の授業ですでに 10 回ほど訪れていましたが、それ以外にも足しげく朝日町に通い自主的に調査を行ってくれました。その甲斐あって、最終的な原稿ではこれまでの報告書と何ら遜色ない水準まで達してくれました。また 13 人全員の原稿をそろえられたことも大きいです。テーマやフィールドは違っても 2 年近くにわたる実習の時間を共有することで、学生たちは助け合い、協力しながらやっていく大切さも学んでくれたように思います。

この報告書は各人のテーマはもちろん、全体のタイトルや表紙、章立てなどほとんどすべて学生が考え話し合って決めていったものです。私は参考意見を述べることはあっても、あくまで学生たちの主体的な判断にゆだねました。その意味で学生たちの手づくりの報告書と呼べるものです。もちろん内容に未熟な点が多々あることはたしかですし、初歩的な間違いも含まれているかもしれません。その責はすべて私にあります。それでも学生たちが足しげく通ってまとめた成果を寛大に見ていただけるとありがたく存じます。

最後になりましたが、朝日町のみなさま、とりわけ合宿の際に大変お世話になりました蛭谷の長崎喜一様と宮崎の河内傭子様には記して謝意を表したいと思います。

2013 年 2 月

富山大学人文学部 藤本 武

1. 朝日町の概要

1-1. 地形と気候

朝日町は富山県の最も東部に位置する県である。東は立山連峰の一部である山稜を有し、更に新潟県青海町と糸魚川市に接し、西は入善町、南は黒部川の支流となる薙川の水源地となる柳又谷、宇奈月町と入善町の一部、北は日本海に面している。海拔が一つの町で0メートルから朝日岳山頂2418メートルまでの幅を持ち、山が日本海に突出しているという独特の環境が、地形と気候、またその地に生える植物の分布を支配している。

このように山と海が非常に近いため、山から良質な養分が川を流れて海へ流出し、その養分を求めてプランクトンが集まり、そのプランクトンを求めて魚が集まってくるため、朝日町は漁場として栄えた。また、宮崎・泊の海岸には姫川上流からヒスイが流れてくるため、ヒスイ海岸と呼ばれている。エメラルドグリーンのヒスイがちりばめられているその様子は、1996年に制定された「日本の渚百選」の一つに数えられている。

また、山には鳥獣が生息し、豊富な山菜や木の実に恵まれているため、狩猟採集も活発に行われてきた。

朝日町は海岸地域から高山地帯に及ぶという地形の関係上、平野部と南東の山頂部では3℃以上の気温差がある。また冬の積雪量は山地ほど多く、年間降水量にして約1000mmの差がある。

季節的な推移について見てみると、冬季は日照時間は少ないが毎日同じような天気が続く気候は安定しており、三寒四温的傾向がある。春になると融雪により河川は増水し、梅雨期の雨は太平洋側に比べて少ない。梅雨が明けると本格的な夏になり、年間を通じて最も雨量が少ない。富山県はフェーン現象の顕著なところであるが朝日町は少ない。晩夏から秋にかけては大変良い天気であるが、11月末から北西の季節風が吹くと海岸浸食が起こるようになる（朝日町誌 自然編,1984）。

朝日町の位置と調査地区については、図1に示す。

表 1. 朝日町の気象観測記録

年 (平成)	年間平均気温	最高気温極値	最低気温極値	日照時間	最深積雪 (cm)	平均風速 (m/s)	総雨量 (mm)	最大日量
18	14.2	35.2	-4.4	1468.0	84	3.8	2861	95
19	14.5	35.4	-1.3	1577.0	12	3.9	2660	91
20	14.3	34.4	-2.8	1720.8	19	3.9	2342.5	110

朝日町役場ホームページ<http://www.town.asahi.toyama.jp/index.php?u=about/kisyo.html>

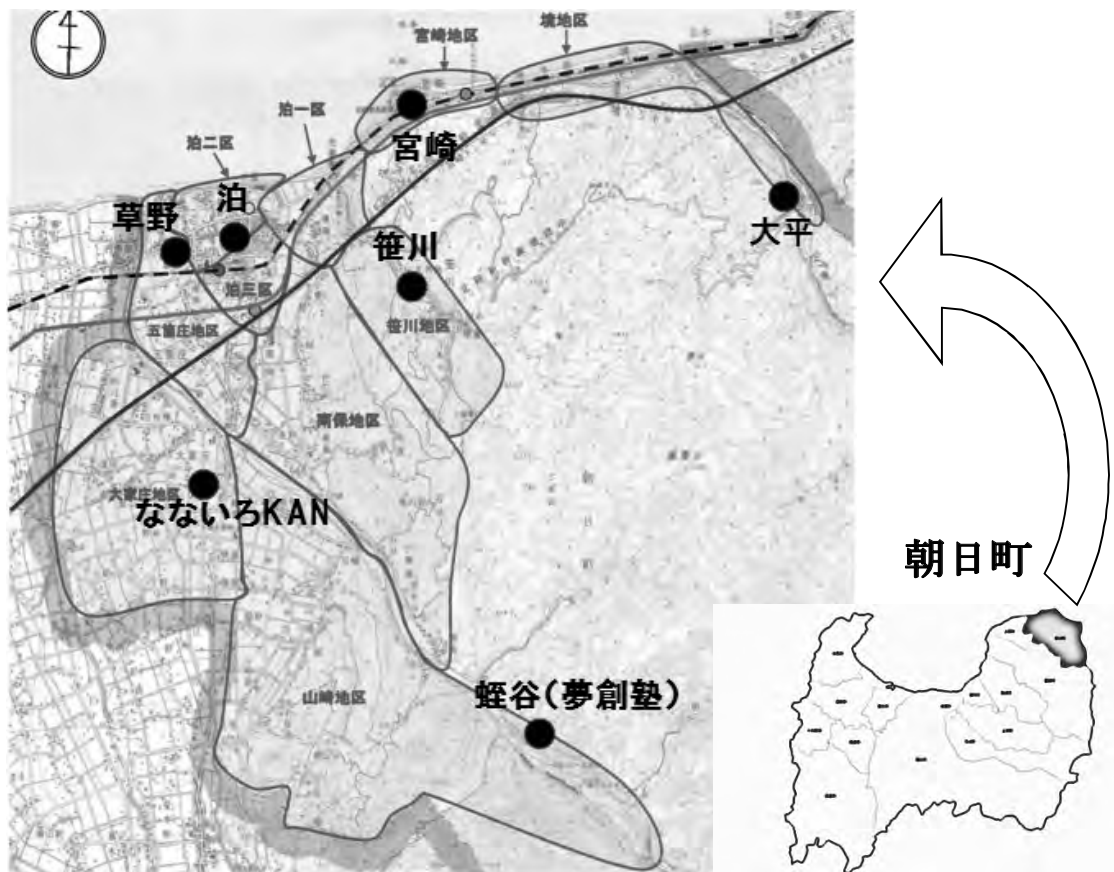


図 1. 朝日町の位置と調査地区
(朝日町役場ホームページより作成)

1-2. 歴史

朝日町は富山と新潟との県境に位置し、昔から交通の要所であった。そのため境地区や泊地区は宿場町として栄えた。泊地区は、江戸時代の頃、玉喜左衛門が旅人を泊めていたために「泊」と呼ばれるようになったとされている（泊町の文化の変遷については第 12 章）。

また、朝日町は海と山が近く、古くから漁業、農業、林業などの産業も各地で発展させてきた。宮崎地区は古くから漁業を主な生業としてきた村であり、沖に突出した岬に社を建てたことから宮崎（宮の岬）と呼ばれるようになった。荒い波を避けることのできる天然の良港をもち、山が近く栄養分が豊富なことから、水産資源に富んでいたばかりでなく、京都と新潟、東北などを結ぶ連絡地としても栄えた。

農業や林業は山間にある蛭谷地区と笹川地区で盛んであった。稲作は両地区とも村の近くに田圃を持っていたが、それだけでは収穫が足りず、山を切り拓いて田圃（山田）を作っていた（笹川の稲作については第 6 章）。木材は建築材に使うほか、生活燃料として用いたり、炭にして各地に出荷したりしていた（炭焼きについては第 5 章）。蛭谷地区は、佐賀の土地から来た木地師たちによって開かれたとされ、また笹川地区では 7 人の祖によって開村したという伝承が残っている。その名残としてか、現在でも地神の信仰が残っている（地神信仰については第 9 章）。

そうした村々が統一されはじめたのは明治に入った、1889（明治 22）年 4 月 1 日の市町村制の施行による。富山は 2 市（富山市と高岡市）31 町 338 村に編成され、現朝日町には大家庄村・山崎村・南保村・五箇庄村・泊町・宮崎村・境村・野中村の、1 町 7 村が成立した。そして、1954（昭和 29）年 8 月 1 日に町村合併促進法によって、人情風俗・習慣及び文化など各分野に共通点を有していた山崎村・大家庄村・南保村・五箇庄村・泊町・宮崎村・境村の 1 町 6 か村が合併した。そのとき、町が発展するにふさわしい名として、域内の最高峰である朝日岳にちなんで「朝日町」と付けられた。

1-3. 人口

2012 年(平成 24 年)11 月末日現在で、朝日町の世帯数は 4,996 世帯、人口は 13,619 名、そのうち男性は 6,368 名、女性は 7,251 名である。

朝日町の 1920 年から 2007 年までの人口推移を図 2 に示した。戦後の 1947 年から高度経済成長期の初期の 1955 年までの間が人口のピークである。最も人口が多い 1950 年には、人口 24,722 人を示していた。それ以降は、人口は減少傾向にある。また、近年人口が減少している一方で、世帯数は大正・昭和期よりも増加する傾向にあり、核家族や単身世帯が増え、1 世帯あたりの人員が減少していることがうかがえる。

続いて、朝日町の年齢別 3 区分人口を、図 3 で示した。図で示すとおり、年少人口の割合は減少の一途をたどっている。1990 年の時点で、高齢人口が年少人口を上回った。1960 年には人口全体の 3 割を占めていた年少人口が、2005 年には半分以下の 1 割強ほどになっている。それに対して、1960 年には人口全体の 1 割にも満たなかった高齢人口が、2005 年には 3 割を占めている。徐々に年少人口と高齢人口の割合が近づき、ついに逆転するという結果になっている。国連や WHO(世界保健機関)の定義によると、65 歳以上人口の割合

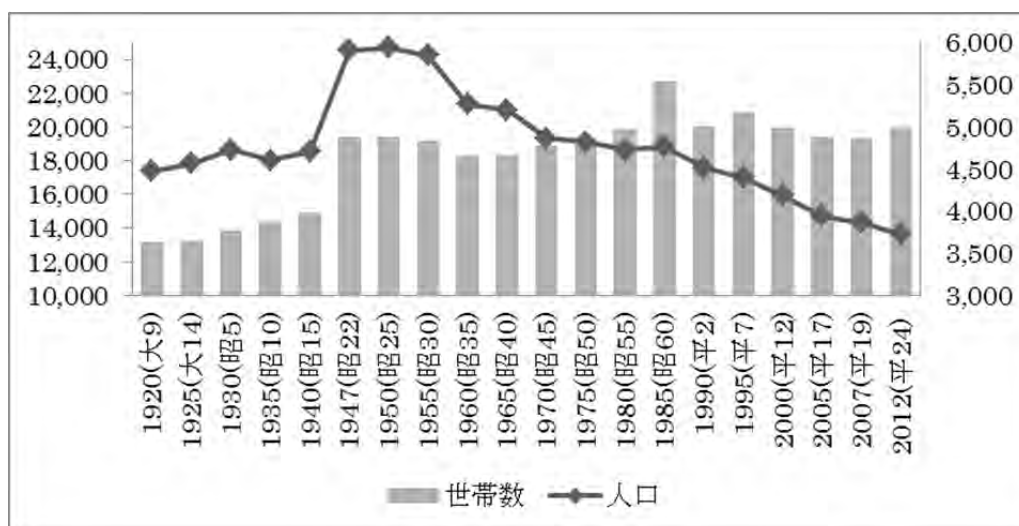


図 2. 世帯数と人口の推移

朝日町役場ホームページより作成

(<http://www.town.asahi.toyama.jp/index.php?u=about/jinko3.html>)

が7%超で「高齢化社会」、65歳以上人口の割合が14%超で「高齢社会」、65歳以上人口の割合が21%超で「超高齢社会」とされており、朝日町は少子高齢化が進み、中でも65歳以上人口の割合が21%を超える超高齢社会であると言える(限界集落については第10章)。

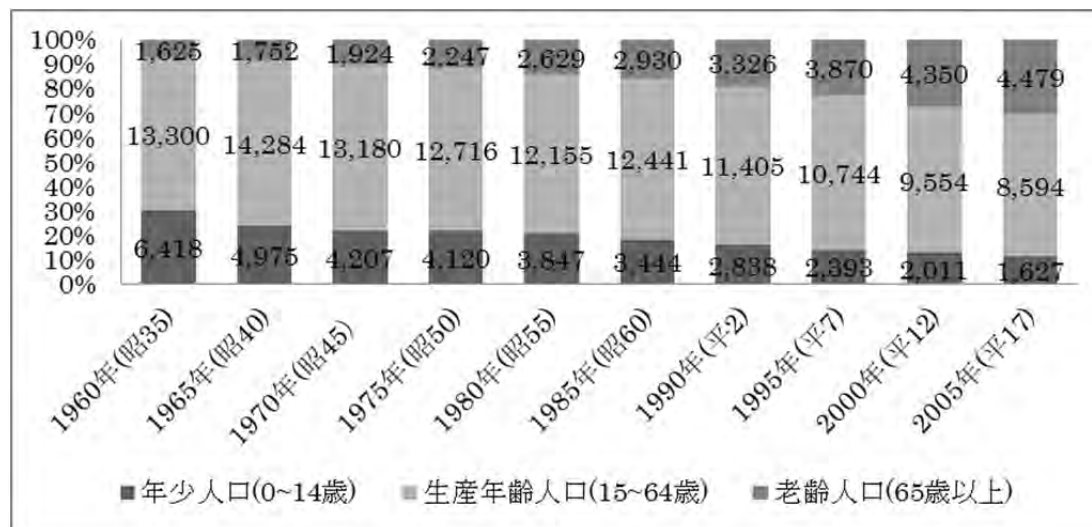


図3. 年齢別3区分人口

朝日町役場ホームページより作成

(<http://www.town.asahi.toyama.jp/index.php?u=about/jinko5.html>)

1-4. 産業

朝日町の産業別従業者の割合を図4で示したが、第2次産業と第3次産業が全体の9割以上を占めている。第1次産業の農業の就業人口は533人、漁業の就業人口は77人である。図5は2006年の農業産出額の内訳である。

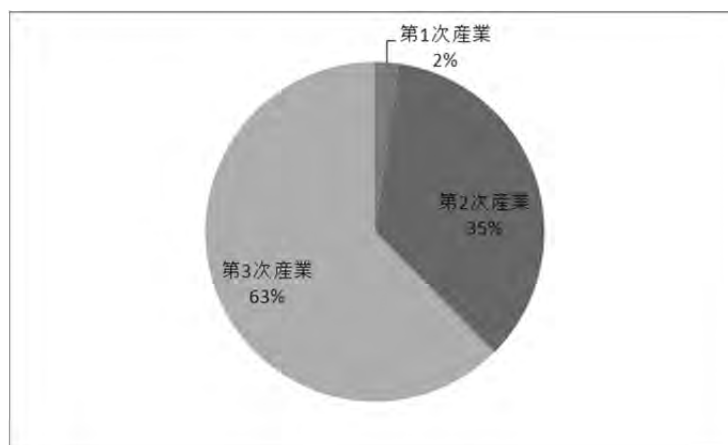


図4. 朝日町の産業別従業者数の割合

(平成21年度富山県統計年鑑をもとに作成)

朝日町産「あいの風」に代表される米の生産が最も多く、次いで野菜類や豆類が多く生産される。これらの農産物を活用し、金糸瓜の粕漬け・みょうがのみそ漬けなどの特産品加工がさかんに行われている。また、朝日町の特産品の一つであるバタバタ茶は朝日町商工会やなないろ KAN にて販売している(バタバタ茶については第 8 章、特産品については第 14 章)。

漁業については、図 6 で示すようにあじ類が最も多く、次いでぶり類、カニ類が多く漁獲される。宮崎地区の名物であるタラ汁に使われるすけとうだらは、以前は大量に漁獲されていたが、近年ではほとんど取れなくなっている(宮崎地区の漁業については第 4 章)。

第 2 次産業として、蛭谷地区の蛭谷和紙が代表的な伝統産業としてある。蛭谷和紙は、富山県内の八尾和紙、五箇山和紙と並ぶ越中和紙として国の伝統工芸品指定を受けている(蛭谷和紙については第 7 章参照)。その他にも建設業や製造業の従業者が多く、第 2 次産業の割合を高めている。第 3 次産業の割合が最も多いことの一つの要因として、観光業に力をいれていることが考えられる。朝日町の観光地として小川温泉は有名であり、また宮崎地区にはたら汁を扱う民宿が並び鉱泉などの温浴施設も多い。また、蛭谷地区にはグリーンツーリズムの一環ともとれる、里山生活を体験できる施設である夢創塾があり、多くの体験者を受け入れている(夢創塾については第 11 章)。

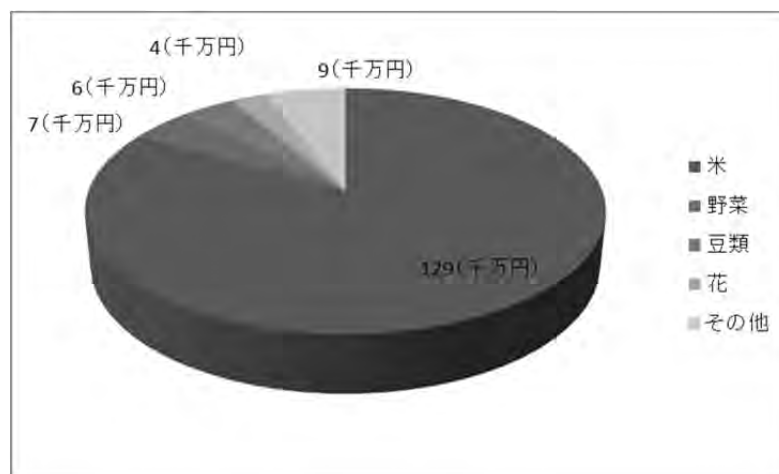


図 5. 2006 年の農業産出額の内訳

(農林水産省統計情報

<http://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/16/343/index.html> より)

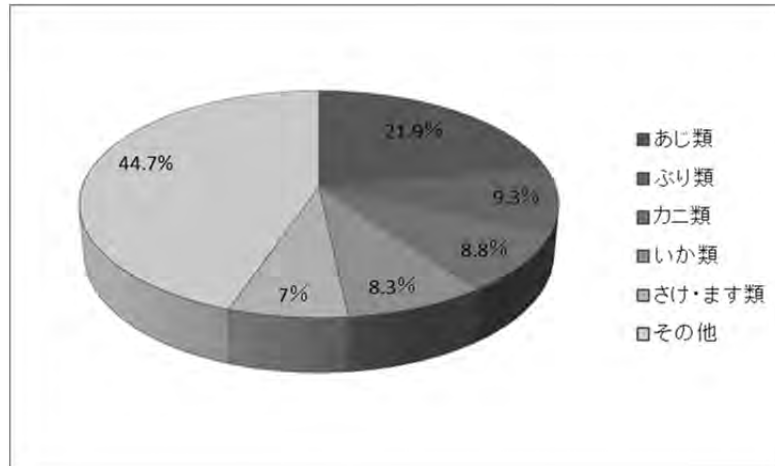


図 6. 2009 年の海面漁業の業種別漁獲量の内訳

(農林水産省統計情報)

<http://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/16/343/index.html> より)

1-5. 年中行事とイベント

朝日町では、年間を通して様々な行事やイベントが行われている。
大まかなイベントを表にした (表 2)。

表 2. 朝日町の行事とイベント

4月下旬	城山まつり
5月3～5日	鹿嶋神社春の例大祭
6月下旬～7月	鬼遠祭り
7月上旬	翡翠カップビーチボール全国大会
8月上旬	納涼あさひまつり
8月中旬	笹川秋祭り
9月上旬	全国ビーチボール競技大会
10月	米吊り祭り

大きな行事として鹿嶋神社春の例大祭、米吊り祭り、獅子舞、鬼遠祭^{ぎわん}、ビーチボール大会について述べる。

鹿嶋神社春の例大祭は毎年 5 月 3, 4 日に宮崎地区にて行われる。豊漁・豊作・家内安全を祈願する春祭りである。神事後、神輿が巡行し、その後神主らによるお祓い・獅子舞・稚児舞が順番に 2 日にわけて地区の家々を一軒一軒まわって行われる (稚児舞については第 2 章)。

米吊り祭りは 7 年に 1 度、10 月に吉祥院の御開帳に合わせ山崎地区にて行われる。辻岩崎の公民館より吉祥院まで、願念坊主・案山子に扮装した人々が青笹を持って清める。奉納行列は 4 人 1 組になって、3 歩進んで 2 歩さがるという方法で進む。その内 3 人は若衆で、丸太を十字に組み奉納品の御米・御酒を吊って進み、残りの 1 人は唄い手となって進む。

鬼遠祭は泊脇子八幡宮で行われている大祭である。鬼遠祓の神事であり、2012 年度は 6 月 30 日から 7 月 2 日に開催された。その中で 6 月 30 日に神殿にて神事が執行されている。神社から氏子に紅白の人形が届けられて、その人形に家族の氏名と年齢を記載して社殿で罪やけがれを除いていただけるように念じ、息を吹きかける。この人形が形代として人の災厄から守るのである。

また、朝日町ではビーチボールという競技が盛んである。このビーチボールは朝日町発祥である。そのビーチボールの大会は毎月 1 回ほど開催されている。主だった大会は 7 月 7, 8 日に 60 代 70 代の全国大会「翡翠カップビーチボール全国大会」9 月 8, 9 日に「全国ビーチボール競技大会」が開催される（ビーチボールについては第 13 章）

富山県教育委員会では、平成 16 年度から『とやま文化財百選』事業を行っている。それによると朝日町では、14 か所（うち 4 つの地区が休止中）で獅子舞がおこなわれている。そのうち富山の獅子舞百選に登録されているのは境、笹川、平柳、草野の 4 か所である。

境の獅子舞は、4 月 15 日と 10 月 15 日に近い日曜日に行われる。獅子舞の形態としては、一人が獅子頭を被り、その後ろの尾持ちと呼ばれる人物が胴幕を持つ二人立ち獅子である。新潟から伝わった越後型の神楽獅子であり、舞手は刀や御幣を持って悪魔払いをする。また、越後型の神楽獅子には、一体の天狗がししあやしとして登場する。

笹川の獅子舞は、4 月の第 2 土曜日と 8 月の第 4 土曜日に行われる。獅子舞の形態は境と同じ、越後型の神楽獅子である。町の無形民俗文化財に指定されている。

平柳の獅子舞は、10 月の第 2 土曜日に行われる。獅子舞の形態は上記の二か所と同じく獅子一頭に尾持ち一人の二人立ち獅子だが、大勢の天狗がししあやしとして登場する、下新川型天狗舞獅子である。

草野の獅子舞は、10 月の第 2 土曜、日曜日に行われる。平柳と同じく下新川型天狗舞獅子である。二人立ち獅子としては獅子頭が大きいのが特徴とされている（草野の獅子舞については第 3 章）。以下は獅子舞の日時である（表 3）。

表 3. 各地域の獅子舞の日時

草野	10 月第 2 土曜日
境	4 月中旬、10 月中旬
笹川	4 月第 2 土曜日、8 月第 4 土曜日
清水町	4 月第 2 土曜日、10 月第 2 土曜日
大平	6 月 10 日に近い日曜日、10 月 21 日に近い日曜日
東草野	4 月第 2 日曜日、10 月第 2 日曜日
平柳	10 月第 2 土曜日
藤塚	10 月 15 日 16 日（三年ごと）
宮崎	5 月 3 日 4 日、10 月第 1 日曜日
横水	春季

このように朝日町では獅子舞をはじめ、様々な年間行事やイベントが行われている。また県境にあるという位置的特徴と、山と海が近いという地理的特徴もあって、固有のものが残っていることもある。以下の各章では、そうした内容についてそれぞれの地域で調査したことについて具体的に報告する。

2. 宮崎の稚児舞の存続

—その源泉となるもの—

林 日登美

はじめに

私の出身地の石川県小松市国府台は平成元年にできた団地で、伝統的な祭りがなく、昔からの祭りといえ小中学生の時に他の町のクラスメイトが参加していた子供獅子であった。朝日町が調査地と決まった時、前々から祭りの調査をしてみたいと思っていた私は、子供獅子と同じく子供が主役の祭りで、色とりどりの衣装の子どもが一生懸命踊る姿が可愛い稚児舞を調査することに決めた。そして調査をしていくうちに、踊り手である子どもの減少から来年は続けるのが難しいという稚児舞の存続の危機を知った。稚児舞が、これから存続していく上で、必要なことは何か。この報告では、宮崎地区の人々にとって稚児舞はどういうものか、これまでの稚児舞はどう存続されてきたか、という 2 つのことを明らかにし、今後存続していく上で必要なことについて考えてみたい。

1. 宮崎の概要

宮崎は宮崎城山の断崖を背に旧北陸街道沿いに家並みが細長く連なる海辺のむらである。2012 年 9 月時点で人口 512 人、世帯数 186 の地区である(朝日町役場,2012)。観光資源に、ヒスイ海岸、オートキャンプ場、たら汁、灰付ワカメ、鹿島樹叢、稚児舞などがある。半農半漁で、古来漁村として名高い。北陸本線越中宮崎駅が近くにあり、南の山裾には北陸自動車道と国道 8 号線が通っており、交通の要衝となっている。

宮崎という名前の由来は、沖の島まで突き出た岬があって、その突端に鹿嶋神社が祀られていたため、宮の崎といいこれを村の名前にしたと伝えられているが定かでない。だが古墳時代の玉作遺跡があることや、鹿嶋神社が平安時代の延喜式神社であるという説があることから(朝日町、1984)、宮崎の起源を古代に求めることができる。しかし歴史上の文献で明らかに宮崎として登場するのは、中世初頭、平家討伐の兵を挙げた以仁王^{もちひとおう}の王子を北陸宮と称し、木曾義仲が宮崎に御座所を設けて推戴したことからである。その当時、宮崎にはこの地を本拠地とする宮崎党がいたため、北陸宮が滞在できる条件を有していた。宮崎党も加わった倶利伽羅峠の戦いでの木曾義仲の快勝により、宮崎党は繁栄した。しかし、宮崎党は、承久の変で朝廷側につき、京都に上がりきた鎌倉幕府側の軍を迎え撃つが、敗れ離散した。中世末期には北越の勇将、長尾、上杉の支配から、佐々成政まで領主がめまぐるしく交代し、1561 年秋に、加賀前田氏の領地になり幕末まで平穏が続いた(宮崎地区郷土誌編集委員会, 1993)。

2. 稚児舞の概要

まず稚児舞について概要を紹介し、稚児舞の起源について、また稚児舞が行われる祭りの概要について述べる。

2-1. 稚児舞とは

稚児舞はその年の豊漁豊作と家内安全、無病息災を祈願する鹿嶋神社の春の例大祭の中で踊られる。鹿嶋神社春の例大祭のうち、本祭の5月3日、4日に行われる。鹿嶋神社春の例大祭は宮崎地区内で行われる祭りである。稚児である踊り子のうち、男の子は勇ましい「槍おどり」、女の子は静かな「扇舞」を、また場合によっては男女両方で踊る「若衆踊り」を若い衆の唄と「カッチリ」という小さな拍子木の音に合わせて踊り、地区の家を2日かけて一軒一軒まわる。その内の若衆踊りは若い衆も最終日の鹿嶋神社の前で踊るが、踊り子とは違う振り付けで踊る。また稚児舞は、踊り子があでやかな衣装から、中世の時代の、時の流れに沿う洒落た趣向の通俗でない数寄を表現しようとした「風流」の定着が見られ、風流系の舞といわれている（朝日町立宮崎小学校, 1970）。この稚児舞は昭和46年に朝日町無形文化財に指定された。

2-2. 鹿嶋神社春の例大祭

鹿嶋神社春の例大祭は、5月2日に宵祭り、3日と4日に本祭の例祭と還興祭が行われる。宵祭りでは、本殿から御神体を持ってきて神事を行う。本祭は神事によって始まり、神輿で地区をまわって神によって祓われた後、神主さんと宮総代の人びとが家にあがりお祓いをする。その後に神楽が「ハライ」「アクマバライ」のいずれかを各家々の前で舞い祓う。最後に稚児舞が踊られ、家で停滞する悪神を慰めいたわり手厚くもてなすことによって送り出し村はずれに追い払い、村に幸福をもたらす。すべての舞が終わった後、神社へ神輿を帰し、宮の前での神楽と稚児舞の奉納で終わる。いつからこの祭りがあったか定かではないが、古代から人が暮らしていたため、古代の時代から現在の鹿嶋神につながるものを祀っていたのではないかと考えられる。神輿は亀が屋根についていて、いつからこの神輿の形なのかはわかっていない。神楽は越後獅子系で、起源は江戸時代の1804～29年頃（文化、文政の頃）とある（宮崎神楽保存会, 2012）。

2-3. 稚児舞の成立

言い伝えによると、昔、鹿嶋神の御手先として戦に臨んだ宮崎の祖先が、船の櫓を操り、手鉾をふるって神敵を打ちほらい、後々にも宮崎を侵す外敵から守るため勇敢に戦った姿を舞として鹿嶋の神に捧げたのが槍おどりで、戦で散った戦士たちの魂の迷いと荒みを慰め、地の内に鎮めて、その上に豊穰を祈るといった神道系の鉾舞と巫女舞が始まりなのが扇舞である。槍おどりと扇舞は、少なくとも平安末期(約800年前)に遡り、中世末期(約400年前)に完成をみたものと考えられ、その間修験者や宮崎を訪れる遊行や村人の見聞した他

村の稚児舞の影響を受けた。藩政時代は閉鎖的に伝承された。(朝日町立宮崎小学校, 1970) 若衆踊りはいつからあったが定かではないが、聞き取りによると少なくとも 1944 年(昭和 19 年)には若い衆が踊る踊りとして存在していた。いつから子どもも踊るようになったのかは不明である。こうしてそれらの踊りに明治以降の近代的な唄が付き現在に至る。

2-4. 踊り子

現在は小学 2～4 年の宮崎に住んでいる、もしくは親が宮崎出身者の男女 10 名程度が踊り子となっている。しかし子どもが多かった頃は、15 名の 1 つの学年の男子のみであって出られない子もいた。踊り子が男子のみの時は、背の大きい子は槍おどり、小さい子は扇舞を踊っていた。そのうち少子化と過疎化によって女子も踊るようになり、踊り子の年齢も 2 つの学年、3 つの学年と幅を広げていった。平成 24 年度は男子 6 名、女子 4 名参加する。現在宮崎に住んでいる子は全員参加し、男子 1 名と女子 3 名が、親が宮崎出身者である宮崎の住民ではない子どもになる。

2-5. 衣装

槍おどりを踊る男の子は黒の紋つきの着物をたくしあげ、赤い前垂れまわしをしめ、色とりどりのたすきをかけ、金と銀の槍を持つ(写真 1)。扇舞を踊る女の子は華やかなボタンの花笠を被り、腰に色しごき、袖口にまで飾房をつけた紫の振袖紋付衣装で飾った道中姿で日の丸の扇子を持つ(写真 2)。若い衆は緑や紺の着流しを着て、紐でつないだカッチリを持つ。若衆踊りを宮の前で踊るときは長襦袢に赤い前垂れまわしをしめる。



写真 1. 槍おどりの衣装



写真 2. 扇舞の衣装

2-6. 唄と踊り

唄は 1 番から 4 番までである。各番に、歌詞が何種類もある。槍おどりは勇ましく、扇舞はゆったりして静かで、若衆踊りは明るい曲調である。下は槍おどりの歌詞の一部である。槍おどりの唄の 1 番は 4 種類、2 番は 5 種類、3 番は 6 種類、4 番は 8 種類ある。

槍おどり

- 一. 城の越しからネエ 武士さんよ
城の越しからノイチョイチョイ
あらチョイト 宮崎見ればね
ドッコイショ
- 二. 塩谷判官 高砂殿へ 白木の三方に
腹切り刀 力弥由良助 今だ帰らぬか
ササ唯今暫時にヨシヨシ コノトーツラツン
- 三. 山茶花桜か水仙花か 寒中咲すのは
梅の花 牡丹しゃく薬 エ百合の花
主の事なら南天菊の花 私しゃ貴方に
ヨシヨシほうれん草 コノトーツラツン
- 四. 会津殿様 ア ヤッコラセー
お田楽好きで 城は丸焼け
ほんまに味噌つけた
ア ヤッコラセーヤッコラセ

唄全体は明治以降のもので近代的なおいが強く、時代とともに変化し滑稽味のある戯れ唄に近くなったり、断片になったりしたものが多い(宮崎地区郷土誌編集委員会,1993)。かつて宮崎党がいたことから武士についての内容や漁に関する唄など宮崎のアイデンティティに関する内容、西郷隆盛や歌舞伎の塩谷判官など唄が作られた当時有名な人物、エピソードに関する内容、恋愛について唄った内容のものがある。

踊りについて、槍おどりでは、1 番、2 番の唄で踊りながら家から出て来て、3 番の唄で家の前で一列になって踊り、4 番でまた家の中に踊りながら入って行って終わる。扇舞では最初から家の前で一列になって 1 から 3 番の唄を踊る。若衆踊りは槍おどりと同様である。

2-7. 稚児舞と鹿嶋神社の組織

ここでは稚児舞の組織とその他の祭りの為の組織について述べる。

2-7-1. 稚児舞の組織

宮崎稚児舞保存会という会があり、これに所属する人が稚児舞の指導を行う。以下本章では稚児舞保存会と呼ぶ。稚児舞保存会は 1997 年(平成 9 年)に発足された。昔は青年団、青年団がなくなった後は有志によって指導を行っていたが、指導者の人数の問題などから、稚児舞保存会が設立された。会員は 20 代~60 代の男性で構成されている。この内 20~40 代の人が祭りで若い衆を担当する。2012 年(平成 24 年)は若い衆として 11 名祭りに参加した。会員の中には踊り子たちの親や祖父もいる。

稚児舞保存会の活動として、今年は、3 月 22 日~4 月 28 日の平日に夜の 7 時 30 分から

9時まで、カルチャーセンターみやざきで指導が行われた。踊り子は宮崎地区の以外の子は泊などの近隣地区に住んでいて、そこから通っている。7時15分位から鍵当番の親子が来て、暖房を付けるなどの準備をする。稚児舞保存会の人8~11人の人が、踊り子たち10人を、休憩を1,2回挟み、または休憩せずに教える。男の子と女の子は部屋別に練習を行う(写真3、4)。男女とも唄の1番を踊り終えるごとに一人ずつに注意を行い、自ら道具をもって実演したり、また子供の手をとり動かしたりして教えている。練習中男の子たちのなかには「えーもう休憩?」といった声もあがり、意欲的な様子がうかがえる。またあいさつや靴をならべるなどの礼儀も稚児舞保存会の人から教えている。踊り子の祖母である60代女性は「子供は前間違えたところを踊れるかを気にして練習にでる。親が言っても聞かないことも若い衆のきびしい人に注意されたら言うことを聞く。学校いって遊んで眠くなる時間帯に稚児舞の練習があるが頑張っている」といい、踊り子たちが一生懸命頑張っている様子と社会のマナーを身につけていることが分かる。中には踊れないのが悔しくて泣く子どももいる。踊り子たちの意欲をあげるため、週の最後の練習日である金曜日にはお菓子が子どもたちに配られる。練習期間の最後の一週間は9時まで踊り子たちの練習をした後、若い衆の練習も行われ、若衆踊りや唄の節の談義などが行われた。



写真3. 練習風景(槍踊り)



写真4. 練習風景(扇舞)

2-7-2. 鹿嶋神社春の例大祭の組織と役職

鹿嶋神社春の例大祭の組織と役職は、稚児舞保存会の他に、宮総代と宮崎神楽保存会と祭典委員長がある。宮総代は50代~70代の7名から構成されている。宵祭りの日に御神体を本殿から拝殿へ持っていき、神社の飾りつけといった神事に関わる準備を行い、神主と宮司と一緒に地区の家を一軒一軒まわってお祓いする。以前は青年団として踊り子を指導していた人が多い。神楽保存会は獅子舞を行う人が入会する会で、正会員8人、子ども会員35名である。10代~60代の小学校5年以上の男女で構成されている。祭典委員長は、稚児舞や神楽などの各組織、交通整備を取りまとめ、祭りの運営を行う。

以上のような組織だけでなく、稚児舞の踊り子の母親たちが、本番の着付け、化粧を行い、稚児舞や神楽、地区の組長の家族らが昼食の準備をし、祭り非関係者も各家で料理を準備したりし、祭りを支えている。

3. 2012 年(平成 24 年)の稚児舞

ここからは 2012 年(平成 24 年)に行われた稚児舞を中心に春の鹿嶋神社春の例大祭を記述する。宵祭りと例祭は例年通り 5 月 2 日、5 月 3 日に行われ、雨天の為、還興祭は 1 日順延して 5 月 5 日に行われた。

3-1. 宵祭り

午後 3 時から 5 時半まで、宮総代の人々と宮司が、本殿から御神体を持ってき、神社の提灯などの飾りを行う。晴れていれば、夕方になると提灯が各家に飾られるが、小雨だったので一、二軒のみ飾られた。午後 7 時から宵祭りが始まり、鹿嶋神社の拝殿で、宮司さんが祝詞を読み上げ参加者の身を清め、玉串の拝礼で地区の役員の会長や部長や祭りの各責任者が榊を手に取り捧げ二礼二拍一礼をする。この宵祭りへの稚児舞参加者からの参加は、稚児舞保存会会長と稚児舞保存会代表責任者のみとなる。拝礼終了後拝殿の前で神楽である獅子舞が行われる。その後、晴れの場合神輿を社務所へ移動させるのだが、雨が降っていたので、拝殿に留まった。次に御霊移しの神事が行われ、明かりを消し、宮司さんが御神体を神輿に移し、宵祭りが終了した。終了後、参加者がお神酒を飲んで談笑したあと解散となった。

3-2. 例祭

表 1. 例祭の流れ (5 月 3 日)

午前 9 : 00	式典 (宮)
9 : 30	子ども着付け (カルチャーセンター)
10 : 00	神輿巡行
	宮総代と神楽開始 (むらの西側から)
11 : 00	稚児舞開始
12 : 00 頃	昼食
午後 1 : 00 頃	稚児舞再開
～8 : 00 頃	2 回休憩を挟み終了 神輿帰社

表 1 に 5 月 3 日の例祭の流れを示した。9 時から鹿嶋神社の拝殿で、鹿嶋神社春の例大祭が神事によって始まり、神事は宮総代のナレーションによって始まる。宮司と神主が式典参加者たちの身を清め、祝詞を届ける。その後、玉串の拝礼が行われる。その参加者は、地区の役員の部長会長、祭り関係者の代表、朝日町の町議会委員や宮崎の老人クラブ代表など、地区や朝日町の役員が参加した。次に本来社務所で行われる神事が、神輿が拝殿にあるため拝殿で行われた。宮司と神主が参加者の身を清め、祝詞を届けた。その後玉串の拝礼が祭りの代表と祭り関係の役員の部長会長のみで行われた。神事の終わりには神楽が舞われた。

10 時頃から神楽の演奏と共に、地区の若い人が掛け声をかけながら神輿を移動させ、神社の前にある台車の上に置く。それから、神楽を先頭に、次に宮司と神主、地区の役員の方々が旗をもって、次に神輿が来て、最後に神楽の演奏者と言う順に並び地区の西半分を御巡幸した。この時、「ハライ、ハライ」と言いながら町を練り歩く（写真 5）。



写真 5. 神輿御巡幸の様子



写真 6. 神楽

そして練り歩いた後の家から宮司と神主と宮総代の方々が家に一軒一軒祓いを行う。そのあとに家の前で神楽（写真 6）、稚児舞の順にそれぞれ行われる。例祭では地区の西半分の家をまわる。

11 時頃に稚児舞は地区の西端の家から始められた。稚児舞は神輿が御巡幸し、宮司さんたちが祓いを行い、神楽が行われた後の家で踊る。稚児舞に献納する「お花」代を受け取った後、男の子の槍おどりから始める(写真 7)。槍おどりが終わった後、次に女の子の扇舞が行われ(写真 8)、扇舞が行われる間、槍おどりは次の家で行われ、同時進行で踊られる。稚児舞を見ている人たちは、宮崎の住民や祭りで里帰りしてきた人、踊り子の家族や親戚が多く、他に踊り子の学校の先生、釣りに来た観光客がいる。見ている人たちは「上手上手」などの掛け声や拍手などで踊り子たちを盛り上げる。若い衆も高めの声で唄の調子を変えたりし盛り上げる。見ている人たちはにこやかに稚児舞をみて、「かわいいね」「子供が少ないねえ」など言い、地元に帰ってきて久々に会った人や、お世話になっている人、地区の人々同士で談笑する。



写真 7. 槍おどり



写真 8. 扇舞

12 時頃から、踊り子たちは鹿嶋神社で母親たちの準備したご飯を食べ、若い衆は食事を用意している家々に上がり、昼食をとる。昼食時、家の人や若い衆同士でしゃべりながらご飯を食べる(写真 9)。この時「保存会の活動お疲れ様」と家の人に若い衆が労いの声をかけられたりする。



写真 9. 若い衆の食事の様子

午後 1 時ごろから再び踊りを開始する。お昼に家に上がったのをきっかけに、若い衆は食事を用意している家に上がり、唄い手の人数が変化したりする。鹿嶋神社春の例大祭では「無礼講」となっており、食事を用意している家々には誰でも上がっていいことになっている。この食事を用意している家々には宮総代の人やその家の人の友達など地区の人々も上がり、食事をして交流する。昔観光ツアーできた観光客 20 人をもてなしたという話もあった。

お花代を多く出してくれる家や新築や新婚の家、踊り子たちの家ではお祝いに若衆踊りも踊られる(写真 10)。若い衆が四番の唄を何種類も唄うことによって踊り子たちが家の中の階段を踊りながらのぼり二階まで上がっていき、お祝いをする。



写真 10. 若衆踊り

そうして地区の家を周り、午後 3 時と 5 時に休憩を挟みながら、8 時頃まで踊る。その後通常は神輿の休憩所から神社へと神輿帰社をするのだが、この日は天気が芳しくなく、神輿が濡れるのを避けるため地区の西側をまわった後すぐに御旅屋に戻っていた。そのため踊り終えた後解散となった。

3-3. 還興祭

表 2. 還興祭の流れ（5 月 5 日）

午前 9 : 00	式典
9 : 20 頃	子ども着付け（カルチャーセンター）
9 : 30 頃	神輿巡行
	宮総代と神楽開始
10 : 00	稚児舞開始
12 : 00 頃	昼食（地区全体／カルチャーセンター）
午後 1 : 00 頃	昼食終わり
7 : 30 頃	休憩を 2 回挟み、稚児舞のむらまわり完了 カルチャーセンター出発（神輿巡行）
8 : 00 頃	鹿嶋神社到着 式典終了後に神楽と若衆おどりと稚児舞

表 2 に 5 月 5 日に行われた還興祭の流れを示した。天気の関係で、4 日は中止となり、5 日に予定より 30 分より早い 9 時に祭りが始まった。神事が行われ、その後神輿の御巡幸が始まり、稚児舞は 10 時から始まった。前日と同じ要領で、前日の続きから今度は町の東側の家々をまわった。お昼はカルチャーセンターで、地区の組長や稚児舞の踊り子の親、神楽からの協力者で用意されたご飯を、踊り子や他祭り関係者が食べた。若い衆は、食事を用意している家に上がりで食べる。

稚児舞は午後 5 時 30 分頃に全ての家を回り終えた。踊り子やその母親はカルチャーセンターで夕食をとり、若い衆はその時に上がった家で食べる。午後 6 時 45 分頃から、カルチャーセンターで、槍おどり、扇舞、若衆踊りをおどり、鹿嶋神社春の例大祭の関係者皆が見て、拍手や「うまいぞー」などの声が上がり若い衆以外の人も唄い、今までで一番の盛り上がりになる。

その後、神楽の演奏が始まり、神輿移動の準備が始まる。祭り関係者の男の人たちが掛け声をあげ神輿を担ぎ、「ハライハライ」と声をかけながら鹿嶋神社へ向かう。神輿の後には祭り関係者や、道中の家から出て来た宮崎地区の人々が歩く(写真 11)。

鹿嶋神社に着き拝殿に神輿をおくと神楽の演奏は終わる。そして拝殿の前で神楽が行われる。次に玉串の拝礼が行われる。この間、宮崎の人びとは宮の前に集まって神事が終わるのを待つ。玉串の拝礼が終わり、神事が終わった後、宮の前での神楽と稚児舞の奉納が始まる。まず神楽の天狗舞が行われる(写真 12)。



写真 11. 神輿帰社



写真 12. 天狗舞

その後、若い衆による若衆踊りが踊られ(写真 13)、次に踊り子たちによる槍おどりと扇舞と若衆踊りが行われる(写真 14)。この宮の前での神楽と稚児舞の奉納では、集まった住民の拍手や「よかったぞー」といった歓声が飛び、鹿嶋神社春の例大祭の中で一番の盛り上がりになる。宮の前での演技を人々は「余興だ」というと同時に「祭りの本番だ」という。



写真 13. 若い衆の若衆踊り



写真 14. 宮の前での若衆踊り

踊り子の踊りの後、祭典委員長の進行で、稚児舞の踊り子がマイクを持ち名前と感想を言う。この時の子どもの紹介で、あの子がどここの孫だといった年配者が孫の確認をするという。最後に自治会長のあいさつがあり、祭典委員長の「以上で鹿嶋神社春の例大祭を終わります」という言葉で解散になる。

4. 地区の人々にとっての稚児舞

この章では聞き取り調査から地区の人々が稚児舞に対してどのような魅力を感じているか、稚児舞の現状に対しての認識を見ていく。

4-1. 稚児舞の魅力

地区の人々は稚児舞のどのような点を楽しんでいるのだろうか。まず稚児舞に関わっている人に聞いてみた。稚児舞保存会の人に、祭りについて聞くと、40代男性は「本番に家に上がって飲みみんなと話すことや、練習後にみんなとコミュニケーションすることが楽しみ」といった。このような本番または練習で、みんなと交流することを楽しみにしているといった人が多い。また、やりがいについて聞いてみたら、30代男性は「だんだん上手になっていく、礼儀正しくなっていくところがやりがい」といった。このような踊り子の成長をやりがいにした人が多く、踊り子の成長も楽しみにしている。また「本番を終えて達成感を得られる」といった30代男性もいて、達成しての充実感や喜びを感じる人もいる。

踊り子たちに、練習で嬉しいことは何かと聞くと、9歳の女の子は「ほめてもらえること」といい、7歳の男の子は「褒められるのと金曜にもらえるお菓子」といった。また本番の楽しみは、8歳の男の子は「みんなの前で踊ること」といい、8歳の女の子は「おかしがもらえることと妹が応援してくれること」といった。これらのことから子供たちは、祭りの後にもらえるお菓子や踊りを上達し稚児舞保存会の人々や家族、宮崎の人々に褒めてもらうことと見てもらうことを楽しみとしている。

また踊り子たちの親や祖父母に稚児舞について聞くと、踊り子の母である30代の女性は「地域の人に顔を親子供がみせることができる、地域の人に見守ってもらえる」といい、また踊り子の父である30代男性は「子どもの主役が見れて、がんばっているなぁと子どもの成長を感じる」といい、他に踊り子の母である30代女性は「他の人に教えてもらってよく人の話を聞けるようになった、子ども同士も仲良くなって祭りの後の稚児舞の懇親会が楽しみだといっていた」といった。祖母の60代女性は「(踊り子たちが)かわいらしい」といった。このように、子どもが地域の人に認められることや仲良くなること、子どもの成長を喜んでいる人が多かった。また稚児舞を踊る姿を見るのが楽しみという人もいた。

稚児舞に関わっていない人に稚児舞の楽しみについて聞くと、30代の男性は「お酒をみんなと飲める」といい、70代の男性は「村が一体となるのが楽しみ」といった。また70代女性は、「毎年稚児舞をみるのが楽しみ」といった。地区のいろいろな人とお酒を飲んで話すことが稚児舞の楽しみといえる。また稚児舞について30代女性は「同級生がお父さんになっていて時間の流れを感じる」といい、60代女性は「一年がきたと感じる、地元を離れた人が帰って来て集まって、お祭りや同級生を懐かしい」といった。稚児舞をやることによって、時の流れや、一年の始まりを感じる人もいる。50代の男性は「今踊っている子が宮崎の将来を背負ってくれるのかなと思う」といい、将来の担い手の確認をしている人もいる。

以上の語りから、いろんな立場の人々に共通している魅力は、稚児舞をやることによって、子どもやその親の場合は地区の人に子どもが認められること、その他の住民の場合は地元からはなれている人も帰って来て皆で集まり住民同士のコミュニケーションをとり仲良くなることといった、地区の繋がり（コミュニティ）の強まりだと分かった。鹿嶋神社春の例大祭自体、宮司と神主、祭典委員長、稚児舞や神楽と宮総代の人々と、あらゆる年

齢と立場の地区の人々が一体となりとり行われ、本番では、祭りに関係ある人もない人も食事を準備している家に上がったり、稚児舞を見て交流する。稚児舞のコミュニティの強まりという魅力は鹿嶋神社春の例大祭全体の魅力を指すともいえる。また稚児舞は子どもが踊り子となり、日々練習して踊りや社会のルールを身につけ成長する。そのことから、踊り子の親と祖父母や若い衆は、踊り子の成長を楽しみにして、これが稚児舞の魅力の一つとなっている。稚児舞をやると子どもが成長するというのは、若い衆の人や踊り子の親や祖父母が多く語っている。学校の先生も稚児舞をする以前とした後で人格が変わったと言ったという話もある。以前若い衆として踊り子に教えていた 70 代の男性は「教えていた時は(あいさつなどの)社会のルールを教えることを意識していなかった。でも宮崎の社会のルールを学ぶ場ではあった」と語っており、昔から踊り子にとって社会のルールを学ぶ場だったことが分かる。他に、楽しみとはいわれなかったが、昔から稚児舞を毎年やることを通して、踊り子や若い衆の交代で時の流れを感じたり、生活の一部となり、年の節目だと感じられたりすることが分かる。

4-2. 稚児舞をやる理由

主に地区の人々同士の交流が魅力の稚児舞であるが、稚児舞保存会、踊り子、踊り子の親、地区の人々と協力して行う必要があり、指導、練習、送り迎え、料理の準備などをしなければならず、大変な部分も多い。実際に嫁いできた 30 代女性は「嫁いところは毎年ゴールデン・ウィークに帰らなきゃいけなかったから大変だと思っていた」といっていた。地区の人々はどのように捉えて続けているのだろうか。稚児舞保存会、踊り子の親、踊り子、地区の人々という立場別に祭りをやる理由を聞いてみると、稚児舞保存会の 50 代男性は「祭りも子供も好きだから」といい、踊り子の親である 30 代女性は「子どもが出たがっていたから」といった。このように祭りを楽しみとしているからという答えも多い。また踊り子の親 30 代女性は「稚児舞を乗り越えて子どもに自信を付けて欲しい」といい、稚児舞の魅力を期待している人もいる。しかしそれらの人々も「伝統だから」、「昔から続いている祭りだから」といったような答えも多い人が多く、踊り子の 7 歳の男の子は「宮崎出身だから」といい、祭りに関わっていない 50 代男性は「みんな伝統だからやっている」といっていて、自身の地域の伝統だから続けているという意見が一番多い。このように昔からの地元の特徴を無くしたくないという、宮崎の人としてのアイデンティティから続けている人が一番多い。このことから、稚児舞は宮崎の人にとってアイデンティティとなるもので、それを理由に続けている人が多いことがわかる。

4-3. 稚児舞の現状への思い

現在の稚児舞に対して、祭りの関係者や非関係者といった立場関係なく言われるのが来年もやるのかといった存続の問題である。前述した通り、今年参加した踊り子 10 名の内 4 名が、親が宮崎出身者である宮崎外の子どもになった。稚児舞に対して稚児舞保存会の 40 代男性は「伝統を無くしていきたくない。子どものときやっていたことが今も子どもがが

んばっているのもあるし、地区の人が孫や親戚が踊るのを楽しみにしているのもある」といい、10代の女の子は「なくなってほしくない」といつている。

5. 稚児舞の存続の仕方

これまでの稚児舞の変遷から、存続の問題の原因とそれに対する対処をみる。また、現在の伝承の努力から、現在稚児舞がどのように伝承されているかを見る。

5-1. 稚児舞の存続の工夫

これまで稚児舞の存続の問題にぶつかる度、人々はどのような対処をしてきたのだろうか。聞き取りと資料から稚児舞の変遷を見ていく。

まず、踊り子の変遷について述べる。はるか昔は7歳の男の子が踊っていたとか、4歳の男の子が踊っていたと言われているが真偽は不明である。そして遅くとも1944年（昭和19年）には小学6年生から入る青年団の人々のみが若衆踊りを踊り、いわゆる稚児舞は踊られていなかった。当時稚児舞が踊られてなかった原因は不明である。しかしのちに稚児舞が復活することや復活した稚児舞の唄の歌詞が近代のにおいが強いことからそれ以前には稚児舞が踊られていたのではないかと考えられる。そして戦時中は、祭りは行われなくなった。戦後の1946年（昭和21年）に祭りの再開とともに稚児舞が踊られるようになった。これは当時のお年寄りや稚児舞に詳しい人に聞いて復活したのではないと思われる。この時は小学1年生の男子が踊ることになっていた。しかし新しい環境に馴染まなければならない時期である小学1年生に踊りの練習と両立させるのは酷だということから翌年休止され、翌々年から小学2年生の男子が踊ることになった。それから遅くとも1951年（昭和26年）には小学3年生の男子が踊った。この頃は子どもの数が多く、稚児舞を踊れずにおわる子もいた。1961年（昭和36年）位から、子どもの数が減少したため、男子が槍おどり、女子が扇舞をするようになり、その後も子どもの減少が進み、踊り子の学年が2つの学年、3つの学年となって、現在の2、3、4年生となり、2002年（平成14年）からは、親が宮崎出身の子どもも参加することとなった（宮崎稚児舞保存会,2012）。

次に、指導者の変遷について述べる。はるか昔、宮崎には若者が集う若衆宿が点在していて、その若衆宿の者が指導していた。戦後稚児舞が復活したときは、いつできたか定かではないが、青年団があり、それに所属する人が指導していた。しかしそのうち青年団はなくなり、その後は踊り子の親が指導することになった。だが親のみでは指導が大変で存続が困難になり、地区の若者が指導しろという話になった。その後平成9年に稚児舞保存会が結成され、以後この会に所属する人が指導することになった。

最後に鹿嶋神社春の例大祭の開催日の変遷について述べる。正確には分からないが、現在御存命の人の前の世代の時に、5月2日、5月3日に行われていたが、田植えの時期と被るため、4月8日、9日に行われるようになった。その後1995年（平成7年）に、会社に勤める皆が祭りに参加しやすくし祭りを守っていくため大型連休中である5月3日、5月4

日に変更された。この時神事をやる側が神様の決めた日を変更するのはよくないとの反対があった。しかし鹿嶋神社春の例大祭は昔から地域住民主導で行われており、地域住民の意見が通り、変更された。

以上のことから、稚児舞の存続の危機は主に日本全体の社会の情勢からきていることが分かった。5月2日、5月3日から4月8日、9日に祭りの変更されたのは、宮崎の社会から原因が来ている。しかし春の例大祭自体が中止されたのは太平洋戦争が原因で、それ以後は、主に日本全体の流れである少子化と地方の過疎化から存続の危機が起きた。日本は戦前から出生率の低下傾向にあって、ベビーブームが二度起きたが、養育費や出産後の雇用の問題、未婚化と晩婚化により少子化が進んでいる。また地方の過疎化は、1960年代の高度経済成長での急速な工業化に伴って、労働力となる人が都市部へ移動したことから始まり、その後の経済と政治の中央集権的傾向や交通網の整備などが都市部への人口流出に拍車をかけて地方の過疎化も進んでいる。朝日町もその煽りを受けていて(図1)、1961年から踊り子の条件が男子だけでなく女子も加えられたことや、宮崎もその影響を受けていて稚児舞の存続の問題の原因となってきた。また会社勤めなど社会の変化からも存続の問題がきている。しかし、以上のような社会情勢の変化にも地区の人々は、踊り子の条件、指導者の組織、開催日を、柔軟に変化させ、今日まで存続させてきた。

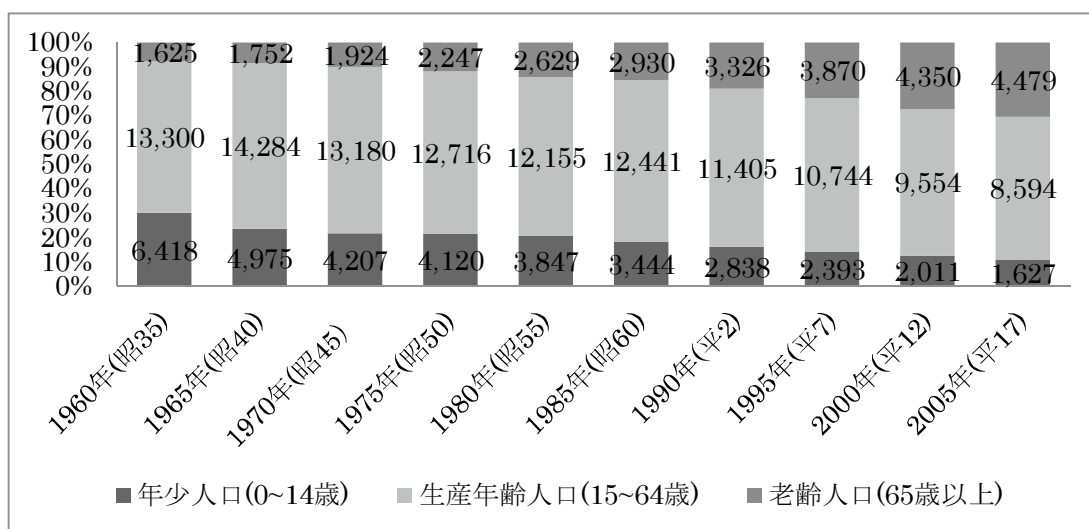


図1. 年齢別3区分の朝日町の人口動態

5-2. 現在の伝承の努力

主に踊り子の条件を変更してきた稚児舞だが、それ以外の唄と踊り子の踊りについては昔からの伝統を守るため昔のまま伝承しようとしている。

踊りは小さい頃自分も踊っていたこともあって、若い衆は子どもに昔のまま教えることには苦勞していない。難しいのは唄の方で、1970年頃の若い衆の唄の音源をCDに保存しており、昔と節が変わらないよう努力されている。また実際に年配の人から現在の若い衆に伝えようとし、稚児舞保存会のみでの練習で、今の若い衆に節を教えているところが見られた。しかし、言われた通りにやるのは難しく、昔の唄と節が変わってしまうようだ。

このことについて、唄を指導する稚児舞保存会の 60 代の男性は「今の若いもんは演歌をしないから、こぶしの入れ方を知らない」といい、また 70 代の男性も「今の唄は詠りが足らん」といっていて、ここにも時代の変化による影響が見て取れる。結果、若い衆の中では、皆忠実にしようすると考えすぎておかしくなってくるため、本番ではそのままやろう、気を抜いてやることにはなったが、しかし本番中でも修正はするといったこととなった。また節を変えていいのではないかという意見もあり、変化させるか昔を忠実に守るかの比重を検討しながら伝承している。

6. 稚児舞の存続

この節では、宮崎地区の人々にとって稚児舞はどういうものか、これまでの稚児舞はどう存続と伝承されてきたかということから、稚児舞の存続に必要なものを探る。

6-1. 存続の源泉となるもの

これまで稚児舞に対する住民の認識とこれまでの存続の工夫を見てきた。稚児舞が存続していくために重要なことは何であろうか。稚児舞は、存続の危機に陥る度、地区の人々の稚児舞を続けたいという思いから、稚児舞の条件を変更し、存続してきた。「5. 地区の人々にとっての稚児舞」から、稚児舞は子どもの成長を地区の人々で認め祝い、交流して楽しむものであり、地区の人々のアイデンティティとなっている。そして、稚児舞の魅力を楽しまたいというものもあるが、主に昔からの伝統を無くしたくないという稚児舞が地区の人々のアイデンティティとなっているという理由から皆で協力して存続していることが分かった。また稚児舞の存続の危機は誰しも認識していることで、自分も経験した昔から続いているもののため、年配者が喜ぶためなくなってしまうと感じている。

このような地区の人の意識から、これからも祭りを続けていくために必要なことの一つは、聞き取り調査で実際に地区の人もいっていたが、地元を愛する気持ち、つまり地元愛ではないかと言う結論に至った。地元愛とは、自分の生まれ育った地域の風景や、祭りや他の地区行事などといった慣習と、コミュニティに愛着をもつことといえる。祭りを楽しいと思うこと、年配者が喜ぶため続けたいと思うことは地元の人々とつながることが楽しいと思うことで、伝統を守りたいという気持ちはその祭りに愛着をもっていることと言え、つまりその地元の慣習とコミュニティに愛着があるということになる。また存続の中心となる稚児舞保存会の人々は、20 代男性は村の人に声をかけられて、30 代男性は友達が出ているから、といったきっかけで稚児舞保存会に入っている。祭り関係者の 50 代男性は、「他の行事(朝日町の運動会など)で仲良くなり昔に稚児舞踊っただろうといって頼む」といった。踊り子も稚児舞保存会の人々からの声かけといった地元のコミュニティから、若い衆の食事を用意するのも役員の家などで地元のコミュニティから参加している。

このことから稚児舞を続けていく上で特に必要なのは、地元愛の中でも、地元のコミュニティへの愛着と、稚児舞への愛着だといえる。地元のコミュニティに対する愛着は、日々

の暮らしや、稚児舞も含む地区の人々が一体となる祭りや地区行事で、地区の人々に認められ、交流して親しむことで生まれる。稚児舞に対する愛着は、稚児舞の魅力を楽しみ、幼い頃から祭りに参加して見て稚児舞に愛着を持つことで生まれる。特に参加することは重要である。女性も稚児舞に参加するようになりそれに愛着を持つようになったことから、現在宮崎の外からの協力も得られている。前述した通り、現在稚児舞の踊り子の内、4名は宮崎以外に住んでいて、その踊り子たちの母親が宮崎出身である。母親たちは稚児舞を踊ったことがあり、母親である30代女性は「自分も踊っていたから踊ってほしくて参加させた」といった。

こうして特に地元愛の中でも、地元のコミュニティに愛着を持ち人々との繋がりが強く、稚児舞に対する愛着を持つ人々が稚児舞の存続を支えていく。

6-2. これからの稚児舞

しかし現在稚児舞は、少子化と過疎化という社会の情勢を受け、踊り子の不足という問題に直面している。この社会の情勢との折り合いも存続していく上での必要なことである。

「6. 稚児舞の存続の仕方」から、社会の情勢から変化させなければならないところは変化させ、しかしなるべく伝統を忠実に守ろうとしながら、存続してきたことが分かる。今現在、稚児舞は存続の危機にあり、また何らかの変化が必要である。踊り子の条件は、少子化と過疎化の影響で、男子のみから、男女、それから宮崎出身者の子供まで広げていった。対策の一つとして、さらに踊り子の条件を地区住民から広げ、宮崎近隣地区の子供に踊ってもらおうという方法がある。調査中、小学校に踊り子の募集をかけるといった意見を聞いた。しかし、現実には宮崎にゆかりのない人々に踊り子の募集をしても、稚児舞は宮崎地区を一軒一軒まわる宮崎地区内の祭りであるから、参加してくれるのかという問題がある。

また、稚児舞の踊り子の条件の年齢を広げる、または変更することで、存続を続ける方法もある。調査中、小学1年生にも踊らせる、年齢を小学5、6年まで上げる、大人が踊るという意見を聞いた。しかし小学1年生は新しい環境に適応するのに加えて稚児舞の練習もするのが酷という理由で廃止された過去があり、小学5、6年生だと稚児といえないのではという意見があり、また恥ずかしがって唄の合いの手の声が小さくなるという問題があり、大人が踊ればそれは稚児舞とはいえなくなる。

どちらの手にも課題はあるが、存続のため試みる価値はあるのではないか。また別の存続の方法もあるかもしれない。稚児舞は、地元愛がある限り、何らかの変化をし、今後も続いていくことを期待してやまない。

謝辞

今回の調査で、宮崎稚児舞保存会の方々をはじめ、春の例大祭の関係者皆様、宮崎地区の方々に大変お世話になりました。調査に多くの面でご協力いただいた口岩俊様。宮崎稚児舞保存会をご紹介いただいた九里文子様。練習の始まりから打ち上げまでの調査にご協力頂いた宮崎稚児舞保存会の皆様。鹿嶋神社春の例大祭全体の調査にご協力頂いた宮総代の皆様と宮崎神楽保存会の皆様と祭典委員長様。聞き取り調査などいろいろなご協力をいただいたその他地域の皆様。突然の調査にも快く御引き受けいただき、皆様のご厚意とご協力のおかげでこの報告を完成させることができ、心から感謝申し上げます、本当にありがとうございました。

参考文献

- 朝日町立宮崎小学校、1970. 『越中宮崎民俗芸能稚児舞』
朝日町、1984. 『朝日町誌 歴史編』
朝日町役場、2012. <http://www.town.asahi.toyama.jp/>
宮崎地区郷土誌編集委員会、1993. 『越中みやざき今昔』
宮崎稚児舞保存会、2012. 『宮崎稚児舞』
宮崎神楽保存会、2012. 『富山県下新川郡朝日町宮崎獅子舞』

3. 祭が形成する地域のコミュニティ

—草野の事例から—

前田 あさひ

はじめに

草野は下新川郡朝日町の北西部に位置する農村である。ここで毎年秋に行われる祭では神輿が二日かけて村のほとんどの家を回り、獅子と天狗による獅子舞が披露される。私の出身地石川県では、富山と同じく獅子舞は盛んである。しかし少子高齢化の影響で、町内の子どもは減少しており、祭の維持が困難になっている。獅子舞を招待する家も少なく、祭の中で様々な変化が起こっている。ほかの地域では祭がどのような状況にあるのか興味があり、祭の運営方法などが比較的よく似ている草野を今回の調査対象に選んだ。

調査を進めていくと、草野の祭が地域住民の繋がりを作るという声が多数あった。今年は草野の全戸 117 軒のうち、97 軒もの家が獅子舞を招待している。この時、草野では祭が地域コミュニティに多大な影響を与えていると推測し、祭に関わる人の流れを明らかにしたいと考えた。

この報告では住民の祭に対する意識を通して、祭を運営する組織や地域の住民の間にもどのような連携が生じるのか。五月から十月の間、主に祭当日の二日間に聞き取り調査で得た証言をもとに、コミュニティ形成における祭の役割を明らかにしたい。

1. 草野の概要

草野は JR 北陸本線泊駅のすぐ西に位置しており、赤川を挟んで北には日本海を臨むことができる（図 1）。直線で 800m 程で海に辿りつく環境ではあるが水田があちこちにあり、兼業農家が多い。また駅から 1 km ほど進むと、今回の祭の重要な拠点のひとつである草野公民館に到着する。もともと草野は寛永年間まで雑草の生い茂る荒野であった。中央にあった沼地の東側を東草野、西側を西草野といったが、本村となった西草野は西を省略し、草野と呼ばれるようになった。本報告でも以下、これにしたがう。

1884 年（明治 17 年）には草野は世帯数 136 軒、人口 677 人であった。2012 年 6 月の時点では世帯数 117 軒、人口 396 人のうち男性が 183 人、女性が 213 である。少子高齢化が進んでおり、草野の児童が通っていた五箇庄小学校は 2012 年 3 月に閉校している。



図 1. 草野とその周辺地域

表 1. 草野の人口（平成 24 年 6 月 1 日）

世帯数（戸）	男（人）	女（人）	合計（人）
117	183	213	396

今日の草野は中坪、新田、西方、東方、裏方の 5 つの地域に基づく班に分かれており、毎年秋の祭の際に交代で御旅所当番に当たる（後述）。今年は東方が担当した。なお、御旅所については後に触れる。

2. 祭の概要

草野は五社明神社の御神体を赤川と共有しており、赤川は春に、草野は秋に祭を行う。祭は 10 月 10 日に近い土曜、日曜の 2 日間に行われる。2000 年（平成 12 年）の改正祝日法施行前は体育の日にあわせて 10 月 9 日と 10 日に行われていたが、平日では不都合だったために現在の形になった。

神輿を招待した家はその 2 日間開放されており、草野の住民は出入りが自由である。また青年会長は招待を受けた全ての家を回るため、この祭は住民とのコミュニケーションを図る最大場といえる。

2-1. 祭の起源

江戸時代の後期、草野は荒野であった。開墾の後も西側を流れる小川の氾濫地帯だったため農作物の水害が著しく、また伝染病の流行もあり、非常に貧しい土地であった。そこで当時の村の長であった草野屋善兵衛が熊野五社権現を祀り、後に五社明神社に改称した。1902 年（明治 35 年）ごろ、当時の村長である吉江又右エ門の要請で広田二太郎という人物が入善新屋から獅子舞を習い、無病息災、五穀豊穡を祈願し、五社明神社に奉納したのがはじまりとされる。

2-2. 御旅所

御旅所とは五社明神社を出て巡行した神輿を初日が終了した後、納める場所である。初日の夜に、前述の御旅所当番の男性たちが御神体に異常がないように泊まり込んで見張る。以前は前述の当番の班の中の家から一軒を選んでいたが、1985 年（昭和 60 年）ごろからは公民館を御旅所にする事になっている。その主な理由は、神輿を入れることができる家が減少したことにある。日本家屋では和室の襖を外して神輿を入れるスペースを確保することができたが、洋間はそれができず、洋間を中心とした家が増えるにつれ、神輿を納められる家が減っていったのである。

御旅所に選ばれることは名誉なこととされ、以前は邪魔な柱を切ってまで神輿を入れる家であった。それでも神輿を家に入れられる家は少なく、また祭壇の準備など、その家に金銭的に大きな負担がかかるようになったため、現在の形になった。



写真 1. 神輿を納めた御旅所（草野公民館）

2-3. 花

この祭では草野の多くの家は「花」とよばれる祝い金を寄付する。そして花を寄付した家で獅子舞が奉納される。祭の運営は町内会に一任されており、花の管理も青年団が行う。

草野に住む人は祭に対する理解が非常にあり、二日間の祭に対する花と一年間の町内会の維持費がほぼ同額らしいという声があった。初日の御旅所と二日目の最後の家で青年団が花を読み上げ、合間に舞が披露される。

2-4. 当日の流れ

表 2. 初日の流れ（10月6日）

10時00分	五社明神社でボイコミを行い、神様を神輿へ移す。
	46軒の家を回る。
20時00分	御旅所の公民館に到着。花を読み上げ、青年団が踊る。
20時50分	追い込みを行い、御旅所に神輿を納める。

表 3. 二日目の流れ（10月7日）

10時00分	公民館で神事を行い、玉串を奉納する。
	50軒の家を回る。
20時00分	最後の家で花を読み上げ、青年団が踊る。
23時30分	神輿を担いで神社まで走る。ボイコミを行い、神輿を五社明神社に納める。

初日、2日目とも9時30分に公民館に集合し、30分後に祭が始まる。青年団と踊り子、旗持ちたちが昼食と夕食をとる家は、あらかじめ決められている。

2日目、全ての家をまわると、青年団が新たに提灯をつけた神輿を担いで五社明神社まで走る。神社に到着すると、参道の両端に置かれた松明の間を通る火渡りを行い、神輿を清める。その後にボイコミを行い、御神体を神社に戻して祭は終了である。

2-5. 舞に使用する道具

踊り子は天狗の面、かつら、豆絞り¹をつけ、青い着物を着る。最年少の踊り子は面をつけず、赤い着物を着る。持ち物には短剣、竹製の長棒と短棒、弓矢、傘がある。

獅子頭は舞手が一人で獅子の頭に入り、もう一人が胴体部分のカヤと呼ばれる幕を持つ一人立ち獅子である。青年団・青年会の担当である。

楽器は横笛、和太鼓、拍子木である。

旗は赤、紫、黄、青、桃、緑があり、旗持ちは好きな色の旗を選んで持つ。小学生が担当する。日が落ちると、旗から「高張り」と呼ばれる長い柄のついた提灯に持ち替えるが、そこからは希望者のみの参加となる。ほとんどの小学生はそこで帰るため、高張りは青年団が引き継ぐことになる。

¹ 豆粒のような小さい丸を染め出した布。本来は絞り染めをいう。手拭地・浴衣地が多い。



写真 2. 獅子



写真 3. 旗持ち

2-6. 舞の演目

一軒の家に対して二種類の舞が行われる。ひとつはオコシバイ（起獅舞）という舞であり、もうひとつは以下に述べる 5 つの舞の内のひとつである。

2-6-1. 各家で披露される演目

オコシバイ：短剣を持った一体の天狗と獅子から成る。全ての家で踊るため、踊り子にとって最も慣れた演目といえる。そのため年少の踊り子が担当する場合が多い。

二人の天狗舞：棒を持った天狗二体と、獅子で構成されている。

獅子とヨッタリ（四人天狗舞）：長棒を持った天狗二体に剣を持った天狗一体、獅子で構成されている。

チドリ（千鳥舞）：獅子一体。天狗四体がそれぞれ短棒を持つ。一曲が長いので、踊る回数は少ない。

小神楽：短棒を持った天狗が二体、長棒をもった天狗一体と獅子で構成されている。

大神楽：弓矢を持った天狗一体、長棒を持った天狗二体、短剣を持った天狗一体と獅子で構成されている。弓矢を持った天狗が他の天狗を一体ずつ倒していき、獅子との一騎打ちにむかう。結婚や出産など、めでたいことがあった家で披露される。

場合によっては、棒や剣などの持ち物が変わる事もある。踊り子は基本的にはその踊りができる人のなかで交代で踊る。また、踊り子の実家ではその踊り子が中心になる。



写真 4. 小神楽



写真 5. 大神楽



写真 6. 追い込み（初日の御旅所で）

2-6-2. ボイコミ（追い込み）

ボイコミは初日の朝と二日目の夜に神社で、また初日の夜に御旅所で、と計三回行われる舞で、神を神輿や御旅所に導く意味がある。11 人で踊る、最も規模の大きい舞である。長棒を持った六体の天狗が三体ずつ縦に並び、短棒を持った三体の天狗を左右から挟んで立つ。後方には獅子が控え、そのさらに後ろには最年少の天狗が二体、傘と短剣を持って青年団員の肩の上に立つ。

3. 御神行順

濃い灰色に塗りつぶされた箇所がで、初日に回った家。薄い灰色に塗りつぶされた箇所が、二日目に回った家である。

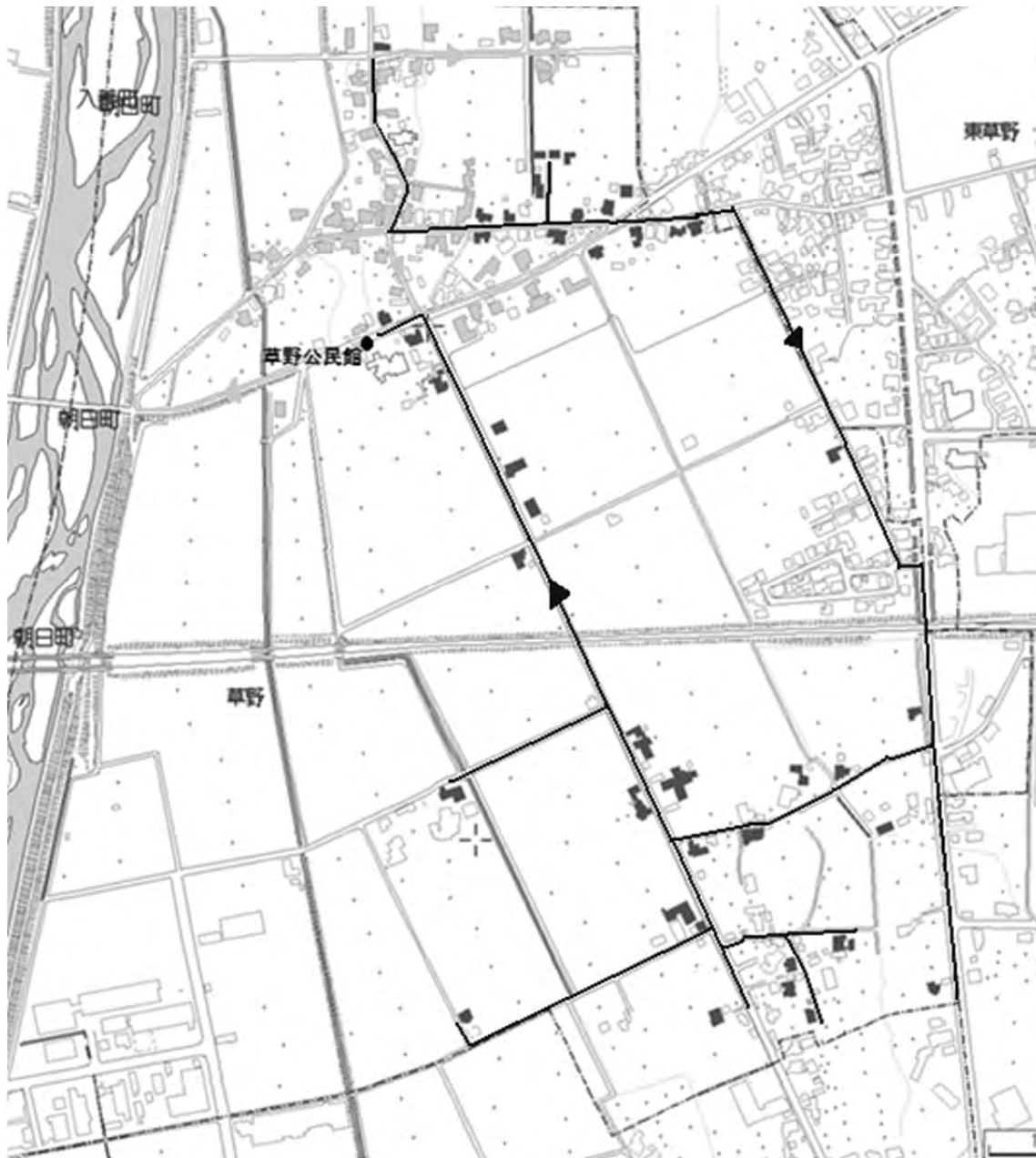


図 2. 御神進順

4. 祭に携わる人々

草野の人々は異なる年齢どうしの縦の繋がりが強い。その要因のひとつとして、祭を通して住民が密接に関わりあっていることが挙げられる。草野では、どのような人がどのような役割をもって祭に携わっているのかを、この項目で記したい。

4-1. 踊り子

踊り子として舞を舞うのは、小学 2 年生から中学 3 年生までの男子である。去年までは小学 4 年生以下は踊り子になれなかったが、少子化の影響により踊り子の数が減少し、参加できる年齢が引き下げられた。踊り子のはかつらをつけ、面を被って天狗に扮する。ただし最年少の二人は面をつけず、衣装も青色ではなく赤いものを着る。また天狗は大天狗、中天狗、小天狗の 3 つに区別されており、年齢や身体の高さで振り分けられる。

現在は小学生が 4 人、中学生が 5 人である。

4-2. 青年団・青年会・保存会

祭を運営するのは草野出身の高校生以上の男性である。彼らは年齢ごとに異なる 3 つの組織に属することになる。まず高校生になると、祭への参加の有無に関わらず、自動的に青年団に籍を置くことになる。29 歳になると青年団から青年会に持ちあがり、厄年の 42 歳になると退団する。直接祭に参加し、指導などを行うのはこのふたつの組織である。43 歳になると保存会に籍を置く。保存会には年齢の上限は定められていない。

青年団・青年会は笛、太鼓、拍子木の演奏、獅子に加えて小・中学生の指導と実質的な祭の運営を行う。本番で神輿を担ぐのは青年団である。対して保存会が行うのは青年団・青年会のサポートである。祭の演目は口承で伝えられており、笛や太鼓の楽譜も存在しない。舞を正しく伝承していくため、青年団・青年会が保存会に教を請うのである。

現在は青年団に 28 人、青年会に 16 人、保存会に 54 人の計 98 人が参加している。

4-3. 女性の参加

裏方として各家で女性が酒と料理を準備し、青年団らの客をもてなす。料理はとくに決まっていないが、オードブルや寿司などに加えて嫁いできた女性の地元の料理など、家ごとにおおよその定番があり、笹ずしや牛すじの煮込み、ハンバーガーや牛丼などさまざまである。どの家でも少なくとも十数人分の用意がある。草野の住民は各家で出される料理をおおよそ把握しており、自分の食べたいものを選んで家に入ることもあるという。御旅所当番の班の女性は公民館に集まり、そこでも御旅所当番の男性のための料理を協力して用意する。

また初日の夜、公民館で花が読み上げられる合間にちょうれんだんまるという踊りを踊る。これは獅子舞ではなく、青年団と笠を被った成人女性が列をつくって踊る盆踊りのような舞である。

旗持ちは、小学 1 年生から 6 年生の男女であり、太鼓持ちは基本的には 6 年生で、6 年生がいないう場合は 5 年生の 2 名または 3 名であり、それ以外の児童は旗持ちとなる。現在では小学 2 年生から男子は踊り子になるため、女子の参加が多い。

現在は太鼓持ちが女子 3 人、旗持ちが女子 4 人に男子が 1 人である。

また女子は、小学 6 年生までの旗持ちや太鼓持ちを終えると役割がなくなってしまう。そこで祭に参加する意思のある女子は笛を親に教えてもらったり、祭の練習に参加することで、自主的に祭に参加するようになった。こうして祭に参加するのは、祭の好きな元青年会役員の子供達がほとんどだが、貴重な戦力となっている。女子が祭に参加するようになったのは、30 年ほど前だという。

5. 練習・指導・反省会

5-1. 練習指導

舞の練習は祭の二週間前に始まる。場所は公民館で、日曜日を除く夜 7 時 30 分から 9 時まで行う。直接指導を行うのは青年団と青年会だが、保存会の人たちも公民館に顔を出す。公民館には小学校に入学する以前の子どもを連れて、練習の見学をさせる母親が見られた。いずれは踊ることになるので、幼いころから舞に馴染ませ、覚えさせるためだという。練習のあとは、踊り子にお菓子が配られる。

5-2. 反省会

踊り子の子どもたちは練習後すぐに帰宅するが、その後に毎回反省会が行われる。青年団・青年会と保存会から 20 数名ほど参加し、今後の指導案を作りつつ団員同士のコミュニケーションを図る、いわば飲み会である。20 代から 60 代と年齢の幅も広く、25 人ほどが参加しているが、そこでは皆が親しげに会話を交わす。練習日の初日に青年団長、総務、会計などの役を決定し、役員に選ばれた人たちは祭を運営する上での疑問を保存会の先輩にぶつける。役員以外の団員は雑談をし、酒を飲む。公私を問わない世代間のコミュニケーションを作りだす反省会は、草野の住民に強固な縦の繋がりをもたらす大きな要因のように思える。

6. 住民の祭への意識

祭が草野のコミュニティ形成にどのような影響を与えているのか、住民が祭をどのように捉えているかという点から明らかにしようと思い、聞き取りによる調査を行った。

6-1. 青年団・青年会の語り

大部分の青年団の方は「皆祭が好きだから、参加している」「祭好きが集まっている」と語る。中でも「小学校に上がる前から紙で道具を作って、見よう見まねで踊っていた」「小

さい頃から曲が身体に染みついている」など、幼い頃から祭に参加する事を望んでいたという声もあった。草野の男性にとって祭は憧れの対象であることをうかがうことができる。

また「草野は酒飲みが多いから、練習後の飲み会が楽しい」「世代を超えたコミュニケーションがとれる」といった団員同士の繋がりを求める声や、「おもいきり叱られて褒められるから、皆根性がある」「社会に出ても通用する子が育つ」「頑張ってる練習している子を見ると、自分が親になった気分になる」など、祭が子どもの成長に大きく関わっていることが判断できる発言も多くあった。

その一方で「正しく踊りを伝えられているか不安」「運営の苦労は大きい」「二日で 5 kg 痩せた役員がいる」など、役員は祭をきちんと運営しなければならないというプレッシャーの分、苦労が大きいようである。

6-2. 保存会の語り

まず、「草野はほかに楽しみがないので、祭に命をかける」といった祭に娯楽性を求める語りをいくつか得た。大勢で酒をのむことがなよりの楽しみようである。

住民の繋がりの面では「祭の二日間はサミット」「祭のおかげで住民、特に青年会の結束が強まる」「縦の繋がりが強固になる」といった声が挙がった。草野は戸数の変化があまりないらしく、余所から人が来ない分、結束が固いようである。また草野の不思議な現象として婿が多いという話を聞いたが、これに関しては後で考察する。

また「還暦を過ぎても、地域の子供たちの名前が把握できている」「道で擦れちがったら名前を呼んで、挨拶をする」「本当の意味で、地域全体で子供を育てている」「子供が減ったため、指導が大変になったが、その分子供の成長が嬉しい。泣きそうになる」といった語りからは、草野の縦の繋がりの強さがうかがうことができる。

マイナスの意見としては「(手間とお金がかかりすぎる) 恐ろしい祭だが、人は集まる」「本当に馬鹿な事をしている」という声があったが表情は苦笑交じりであり、多くの家で人々と積極的に交流していたため、祭が好きだという意識はもはや前提として存在しているようであった。

6-3. 踊り子の語り

踊り子の方からは「達成感、やりがいがある」「練習は厳しいけど、祭だけの感動がある」「踊った後、褒められるのが嬉しい」「学校の行事とは違う感動がある」「上手く踊れると嬉しい」という意見が挙がった。練習後の飲み会にはまだ参加できない分、踊る事の楽しみが祭への意識として大きく存在するようである。

また、比較的年少の踊り子の方は「祭は嫌い、(祭の後に) お金もらうのは嬉しい」と満面の笑みで語った。

6-4. 女子小・中学生の語り

「祭は楽しい、でも仕事は大変」「歩くのはしんどい」「途中の休憩が楽しみ」「早く帰る

のが楽しみ」「(青年団が) お酒を飲み出すと長い」など、やや否定的な意見が目立ったが、旗持ちの子同士は終始笑顔で会話をしており、合間をみてはさまざまな遊びを行っていた。

旗持ちの役割は踊り子に比べて祭によってもたらされる非日常感が薄いために、このような結果になったのかもしれない。しかし大会が近いにもかかわらず部活を休んで参加する女子中学生もあり、祭への関心は大きいようだ。

6-5. 女性住民の語り

草野に嫁いできた女性からは「男の子は社会を学べていいと思う」「子どもたちが上手に踊っているのをみるのが楽しみ」「昔は楽しみは祭りだけだった。その楽しみを青年団が維持している」など肯定的な意見もあったが、やはり苦労は大きいようで「料理の準備は大変」「嫁に来た時は驚いた」「独特の祭。準備はとんでもなく大変」「伝統だから(仕方ない)」といった意見が多数を占めていた。多くの家へ伺ったが、どの家でも豪勢な料理が用意され、女性はひっきりなしに訪れる人の対応を行っていた。そのためなかなか家から出られず、獅子舞を見に外へ出たくても出られないと話していた。また御旅所では、今年の御旅所当番の東方の20代から70代の女性が15人ほど集まって料理を振る舞っていたのだが、祭の楽しさについて聞いたところ、全員が顔を見合わせて苦笑し、沈黙するといった光景が見られた。草野の男性の中には苦労が大きい分、草野の祭は女の祭という認識を持つ人もいる。

対して草野で生まれ育った女性は「小さい頃、男の子に混じって踊りの練習をしていた」「祭の日には草野に帰ってくる。みんなに会うのが楽しみ」といった意見が多かった。祭りの準備にかかる手間について聞くと、「でも、一年に一回の事だから(平気)」など、上記の女性たちと比べると、祭の苦労に対してやや寛大であるようだ。

6-6. 男性住民の語り

ここでの男性住民とは草野に婿としてやってきたため、幼い頃草野の祭に触れることのなかった人々のことである。「組織がしっかりあって団結が強い分、なかなか入り込めずに辛い思いもした」「とりあえず(一番簡単な)獅子に入れと言われて、獅子頭だけをやってた」など、結束の固さゆえの弊害ともとれる声が挙がった。幼い頃から祭に参加することによって築き上げた繋がりや技術が足りない分、お座成りな扱いを受けていると感じることもあったという。

しかし「悔しくて踊り、笛、太鼓を全部覚えた。今では完全に草野の男や」と言う男性もいる。周囲の方と親しげに会話を交わしながら自信をもって語られた言葉からは、祭によって生じた弊害を取り除くのもまた祭であるという、人々にとっての祭の意義を再確認することができる。

7. 考察

草野の住民の縦の繋がりは非常に強い。調査をしていて、自分の孫でなくても、草野の子の名前は分かる。道ですれ違えば声をかける。他にもふたまわり年の離れた保存会の人に誘われて、その日のうちに旅行にでかけたという話を聞き、還暦を迎えた男性と20代女性が親しげに抱擁をかわす光景を見ることもできた。このことから分かるように、祭によってもたらされる繋がりは、男性間のみのものだけではない。男子も女子も幼い頃から祭に慣れ親しみ、親や青年団に影響を受けて、自らも祭に関わっていくというサイクルができ上がっていると感じた。

また青年会長は神輿を招待した全ての家に顔を出し、話をして住民の様子を窺っていく。多くの家にお邪魔させて頂いたが、どの家にも家主以外に5人、多い場合は20人ほどの人がいたように思う。また住民は自由に出入りができるため、いろいろな人が入れ替わり立ち替わり家を訪れていた。そこでは酒を飲みながら様々な会話が交わされており、世間話もあれば、草野への要望、苦情などもある。町役場で働く方は「こうしていろいろな意見を聞いて改善する。祭は住民の生の声を得る大切な機会」だと語った。多くの祭は住民のコミュニケーションを円滑にする側面があるが、ほとんど全ての家を回る草野の祭はこの要素が突出している印象を受けた。

個人主義が進んだ現代では、隣に住む人の事を知らないという状況ももはや珍しくない。老人の孤独死などのさまざまな問題が発生する事により、地域活性化があちこちで叫ばれるようになった。しかし行政がどのような政策を打ち出したとしても、中身が伴わなければ効果もさほど期待できない。中身とは、その地域に実際に生活する人々の共同意識であろう。

草野の祭は各地で消滅しつつある地域のコミュニティを維持するという点において、非常に優れた役割を果たしていると考えられる。しかし五箇庄小学校の閉鎖から分かるように、少子高齢化の波は草野にも例外なく襲ってきている。「神輿が担げなくなったら祭も終わるのでは」「(踊り子が)11人いなければ、ボイコミができなくなってしまう」「そのうちに青年団も踊るようになるかもしれない」など、その存続を危ぶむ声もあった。

そこでかつて祭りを経験した人や草野から外へ嫁いで行った人が、自分の子供に踊らせようと草野に戻ってきている。祭によって育てられた子どもが大きくなり、自分の子どもをまた祭によって育てていくのである。

祭が人々を育て上げ、人々が草野の祭をまた作り上げる。外部から来た人にとって、祭が地域に溶け込むための通過儀礼となる。話を聞く限りそれを乗り越える事は容易ではないが、その分乗り越えた後に得るものは大きい。草野にはこうして人と人、人と祭の間に互いを助長させる循環ができ上がっているのではないかと思われる。

謝辞

最後に、今回草野で調査をさせて頂くにあたり、青年団の方々をはじめ、お話を伺った
沢山の方、祭の当日、お忙しい仲の突然の訪問にも拘らず、もてなしてくださった方々。
本当にお世話になりました。拙い調査ではありましたが、みなさんのご協力のおかげで、
なんとか報告書を完成させることができました。重ねてお礼申し上げます。

参考文献

朝日町、1984 年、『朝日町誌 歴史編』

草野青年団作成資料、1994 年

4. 宮崎村における魚が形成する行事とコミュニティ

伊藤 心之介

はじめに

私たちの調査地域が朝日町と決まり、私は先ず、その下調べに幾つかの地域を回った。その段階から私は、もし調査するならば漁業を生業とする港町や漁村を選びたいと考えていた。その理由は、私事であるが、私自身の生い立ちに大きく関わっている。私が生まれ育ったのは、富山と新潟のほぼ境に位置する親不知という、日本海と飛騨山脈に挟まれた断崖にある村落だった。親不知では主に漁業が行われており、私の家も祖父の代まで漁師を営んでいた。けれども幼い私はそうした仕事の手伝いには全く参加せず、漁師の営みについて知ることなく、後に富山に引っ越すことになる。この、自分の育った場所であるのにその実態を知らないという事実が、私の心の中にずっと嫌なものとして残っていた。

このような経緯から、私は漁を生業として生活している地域の実態というものに興味を抱いていた。下調べの際にはそうした観点で各地に赴いたが、結果として今回の調査地となったのは、宮崎村であった。宮崎村は親不知と距離的にも近く、海と山に囲まれているという環境にも共通点が多い。必然様々な事柄を整理しやすく、また幼いころから父に連れられ、浜辺に拾いに行っていた翡翠でも有名なこの地に、少なからず親近感を抱いた。これらのことから、宮崎村こそが私の調査すべき場所なのではないか、という考えに至ったのである。最終的な報告書の体裁としては題のごときものになったのだが、私の当初の動機は以上のようなものであった。

後々調査を続けていくうちに、宮崎村の漁業（厳密にはシンボルとなる魚）と、現在の宮崎における様々な慣習やイベント、祭礼などによる人々のつながり、の二者の関係というものが徐々に目に留まるようになってきた。それはたら汁まつりのように観光的要素の強いものによるものもあれば、後に述べる「御絵様」^{ごえさま}の儀式のように、宗教色の強いものなど様々である。次第に私はこれをテーマに調査を進めてみたいと考えるようになった。私の個人的興味に出発した調査ではあったが、上記のテーマはその範疇から一步抜け出して、研究に値するのではないかと感じたからだ。

では、以下に調査内容を纏めてゆく。

1. 宮崎村について

1-1. 最古の宮崎

現在の宮崎村がある地には、縄文時代より集落があったとされる。ある男性の語りによれば、「考古学者の研究では、宮崎は本当に歴史の深い所。上杉謙信に攻められて、ほとんどの資料が消失してしまったが、もともとの宮崎は全て山であつたらしい。おそらく現在

の海岸地帯は山が崩れて沈んで出来たものだろう。」とのことである。その海岸地帯、「宮崎浦」は、新潟県との県境である境川から西へ 1km の場所に位置しており、過去には海岸からおよそ 1km 離れた「沖の島」という離れ島まで岬が細長く伸びており、船を留める自然の入り江となつて、漁に適した地形であった。山野もまた鳥獣が繁殖し、豊富な山菜や木の実が生り食料に恵まれていた。狩猟や漁労、採集で生活していた人々とは別に、「明石」や「馬場山台地」、「浜山台地（現在の浜山遺跡）」なる場所で土器・耳飾玉等の製造に従事する人々が存在していた。特に浜山台地では、古墳時代中期に 4~5 軒単位の住居を構え、翡翠で勾玉・管玉等を作る集団が居たことが、遺跡の発掘によって明らかとなっている。これらの産物は時の権力者達に献上されていたのだろう。なぜこの地でこのような加工業が始まったかについては、新潟県の青海川、姫川から宮崎海岸まで翡翠が流れて打ち上げられ材料が豊かであったこと、大陸の文化の影響が強かったことが挙げられている（新村みやざき）。「浜山遺跡で見つかる翡翠に含まれる成分は姫川で見つかる翡翠と同じものであり、その成分は日本中で見つかっている。姫川こそが日本の翡翠の原産地で、浜山遺跡ではその翡翠の加工を行っていたのではないか。」という語りも聞けた。

1-2. 宮崎の名称と海の守り神・鹿嶋神社

「宮崎」という名称の由来は、鹿嶋神社の伝説と結びついている。宮崎海岸における、かつての岬の先端である沖の島に神が降臨し、自分は常陸国・坂東鹿島社の分神であると名乗り数々の奇跡を起こしたという。その神を祀る宮が岬の突端に建立され、船止めの明神と呼ばれ、海の守り神として信仰されたことにより、その岬が「宮の岬」と呼ばれるようになった（新村みやざき）。その名が後に「宮崎村」という村名になったという。海神を祀る社が村の名前になっていることから、宮崎村において海（漁業・航海）がいかに重要なものであったかを推察することができる。その後、時の流れとともに海の浸蝕が進んで、沖の島まで続いていた岬は崩れて沈み、宮も流失した。そこで当時の宮守、九里藤大夫は神の御告げを奉じて、新たな社を作り、^{たてみかつちのかみ}建甕槌神及び天照大神を祭神として祀った。当時は宮崎大明神と呼ばれていたこの神社が、現在の鹿嶋神社となる。

1-3. 宮崎村における漁業の歴史と実態

先に記した通り、漁場である宮崎浦は沖の島という突出した岬によって出来た入り江によって船止めに適しており、また海底は連なる岩礁に海藻が繁茂し、それ自体の収穫も豊富であると共に、魚介類の生息地としても良好であった。こうした環境から様々で豊富な海産物を得る事ができた。

漁法とそれによって獲れる魚の種類としては、^{はえなわ}延縄（一本の縄から多数の枝縄を伸ばし、その先端に針をつけたもの）を用いた作業による、通年的な鱈漁、後



写真 1. 収納された延縄

(www.fishexp.hro.or.jp/shidousoyofishery/.../s.../s_tarahae.htm)

述の石投・鳥賊の一本釣り、鰯・ふくらぎの地引網（船で海中に網を張り、網の両端を浜まで引っぱってきて引きずりあげ、魚を獲る方法）、雑魚や飛び魚を獲る刺網（魚の進行方向を遮断するように網を張り、網目に魚の頭を差し込ませて捕獲する方法）などが存在する。また、海藻類ではわかめ、えご、てんぐさ、もずくなどがあり、貝類では姫貝、かき、あわび、さざえなどが獲れる。

使われた漁船は、宮崎では「キンパチ」と呼ばれる三人乗りの小型船であった。形は細長く小幅な船体に、丸い船底となっている。操縦には櫂を用い、船尾の一人が「立て櫂」を漕ぎ、船首の二人が「座り櫂」で調整をする。

また、春の終わりから夏にかけて、個々人が素潜りして貝類、海藻を獲ることもある。これを「もぐり」といい、現在もおこなわれている。獲るものはアワビや岩ガキ、サザエなどである。この手法は全国各地にみられるものだが、所謂海女とは違って、基本は男が潜る。余談だが宮崎にはかつて石川から海女さん達が移住してきたことがあるらしい。その事と宮崎におけるもぐりとの関係は不明であるが。

宮崎村の人々は漁場開拓にも努め、近くは新潟県市振から遠くは北海道まで、日本海を北上する形で漁の範囲を広めていった。近隣の漁村である市振とは昔から漁業の利権を巡って度々諍いが起きたという。その際は互いの村が沖に船を出してにらみ合い、海上が修羅場と化す様相を呈した、といわれている。明治期になると、漁場を求めて十隻程度の船（キンパチ）集団が日本海を北上し、岩手や北海道に至った。1884年（明治17年）から、函館市寒川地区の無人漁場を開拓した宮崎村の漁民の苦難が記された『寒川開拓史』には、そうした開拓の一例が見て取れる。更に日露戦争終結後は、樺太北千島までの出稼ぎや移住が行われた。

このような開拓の裏ではまた、大正期の鉄道開通などの社会現象を受けて、遠方での漁業以外の職を求めた村民の流出も始まっていた。こうした様々な変容を経て、宮崎村の漁業は過渡期を迎えようとしていた。この後、職種の多様化や漁獲量の減少などが原因となって次第に宮崎の漁業は規模を小さくしてゆき、現在に至るのである。

1-4. 現在の宮崎における漁業の状況

2012年（平成24年）現在、宮崎漁港には、定置網（袋状あるいは垣根の網を海中の何か所に固定させ、入り込んだ魚を引き上げる方法）船一隻、個人の漁船十二、三隻、蟹船（蟹獲り専門の漁船）一隻、レジャーの船三十隻ほどが控えている。漁師は深夜一時ごろに漁に出て、早朝四時、五時までには仕事を終えて港に戻ってくる。網を外した後は本人達曰く「酒を飲んで寝る」のだそうだ。

獲れる魚介は前項、過去のものとは大差はないが、それに加えはちめ、鯛、ひらめ、かれい等がある。季節それぞれに最も狙う魚は、春は鱒、夏はイシナギ（おいぼ。趣味の人のみ）、秋は鮭である。

過去と大差ないとは述べたが、海水温上昇などの影響によって、年々数が少なくなっている種がいくつかある。特に鱈、それもスケトウダラの漁獲量が激減している。このスケ

トウダラは、後述のたら汁の原料でもある。

日本全国の地方漁村でみられるように、宮崎村でも現在、漁師の後継者不足が起こっている。子どもは学校があるため漁の手伝いなどには参加せず、またその漁自体の規模が縮小し、もともと不確定な収入源であることから、親が漁師にさせたがらない、などという理由があるようだ。「今（漁師を）やっている人間が辞めてしまったら、もうそれで終わり（＝漁をする人間がいなくなる）じゃないか」という声も聞いた。現在でも、地元の人間だけでは間に合わないので、泊や魚津からバイトに来てもらっている船もある。



写真 2. 宮崎漁港

2. 宮崎の特産

2-1. 鰯

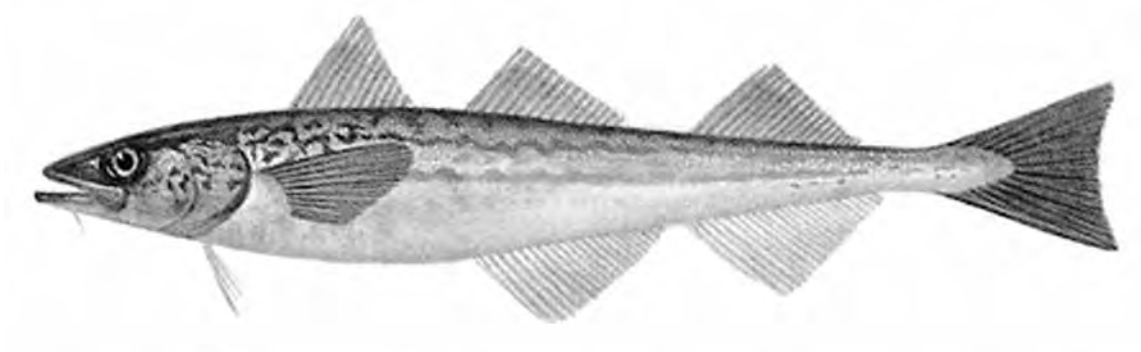


写真 3. スケトウダラ

(<http://100.yahoo.co.jp/detail/%E3%82%B9%E3%82%B1%E3%83%88%E3%82%A6%E3%83%80%E3%83%A9/>)

鰯、それもスケトウダラは、宮崎漁業の象徴とも言えるほど、地元では重要な魚である。宮崎の鰯漁は、かつては県下一の水揚げ量を誇るほど盛んなものであった。それゆえに宮崎村では、様々な鰯の加工法が見られる。これから紹介するのは全て過去のものであるが、現在でも村民の記憶に鮮明に残っており、宮崎の人々にとって鰯がいかに大切で、思い入れが深いかが伺える。

一つは干ダラである。宮崎ではほんの一世代まで、獲った鰯を干したものを籠に背負って、女性達が近隣の町まで行商に行っていた。その際に女性たちは「たーらいらんけ」という掛け声とともに各地を回った。

また、鰯を丸々一匹串に刺して、浜辺で焼いて食べる鰯の串焼き（浜焼き）というものもある。浜で焼いて食べるというのは、これもまた干ダラと同様に、行商の売り物となっていた。この料理は現在ではあまり見る事が出来ないが、体験学習の一環として年に一度ほど、当時の調理法が再現され、食すことが出来る。

漁師たちの賄いとしても鰯は使われていた。漁師の奥さん達が、漁から帰ってきた夫の網を外す（片づけ）作業を手伝いに行く際、一緒に鍋等を持っていき、獲ってきた鰯をそこで調理して、味噌ベースの鍋物として食べたという。これが現在「たら汁」と呼ばれているものの原型である。漁師達が賄いとして楽しんでいたこのたら汁が、宮崎に訪れた当時の朝日町の町長の目にとまった。町長はこのたら汁を非常に気に入り、たら汁を食べに何度も宮崎に足を運んだという。この町長によって、たら汁は県下に広く知られるようになり、やがては宮崎の特産品となるに至ったのである。



写真 4. たら汁

2-2. たら汁まつり

上記のたら汁が大々的に振舞われる「たら汁まつり」が、十月の月上旬に宮崎漁港で行われている。以下には私が訪れた際の様子を元に、その内容を紹介していく。

たら汁まつりはその名の通り、たら汁などが参加者に（有料で）振る舞われ、それを食すとともに村民同士で語らいを楽しむ。宮崎漁港は、船の連なる海岸沿いのちょうど真上に車道が通っており、雨避けに格好の場所となっている。その並びには、大量のたら汁を

仕込む大鍋に始まり、祭りに定番の焼き鳥や焼きそばの屋台やお菓子の店、様々な店が軒を連ねている。ズワイガニなどの魚介類もまた、そのまま売られている。また開けた場所にメインステージが設けられ、景品の抽選や、宮崎村にまつわる武将「宮崎太郎」のマスコットキャラクターのPR等が行われていた。

まつりには子供からお年寄りまで参加し、県外からも人がやってくる。主にこの県外から来た人たちは、このまつりに平行して、隣のヒスイ海岸へ石拾いに行くようだ。まつりの日のヒスイ海岸もまた、普段よりも賑わっている様子を見せた。

たら汁まつりの行われる日は、漁業の安全を祈る安全祈願祭という催し物が同時に行われる。こちらは通称秋祭りと言われ、稚児舞が行われる春祭りとは違い、海との関連が深い祭りである。地元の人々は鹿嶋神社に赴き、お守りのお札をもらう。そしてその後に海岸のたら汁まつりに参加するのが定番になっているようだ。



写真 5. たら汁まつりの様子 (www.shokoren-toyama.or.jp/~hisui/)

2-3. おいぼ (石投)



写真 6. 全長 1.7 m のおいぼの魚拓

おいぼという名前は宮崎村独自の呼び名であり、漢字で「大魚」と書いておいぼと読む。正式名称を石投^{いしなぎ}といい、北海道から日本海側の各地、また高知などの南日本に生息する深海魚である。体長は4～50cm から 2m であり、5～6 月の産卵期になると 4～500m の深海から 150m 程度まで上昇するため、この期間に漁を行う。釣った魚は脂が乗って美味であり、主に刺身として食される。宮崎ではこの巨大な深海魚、おいぼを求めて、多くの漁師たちが努力を重ねている。おいぼを釣ることが漁師にとって一つの名誉となっているのである。なぜかという、おいぼはその巨大さ、生息地の水深などから非常に釣ることが難しく、現在シーズンを通して十数匹獲れるか獲れないかという程の魚なのである。

2-4. 御絵様^{ごえいさま}

上記のおいぼと宮崎の関係の深さを示す、宗教行事がある。それが「御絵様」と呼ばれる浄土真宗の行事である。まずはその歴史について述べていく。

今から約 200 年前、浄土真宗の寺である京都東本願寺の本山が、大火によって消失するという事件が起こった。これを受けて、当時の本願寺門主は寺の再建の工事のために全国の門徒に協力要請し、大工を京都に招集したのである。その際、門主は大工たちの宿場であった話所^{つめしょ}で、工事の礼として説法を行っていたという。(一日大体二時間くらいだったらしい)。しかし悲しいことにその門主が、本願寺の復興を見ることなく、突然に亡くなってしまうのである。東本願寺は寺の復興を終えた後、この門主の生前の業績を称え、また復興に協力してくれた全国の門徒のため、亡き門主が描かれた掛け軸三十数本を、全国に与えたのである。この掛け軸の事を「御絵様」と呼ぶのである。

これ以後、全国三十数か所に配られた御絵様は、浄土真宗を信仰する村々を定期的に回り、それぞれの地域で祀られるようになった。富山県においては東西で一つずつ御絵様が存在し、それぞれ巡回ルートが存在している。宮崎も含まれる東のルートは、六月の二十五日の蛭谷に始まり笹川から谷、長野、境、と回って、同月二十七、八日頃に宮崎にやってくる。宮崎では現在はカルチャーセンターで一晩、御絵様を祀っている。その後各地を回り、魚津まで行ったところで終点となる。そしてまた蛭谷に戻り、次の年にまた祀られる、というシステムになっている。

御絵様を祀る期間、場所、方法は地区によってまちまちであるが、特徴的なのはそれぞれの地区で何か一つ固有の品（特産品に近いもの）を御絵様に捧げるのが決まりとなっている所である。この品が、宮崎ではおいぼなのである。このことから、おいぼが宮崎で最も重宝されるべき魚であったことが推察できる。

現在でも御絵様の時期が近づくと、漁師たちはそのためにおいぼ漁に精を出すという。儀式の後には地元の人々で宴会となり、その際御絵様に供されたおいぼも食すのだが、そこで今年のおいぼは誰が獲ったのか、という話題で盛り上がるのだという。

2-5. おいぼ漁師、宮内和彦氏を中心とするコミュニティ

漁師たちのみならず、宮崎の人々から一目置かれている漁師がいる。それが宮崎で唯一人、おいぼ漁のみを専門に行っている、宮内和彦氏である。彼は宮崎で生まれ育ち、東京での会社勤めを経て再び宮崎に戻ってきて漁師になった、という異色の経歴を持ち、困難なおいぼ漁のために自らの船や釣り具に独自の加工を施し、試行錯誤の末、年に一匹獲れるか獲れないかというおいぼを、年に十二、三匹は一人で釣り上げてしまう程の、おいぼ漁の名手となった方である。

そんな彼の周りには、常に漁師仲間たちが集まり、何かと一緒に酒を飲んでいる。私もその飲み会に何度か参加させて頂いたのだが、そこは常に笑いが絶えず、互いの近況や、他愛のないことを話し合っただけで楽しむ輪が出来ており、和気藹々とした場が出来ていた。おいぼ漁というものを通して、確かに漁師仲間同士のコミュニティが形成されていたのである。その中のある人は「皆がこれだけあいつ（宮内氏）の周りに集まってくるのは、ただおいぼ釣りが上手いからだけじゃない。あいつの悪口を聞いたことがない。そういう性格だから、皆尊敬して集まってくる。」と、宮内氏の人柄の良さについてもこの集まりの理由があると語った。

3. 考察

ここまで調査してきたことで分かったのは、宮崎には、そこで獲れる魚によって生まれる、新たなコミュニティが存在する、ということである。現在、宮崎においては漁業は主な収入源ではなく、皆それぞれの仕事と並行して行っているに過ぎない。そうした現状にも関わらず、あるいはその状況がより、様々な行事やコミュニティを産み出す原動力となっているのではないだろうか。たらの言えたら汁まつりや串焼きの体験を通じた地元の人同士や、外部からの参加者とのつながりがあり、おいぼで言えば、年中行事で人々が集う場をおいぼがもたしたり、宮内氏を中心とした漁師達のコミュニティが形成されている。漁村において、魚というものが単なる食料としてだけではなく、人と人をつなぐツールとなり、彼らのアイデンティティーとなっているのである。これは全ての漁村に見られるようなことではない。それは小さな規模ではあるにせよ、結果として宮崎の内外に新しいコミュニティを作ってきた。

ただ、たらのまつわる諸事情に見られるように、特産となってしまうことによって、供給のあるなしに関わらず、常に需要が存在してしまうという現象も発生している。

謝辞

今回の調査においては、宮崎にお住まいの方々、漁師の方々をはじめ、朝日町宮崎漁業組合様、なないろ KAN 様等多くの人の方大な協力を賜りましたことを、改めてここに感謝いたします。特にカルチャーセンターみやざき職員の水島様、合宿の際に宿を提供して下さいました河内様には、私のみならず文化人類学ゼミの三期生一同がお世話になりました。その節は誠にありがとうございました。

参考文献

『宮崎村の歴史と生活』坂井誠一

『越中の国 佐味郷 親村みやざき』加藤善治

5. 過去と現在における炭焼きの役割

田村 史織

はじめに

かつての日本において、炭焼きは山間農民の生業のひとつとして全国各地で営まれ、生活していく上で不可欠な燃料創出の手段として人々を支えていた。それは今回調査地とした朝日町でも例外ではなく、山間部の住民による炭焼きが県内外の山々で広くおこなわれてきた。しかし、日本の近代化が進むにつれて炭焼き業は廃れてゆき、今日ではあまりなじみのないものとなってしまっている。一度失われてしまった文化といえる炭焼きだが、近年、各地で活動が見直されており、朝日町においてもふたつの地域で炭焼き活動がおこなわれている。

本章では、このように近年再び注目されはじめている炭焼きの過去の様子と現代の様子を比較して、過去の炭焼きはどのようなものだったのか、炭があまり用いられなくなった現代においてなぜ炭焼きが復活してきたのか、また炭焼きは人々にどのような影響をもたらしているか、現代における炭と私たちの生活にはどのようなかかわりがあるのかを調査し、考察していきたい。

1. 調査方法

かつて炭焼きは朝日町の各山村でおこなわれていたが、そのなかでも近年再び炭焼き活動をおこなうようになった蛭谷と笹川に範囲を絞り、かつて生業として炭を焼いていた人や、近年になってはじめて炭を焼き始めた人の語りを通して、過去と現在における炭焼きに対する認識の相違を探る。また、今回炭焼きについて調査するにあたり、基礎的な知識を習得するために 2012 年 6 月から 2012 年 12 月の期間に何度か夢創塾（後述）に通い、実際に炭焼きの作業に加わることで一通りの炭の焼き方を学んだ。

2. 炭焼きの概要

この節では炭焼きの概要について説明する。

まず、炭焼きとは、「木材を焼いて炭を作ること、また、それを生業とする人のこと」を指す（広辞苑）。

炭とは「木材を焼成し炭化させたもので、燃料として用いられるほか、工業原料や研磨剤などの用途もある」（日本民俗事典、2006）。そのほか、保存が効き、燃やしても煙が出ない。水分が少なく、多くの孔があるため吸着性に優れ、灰分はミネラルを多く含む。このため最近の用途として、水浄化、脱臭、湿度調整、土壌改良等に有効である。また、本章で用いる炭とは、特に説明がなければ主に木炭のことを指す。

2-1. 日本の炭焼きの歴史と技術

第一節でも述べたとおり、炭焼きは日本の山村に古くから伝わる伝統技術であり、山間農民の生業のひとつとして全国各地でおこなわれてきた。

炭の存在自体は定住生活が営まれるようになった頃から認められ、史料においては奈良時代から東大寺大仏鑄造に際して炭の使用に関する記述が登場している。また、平安時代になると税の代わりに炭を納めることもあった。炭は暖を取るために用いられていたが、その当時の使用はほぼ貴族階級に限定されていた。中世になると、茶の湯の際に炭が用いられたことで単なる生活燃料以外にも炭が扱われるようになり、炭焼きの技術も向上していく。そして、近世になると都市生活の発展や庶民の生活水準の向上により一般家庭でも炭が使われるようになってくる。しかし、この頃の炭はまだ高価なものであり、多くの庶民の生活では依然として薪が使われていた。それが近代になると、木炭が重くかさばる薪材にかわる重要な燃料となっていった。庶民の生活に使われるようになったことで炭の需要も増え、明治期以降になると炭焼きが生業として一般化し、木炭が生活必需品となっていた 1950 年代ごろまで盛んに行われた。このように一度は興隆をみせた炭焼きだったが、戦後の高度経済成長期になると 1960 年代にそれまで燃料の主力だった木炭が石油やガスに変化した。このことにより大幅に木炭需要が低下し、加えて海外からは安価な炭が輸入されるようになった。こうして日本の炭焼き産業は急速に廃れていき、現在ではほとんどおこなわれないものになってしまっている（カーボンジャパン HP 炭の歴史）。

このように、一度は衰退した炭焼きの文化であるが、近年になって脱臭、除湿などにはじまる炭の利便性に注目が集まっており、それに準じて全国各地で細々と続けられてきた炭焼きが見直されたり、一度はなくなってしまった炭焼き活動が復活したりしている。

2-2. 炭の種類と生成方法

木炭は大きく分けて黒炭と白炭に分類されるが、その違いは炭焼きの工程にある。

以下では、著者が実際に蛭谷の夢創塾で体験した 2 種類の炭焼きの方法を述べる。

2-2-1. 炭窯

はじめに、炭焼き窯の各部位の名称を図 1 で表す。なお、炭窯は蛭谷夢創塾の炭窯を参考にしている。

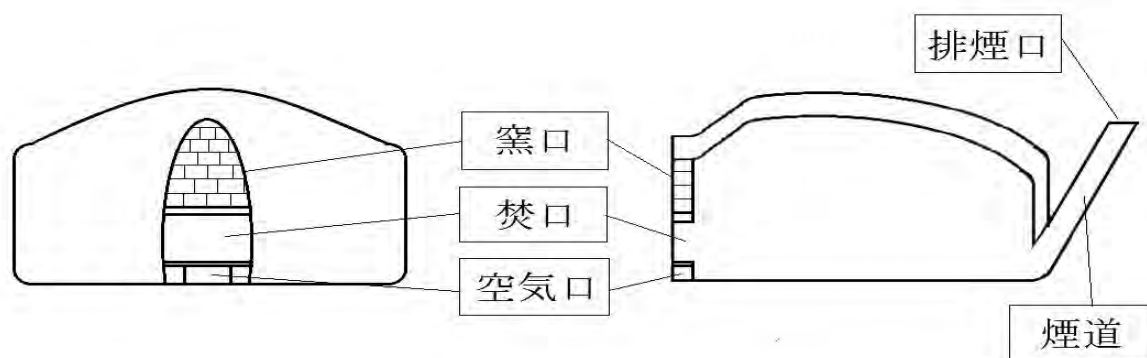


図 1. 炭窯各部位の名称（口焚きの際の状態）

2-2-2. 白炭の生成方法

白炭に適している木材はナラやカシなど硬質の木である。

①窯詰め

炭焼きに使用する木材のことを^{かまぎ}窯木という。窯詰めとは、炭窯の中に窯木を入れていく作業である。なるべく多くの炭を作れるように、また、焼くときに炭窯内の熱を逃がさないように、隙間なく窯木をつめていく（写真 1）。夢創塾では一窯に約 1.3 t の木を入れる。窯の奥の方が良い炭ができるので良木を入れ、反対に入り口近くは空気に触れやすく灰化しやすいため、質の良くない木や割れにくい大きな木を入れるようにする。このとき、炭が出来る途中で木が倒れることも想定して奥の方へ窯木を傾けておく。また、炭化するときには上の方から熱分解が起こるため、窯の下部では温度が上がらず、窯木が炭化しにくい。そのため、なるべくこの部分の無駄がなくなるように太い方を上にして木をつめていく。炭焼きことばでは、炭にならないこの部分のことを「アシ²」（写真 2）といい、この部分をいかに少なくするかで職人としての技量が問われる。



写真 1. 窯詰めの様子



写真 2. 炭にならないアシの部分

②口焚き

窯詰め作業が終わると、窯に火をつける準備をおこなうために燃えやすい細い木を入り口にたてかける。次に窯口を煉瓦と泥で密閉していく（写真 3）。何度も炭焼きに使われた土は耐火性のある物になっていくため、夢創塾では同じ土を繰り返し使っている。煉瓦の隙間につめる土は叩きつけてつめ、空気を逃がすようにする。また、真ん中に楔を打ち込むことで窯口の煉瓦を簡単には崩れなくする。火を点ける部分を残して炭窯がふさがるといよいよ火を入れる。焚口に火種を置き、火をつける。火がついたらうちわで風を送って、炭窯全体をあたためていく（写真 4）。このことを口焚きという。このとき、入口の火が燃えたからと安心して口焚きをやめると火が消えてしまうことがあるので注意が必要である。ある程度火がついたら風を送るのをやめて様子を見る。口焚きはおよそ 6 時間进行し、窯の裏側にある排煙口の温度が 82℃に達した時点で焚き口をふさぐ。このとき、焚き

² アシの部分は商品にならないため、売りに出す際に切り取って自家用に使う。

口の下部に 7~8cm の空気穴をあけておき、熱が窯木を分解して炭にするのに必要な酸素供給用の経路を残しておく。排煙口から煙がよどみなく排出されていれば窯内温度 300℃前後で炭化が安定しているといえ、火入れは完了である。



写真 3. 粘土をたたきつけて空気を逃がす



写真 4. うちわで風をおくって窯を温める

③煙の色での状況把握

炭窯のなかの木材はおよそ 72 時間で炭になる。はじめは白くていがらっぽい煙がでる。着火が成功した後に出る煙はアイドルと呼ばれ、灰色で重く、地上を 70~100m 流れても消えない。乳白色で辛みがツンと鼻にくるが、その中にかすかな甘みを感じる。ここで、煙の様子を確認しながら空気穴と排煙口を徐々に締め、酸素量を調節していく。最終的にどちらの口も 5 cm ほどの大きさに締め、酸素供給を最小限におさえた状態で焼き続けると、灰色の煙はしだいに根元が透明になってくる。ここまでの約 50 時間かかる。やがて、煙の量がさほど多くない、大きな真っ白の煙が出るようになる。この煙をスラという。なおも焼き続けると、この煙に青色が混ざってくるようになる（蛭谷ではこの煙をスラ青という）。このあたりから徐々に排煙口を開いていく。すると、煙がやがて透明な青色から香りのよいうす青、そして、最終的には透明で熱気のあるガス状のものに変化していく。炭焼き職人は窯から出る煙の色で窯のなかにある炭の出来を見極める。

④窯出し

窯から出る煙が透明になったら炭ができたサインである。白炭の場合はここでふさいでいた焚口を壊す。この時の煙道口の温度は約 300℃あたりだが、窯の中に再び酸素が取り込まれることで、窯の中の温度は再び 1000℃以上まで一気に上昇し、できた炭が燃えはじめる。その前に手早く掻きだし（写真 5）、ゴウバイと呼ばれる、灰と土を混ぜて湿らせたものを炭の上にかぶせて酸素供給を断ち消火する（写真 6, 7）。掻きだした炭が冷えれば白炭の完成である。

できあがった白炭は消火の際の灰が表面につくことで灰白色をしており、密度が高いため硬い。着火温度が高く火はつきにくい、高温で長持ちする。かつて養蚕では蚕室の保温や繭の乾燥、製茶では茶葉の乾燥を行う作業で大量に使用されたほか、現在では蒲焼きや焼き鳥などの調理に用いられる。



写真 5. 白炭を掻き出す様子



写真 6. ゴウパイをかけて消火する



写真 7. ゴウパイがかかった白炭

2-2-3. 黒炭の生成方法

黒炭にはクヌギやナラ、カシワ、マツなど、さまざまな木が使われる。

①窯詰め～③煙の色での状況把握までは白炭の生成方法と同じで、異なるのは次の作業からである。

④窯出し

白炭と異なり、黒炭では焼きあがった炭をそのまま窯の中で冷やす。400℃前後で炭を熟成させたあと、空気穴を広げて窯内の二酸化炭素を抜く作業を行う。この作業をネラシという。この作業で窯内の温度を一気に 700℃以上に上げてから酸素供給を断ち、自然鎮火を待つ。このとき窯を密閉するため、ヘドロ状の粘土や灰をかけて空気が入らないようする(写真 8)。これは蛭谷独特の技術だという。そのまま一週間ほどかけて窯を冷やしていき、常温になったところで炭を取り出す。これで黒炭の完成である。

できあがった炭は黒色でやわらかい。着火温度が低いため、火をおこすのは簡単だが火持ちはあまり良いとはいえない。主に家庭燃料として七輪で煮炊きや炬燵・火鉢での暖房、茶の湯などに使用されてきた。以下、白炭と黒炭（写真 9）の特性をまとめる（表 1）。



写真 8. 焚き口を密閉して消火する



写真 9. 白炭（左）と黒炭（右）

表 1. 白炭と黒炭の特性

	色	堅さ	着火温度	火付き	温度	火持ち	用途
白炭	灰白色	かたい	高い	よくない	高い	よい	産業利用、調理等
黒炭	黒色	柔らかい	低い	良い	低い	よくない	煮炊き、暖房等

表からも分かる通り、2 種類の炭には一長一短があり、用途にあわせて使い分けられている。

2-2-4. もくさくえき 木酢液

炭を生成する際に出る煙を冷やして液体にしたものが木酢液である。炭焼きの際の貴重な副産物で、土壌消毒、殺虫、脱臭などに効果があり、農業などで扱われている。普通は蒸留して使うが、純度の高い木酢は茶色がかった透明な色をしており、燻いぶしたようなにおいが特徴的である。また、舐めてみると苦みと酸味が混ざったような味がする。

3. 朝日町における炭焼きと炭焼き職人

朝日町の地勢は山地が多く、全体の 90%以上が高地で占められ、従って昔から林業が盛んな土地柄である。これに付随して蛭谷、大平びろだん、笹川だいらなど、古い時代から薪炭が盛んに生産された（『朝日町誌』）。

そして、現在炭焼きが再びおこなわれるようになった地域は蛭谷、笹川、山崎の 3 つの地域である。過去と現在の比較という観点から、今回は活動が盛んな蛭谷、笹川の二つの

地域に絞って調査を行った。

以下では個人の語りから過去の炭焼きの様子をまとめる。

3-1. 朝日町における過去の炭焼きの制度と様子

まず、朝日町において炭焼きが盛んだった当時、炭焼きの形態は 2 種類あり、ひとつは自分で山を借りたり買ったりして炭を焼くという形態で、できた炭は森林組合に検査・買い取りをしてもらい、その時の相場で取引をするという方法であった。当時の森林組合は村ごとに組織されており、木炭と材木出しの仕事を担っていた。もうひとつは山の元締め（後述）に依頼されて焼くヤキボヤキ（焼歩焼）という方法である。一般的にはこの焼歩焼で炭焼きがおこなわれていたので詳しく説明する。

まず、全国各地（語りでは石川、新潟、長野、栃木、群馬、和歌山、岐阜などが挙げられた）からその山の元締めが村まで炭焼き職人を募集にやってくる。元締めとは、炭焼き職人の統括をし、山の地主と炭焼き職人の仲介役となる人のことである。炭焼き職人はまず、依頼に来た元締めに山の規模、地形、生えている木の種類、焼く炭（白炭か黒炭か）の種類、一俵あたりの焼き賃（歩合制）、食料にはじまる生活用品の支給・運搬制度についての話を聞く。そこで納得のできる条件が提示された場合のみ実際に山に出向き、自分の目で山を見極める作業をおこなう。このとき見極めるポイントは炭窯や炭小屋を建てるのによい地形かどうか、きちんと水が確保できるか、切った木の運搬はしやすいか、などである。また、山を見に行ったときは元締めの家に泊めてもらい、元締めの人となりを見るということも怠らなかった。というのも、焼歩焼の場合、炭焼き以外の生活の世話、つまり、出来上がった炭の運搬や俵や縄などの資材、生きるための食料供給にいたるまですべて元締めが世話をするようになっていたためだ。この元締めにもいろいろなタイプがあり、親切に尽くしてくれる者もいれば、なにかと出し渋る人もいた。なるべくよい環境で炭を焼けるようにするため、元締めの人柄を見極めることも炭焼き職人の重要な作業であった。しかし、炭焼き職人が働かないと元締めも商売にならないということで、炭焼き職人は元締めに対して優越的な態度を崩さなかった。きちんと自分が納得する条件がそろった山が見つかれば、契約に応じた期間だけそこで炭を焼くことになる。場合によっては何人かの炭焼き職人が同じ山に向かい、与えられた土地のなかで自分たちの領地を決めて焼くことになるため、同じ山の中でもよい条件の土地を確保するために炭焼き職人同士で競りをおこない領地を決めることもあった。

さて、自分が炭焼きをする場所が決まると、さっそく炭窯、水場、そして生活の拠点となる炭小屋作りにとりかかる。与えられた土地のどこに炭窯をつくるか、水はどのように引いてくるか、材木の運搬経路はどのようにするかなどを経験に基づいて決めていく。特に自分たちが寝泊りするのための炭小屋の位置は重要である。なぜなら、炭窯と炭小屋の位置によっては、炭焼きが始まった時に自身の焼く炭の煙に悩まされ続けることになるからである。炭焼きの際に出る煙は人体に有害な物質を含んでいるため、いっそう注意しなければならない。朝は山裾の方から吹き上げてくる風、夕方には頂上から吹き下げてくる風、

この経路を見極めて炭小屋作りをしていく。この時作る炭小屋の外観やつくりは集落間できとくに似通っていたというわけではなく、その家その家で独自の特徴があったという。

さて、炭焼きには一家で向かうのが当たり前であったため、子供たちは両親と一緒に炭焼き小屋に住み、幼いころから両親の炭焼きを見て育つことになる。また、学校へ行かなくてはならない年齢になると、子供たちは村に残っている祖父母のところや、親しい村民のもとへ預けられた。このように、炭焼き職人一家にとって生活の拠点そのものになるのが炭焼き小屋であり、一年の大半をそこで過ごすことになる。一つの布団で家族全員が眠ることも珍しくなかった。また、出産さえも炭焼き小屋でおこない、その際、赤子を取り上げるのは夫の役目であり、へその緒は鉋で切った。

このように山の各地で炭焼きがおこなわれ、多い人でひと夏に 2000 俵の炭を焼いていたという。焼いた炭は検査員によって査定される。雪国である富山県は炭の消費県だったため、どのような炭でもある程度は売れたが、群馬、和歌山、岐阜など、炭の生産県で焼いた炭は、査定が厳しく、お金にならないこともあった。なので、炭焼き職人は質の良い炭を大量に作ることに心身を注いでいた。

3-1-1. 蛭谷の炭焼き職人～米丘氏の語りより～

米丘氏（86 歳男性）はかつて 30 年間もの間蛭谷で炭焼き業をおこなっていた。

蛭谷は多くの職業に恵まれた裕福な村だった。炭焼きはもちろん、山菜採りや山で薪を刈るバイタ伐り、そして金を発掘するカナグルイと呼ばれる職業などがあった。対して稲作をしている人はほかの村から見ると少なかった。そうはいっても現在よりは田んぼも多く、奥山にも山田（山間にある田）が広がっていた。そのほか、村を出て東京の方で炭問屋を営む者もいた。

学校へ通っていた幼少期は、炭焼きのにおい（土が燃えるようなにおい）は、炭焼きで家を空けるためになかなか会えない父母を思い出す懐かしい匂いだった。小学校卒業の折に鉋をプレゼントしてもらい、嬉しくていろんな木を伐ってまわっていた。本格的に炭焼きを始めたのは 15 歳の時で、炭焼き職人になろうと思ったのは両親が炭焼き職人だったからであり、そのため自分も自然と炭焼き職人になるものだと思っていた。初めは父親の元について群馬の山で炭を焼いていたが、幼いころから両親の炭焼きを見て育ったため、この時すでに一通りの炭焼きの知識はあった。炭焼きをするうえで大事な能力は、ノコギリ、ナタ、オノの技術。というのも、材木がきちんと取れないと炭を焼くことすらできないから。道具を使いこなすことは、そのまま炭焼き技術に繋がっていくものだった。金物を下手に扱うとすぐに刃こぼれをおこしたりする。なるべくいい金物を使いたいから、各地の金物問屋の性質はひととおりの把握していた。

3-1-2. 笹川の炭焼き職人 ～折谷氏の語りより～

笹川在住の折谷氏（80 歳男性）は蛭谷で 5 年、笹川で 5 年炭焼きをおこなってきた。

折谷氏はもともと蛭谷出身であるが、結婚を機に笹川にきてこの地で炭焼きをするよう

になった。笹川では炭焼きが盛んな時期にあっても職人は5～6人と少なかった。村の主な生業は稲作で、今は杉林になっている部分にもかつてはたくさんの山田を見ることができた。炭焼きがおこなわれていた範囲は、集落近くの山から遠くは長野県の山間部までだった。契約体系は山の地主に依頼されて焼くものだった。また、時には笹川の共有林に出向き、炭焼き仲間同士で領土を互いに決めて焼くこともあったし、共有林を蛭谷の炭焼き職人に貸し出すこともあった。焼いた炭はすべて業者が引き取っていき、業者が仲介する形で各地域に流れていった。炭焼きを始めたのは20歳の時で、心に残っている思い出は、寒い冬に長野で炭焼きをしていた頃のこと。その土地は雪がほとんど降らない土地だったがとにかく寒かったことを覚えている。また、当時は主に白炭を焼いており、炭は焼けば焼いただけ売れた。

3-2. 小まとめ

蛭谷、笹川両地域の炭焼き職人の語りから次の事が得られた。

米丘さんが炭焼きをやめたのは45歳の時、昭和44年（1969年）頃である。理由は前述のとおり、戦後の燃料転換により、炭を焼いても売れなくなったことによるものだ。炭焼きをやめてからは、それまで培ってきた山の知識を生かして富山各地でバイタ伐りなどの山仕事をおこなってきた。また、米丘さんが蛭谷での最後の炭焼き職人だったため、彼が炭焼きをやめたことで、蛭谷の炭焼きは生活から姿を消してしまった。一方、笹川では戦後、よりよい労働条件を求めて住民の多くが勤め人、いわゆるサラリーマンへと転身していき、それに準じて炭焼きの生業も廃れていった。折谷さんも31歳の時（1963年）に炭焼き業をやめ、会社勤めになったという。

以上のように、蛭谷、笹川両地域とも1960年代におこった燃料転換のあおりや社会的化の影響を受ける形で炭焼き産業が衰退し、ついにはおこなわれなくなってしまった。

4. 現代における炭焼き

第3節では蛭谷、笹川両地域における過去の炭焼きについての語りと産業が失われた経緯を説明した。本節では両地域における炭焼き活動が再びはじめられた経緯をまとめ、現代における炭焼きは人々にどのような効果を与えているのかについて考察していく。

以下から現在の炭焼きにおける職人たちの語りをまとめる。

4-1. 夢創塾の炭焼き活動のきっかけ

蛭谷の炭焼き技術をもとに炭焼き活動をはじめたのは夢創塾の長崎喜一塾長である。長崎氏は定年退職後の活動準備として50歳の時（1992年）に、蛭谷にあるご自身の所有林に夢創塾を作った（夢創塾については別章参照）。目的は定年後の生



写真 10. 花炭の窯

活を楽しむためである。夢創塾に小屋を作り、仲間と集まって語らううちに用意してあった木炭が底をついたので自分で炭を焼こうと考え、平成7年（1995年）に炭窯（写真10）づくりに挑戦した。このとき併せて作ろうとしたのは花炭（写真11）と呼ばれる観賞用の炭を焼くための窯であった。この窯を作る際に、噂をききつけたかつて蛭谷の炭焼き職人たちが夢創塾に訪れ、作業を手伝うことになった。再び炭焼き作業に携わることにより、元職人たちもいきいきと若返ったようだったという。こうして花炭づくりをはじめたが、初めはうまくいかず、なんとか50%成功させることができるようになるまでに5年間、試行錯誤を繰り返して炭焼きをした。夢創塾には蛭谷に住む年配者が頻繁に集まるようになり、やがて地元の小学生たちも授業の一環で来るようになると、さらに広い世代の交流の場として機能した。



写真11. 花炭（左からクリ、イネ、バラ）



4-1-1. 現在の夢創塾の炭焼き

現在、夢創塾では花炭のほかに白炭、黒炭、竹炭と多彩な炭を焼いている。竹炭とは文字通り竹を炭化させたものである。この活動は子どもたちの炭焼き体験や、帰農塾³のプログラムのひとつとして行われている。ここで使用する材木は小川に生えている木を使っている。小川のほとりの木はしばしば人里に下りてきたクマなどが身を隠す場所として使うこともあるため、これを防止するために切られる。その木をただ処分するだけではなく、なにか別のことに使えないかと考えた時に、新たに炭焼きに使うことを思いついた。このために大量に炭焼きができる炭窯（写真12）を新たに作った。また、時には山に入って間伐した木材を炭焼きに使



写真12. 体験活動で使う夢創塾の炭窯



写真13. 体験活動の様子

³農業技術に対する講義や農業体験だけでなく、里山の生態や山林の利用の仕方、村の生活、村人とのつき合い方など里山での生活の仕方全般を学ぶとりくみ。夢創塾ではNPO法人グリーンツーリズムとやま主催の帰農塾が開催されている。

うこともある。

炭焼き体験の最中、長崎氏は指示をするのみで作業はもっぱら参加者の手によって行われる。これが体験プログラムのミソともいえる。体験では窯詰めなどの大変な作業や火付けに始まり、白炭の炭出しなどの危険な作業に至るまで参加者はまんべんなく体験することになる。また、この時焼かれる炭のよしあしは二の次であり、いかに参加者が身をもって炭焼きの手順を学べるかということに重点が置かれている（写真 13）。

さて、夢創塾で焼いた炭はほとんどが体験者に還元される。「無償で炭をあげることで、体験者は自分の成果を形として受け取ることができる。それに対して自分は、炭の対価としてお金では買えない人脈や笑顔をもらうことができる」と長崎氏は話す。このほか、焼いた炭は夢創塾を運営プログラムの一つである塩づくりの際に炭で塩を煮詰める作業に使われるほか、頼まれて農家に売る場合もある。そこでは炭は木酢と共にハウス栽培の土壌改良に利用されるという。

どうして炭焼きを続けているのか、と尋ねたところ、答えは「自分がたのしいから」というごく簡単な理由であった。長崎氏は、「自分が楽しんで行う活動が、環境教育や人とのつながりをもたらし、社会に還元される、そこに生きがいを見出すことができる」と話してくれた。また、「炭窯は生き物であり、炭焼きはその炭窯との対話である。炭を焼くことで（炭窯と対話することで）人間本来の能力などを感じることができる」とも語った。

今後の展望としては、「炭窯塾をひらくことで、これからも多くのひとたちと交流していきたい。そして、活動を通して新たな炭やきの仲間を増やしていけたらいい」と語る。そのほか、長崎氏はインドネシアのバリ島でも炭焼きを教えており、蛭谷の炭焼き技術が海外にも伝承できたことを誇りに思っている。

4-2. 笹川の炭焼き復活のきっかけ

笹川で炭焼き活動を再開させたのは、かつて生業として炭焼きをしていた人々である。この地域の炭焼きは過去の生業に対する懐かしさや、伝統文化を残したい、という思いから再開した。炭焼き活動がはじまったのが平成 15 年（2003 年）で、最初に活動を始めようといった人たちのほとんどはすでに亡くなっている。発起人の一人に三峰山にあるキャンプ場の管理人をしている人がいたため、当初はその土地に炭窯をつくり、村の公民館活動の一つとしておこなった。しかし、実際に活動を始めてみると、その作業の大変さから参加者たちが活動を嫌がるようになり、公民館活動としての炭焼きは 1 年で終わってしまった。その後、やはり炭焼きをやりたい、という思いをもつメンバーが再び集まり、現在の炭焼きグループが作られた。

4-2-1. 現在の笹川の炭焼き

現在、笹川の炭焼きグループは 9 人で活動している。メンバーの平均年齢は 70 歳である。火加減や煙の様子をいちいち見に行くのが大変ということで、活動に使う炭窯は三峰の山から笹川の集落近くに移動した。現在の窯が作られたのは平成 21 年（2009 年）で、すべ

てメンバーの手で作った自慢の炭窯だという（写真 14）。炭焼きグループは毎年 11 月くらいまで、年に 3～5 回ほど炭を焼いている（写真 15）。その際に使用する木は、以前は山から伐ってくることもあったが、そうすると車で運ぶことができる範囲からしかとれないため、最近は川べりの木や、電線にひっかかったいらぬ木などを用いている。木を運んだり窯詰めをしたり、炭を掻き出したりする作業はみんなで一斉にやっているが、焼き具合をみたり調節したりするのは唯一の経験者である折谷氏ひとりである。そのため炭焼きにおける火入れ後の温度管理や見極めは彼が頼みの綱になっている状態だ。



写真 14. 笹川炭焼きグループの炭窯

笹川の炭焼きグループは毎回焼いた炭と木酢液を売っている。ほとんどが個人取引であり、主に朝日町に住んでいる人が購入していく。また、料亭に出荷することもある。そのほか、笹川で行われる直売会で炭を売ることもある。炭を売って得たお金は、次の活動資金を除いて全てメンバー同士の飲み会代になる。

ここではお金を稼ぐためではなく、仲間内で集まって楽しむために炭焼きがおこなわれている（写真 16）。それは「炭焼きをすることで集まる場所ができる」「普段お金がなくても、炭を売ったお金で集まって飲むことができるので欲求を満たすことができる」「炭焼きは道楽。飲みに行くために焼いているようなもの」という意見からもうかがえる。なぜ炭焼きを続けているのかという質問に対しては「炭焼きはちょうどいい退屈しのぎになる。家で寝ているよりよっぽど健康的だ。炭焼き小屋が憩いの場だ」という答えが返ってきた。このように、初めはなつかしさや技術継承のためにはじめた炭焼きであるが、現在では仲間が集まることのできる場所としての役割が大きいようである。そして、それが結果的に個人の生きがい創出や、より親密な人間関係を作り出す場として機能しているといえる。

今後、炭焼きは続けていくのかということについては、前述のとおり、現在炭焼きの経験者はひとりしかおらず、そのひとに頼っている部分が大きいため、なんとか技術を次の世代に伝えていかなければ存続は難しいという。しかし、長年培われた勘を教えることが難しいのはもちろん、下の世代から学ぼうとする姿勢があまり感じられないのでどうしたものか、と 80 歳の年長者であり唯一の経験者である折谷氏は語る。それに対する意見としては、炭焼きは面白いし、学ぶ意欲はあるのだが、本業というわけではないので折谷さんのようにはできないのでは、という思いがある。このように世代間のギャップはあるものの、双方とも炭焼きを伝承し、続けていきたいという気持ちは同じである。



写真 15. 俵川炭焼きグループの活動風景



写真 16. 炭焼き後の飲み会の様子

5. 炭の新たな使い方

ここからは視点を変えて、現代における炭の用途について説明をしていく。
近年、燃料としての認識しかされてこなかった炭の使い方にも変化があらわれている。例えば黒炭は、これまで「火持ちがしない」と敬遠されていたが、現在では逆に「火が付きやすいから」ということで売れるようになった。その理由はかつてのような暖房用ではなくバーベキューなどのレジャー用燃料として使われるようになったためである。このほか、

表 2. 炭の使用報告例（林野庁 木炭関係資料）

用途	内容
土壌改良用	稲作、畑作、施設園芸、果樹等へまくことで、土壌の透水性、保水性、通気性の改善のほか土壌微生物活性化等の効果がある
家庭調湿用	家屋床下、押し入れの利用により、木炭の水分吸収作用による湿度の低下、木材の含水率の低下、かび、微生物を調整する作用があり、生活環境の改善をはかるとともに腐朽を防止する効果がある
水質浄化用	流水路に木炭を設置すると、木炭の吸着効果により不純物を除去し、孔隙に住みついた微生物による汚濁物質を分解する機能もあり、河川等の水質の浄化が図られる。
消臭用	庭等において、木炭の孔隙ににおいのもととなるアンモニア等の分子が吸着されることを利用して消臭用として用いられる
鮮度保持	生鮮果菜類が発生させるエチレングスを吸収し、熟成老化を防ぐ
飲料水用	木炭の吸着性や浄化作用を活用し、水道水をろ過することで市販の浄水器と同等の効果が期待できる
炊飯用	よく洗った木炭を米と共に炊き込むことでふっくら炊きあがる
寝具用	炭の多孔質性から通気性、頭寒、除湿などの効果が期待できる。また、木炭粒によるマッサージ効果やリラクゼーション効果も期待できる

木酢液の利用なども含めて、燃料以外の分野で炭は見直されてきている（日本の森を支える人たち、1992）。

では、燃料以外で炭は具体的にどのように利用されているのだろうか。表 2 で炭の新たな使用報告例をまとめる。

このように、炭には土壌改良、湿度管理、水質浄化、消臭、リラクゼーションなどの効果が期待できる。

5-1. 蛭谷・笹川での炭の使い方

蛭谷と笹川では、焼いた炭はどのように使用されているのだろうか。

5-1-1. 夢創塾（蛭谷）

夢創塾では体験プログラムである塩づくりの際やバタバタ茶をふるまう際に燃料として炭を用いるほか、長崎氏は新たな炭の使い方はできないかを模索し続けている。これまでおこなった事業は、トイレの壁を塗るときに炭をまぜることで消臭効果を期待した炭壁、赤外線働きで自身の体温で温まることができる炭布団、粉末にした炭を練りこんだ炭うどん、インテリアとしての機能のほか、消臭、湿気とり効果も期待できる飾り炭（写真 17）などである。これら炭を用いた製品を作るメリットは、燃料としてよい炭でなくても使うことができる点だ。これらのアイディアは長崎氏が考えたもの、体験にきた子どもたちに考えてもらったもの、別の機関で実際に販売されている商品からヒントを得たものなどさまざまである。



写真 17. 夢創塾の飾り炭
「えんむすび」

5-1-2. 笹川炭焼きグループ（笹川）

笹川炭焼きグループでは焼いた炭は良い部分を商品として売り出し、細かな炭やアシの部分は自分たちの飲み会のバーベキューの際に用いている。11 月に笹川で開かれた直売会（写真 18）の際に炭を購入した人たちに炭の使い道を聞いてみたところ、多くがバーベキューに使うという回答だった。なかには笹川の炭は燃える際に炭がはじけ飛ぶ爆跳がおこらず安心して使用することができるという意見もあり、笹川の炭の質の良さがうかがえた。その他には、火鉢で暖をとる、ご飯を炊くときに一緒に入れる、冷蔵庫の消臭に使う、タンスに入れて湿気とりにする、などの用途に使われることがわかった。



写真 18. 直売会の様子

6. まとめと考察

まず、蛭谷・笹川両地域で炭焼き活動が再びおこなわれるようになった背景にはどのような想いがあったのかということについて考察したい。かつて炭焼きを生業としていた人たちのライフヒストリーを通して見えたものは、過去の炭焼きは職業・生業としての意味合いが強く、生きるためや儲けるために、どのような山へ赴いて、どうすれば効率よく炭が焼けるかということに重点がおかれていたということだ。また、米丘氏の「親が炭焼き職人だったから自分もそうなるものだと思っていた」という言葉からもわかるとおり、炭焼き職人には、“なりたくてなった”というよりは、“なるべくしてなった”というほうが正しいようにも思える。しかしながら、炭焼き業がしがらみにとらわれた職業であるかということではなく、今回炭焼きについて書くにあたって参考にした『二人の炭焼き、二人の紙漉き』という書籍の中で著者の故米丘寅吉氏（蛭谷出身の炭焼き職人）は「炭焼きには何者にも縛られない自由がある、そして、すべてが自己責任だ」と述べていたことから、炭焼き業に対するある種の希望や、厳しい作業に見合うだけのやりがいがあったことがわかる。また、「大自然のなかで一家が団結し、自分たちのペースで炭焼きを続けていた」という部分からは、現代にはあまりみられない心のゆとりやおおらかさのようなものも感じられる。笹川のように、現代の炭焼きが過去への懐旧という意味合いで再開されたと考えるならば、こうした心のありかたに対して懐かしみを感じているのではないだろうか。また、炭焼きがいかにやりがいを感じることができる職業であったかについても、4-1. 夢創塾の炭焼き活動のきっかけで記したように、夢創塾に訪れる元職人たちが再び炭焼きに携わることによっていきいきと輝きを取り戻したという話からもうかがい知れよう。

次に、現代における炭焼きはどのような役割を担っているのかについて考える。過去の職業としての炭焼きを生きるためとするならば、現代の炭焼きをする理由は、自分たちが楽しむためであるといえる。いままでみてきたとおり、笹川炭焼きグループと蛭谷夢創塾の両炭焼き活動は余暇を楽しむための活動のひとつとして捉えられている。そのなかで、「炭焼きをすることで集まる場所ができる」「炭焼きはちょうどいい退屈しのぎになる。家で寝ているよりよっぽど健康的だ。炭焼き小屋が憩いの場だ」などの語りより、炭焼きをすることが新たな人間関係を育むコミュニケーションの場として機能していることがわかる。また、実際に体験してみてよくわかったが、炭焼きは大変な作業の連続であり、活動続けることは健康保持に効果抜群であるということだ。その証拠に、これまで著者が話を聞いた炭焼き職人たちは健康そのもので、実年齢よりも若く見える人たちばかりであった。つまり、現代の炭焼きは、炭焼きそのものを楽しむのはもちろんのこと、炭焼きを通して個々人が新たに居場所を獲得したり、肉体的にも精神的にも健康を保つことに役立ったり、人とのかかわりを生むツールになったりする役割を担っていると考えられる。それが結果的に活動する人々の生きがい創出につながっている。

そして、現代における炭は私たちとどのような関わりがあるのかということについて述べる。本報告の最初で「現代において炭はあまり用いられなくなった」と書いたが、炭焼

きについて調査するうちにそれが思い違いであることに気付いた。たしかに燃料としての炭は今日ではあまりなじみのないものである。しかし、それ以外の用途については湿気とりの効果や消臭、殺菌など、様々な効果が期待できる優れものであり、さまざまな場面で私たちの生活に関わってくる。それは5. 炭の新たな使い方の表2で記したとおりなのだが、他に例をあげるとすると、私たちはドラッグストアなどで炭由来の石鹸や洗顔フォーム、果ては冷蔵庫に入れる脱臭材や消臭スプレーなどの製品を容易に目にすることができるだろう。寒い冬にはホッカイロを使って身体を温めることもあるが、それも炭由来のものである。つまり、炭は形をかえてなお、私たちの生活の中に組み込まれており、私たちの生活と共に発展してきた、日本人とは切り離すことのできないものなのである。

最後に、今回調査してみて思ったことだが、現在山間部における森林はほとんど利用されないまま放置されている。これは朝日町だけでなく日本全国に言えることだろう。かつては炭焼き活動によって定期的に間伐⁴されていた山々も現在では人の手が入らなくなっており、そのせいで環境変化による動植物の絶滅や土壌の劣化が懸念されている。それを打開するため、私たちの生活の中に炭の利用がもう少し復活してくれれば、炭焼きを副業としてではあってもおこなう人が増え、やがて山間部の森林利用も復活し、より健全な環境にしていくことができるのかもしれない。

感想と謝辞

私は黒部の漁師町の出身である。もともと山が好きで山村の生活に憧れはあったものの、山里の文化にはあまりなじみはなく、今回炭焼きについて調べるにあたってもまったく知識がない状態から始めなければならなかった。そこでまず、実際に炭焼きを体験してみないことには話を聞いても仕方ないと思い、夢創塾の長崎氏のもとでいくつかの炭焼き作業に携わらせてもらうことからはじめた。このような体験がすぐにできる環境に巡り合えたことは本当に幸運なことだと思う。実際に体験してみて、覚悟はしていたにもかかわらず、かなりの重労働に驚かされるばかりだった。しかし、身体全体を使って流す汗はとても心地よく、楽しんで作業することができた。長崎氏の語りではないが、身をもって炭焼きを体験することができたおかげで、ただ話をきくよりも数倍実のある、実感を伴った調査が進められたように思う。また、夢創塾に通ううちに、炭焼きだけではなく塩作りや紙漉きなどの自然体験にも参加するようになり、この1年はかなり健康的な生活を送ることができた。このような場を提供され、親身に話をきいてアドバイスをくださった長崎氏には感謝してもしきれないくらいである。また、笹川の炭焼きグループの方々には、突然訪ねていったにもかかわらず快く調査に協力してくださり、おかげで調査内容の幅がかなり広がった。そして、活動後の飲み会にも参加させていただき、より深い話をきけたことにも感謝

⁴木の生育を助けたり、採光をよくしたりするために、適当な間隔で木を伐採すること。かつては炭焼きのための木材調達の際に自然と間伐がおこなわれていた。

している。はじめてうかがったときに御馳走していただいたイノシシ肉の味は一生忘れな
いだろう。そのほかにも朝日町の多くの方々にお世話になり、つつがなく調査を終えるこ
とができた。今回朝日町の炭焼きについて調査したことは私の人生におけるとてもよい経
験である。

最後になりましたが、調査に協力してくださった長崎先生、笹川炭焼きグループの皆様、
そして多くの朝日町の皆様に対し、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

参考文献

米丘寅吉、『二人の炭焼、二人の紙漉』桂書房、2007 年

全国林業改良普及協会、『日本の記録 林業偉人列伝 Vol. 3』株式会社技秀堂、2010 年

中沢和彦、『日本の森を支える人たち』株式会社晶文社、1992 年

農林水産省 林野庁HP『木炭関係資料』<http://www.rinya.maff.go.jp/j/tokuyou/tokusan/megurujoukyou/pdf/3mokutan.pdf>

カ・ボンジャパン HP

<http://www.carbon-japan.com/index.html>

6. 笹川における稲作の変遷と稲作グループが地域に果たす役割

土井 冬樹

はじめに

私の出身地である伊豆大島は火山島のため粘土が少なく、水をためることができない。そのため田圃がなく、幼い頃から稲作というものはしたことがなかった。反対に、笹川は川を挟んで、家々と田圃という風景である。調査をはじめの頃は、ただきれいな景色だというようにしか思っていなかった。

笹川の稲作について興味を持ったのは、2012 年 5 月の中頃、「稲作グループさき郷」の田植えに参加させてもらったときだった。稲作ができなくなった人たちの代わりに田圃をやる、という話を聞いて、笹川では、いまでこそこうしたグループが必要になっているが、昔はどのような稲作が行われていたのか、そして、このグループは笹川でどのような存在となっているのかと興味が広がり、稲作のことを調べたいと思うようになった。

この報告では、まず笹川におけるかつての稲作、そして現在行われている稲作について説明する。次に笹川で稲作をしていた人、現在稲作をしている人への聞き取りから得られた語りをもとに、笹川で田圃というものがどのように捉えられているのか、そしてとりわけ「稲作グループさき郷」については、それがどのような集団で、グループメンバーや笹川という地域にどのような影響を与えているかを考察する。調査は、主に聞き取りで、2012 年 8 月 13～26 日、9 月 20～26 日に泊まりがけでおこない、その他土日や祝日などにも訪れた。稲作グループの活動については参与観察をした。

1. 笹川の概要

1-1. 笹川の地理

笹川は周囲を山に囲まれている。そのため日照時間が短く、夏場は日中こそ暑いですが、夜中には 10℃ほど気温が下がる。また山が近いこともあり、川の水が冷たい。稲は水が冷たいとおいしくなるとされ、寒暖の差があるところだと甘い米ができるともいわれる。笹川はこうした点が合致した、稲作に適した土地である。

ただ、気候的、立地的な側面を除けば、山間であるため土地が狭く、平野のように整った圃場整備をすることができない、斜面があつて畦が^{あぜ}高くなるなどのことがあつて、機械を田に入れるときは幾分か不便である。

1-2. 出稼ぎの村

笹川は、大正時代の頃から出稼ぎの村であつた。笹川の村人のうち、働き盛りの男性のほとんどは出稼ぎ（タビ）に出て、村から遠く離れた地で過ごした。泊町で定職に就くよ

り、土方として遠方に出稼ぎにでて働いたほうが多く稼ぐことができたという。そのため、ほとんどの田圃の仕事は、残された家族でするのが一般的だった。

当時の男性は、春、田おこしがすむと出稼ぎに行き、お盆の時期に笹川に戻った。そのあと、8月28日を本祭りとする笹川の秋祭りに参加し、稲刈りの準備をすると9月の上旬にまた出稼ぎに行く。次に帰ってくるのは年末で、年を越したあと出稼ぎに行くこともあったが、多くは笹川で冬を越した。冬の時期、笹川に残った男性たちは、町内会に一つずつある倶楽部と呼ばれる公民館のような集会所に集まって藁仕事をする。そのときに、その年一年分のわらじや、^{みの}簀、かごなどを作った。そして、春になるとまた田おこしをしてから村を出て行く、という生活をしていた。

2. 笹川の稲作

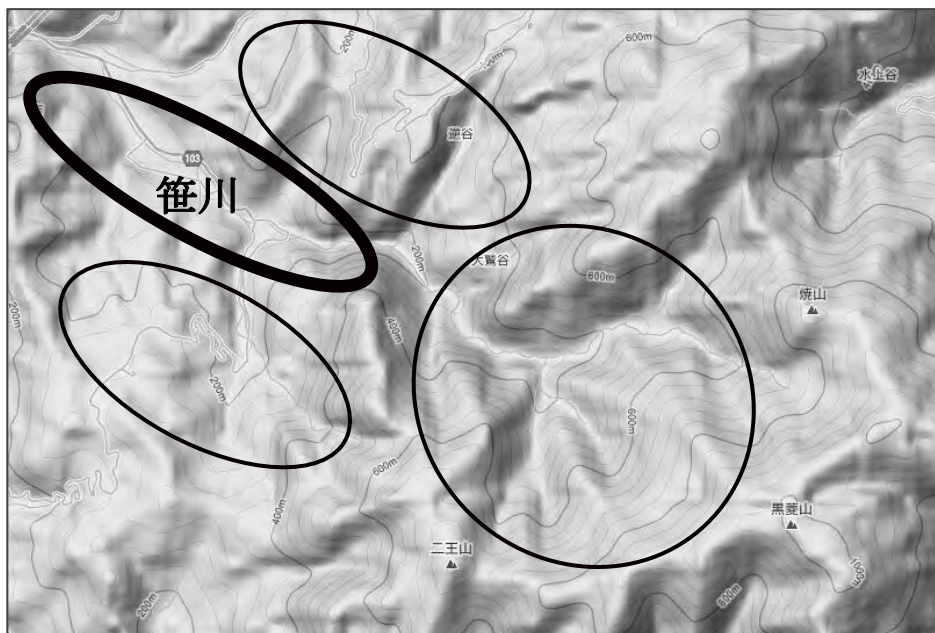


図 1. 山田の分布 (Google map)

以下、笹川の稲作について、過去から現在までの変遷を書く。なお、この章にある「山田」とは、山の中にある田圃のことで、村の田圃と対比して考えられている。村の田圃は、オヤッサンと呼ばれる一部の土地持ちのものとなっていたので、分家など多くの村人は、山に田圃を作っていた。山田は管理が大変ではあったが、畦に傾斜があるため一坪あたりの面積が大きく、また平らなところにある田圃より広いので枝豆や小豆などの作物を多く植えることができた。

山田の分布はしっかり把握できていないが、笹川を中心として、南は共有林の方まで、東は宮崎や境の方まで広がっていたという。現在ではそのほとんどが杉林となっており、「杉が見えるところは、もともと山田だった」と住民は話す。図 1 は、聞き取りからおおよその山田の分布を示したものである。集落近くにあるものもあるが、田圃に行くために

山を二つ三つ越えなくてはならないところも多く、標高にして 200 メートルから 800 メートル辺りに作られていた。

2-1. 戦前戦後の笹川の稲作

ここでは、笹川に住む 70～80 代の人からの聞き取りをもとに、第二次世界大戦前後から、機械化がはじまる 1960 年代初頭までの稲作について報告する。



写真 1. マンノ



写真 2. ヘランガ

田おこし

田おこしは春先におこなわれる。田おこしとは、前年使った田を耕し、「眠りから覚ます」ことで、主に家族でおこなっていた。

田おこしは、まずマンノという道具（写真 1）を使って、前年刈りとったあと残された稲の株を掘り起こすことから始まる。これをアラオコシという。マンノは鋤の^{くわ}ように使うもので、これで株を掘り起こす。それが終わると、次はミツンガという道具で、マンノを使って起こしたアラ（稲株とその土のかたまり）を細かくする。これを小さくコギルという。そうしてから、そのあらくれをシロカキマンガで掻いて最後の掘り起こしを行う。シロカキマンガは、横に広いフォークのような形で、歯が 10 数本ついているものである。

裕福な家では多くの場合牛や馬を飼っており、シロカキマンガを家畜につないで起こした。数軒で共同して牛馬を飼うこともあったが、家畜を飼っていない家もあり、そうしたところは人から借りて作業をした。しかし、借りるときには相当な金額がかかったため、家畜を使わず人力で作業をすることもあった。

家畜を使う場合、鼻輪に 1.5～2 メートルほどの笹を結んで、それを引っ張って先導する者（ハナトリ）がついた。だいたいそれは女性や子どもの仕事で、後ろのシロカキマンガを土に押し込んで操作するのが男性の仕事だった。人が 3 人いると、ハナトリとシロカキマンガを操作する人、そしてその後ろでおこしたところをならす人とで一人ずつ役割分担をした。

土をならし終わると、肥料として土手の草を刈ったものを田圃に入れ、冷凍のニシンを

碎いてまいた。牛馬を飼っている家では、刈った草と牛馬の糞とを混ぜて堆肥にしてそれを肥料に使った。田おこしは、基本的にそれぞれの家族で行うが、この堆肥を運ぶのは力のいる仕事だったので、人夫を雇って村の田圃や山田に運んでもらっていた。

畦を作るのも大切な仕事だった。畦はヘランガ（写真 2）で稲株をおこして重ね、それを固めて作る。またモグラが穴を掘ったり、雨などで緩んだりするため、杵で畦をうって田圃を囲う。これは、子どものうちからやるようにと親にいわれ手伝うものだった。畦ができたなら水を張って田圃の準備は完成する。畦には枝豆や小豆を植えて育てた。

苗代作り

田おこしが終わると、その田の隅にここと決めて苗代をつくった。去年残しておいたもみをばらばらとまいて、そのあと一足分の隙間を作り、その横にまたまく。それが生長すると、片手で握れるくらいの量でまとめていって、田植えの時に使った。

田植え

田植えは、ワクを使っておこなわれた。ワクとは、長さが 2～3 メートルの六角柱で、田に転がして等間隔の跡をつける道具である。田植えをするときにはその跡を目安に植えた。現在使われている機械と比べると苗と苗との間隔が広く、株の大きさがほぼ均一に生長する。田圃が四角形であればワクを使うことができたが、三角形などの場合ワクを使えないので、植える人の経験で田植えがされた。

田植えの時期は、現在と比べると遅く、笹川では 5 月末頃だった。また、この頃は、宮崎や境の方に田圃を持つことがはやっていたが、それらはドロムシの影響で 6 月に入ってから田植えをした。笹川ではドロムシと呼ばれているが、正式名称はイネドロオイムシといい、稲を白く腐らせる虫である。ドロムシは、6 月に入ると宮崎や境の田圃に出てきた。そのため、6 月の頭に糞のようなもので田の水をすくい、ドロムシを除いてから田植えをした。

田植えは、村の内外関係なく親戚を呼んだり、また近所で集まったりして手伝いあった。笹川では「イノココロ」と言われるものがあり、親戚、近所同士などで手伝ったら手伝い返す、という風習、考え方があったため、こういったやり取りはよくあったという。また、そのようにお互い助け合うことを、イイスル、イイサスとも言う。

また、大正前期やそれ以前には、広い土地を持った家は「いついつに田圃をする」というのが決まっており、手のあいている人がその日に手伝いをすると昼食と米 2 升がもらえた。しかし、それ以降出稼ぎがはじまり男性が村から出て行くようになって、村全体に人手が減っていくと、この風習は姿を消すようになる。

田植えをするとき、男性が笹川にいる場合は、男性が朝早くに田圃に行ってワクを回して跡をつけ、そのあと女性が田植えをした。子どもは学校から田植え休みを 3 日ほどもらっており、休憩のときのお茶やご飯を持ってきたり、力がついて運べるようになったら苗を天秤棒で運んだりした。

草取り

草取りには、まず一番取りというものがあった。田植えから 10 日後くらいに、田圃の中に入って、苗の周りがある草を抜かずに土の中に押し込む。この頃は稲の根が張り出すくらいであるため、苗を抜いてしまわないように気をつけなくてはいけなかった。それからまた 10 日後に二番取り、そしてさらに 10 日後に三番取りまでやった。草取りとはいうものの、このように草を泥に押し込むだけのものだった。三番取りの時期になると、草を押すためにかがんだとき、苗が生長していて目や顔に刺さるので、防御のためにお面のようなものを被った。

これは、2〜3 人でイイサしてやることもあったが、家族だけでやることもあった。

草刈り（クロ刈り）

草取りが終わる頃、今度は土手の草刈りがはじまる。土手の草はクロと呼ばれ、クロ刈りとも言われた。クロは、牛や馬などの家畜の餌に使うほか、翌年の田の肥やしにするため田の横の土手に積み重ねてとっておいた。これをチュウという。

稲刈り

田植えの項で書いた、ワクを使ってする田植えでは、現在の機械での田植えと違い、株がほとんど同じ大きさに生長したため、5 株刈って置き、もう 5 株を刈って、それを稲架に掛けるときに開きやすくするため、「V」の字の様に重ねてからからげている。からげるといのは、刈った稲を乾かすときに稲架にかけるため、写真 3 のように束ねることである。通常、水を抜いて田圃の土を乾かしてから稲刈りをしたが、山田には水が抜けず土が乾かない沼田もあり、そういった田圃ではぬかるんだままで稲刈りをした。沼田の場合、最初のうちはからげた稲束を畦に置いていくが、田の中の方に進むと、杉の葉を重ねたものや木の板などを浮かべてそこに稲束を置き、いっぱいになると畦の方に運んだ。

稲刈りは、小中学生も、「手伝わないとご飯を出さないよ」などと親から言われてやる仕事だった。また、田植えと同じように人と集まったり、人を呼んだりしてイイサした。

刈った稲は稲架場へ持って行って掛ける。稲架場まで刈った稲を運ぶのは、学校が休みであれば子どものやる仕事で、運ぶときには、5 株と 5 株でからげた稲束を 18 集めて一つに結んだ。この 18 集めたものを一束いっそくと呼ぶ。

男性は、お盆の時期に帰ってきて、笹川が一番大きな行事である秋祭りに出る。そして、笹川にいる間に、作業がしやすくなるように田から稲架場までの道刈りをした。それから、稲架には杉の木を使ったが、その稲架場の下刈りをして、写真 4 のような稲架を作ってから出稼ぎに出た。そのあと一週間ほどしたらまた出稼ぎに行った。そのため、稲刈りも一般的には女性の仕事であった。

日中はずっと稲刈りをするため、稲架掛けは夜中、月夜の晩にやった。稲架が 4 段より高いところになると、稲架掛けする人ははしごで上に行き、下の人に稲束投げあげてもらい、それを受け取っては掛けた。この稲束投げはヤンダスといって、主に子どもがやる仕

事だった。学校から帰って夕飯前にやらされることもあったという。写真 5 は、はしごを使って稲架掛けをしている様子である。一番上の段の高さはだいたい 3 メートルほどになる。

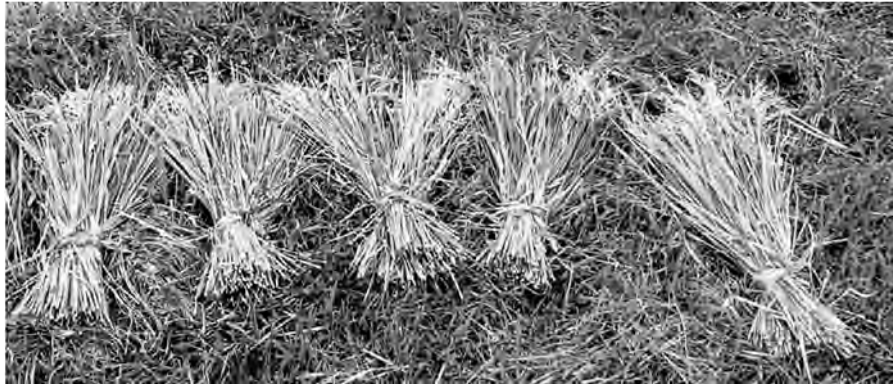


写真 3. からげた稲



写真 4. 稲架と稲架掛けされた稲



写真 5. 稲架掛けの様子

稲架で稲が乾いてくると、脱穀をする。脱穀には、足踏みでもみをとる仕掛けが回る仕組みの脱穀機を使い、山田の場合これを稲架場の近くまで持って行った。藁の分だけでも軽くして運ぶためである。足踏みをするのもなかなか大変なため、子どもに足踏みをさせることも多かった。また、水路を持っている人は、ダイロといって、足で踏む代わりに水車を使って回す脱穀機を使った。

山田だと日が陰るのが早く、稲架掛けをしても稲がすっかり乾かないこともあった。そのときは、脱穀をしたあとに家の庭など日当りのいい場所にむしろを敷いてその上に米を広げて干した。それを 1～2 時間の間隔で、稲を混ぜて場所をかえ、乾きやすくなるようにした。これをテガヤスという。今度は日が暮れる前、稲粒が暖かいうちにカマス（かご）に戻し、家の中に入れる。こうしたことを繰り返してからからになるまで乾かした。

もみすりは、笹川にもみをする道具がなかったため、農協に頼んで持ってきてもらっていた。それを、10～15 軒くらいの人が、その日一日でできる分の米だけ持ってきてもみすりをした。それ以前は、ごまをするような方法でもみすりをしたという。

米は、自分たちで食べるものの他、年貢としてオヤッサン（土地持ち）に渡したり、農

協納めといって農協に出荷したりしていた。笹川の米はその頃からおいしいといわれていた。

2-2. 機械化の進展と出稼ぎの終わり

1960年代から、稲作の機械化が笹川でも起き始め、テイラーという耕耘機^{こううんき}や、バインダーという稲刈り機が入るようになった。バインダーは、刈りとりながら稲を束ねる機械で、そのあと簡単に稲架を使って稲を乾かせるようになった。

はじめのうちは機械が高価だったので、数軒で一台の機械を買い、その仲間内で交代で使っていた。テイラーでもバインダーでも、山田に運ぶのは大変な作業で、引く人と押す人とに分かれて皆で運んだという。

しかし、高度経済成長期で景気が良くなり余裕が出てくると、自分のしたいときにできる、ということもあって個人でそれぞれ機械をかうようになっていった。こうして、多くの人手を必要とした手作業でおこなう稲作は、機械があれば家族だけでできるものとなっていき、イイスルことが次第に減っていくようになった。

また、仕事が泊の町の方でできるようになったり、それまでの土方としての経験を生かして建設業を地元で立ち上げたりして、出稼ぎに行く男性はほとんどいなくなった。そのため、以前と比べると稲作は夫婦でおこなうところが多くなっていった。そして、機械化が進み、トラクターなどが出てくると、その運転はおおむね男性がするものとなった。

その後も、田植機やもみすり機、コンバインや乾燥機なども導入されるようになり、田圃の仕事は親戚、近所の協力で行うものから次第に家族化、個人化していくようになる。

2-3. 山田の終わり

1970年代には、上で述べたような機械化が進展していく一方、山田が終わりを迎えるようになる。

その原因の一つは減反政策である。減反政策は1970年頃から強く押し進められるようになった、米の生産調整のための国策である。米の作付け面積のうち、一部を大豆や小麦などに転作するというこの政策は、多くの人に山田をやめさせるきっかけとなった。

また、1969年と1972年にあった笹川の水害も、大きな原因の一つである。この水害で、山田自体がだめになったり、山田まで通じている道が流され田圃に行けなくなったりして、山田をやめたという人は多い。

その水害の結果、女性の農作業が減り稼ぎもなくなってしまうため、富山市大沢野から「朝日電子」の工場^{こうば}を誘致した。もともと田圃の作業などが落ち着くと、女性も土方などの日雇いの仕事に出て行くことが多かった。そのため、村の外へ行かなくても稼ぎができる、ということで多くの人がこの工場に勤めるようになったが、仕事の忙しさなどで、水害の影響が少なく、山田を続けていた人たちも村から離れたところにある山田の管理にまで手が回らなくなった。山田は次第に放棄され、村の田圃だけが使われるようになってい

った。

この時代を境に、山田には杉の苗木が植えられ、ほとんどが杉林となった。その杉も、はじめのうちは下刈りをしたり、冬を越したら杉起こしをしたり、枝払いをしたりと管理をしていたが、木材の価格が下落して金にならなくなったため、管理されなくなっているのが現状である。

2-4. 現在行われている笹川の稲作

山田は、書いたとおり放棄され終わりを迎えたが、村の田圃はその後も続いている。ここでは、現在おこなわれている笹川の稲作について紹介する。

2-4-1. 笹川の稲作の一般的な形態

ここで一般的とは、笹川の多くの家がこの形態をとっているということである。現在、田起こしから、田植え、稲刈り、精米まで、すべて機械が用いられている。笹川でも圃場整備が約 20 年前におこなわれ、機械での稲作がしやすくなっている。

田起こしはトラクターで行う。田植えは田植機でおこなうが、機械に苗を追加したり、植えきれない田の角のところを植えたりなどやることがあるため、少なくとも 3 人ほどの手を使う。また、手押し式の田植機しか持っていない人は、車型の機械を持っている人に代わりにしてもらうこともある。稲刈りは、全体をコンバインで刈るが、刈りきれっていない隅は人が刈ってコンバインの脱穀機にかける。脱穀された米は、そのまま乾燥機に運ばれ、そこで精米までおこなわれる。

また、機械の他に、畦には除草剤、田圃には防虫剤をまくようになるなど様々なところで近代化が図られ、かつてのような手間ひまがずっとかからなくなっている。

2-4-2. 笹川の稲作の他の形態

笹川では、現在でも稲架掛けをおこなっている家が二軒だけある。

私はそのうち一軒からしか話を聞くことができなかったが、その家では、上で紹介したものとは違った稲作をしている。

田植えには、車型のものとは違い、手押しのものを使っている。そのため、車型のものよりは手がかかるし、運転をするのにも力を使う。また、稲刈りには上でも述べたバインダーという稲束をからげる機械を使い、そこでからげたものを田圃の近くに建てている稲架にかける。

このようなやり方を続けているのは、「機械を買うお金がないから」とのことだったが、こうしたやり方はとても気に入っているようで、田圃を主に管理している 70 代男性は「稲架に掛けると、やっぱり米を作ったなあという気になる」と語った。稲架掛けをすると、茎の栄養分が稲穂のほうに下りて、味が良くなる。稲穂は稲架で半分実る、ともいわれている。

現在田圃を見ているのは 70 代の夫婦だが、稲刈りのときには息子が富山市や他県からも手伝いに帰ってくる。稲架掛けをするときには、親子三代で作業をしていた。

2-5. 荒れ田の利用と担い手不足

笹川では使われなくなった田圃を杉林にする以外の活用がなされているところがある。一つは、減反のあった頃からはじまった活動で、みょうが組合である。笹川では水が冷たくきれいだから、ということで、長野から諏訪^{すわ}みょうがの種を買い、それを育てている。現在ではみょうが組合員の数も減ったが、多いときには 20 名ほどの組合員で、稲作をしなくなった山田などにみょうがを育てて、写真 6 のように加工し出荷していた。最盛期には京都など関西の方にまで笹川のみょうがは流通していたという。

二つ目に、田圃があったところに実バラを植える、という活動もここ 2 年の間にされている。実バラとは、バラの花ではなく、そのあとにできる実を切り花のようにして鑑賞するものである。2012 年の 10 月には、実バラの初の収穫があり、全部で 2500 本ほどの実バラが東京に出荷された。

このように、使われなくなった田圃を、ただ捨てて荒れ地にするだけではなく、有効活用をしようという動きもなされている。

その一方、担い手の不足は見逃ごせない問題である。写真 7 は放棄され、荒れ田となった場所である。戦後、学校へ行くためや、仕事を求めて村を出て、そのまま戻ってこない人が多くいる。その結果、営農者の高齢化が進み、跡継ぎのいない田圃が増えた。



写真 6. 笹川みょうが組合の漬け物



写真 7. 荒れ田(左)と稲架に使われていた杉(中央)

2-5. 小まとめ

戦後の笹川の稲作は、出稼ぎをする男性が力の必要な作業だけをやり、その他は女性を中心として、近所や親戚とともに手作業でするものだった。それから、徐々に機械が入り始めるようになり、人の手をそれほど借りずに稲作ができるようになっていく。初期の機械は、山田に運んだり、田圃に入らなくてはならなかったりしたが、山田がほとんど使われなくなり、また機械化が進むに連れて、機械に乗って運転するだけでほとんど何でも作業ができるようになった。現在の稲作は、主に男性が、機械を使ってするものへと変化し

ている。

使われなくなった田圃は、杉林になったり有効利用されたりしてきたが、その一方 10 年ほど前には高齢化と跡継ぎ不足により、荒れ田の問題が出てきた。荒れ田は虫や草を近くの田圃に移してしまうことがあるため問題視されている。次の節では、その荒れ田の問題を解決するために結成された笹川のグループについて報告する。

3. 稲作グループささ郷

3-1. 稲作グループささ郷の概要

稲作グループささ郷（以下「稲作グループ」）は、2003 年に作られた、笹川の稲作をするグループである。結成当時、30～40 代の人を集めたグループで、笹川に増えた荒れ田を耕すために、農協笹川支部と生産組合長からの要望で立ち上げられた。

もともとは、集落営農をしないか、という話が笹川にあったという。集落営農については後述する。しかし、その頃農業に従事していた世代が、新しい機械を買うのには金がかかりすぎるし、これから先どれくらい稲作が続けられるかもわからない、ということで断った。管理されなくなった笹川の田圃は、泊町月山の農家に使ってもらっていた。しかし、その人も農業ができなくなり、残った荒れ田が問題となったとき、一世代若い人たちに声がかかった。結果、「(稲作が) できない人の余った田圃を代わりにやる」というグループが結成された。

結成当時、耕す田圃は 5 枚で 6 反ほどであった。2012 年春には 25 枚で 2 町 5 反ほどになり、笹川の田圃の半分以上を耕していることになる。メンバーは、8 人ではじまり、現在は 9 人で活動をおこなっている。活動資金はなく、機械類はすべて持ち寄りで運営される。作った米の半数は農協におろされ、注文があるものについては笹川米として売り出す。米の売り上げは、メンバー各人の日当と機械代、また飲み会や旅行代に使われる。会社のような組織ではないので、売り上げは基本的に使い切るという形をとっている。また、このような形態は小作農のように見えるが、田圃の持ち主に年貢として、米や金を渡すことはない。

3-2. 集落営農との違い

この稲作グループは集落営農という、現在国が推進している農業のやり方と似ているようにも見える。集落営農とは、集落が農地や機械を共同で利用し作業することで生産コストを減らすことができる、女性や高齢者も含めて活動することで農地の有効利用と遊休農地の解消が図れる、集落ぐるみで行う営農活動で連帯感が深まり、農村の文化の継承やコミュニティが活性化する、というメリットを掲げ推進されたもので、「集落を単位として、生産工程⁵の全部又は一部について共同で取り組む組織」（農林水産省）のことを指す。この

⁵ 生産工程の間違いか。ここではホームページに記されていた通りに示す。

定義だけを見ると、笹川の稲作グループもほとんど同じように見えるが、詳細を見ると違っている。

農林水産省は、「集落を単位として」という文言に注釈をつけて、「集落営農を構成する農家の範囲が、ひとつの農業集落を基本的な単位としていること（以下略）」としているが、笹川では数名の比較的若い農家の人がグループに所属しているだけで、その他の農家はメンバーに含まれていない。

また、「生産行程の全部又は一部について共同で取り組む組織」については、「農業生産過程における一部または全部についての共同化・統一化に関する合意」の下に実施されている組織のことを指す。合意する内容とは、「(1) 集落で農業用機械を共同所有し（以下略）」や、「(3) 集落の農地全体をひとつの農場とみなし（以下略）」などの文言で記されている。しかし、稲作グループで用いる機械は、上で書いた通り持ち寄りのものである。また集落の農地に関しては、「代わりに」稲作をしているだけであり、それぞれの田圃は個人のものである。そういった点から、稲作グループは集落営農ではないとすることができる。

3-3. 稲作グループの活動

水の管理はメンバーの親に任せているが、その他の活動は通常の稲作と同じである。

稲作グループの活動は、ほとんどのメンバーが自分の仕事を持っているため、平日ではなく土日祝日におこなわれる。また、グループのものとは別に、メンバーは個人の田圃を持っているため、グループの田植えや稲刈りは、個人の持っている田が終わってからやることになっている。そのため、通常の田植えや稲刈りをする時期とは一週間ほど遅れて作業することが多い。また、草刈りは多くても3回ほどしかない。

そのうち田植えと稲刈りに参加し調査をした。以下、様子をふまえて詳細を報告する。

田植え

田植えは通年どおり、一週間遅れで、2012年は5月19日におこなわれた。朝8時に集合し、持ち寄った田植機で作業を開始する。この日は3台の田植機が使われた。今年は、500枚の苗を買って、25枚の田に植えた。

12時を過ぎたときに苗をとりに泊の方へおり、帰ってくると昼休憩になる。昼休憩のときは写真8のように全員でお弁当を食べながら談笑していた。午後の作業開始は13:30からで、13枚ほどの田植えをして、田植機を洗ってから1日目は終了する。

作業は、基本的に機械の持ち主がそのまま運転し、他の人は苗や肥料の追加、休憩時の飲み物の準備などをする。写真9は、田植えが終わって田圃から機械を出すところだが、泥にはまって出せなくなってしまったのを、メンバーで協力して引っ張っているところである。このように、メンバー同士で協力しあっている姿はしばしば見られた。

翌日、朝8時から苗のプランターを洗って、返却して田植えは終了となる。



写真 8. 昼食の様子



写真 9. 田植えの様子



写真 10. 新式（左）と旧式（右）のコンバイン



写真 11. 稲もみを専用の軽トラックにいれる

水の管理

水の管理は、メンバーの親の二人がおこなっている。5 月は、植えた稲を分けつさせ（新芽をださせて株を増やすこと）、株を太くしてもらうため水を溜めておく。6 月には、中干しといい、稲の根が地面につくように水を減らし、田圃を乾かす。

稲刈り

普段であれば、9 月末頃に自分の田圃の収穫をし、10 月の一週目にグループの稲刈りをするため、地域の運動会と日が被ることが多い。2012 年は、日照りが長く続いたため、稲の生長が早く、通年より 2～3 週間ほど早い収穫となり、9 月の 16～17 日と、次の週末の 22 日に稲刈りはおこなわれた。先におこなわれたものは、すべて農協に出荷する米で、22 日におこなわれたものは、笹川米として注文した人に届ける米である。

稲刈りのときも、コンバインは持ち寄りで行われる。田がやわらかいところには、重たい新式のコンバインは入れないので、写真 10 のように軽い旧式のコンバインを使う。

稲刈りは、朝露が残っているとコンバインによくない、ということで、9:30 から作業開始となった。12:30 頃に 1 時間ほどの昼休憩、それから一通りの区切りがつくまで作業をする。稲刈りをする、コンバインに脱穀された米がたまるので、それを写真 11 のように専用の軽トラックに移して、乾燥機まで運ぶ。

稲刈りのときは、農協に出荷するものと、笹川米として注文を受けているものとに分ける。笹川米の注文は、笹川在住の人や、笹川出身で東京在住の人などからよせられる。農協に出した米は、朝日町全域から集められたものと混ぜられて朝日町産のコシヒカリとして出荷される。注文を受けた笹川米の分はそれとは別に、グループメンバーの持つ乾燥機に入れる。

飲み会

作業が終わると、たいてい飲み会が開かれる。ほとんどの人は、「この飲み会のために稲作をしている」「飲み会という楽しみがなければこんな作業やっていられない」と笑いながら話す。日中の暑く、つらい時間に作業をする、そのモチベーションを保つために必要なものとなっている。

この他、草刈りを、6月と7月とにしているが、稲作グループはメンバーが忙しいこともあって、草刈りの回数は通常の田圃に比べて少ない。現在田圃の水を管理している70代の女性は、「もともと草刈りもしていたが、管理する田圃は増えるし、年は重ねるしで、今では自分の田圃を管理するので精一杯」と話す。

3-4. 小まとめ

笹川では、集落営農とは異なった稲作の組織として、現在、40～50代の人によって構成される稲作グループささ郷が存在している。できた当初はグループの持つ田圃は少なかったが、10年ほど経った現在では25枚、2町5反の田圃を「代わりに」営んでいる。このことから、グループが笹川の稲作を支える重要な存在になっていることがわかる。

4. 稲作をする人々の語り

ここでは、田圃を稲作グループに預けている人や稲作グループのメンバーを含め、稲作をしている人の語りをまとめる。

4-1. 笹川で稲作をしている人の語り

作業については、ほとんど誰もが「大変だよ」と答えた。そのため、「田をやめたいとは思うけど」と話す人もいた。ある80代の女性は、「今は、息子と二人でなんとか田圃をしている。機械でできないところは手作業でやるけど、この歳になるとそれもだんだん難しくなってきた」と渋い顔で話した。しかしそのあとに「やめるっていうことは、その土地を捨てるのと同じこと。そう思ったらやめられない」と続けた。70代の男性は「大変だけど、(田圃を)持っているから続けている」と語った。このように、持っているから田圃をしている、という人は多い。

また、「作業は大変だし、お金もかかるけど、自分で作ったお米が食べたいから稲作を続

けている」と話す人もいる。こう話したのは60代女性で、以前は朝日町宮崎の方に田圃を持っていたが、他の人が田圃を捨てていって荒れ田が増えたので、笹川に田圃を持ってそこで稲作をしているのだという。「機械を持っているわけじゃないから、親戚の人に頼んで手伝ってもらっている。業者に頼んだらお金がかかりすぎるし、実際今の状況でも、作るより買う方がずっと安い」と話した。「実際、作るより買った方が安い」と話す人は他にもいる。それでも稲作を続けるのは、やはり自分が田圃を持っているからだという。

稲架掛けを続けている家では、「確かに稲架掛けをするのは大変だけど、コンバインは高いし」と言葉を濁したが、「ずっと昔からこうやっているから、稲作っていうのはこういうもんだと思っている」とそのあとに続けた。「お米は売りに出すわけでもないし、本当に趣味でやっているようなもの」と70代の男性は話す。

現在笹川で稲作をしている人たちは、作業が辛い、大変ということをいいながら、自分が田圃を持っているから、自分で作った米を食べたいから、趣味で、といった理由で稲作を続けていることがわかる。

4-2. 田圃を預けている人の語り

どうして稲作グループに田圃を預けたのかという質問に、70代男性は「膝がだめになって田に入れなくなった」と答えた。「手押しの田植機を使っているから、いつも田にはいらなくてはいけませんが、それができなくなった」と語る。現在農業の機械化が進んでいるが、田植機を一台買うだけでもお金がかかる。そのため、とくに70～80代の農業者は初期の頃の機械を使い続けていることが多く、その場合田圃に入って作業しなければならない。

田圃を預けることに抵抗はあったかと聞くと、「できないものは仕方ない」と80代女性は答えた。また、別の80代女性は「田圃は大好きだけど、やれなくなったら仕方のないこと。それを誰かがやってくれると言うなら、ありがたくやってもらうしかない」と話した。昔から田圃ができなくなると、それを継ぐ人がいなかったときには別の人にやってもらうことはよくあることだった。しかし、「そういうときは親戚にやってもらうのが一般的だったけど、いまじゃその親戚も田圃がやれるような歳じゃない」と70代女性は話す。笹川では根本的に跡継ぎ不足が問題となっていることがわかる。

稲作グループの存在については、「ありがたい」や「助かる」と話を聞いた誰もが答えていた。「跡を継ぐ人もいないし、ああいうことをしてくれるとありがたい。そうでなかったら笹川の土地は荒れ放題になる」と80代女性は話した。

現在稲作グループに田圃を預けている人は、田圃をやめたくてやめた、というよりは、体の具合などでやめざるを得なかったということがわかる。そうした人も、自分では管理できないが、田圃を荒れさせるわけにはいかない、という気持ちは他の多くの笹川の人と共通している。笹川において稲作グループかなり重要な役割を担っていることが見えてくる。

4-3. 稲作グループメンバーの語り

次に、稲作グループのメンバーである 40～50 代の男性に話を聞いた。以下では、稲作について、グループで活動をする醍醐味という枠組みで語りをまとめる。

4-3-1. 稲作をするということ

作業については、「仕事も忙しい中、一ヶ月ほど作業に追われ、毎日休みなく働かなくちゃいけないのは大変」と話す人や「田植えの 5 月と稲刈りの 9 月は本当に休みがない」と、作業の忙しさを語る人が多かった。「最初のうちはやめたくて、いつやめようかと思っていた」と語った人もいる。また、冗談っぽく「いやいやながらやっているのさ」といった言葉もあった。作業そのものについては、「暑くなるし、稲刈りの方が疲れる」や「田圃をいくつもやっていて草を刈る範囲が広いから、それが大変」という話が聞かれた。

それだけ大変な作業をして、田圃をやり続けている理由はなにか、と尋ねると、「田圃は草だらけにできない、大切な財産」や「村を守るためにやっている」と答えた。ここでも、多くの人と同じような気持ちを持っていることがわかる。同時に「やっているんだから仕方ない」とか「俺たちのような（笹川に住む）者にとって、田をやるのは当たり前のこと」といった言葉もあった。これはグループの田圃だけではなく、個人の田圃のことも含めると考えられる。「笹川は、町の方とは違ってずっと閉じてて、周りの大人たちはみんな休日もなく作業をしている。町の方でなら遊んでいる人とかも見たらさうけど、笹川はそうじゃない。そう言うところで育ったから手伝うのが当然になるし、だからこそ今もこうやって作業をしている」と語った人もいる。

このように、子どものときからずっと稲作を見てきたので、現在も稲作をしている、という人はグループの中にも多い。

4-3-2. グループ活動の醍醐味

グループで活動することについては「皆で集まって話しながら作業すると（いつも一人でやっているのとは）雰囲気が違う」、「一人で大田にぼつんといたらできないが、皆でやっているからこそできること」や、「みんなが（田圃の）経営者。だからこそ、みんなでやらずにや」と話す。稲作を一人でするのは違い、グループで活動することで人と話しながら、冗談を言い合いながら、メンバー同士が励ましあって作業をすることができる。それがグループで活動する醍醐味の一つとなっているようだ。また、個人の田圃以外で稲作をするについては、「小遣いをためる程度のもの」と答えた。「みんなサラリーマンだし、お金には困ってない。だからこの稲作は道楽みたいなもの」と語る人もいた。そのため、グループには立ち上げたときから、「とにかく仕事を休んでまでは（グループの活動に）出るな」という決まりがある。「そうでもない活動が続かない」、「みんなそれぞれ趣味があるし、やりたいことがある」ということを考慮したグループの方針である。メンバーを活動に拘束せず、「道楽でやっている」という言葉がある通り気を楽しんで活動していることがわかる。その反面、「もちろんやるときはきちっとやらなくちゃいけない」とい

った語りもあり、メンバーははじめを持って活動をしている。

やっていたいいことはなにか、という質問には、全員が「飲み会」と答えた。「飲めるからやっている」とか「飲みに行くのが原動力」という話が多かった。

これから先の、グループや笹川の稲作については、「もうしばらくしたら定年になる人とか出てくるし、もう少し（農作業やその手際が）うまくいくようになるかもしれない」と、プラスに考える一方「もう一世代下の人らに継いでいかなくちゃ」という焦りの声もあり、「次の世代がいけないことには、笹川の稲作も終わっていくんじゃないか」と語る人もいる。

「最終的には全部グループが（稲作を）するようになるかもしれない。そのときはそのときだ」と50代男性は語る。「だけど若い者もいまじゃ稲作はしなくなってきたし、（これから先のことは）どうなるかわからない。とにかく、（一世代上の人に）やってもらえるうちはやってもらうしかない」と先を案ずるように話した。

5. 笹川の「田圃」と稲作グループの果たす役割

以上の語りをふまえて、ここでは、笹川の「田圃」とはどういうものか、そして、稲作グループの果たしている役割とはなにかを考える。

5-1. 笹川の「田圃」

田圃は、もともと生きていくために必要な食料を作る場所であり、稲作は笹川の人にとって重要な生業の一つであった。かつての稲作のことを尋ねていると、「あの頃は田圃にすがっていた」という語りを聞くこともあった。

しかし、田圃を持っている人に、どうして稲作を続けているのか、という質問をしたところ、「（田圃を）持っているから」や「子どものときからずっとやっていることだから」という答えが返ってきた。稲作というのは、子どもの頃から携わりながら、代々田圃を引き継いでやっていくものだった。ところが、高度経済成長などで多くの人が職を手にするようになり、田圃をしなければ生活できない、ということは次第に減っていった。その結果、現在の笹川では生業としての稲作は姿を消している。

稲作は「子どもの頃からずっとやっている」からやるものであり、必ずしも生活していくため、生きていくためのものではなくなってきた。それどころか、「実際、米は（自分で作るより）買った方が安い」という話もよく聞く。つまり、現在の「田圃」は生業とはかけ離れ、代々続いた土地を守るためや、趣味、あるいは自分で作った米が食べたいからといった理由で作られている。実際、定年を迎えていない60代までの稲作をしている人は、ほとんど自分の仕事をしながら稲作をしている。そして、「サラリーマンだし、お金には困っていない」と話す。

笹川では、生業としての稲作がなくなり、守られるべき土地としての「田圃」が残っている。荒れ田にして代々作ってきた田圃の土地を終わらせてはいけない、自分の代で終わらせるわけにはいかない、という思いから、笹川の人たちは「田圃」で稲作を続けている。

しかし、機械化が進み、以前ほど人手が必要なくなったため、子どもの頃から稲作をやってきた人が少なくなり、また職業選択の幅が広がったことで農業従事者が減って、跡継ぎがいなくなってきた。そして、「田圃」で稲作をしてきた人も、膝が悪くなったり体が弱くなったりして、自分の土地を管理できない状況になってきた。

5-2. 「田圃」を守るということ

そうした中で結成されたのが稲作グループである。グループは耕されなくなった「田圃」を代わりにやる、という目的で結成されたものである。「代わりにする」というと小作のように見えるかもしれないが、稲作グループは土地の持ち主に年貢を払うことはない。つまり稲作グループがやっていることは地主に代わって農作業をすることではなくて、代わりに「田圃」の手入れなどをして、「田圃」としての土地を守ることであり、といえる。つまり、土地と収穫物に関して差別化が図られているのである。土地に対しては代わりに手入れしているが、稲作そのものは代わりにやっているわけではない。稲作は「田圃」を手入れする有効な手段の一つにすぎず、そのためその収穫はすべてグループのものとなるのである。

また、集落の「田圃」を耕す、というと前に書いた集落営農を思い浮かべるかもしれないが、集落営農とこの笹川の稲作グループは、組織としてではなく、考え方や存在する意味としても違うところがある。上でも書いたが、それらは農地の扱われ方から見えてくる。

集落営農では、基本的に作業の効率化を目指しており、「農地全体をひとつの農場とみなし」という文言が使われる。しかし稲作グループは、個人の持っている「田圃」を「代わりにやっている（手入れしている）」だけであり、農地は個人のものと考えている。実際、グループの中で「〇〇さんの『田圃』」という表現を使うことがあるし、「やってもらってありがたい」や「助かっている」という「田圃」を預けた人の言葉からも、その「田圃」が個人のものであるという意識を持っていることがわかる。

つまり集落営農では、農地を集落のものとし、参加する農家全員が同じ立場で田圃を管理する、という考え方を持っているのに対し、笹川では、「田圃」を代わりに耕す（手入れする）人と、「田圃」を預ける人、という二者が存在している。グループが提唱しており、稲作グループの役割は「できなくなった人の代わりに『田圃』をやる」ことである。そこで『田圃』は財産」という語りを思い出すと、稲作グループは笹川の財産を守っている、ということができる。つまり、「田圃」を代わりに耕す人と「田圃」を預ける人は、守る存在と守られる存在と呼ぶことができよう。

5-3. 明確化するコミュニティ

まず、ここでのコミュニティについて定義したい。笹川では、昔からイイスル、イイスアことがあったばかりではなく、持っていない調理道具を貸しあったり、わらじの作り方や料理の作り方などを教えあったり、と人々が濃いつながりを持っていた。調査中も、「〇〇さんならやり方を知っているから」ということでその人に頼っている姿を目にしたことが

ある。また、多くの人が笹川で生まれ育っているため互いに面識を持っており、同世代の人とはもちろん、上下世代とも仲の良い交流をしている。つまり、笹川の人はいくつした信頼をもとにした相互依存的な関係を形成している。以上をふまえ、ここでは信頼をもとにした相互依存的で密な関係を持ち、また幅広い地域内交友ネットワークを持っている集団をコミュニティと呼ぶ。

稲作グループは、笹川の財産である「田圃」を守っている、という話をした。その「田圃」はもともとメンバーより上の世代の人たちが使っていたものだったが、稲作グループに管理を任せるようになった。実質的に土地を受け継いだわけではないが、こうしてみると稲作グループは財産を受け継いだ跡継ぎのようにもみえる。このように笹川では、稲作グループをめぐって一村一家のような関係が構築されている。自分の財産を任せるのだから当然信頼関係が構築されていることが前提である。

稲作グループのメンバーはそのほとんどが笹川で生まれ育った人であり、「田圃」を預ける人とは面識がある。そのため預ける人も、稲作ができなくなり跡継ぎもいないときに、知っている人がやってくれるのなら、と安心して任せることができる。これは、頼ったり頼られたりする人々のつながり、つまり笹川のコミュニティを最大限に利用したものであるといえる。「田圃」をやってもらい、「田圃」を代わりにやる（手入れする）という具体的な関係が築かれることで、それまで同じ村に住む者同士という関係で形成されていたコミュニティが、より明確化した形で現れるのである。

5-4. コミュニティの期待とアイデンティティの発揮

ここでアイデンティティとは、地域という横の広がり、そこでコミュニティとともに過ごしてきた時間（個々人の歴史）から生じる郷土愛、コミュニティに対する愛着がもととなって生まれる、「自分は笹川に生きる者」という自負心のことと定義する。

稲作グループの人たちは、財産を守るという重責を、周りからの期待（コミュニティの要望）だけでおこなっているのだろうか。たしかに稲作グループのメンバーは、笹川という村の中で、そのコミュニティとともに時間を過ごしてきた。その中で郷土愛や所属意識を育み、アイデンティティを持って笹川で生きている。このように、コミュニティに寄り添うようにして形成されたアイデンティティを持っているため、笹川というコミュニティの影響を受けてはいる。

しかし、「村を守るためにやっている」という語りは、数人の稲作グループメンバーから聞かれたことである。これは、集落の土地や財産を守る、という自発的な使命感持っていることから出てくる語りであろう。「田圃」を荒れ田にしてしまえば、代々継がれてきた笹川の財産がなくなってしまうことになる。それは、笹川で生まれ、生きる者として、決して喜ばしいことではない。つまり稲作グループのメンバーは、「自分は笹川に生きる者」というアイデンティティを持っているために、荒れ田を増やすわけにはいかない、と思って活動をしているのであり、それはアイデンティティの発揮といえるのではないだろうか。

6. まとめ

笹川で長く営まれてきた生業としての稲作はすでに姿を消し、現在では代々稲作に使われてきた守るべき土地としての「田圃」だけが残っている。管理できるうちは元々の持ち主がしているが、10年ほど前から管理できなくなってきた「田圃」が出てくるようになった。そこで、稲作グループが結成される。

稲作グループは「管理されなくなった『田圃』を代わりにやる」グループである。ただ、メンバーは「田圃」を頼まれたからという理由だけではなく、自分たちが村を守る、守らなくてはならないという気持ちを持って活動している。この気持ちは、自分の育った村に対する愛着心から生じていることから、稲作グループの活動はアイデンティティの発揮の場と考えられる。

また、稲作グループは集落営農と違い、個人の持つ「田圃」を代わり使っている。そこには「田圃」を代わりにする人、「田圃」を預ける人という、守る存在、守られる存在がいる。「田圃」においてこうした信頼的な相互依存関係が築かれることで、それまで同じ村の人だからという関係だったコミュニティがより明確化される。

稲作グループはこのように、個人のアイデンティティの発揮の場としての役割を果たしているだけではなく、以前からイイスル、イイサスという形などで存在していた笹川のコミュニティにおけるつながりを明確化し、住民同士がコミュニティを確認しやすいものになっている。

謝辞

今回、笹川の稲作を調査するにあたって、稲作グループの代表、竹内重之様をはじめ稲作グループのメンバーの方々、また話を聞かせてくださった笹川の皆様方に大変お世話になりました。

稲作グループの方々には、初めて稲作というものに触れ、また車の免許も持っていないのに手伝いに呼んでいただき、大変な迷惑をおかけしたとは思いますが、あたたかくしてくださり、本当に感謝しております。田植機やコンバインにも乗せてくださり、稲作というものを肌で感じることができました。今でも米の袋を開けたとき米の香りをかぐと、稲刈り中や、乾燥機の前でかいだ笹川米のことを思い出します。本当に何もかも初めてのことで、大変貴重な体験ができました。ありがとうございました。

勝田忠温様には、愛知からの中学生の稲刈り体験のときばかりか、ご家族でやっている稲刈りにも参加させていただきました。稲の手刈りや、ヤンダさせていただき、ただ稲作をやるだけではなかなか体験できないことをさせてくださりました。ありがとうございました。

笹川獅子舞保存会の皆様には、まったく経験のない私に太鼓を教えてください、秋祭りの時には神楽を担がせていただいたり、非日常的な体験をすることができました。

炭焼きグループの方々には、炭焼きの話をお聞かせいただいただけでなく、猪肉をいただいたり、窯入れに誘っていただいたりしました。初めての猪肉は、とてもおいしかったです。ありがとうございました。

笹川に 8 月 13 日から 26 日までの約 2 週間築山倶楽部に泊めていただき、町内会長の小林茂和様、夕食に誘ってくださり、毎日のように風呂を貸してくださった竹内幹子様、その他築山町内会の皆様にお世話になりました。時には食事まで用意してくださり、とても快適な宿泊と、集中した調査をすることができました。また、笹川で最初に知り合って、つながりを作ってくださった疋田由香里様には大変感謝しております。

今回の調査が無事終了いたしましたのも、笹川住民の皆様のご協力のおかげだと痛感しております。笹川のみなさんには、話を聞かせてくださったり、行事に参加させていただいたり、ご多忙のところ大変な迷惑をおかけしましたが、あたたかくしていただきました。笹川はすっかり第二のふるさととして私の心に刻まれております。今回笹川で調査できたことを本当にうれしく思っています。誠にありがとうございました。

参考文献

笹川小学校 1994 年 「ささ郷の流れとともに」

農林水産省 http://www.maff.go.jp/j/kobetu_ninaite/index.html (2012 年 11 月 7 日閲覧)

7. 朝日町における伝統工芸の現状

—蛭谷和紙の事例から—

趙 允溶

はじめに

日本はモノ作りに強い国というイメージは世界中の各国に定着している。しかし、日本のモノ作りに対するイメージは現代的な技術製品に限ってのものと思われている。古くから培われてきた日本の伝統的なモノに対してそのような注目を集めていないのではないかなと思う。本章では朝日町の伝統工芸の一つとしての蛭谷和紙の事例から伝統工芸が直面する存続問題を考えていきたい。

1. 伝統工芸の概要

伝統工芸は長年に渡り受け継がれている技術や技が用いられた美術や工芸のことをいう。伝統工芸を用いて作られる工芸品は伝統工芸品という。

伝統工芸品については、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」（昭和 49 年 5 月 25 日法律第 57 号）第 2 条 1 項に以下の規定がある。

- ①主として日常生活で使用する工芸品であること。
- ②製造工程のうち、製品の持ち味に大きな影響を与える部分は、手作業が中心であること。
- ③100 年以上の歴史を有し、今日まで継続している伝統的な技術・技法により製造されるものであること。
- ④主たる原材料が原則として 100 年以上継続的に使用されていること。
- ⑤一定の地域で当該工芸品を製造する事業者がある程度の規模を保ち、地域産業として成立していること。

この法律の規定に基づいて、昭和 50 年から平成 24 年 12 月現在まで 212 品目の工芸品が「伝統的工芸品」として経済産業大臣に指定されている。昭和 63 年 6 月 9 日富山県下新川郡朝日町の「蛭谷和紙」と婦負郡八尾町の「八尾和紙」、東砺波郡平村（現在は南砺市）の「五箇山和紙」の 3 つをあわせて「越中和紙」という名前で指定されている。本章はそのうちの朝日町の蛭谷和紙を中心に調査して書いたものである。



写真 1. 朝日町蛭谷に立っている看板（左）と仕上げた蛭谷和紙（右）

2. 和紙の歴史

紙はいろいろな観点から分類できるが、日本では、和紙、洋紙および板紙の三種類に分別されることが多い。和紙（わし）とは日本で作られる手漉きの紙をいう。洋紙に対することばで、「わがみ」ともいう。木材パルプを材料として機械によって量産する洋紙に対し、和紙は植物の靱皮繊維をとってすべて手作りで漉くのが特徴である。

製紙技術の歴史は中国「後漢」時代の改良からはじまり、日本への製紙技術の伝来は『日本書紀』巻 22 により、「推古十八年春三月 高麗王貢上僧 曇徴 法定 曇徴知五經 且能作彩色及紙墨 并造碾磑 蓋造碾磑 始于是時歟」と記録されている、徴税のために 7 世紀から戸籍がつくられ、また仏教の布教や写経により、文字による情報伝達の媒体として紙の需要が激増し、製紙は量的にも質的にも急速な進展をみた。室町時代から書院造の建築様式が流行するによって障子に用いる紙の需要が急増し、また雨傘用の紙は美濃国、土佐国をはじめ増産された。大和国の奈良紙、吉野紙などがちり紙として使用されるようになり、江戸時代には紙がすでに庶民の生活必須品となっており、この時期が和紙の全盛時代であった。明治以降洋紙の流入や生活様式の変化に伴って、和紙は実用性を失って、現在では伝統工芸品として漉かれている。

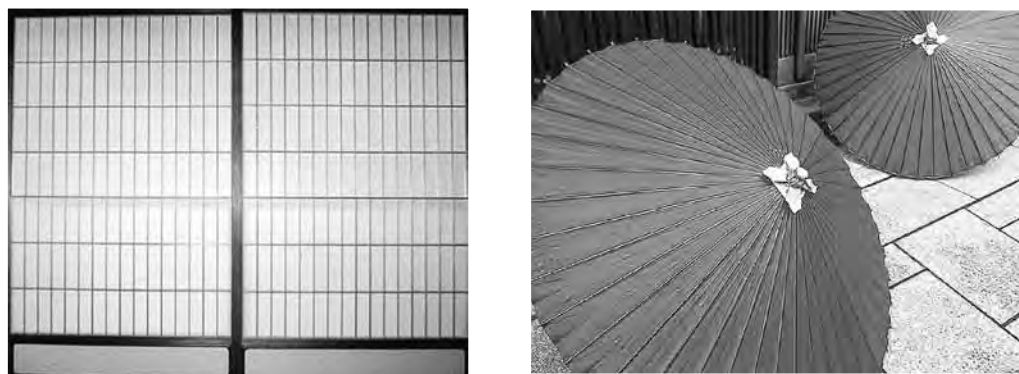


写真 2. 和紙で作った障子紙（左）と傘（右）

表 1. 伝統工芸品と指定される和紙の現状 (財) 伝統的工芸品産業振興会の指導調査部
2005 年の調査より <http://www.nipponnowaza.com/com/genjyo.html>

伝統工芸品名	企業数	従事者数(推定)	年生産額	伝統工芸士数 (推定)
内山紙(長野県)	9 社	20 名	42 百万円	5 名
美濃和紙(岐阜県)	15 社	44 名	269 百万円	11 名
越中和紙(富山県)	8 社	52 名	214 百万円	16 名
越前和紙(福井県)	69 社	511 名	4,744 百万円	26 名
因州和紙(鳥取県)	36 社	225 名	1,616 百万円	13 名
石州和紙(島根県)	5 社	19 名	47 百万円	5 名
阿波和紙(徳島県)	9 社	65 名	400 百万円	8 名
大洲和紙(愛媛県)	3 社	18 名	50 百万円	3 名
土佐和紙(高知県)	29 社	80 名	190 百万円	7 名

調査発表などにより様々なデータがあったが、一般的に全盛期日本各地では 20、30 万軒があったのに対して現在全国個人と事業を合わせて 400、500 軒しか残っていないと推測されている。表 1 は伝統的工芸品産業振興会の指導調査部の調査により伝統工芸品となった和紙の状況を表すものである。表 1 から分かるように越中和紙の規模は決して大きいとは言えない。その中に朝日町の蛭谷和紙は全盛期 120 軒余りあったが現在は川原隆邦さん一軒だけで途絶えそうな状態となっている。



写真 3. 蛭谷に残る唯一の和紙工房

3. 蛭谷和紙の歴史

蛭谷の歴史についての記録は金沢市玉川図書館蔵『加越能文庫』の中にある。また、紙漉きのことについて「村々寄帳」の元禄8年（1695年）の項に「中折紙少々漉申候蛭谷村」とあるのが最も古い記録である。しかし、朝日町蛭谷の人々の話によると、蛭谷の祖先は遠く西の方から流れてきて定着した木地師だという。木地師の本拠地は近江国、今の滋賀県神崎郡永源寺町蛭谷で、そこから全国の山々に散っていった。木地師たちは何年間にも渡って山から山へ移っていく人たちで、雪降る時期は麓の村で紙を漉く。紙漉きの技術は越前か美濃で習得したものとされ、その中の一群が朝日町蛭谷地域に定住し、故郷の地名を名乗った。蛭谷の紙は文献の記録よりずっと前からあったと推測されている。

蛭谷では明治の末まで小さな漉槽の前に座って「八寸紙」（八寸×一・二尺 24cm×36cm）を漉いていたが、明治42年から2年間、岐阜県から井上才次郎という紙の指導者を招き、大きな漉槽で立って大紙漉き（二〜三尺）の紙を漉くようになった。その直後の大正の初め、技術の向上を図るために、村から長崎清澄・北山源二という二人の青年を青年団から選出し二年間実習生として岐阜県美濃郡へ派遣し、優れた技を村に持ち帰った蛭谷紙はいちだんと飛躍した。当時村中が十二月から四月まで冬場の時期蛭谷の女たちは紙漉きを競った。戦時中は繊維統制となり、製紙の原料楮を手に入れることが難しくなり、生産が急速に低下した時期があった。戦後は富山県が紙の指導に力を入れて、蛭谷の女たちが県の技術者の教えをうけた。楮は各自の畑で栽培していたが、とても足りず、朝日町の南保・山崎・笹川など地域の田畑、土手などで栽培してもらった、村のうち世間に明るく信用できる二、三人が販売人になって各地を売り歩いていた。当時の蛭谷紙は障子紙として高い評価を受けるようになった。

しかし、その後機械漉き和紙や安い洋紙が出回るようになって、機械漉きに追いつくために、楮の中にパルプを混ぜて漉くこともあった。そうすると売れ行きは落ちていった。その上、昭和28年の大火により、村の三分の一が燃えてしまって、ほとんどの紙屋が消滅した。同じ時期日本の高度経済成長が始まって、住居が洋風スタイルに変わったことによって障子紙の需要が急速に減っていた。また、公共工事などの紙漉きより高い現金収入の仕事に就く人が増えることにより、蛭谷和紙は一時的に姿が消えてしまった。

昭和44年米丘ふじ子さんは蛭谷和紙を再興するために八尾町の製紙指導所で紙漉きの指導を受けて、その後11年間紙漉きを続けていた。昭和55年病気で倒れたふじ子さんに代わって、夫の米丘寅吉さんが紙漉きを始めた。平成14年83歳の寅吉さんは体力の問題で紙漉きを止めていた。平成15年朝日町隣の入善町在住の川原隆邦さん（当時22歳）は蛭谷和紙が漉き手が高齢になって後継者がいないということを聞いて、米丘さんのところに尋ね、弟子入りを果たした（写真4）。その後ほとんどの指導は口頭のみで行われ、自分で技術を磨いて今まで蛭谷和紙を支えてきた。すなわちこの40年あまり代々1人で蛭谷和紙の製法は守られてきた。



写真 4. 蛭谷和紙職人 米丘さんと川原さん

しかし、山の中で製紙の仕事を通して生活をして行くのは容易ではない、師匠は年金生活者で、紙で稼ぐ必要がなかったため営業はしなかったようだが、川原さんにとってこの伝統工芸は守るだけではなく、生活手段の一つである。しかし、生活様式の変化やすべて手作りで価格が高いためなかなか売れなかった辛い時期もあった。4年前師匠の米丘さんが亡くなり、また、地域行政からの政策上の支援を得られないため、川原さんは1人で蛭谷和紙を守って途絶えそうな状態が続いている。

4. 伝統的な蛭谷和紙の製作



写真 5. 楮の木



写真 6. 楮刈り

①楮刈り：初冬地元の楮を山から採取してくる（写真 5）。楮は桑科の植物で北海道と東北地方の一部を除き、全日本に分布する最も普及した和紙の原料である。かつては山野に

自生のものを使ったが、現在では栽培され、根分けや挿木により増殖する（写真 6）。楮は一年生のものを使い、二年以上成長した楮は繊維が硬く節が多いため良い紙にならない。

②楮蒸し：蛭谷では「楮をつだむ」という。刈り取った楮は枝を払い節を削り、長さ 1 メートル 20 センチほどに切り揃え、束に固く叩き締め縛る。まとめた楮のいくつかの束を釜の座の上に立て桶で蓋をして蒸す（写真 7）。蒸し上った熱い楮に冷水をかけ、或は楮の束を川に放り込んで急激に冷やし皮剥作業を楽しむ。



写真 7. 楮蒸し

③楮むき：蒸された楮の靱皮は、木質部から手でたやすく剥ぎ取れる（写真 8）。靱皮の白皮繊維が和紙の原料となるが、靱皮表面の濃茶色の不要な皮も剥げ落ち、そのまま乾燥し、貯蔵する。



写真 8. 楮むき

④楮たくり：乾燥した皮を水に浸し柔らげた後に、黒皮をとりさり、白皮だけにする（写真9）。



写真9. 楮たくり

⑤楮晒し：外皮の削られた楮の白皮を更に脱色させるために、雪中に広げ、上を1センチ程の雪を覆い絶えず濡れた状態を持ちつつ、3～4日陽光に当てる（写真10）。雪の少ない年は川の浅い流れに数日浸透し漂白させる。



写真10. 楮晒し

⑥楮煮：晒された白皮は和紙の素材となる繊維分と他の不純物とを分離するために灰汁を釜の中に入れて白皮を煮る（写真 12）。



写真 11. 灰を作る時の様子



写真 12. 楮煮

⑦あくぬき：水槽の中に煮終えた白皮を浸し、隅の栓を抜き水を換え同時に手で洗いつつ原料の荒選り（ちりを簡単に取り除くこと）をする（写真 13）。



写真 13. あくぬき

⑧ちりとり：更に精密な選別である。一握りずつの白皮繊維を水に浮かしつつ洗い、肉眼で不純物を除去する。ちりとりは良紙の為に欠かせない手間のかかる作業である。

⑨楮叩き：細かくつぶす為に精選された繊維を石の台の上で木槌で叩き、繊維を打ち碎く（写真 14）。



写真 14. 楮叩き



写真 15. 叩いて碎かれた楮の繊維

⑩粘剤：打ち碎いた繊維を水槽に投げ紙をすくのだが、その際に細かな楮繊維が水中で固まらずに均一に分散し、又沈殿させないよう＜粘性のある液＞を加える（写真 18）。この粘液はネリと呼ばれ、蛭谷ではトロロアオイ（黄蜀葵）を使用する。栽培したトロロアオイの根を採集し叩き潰して容器に入れ、水を加えると粘液を作れる。この粘液は気温が上ると腐敗し易く効力も減少するので、紙漉きは冬の寒冷期に適する。



写真 16. トロロアオイの畑を作る様子



写真 17. トロロアオイの花



写真 18. トロロアオイの根で作った粘剤

⑪紙漉：漉槽に繊維原料と粘剤を投入し、よくかき混ぜた紙料を濾水性の簀を動かして、紙料を簀に汲み込んだり紙料を簀から捨て戻したりして、簀の上に紙層を作る（写真 19）。



写真 19. 紙漉き作業

⑫紙しぼり：漉き上った紙を紙床に積み重ね、圧搾機により水分を搾る。

⑬紙干し：水分の切れた紙を一枚ずつへぎわけて板に張り、陽光の下で乾燥させるのが一般的だが、冬季に日照時間の乏しい蛭谷では、天日乾燥は非常に効率が低いため、鉄製の乾燥機を用いている（写真 20）。



写真 20. 紙干し

5. 蛭谷和紙の振興に向けての取り組み

蛭谷和紙を振興しようと販路を開拓するために川原さんはすべてを手作業で行う以外で自ら新しい技法を研究し、平成 23 年から富山市の支援を得て、少しずつ活動拠点を富山市内に移行してきた（写真 21,22）。富山の里山整備の活動で町の人たちに呼びかけて和紙の原料楮の木とトロロアオイを栽培している。現在は各地のお客さんの注文に応じて様々な紙を製造し、蛭谷和紙を新たな用途や姿に変えている。照明器具、名刺カード、団扇などわれわれの日常生活に身近なものが和紙で作られていた（写真 23）。



写真 21. 富山市の里山で行われた楮栽培と紙漉き体験



写真 22. 動物園で和紙を使って作った等身大のクジラとキリン



写真 23. 商品化された蛭谷和紙

平成 24 年 4 月川原さんはイタリアのフィレンツェ市で開催された民芸品を紹介する展示会に参加し、蛭谷和紙を世界にアピールした、ブランド品会社から高い評価を受けた（写真 24）。また、同年 9 月に講師として京都の大学で和紙のことを大学生たちに伝えた。



写真 24. 世界にアピールした蛭谷和紙

6. 蛭谷和紙をめぐる語り

6-1. 蛭谷地域の人々の語り

蛭谷地域で調査するとき、若者の姿が見えなくて、地域高齢化が進んでいることを感じていた。村の 70 代・80 代の人に和紙のことについて聞くと、「昔障子紙が必要な時代この村では 120 軒以上あったが、現在は川原さん 1 軒しかやっていない。和紙のことならそのほうが詳しい」と語ってくれた方が少なくなかった。「俺子供の頃まだ何十軒があった」と 70 代の男性が語ってくれた。「川原さんは時々夜にその家に戻って作業をやっている、具体的どんなものを作っているのかわからない」と語った方もいった。少し語ってくれたのはほとんどその時代の話で、蛭谷の人たちにとって現在「蛭谷和紙」はすでに存在感がないものとなっていると感じられた。「紙を漉いてどこに使うの？」と逆に聞かれる方もいた、やはり紙というイメージは紙漉きの経験者としても昔の障子紙に過ぎないと感じられ

ている。また、筆者と同じように川原さんが活動拠点を富山に移行することに対して「それもう朝日町の伝統工芸じゃないだろう」と言う方もいた。

6-2. 和紙職人の考え

後継者不足の問題に対して、川原さんは「まず、高価な道具を揃えないと仕事ができない」「今ほとんどの親は自分の子とかがこんな厳しい仕事に就くのを望ましくないだろう」と言う。

伝統工芸の「現地主義」に対して川原さんは「伝統工芸は永遠に変わらないものではなく、生き物のような、どんどん状況が悪くなっているこの地域で伝統工芸を守るばかりではなく、時代に応じてスタイルを変えて発展していくことも大事だと思う」、「いろんな原因で朝日町蛭谷でできないことが富山市では実現できて、より広い範囲で名声を高めるおかげで仕事も増えるし、そして蛭谷和紙のブランド力をさらに高めることができる」などを語ってくれた。

7. まとめと考察

四百年以上の伝統がある朝日町の蛭谷和紙は八尾和紙、五箇山和紙で後継者が育ち生産・販売額が伸びているのに対して、高齢化と地方施策などの原因により後継者がいなくなりその土地から消える危機にあることが感じられた。一方、「和」をベースとして、日本の伝統工芸は常に新しい文化や人間の生活にどのような繋がりがあるかを意識して、新たな発想でビジネスチャンスを産み出し、高い品質のものを作っていけば世界に伝えることができるはずである。現在大きく変化している日本の伝統工芸も、その時々に合わせていけばこれから何百年もの間生き続け、その時代でもなお伝統工芸となりうるであろう。そしてまた、現在の産業も未来においては伝統工芸となる可能性はおおいにありうることであり、大切にされなければならないだろう。

謝辞

今回朝日町の蛭谷地域で行われた調査は多くの方々に大変お世話になり、資料と情報をいただいた蛭谷和紙工房の川原様と夢想塾の山崎様をはじめ多くの方々にお話を聞かせていただきました、心から感謝しております。

参考文献

米丘寅吉、『二人の炭焼き、二人の紙漉き』、桂書房、2007 年
山口汎一、『特集越中蛭谷紙』、1973 年
高田長紀、『北陸産紙考』、財団法人 紙の博物館、1970 年
富山県和紙協同組合、『越中和紙』、富山県和紙協同組合、1996 年
町田誠之、『和紙文化』、思文閣出版、1977 年

8. 蛭谷におけるバタバタ茶の役割

長友 増美

はじめに

初めて蛭谷を訪れた際、まず訪問したのがバタバタ茶伝承館だった。中に入る前から楽しそうな話声とカチャカチャと賑やかな音が聞こえていたが、中に入ると鍋にぐつぐつと煮だされたお茶を囲んで、何人かの女性が漬物などの料理をつまみながらおしゃべりをしていた。「お茶飲んでかつしゃい！」というお言葉に甘え、そこで初めて飲んだのがバタバタ茶だった。70～80代の女性の方がほとんどという集まりだったが、年齢を感じさせないパワフルで元気な様子に圧倒された。初めて飲むこのお茶に興味をもったのはもちろんのこと、古くから飲まれているというこのバタバタ茶が蛭谷の人々にとってどんな存在なのかということに興味をもった。本章では、蛭谷におけるバタバタ茶の変遷を述べるとともに、住民の語りを通し、蛭谷の人々にとってバタバタ茶はどういうものか、その役割について考えていきたい。

1. バタバタ茶とは？

まずバタバタ茶の概要について、漆間元三『民俗資料選集 12 振茶の習俗（1982）』、清原爲芳『仏教民俗 バタバタ茶（2001）』を参考に述べていきたい。

1-1. バタバタ茶の由来

バタバタ茶という名で飲まれているこのお茶は黒茶に分類される発酵茶で、もとは中国で飲まれていたものが日本に伝来したとされる。室町時代に真宗本願寺第八世蓮如上人^{れんにょしょうにん}が説法にともなう酒・飯・茶のひとつとしてこの地で飲まれていた黒茶を利用したという記録があり、それ以前から飲まれていたようだが、いつから飲まれ始めたのかは定かではない。

昔は各家に一つずついろいろがあり、そのいろいろで茶釜に茶を沸かし、それを囲んで皆で茶を飲んでいた。鍋いっぱい^{しゃく}に沸かしたお茶を各自柄杓でくみとり、持参した自分の五郎八茶碗（後述）に注ぐ。そして片方の手で茶碗を持ち、もう片方の手で夫婦茶筌^{めおとちやせん}（後述）と呼ばれる茶筌をせわしなく振り、泡立てる。この時、茶筌の持ち手の部分と茶碗がぶつかってカタカタと音をたてる。このあわただしくバタバタと茶筌を横に振る動作が「バタバタ茶」という名前の由来とされる。ただしこの名前と呼ばれるようになったのはここ数十年で、昔は単に「茶」と呼んでいたものを調査で訪れた学者の人たちが「バタバタ茶」と呼んだことから、この地にこの名前が定着したといわれている。なお昔は畑仕事などの後に飲むことも多く、塩分をとるためにお茶に塩をひとつまみ入れていた。

バタバタ茶を飲むときは茶受けとして何品かの料理がふるまわれ、集まった人々は各自小皿にとってお茶を飲みながらそれをつまむ。これらの茶受けは茶会をする家で、季節ごとの旬の食材を使って作られる。野菜の煮物や漬物、ごまあえや酢の物などが多くみられる。

1-2. バタバタ茶の道具

続いて、これまで述べてきたバタバタ茶を飲む際に用いる道具について紹介する。

1-2-1. ゴロハチチャワン・ゴロハチヂャワン（五郎八茶碗）



写真 1. 五郎八茶碗

五郎八茶碗は写真 1 のような飴色をした小ぶりの茶碗で、昔は朝日町赤川で作られた赤川焼のみを使用していたが、現在は朝日町南保の越というところで作られた赤川焼に加え、笹川地区で作られる笹川焼も使用されている。蛭谷のほとんどの人は自分の五郎八茶碗を 1 つ持っており、茶会の日にはこれを持参する。

なお、蛭谷出身で現在も蛭谷に住む 80 代のある女性は「昔、家庭では五郎八茶碗はとても大切なものとされていて、油などがつかないように他の食器とは別に保管されていた」と語っており、昔から各家で特別大切に保管されてきた。現在も他の茶碗とは別に保管してあるという人が多くみられ、今も昔もこの茶碗はバタバタ茶を飲む時のみ使われているようだ。

1-2-2 メオトチャセン（夫婦茶筥）



写真 2. 夫婦茶筥

写真 2 のように 2 本の竹を合わせてあることから「夫婦」茶筥と呼ばれる。昔は細い竹が好まれたが、現在は太いものを好む人が多くなった。穂先の部分は薄く平らで、薄ければ薄いほど泡立ちはいいが、その分長持ちしなくなる。

現在は数少なくなってしまった茶筥職人だが、昔は蛭谷の中に何人か茶筥作りを専門としている人がおり、蛭谷で作った茶筥は行商人を経由して富山県内や新潟県直江津方面まで売られていたらしい。また蛭谷出身で 80 代の女性は「昔はおばあちゃんや母が自分で山から竹をとってきて、火であぶりながら小刀で削って茶筥を作っていた。」と語っており、昔は職人から買い取るだけでなく、各家庭でも独自に茶筥を作っていたことが分かる。

なお五郎八茶碗同様蛭谷のほとんどの人が自分専用の茶筥を持っており、茶会の際はそれを持参する。

1-2-3. チャーマ、チャガマ（茶釜）



写真 3. 夢創塾にある茶釜

昔は写真 3 のような茶釜という鉄製の手付釜を使用していた。各家にいろりがあったため、天井のチョウナ梁かヒヤマと呼ばれる部分から下がっているカギサマという自在カギにこの茶釜をかけ、湯を沸かし、茶葉を入れた布袋をその中に入れて煮だしていた。

1-2-4. シャーク (柄杓)



写真 4. 夢創塾にある柄杓

一般的に番茶を飲むときに使われる柄杓は竹製であるが、バタバタ茶をくむのに使う柄杓の柄の部分には山に自生するバラの木の枝が使われている。バラの枝は太さも形も良く、燃えにくいいため、いろり端で飲むバタバタ茶には竹よりも適していた。茶をくむ部分は合^{ごう}といい、合には竹の節の部分が用いられる (写真 4)。

1-3. 茶会の種類

蛭谷では主に毎月、お待ち受け、お講、お座、各家の月命日、冠婚葬祭などの集会の際に飲まれた。蛭谷での集会は表 1 のとおりである。

表 1. 蛭谷でバタバタ茶を飲んだ集まり

5 日	お座
10 日	男講 (常泉寺門徒)
16 日	男講 (光栄寺門徒)
20 日	女講 (光栄寺門徒)
25 日	女講 (常泉寺門徒)
(27 日)、28 日	お待受け (親鸞聖人の命日)
	各家の月命日
	冠婚葬祭

お待受け、お座、お講は「講⁶」と呼ばれる組によって行われる宗教行事である。講の開

⁶ ここでは一般的な宗教行事として行われるものを「講」、蛭谷で毎月開かれるもののうち男講と女講をまとめて「お講」と記す。

かれる日には組の家々から必ず1人参加し、参加するのは70代以上の女性が多かった。

蛭谷には寺院がないが、各家々は東隣の南保の常泉寺と北方に隣接する光栄寺のいずれかの門徒で、表1に記したように常泉寺と光栄寺の檀家2組の宿に分かれて講が行われていた。宿は当番制で、当番は蛭谷の組には上組・中組・下組・吉原組の4つの組でそれぞれまわされる。お座の日には皆正座をして茶を飲みながら仏教の話をし、お講の日には寺の僧侶による念仏があった。特に28日のお待受けは親鸞聖人の命日とされ、村の人々が欠かさず集まっていた。これらの茶会では初めにいり端に置かれたお盆に賽銭を入れる。これらの賽銭の額は「お座帳・お講帳」に記録されて次の宿に引き継がれていた。

1-3-1. オマツキ（お待受け）

毎月27日の夕食後、各自五郎八茶碗と茶筌を和服のふところに入れ、組の当番の宿に集まる。宿の家主はあらかじめいり端の茶釜に茶を入れ、沸かしておく。集まった人々はいり端を囲んで順番に座り、賽銭を入れたらお経が始まるまで各自茶釜から柄杓でバタバタ茶を五郎八茶碗にくみ入れ、その中に塩を一つまみ入れて夫婦茶筌で泡を立てて飲む。組の人全員が集まると、一同でお経があげられ、いり端で行う「御領解^{ごりょうげ}」にうつる。なお、いり端を囲んで座る際、「親鸞さまが座っておいでだから」と、いり端の横座は空席にする。

御領解とは仏法のことで日頃疑問に思っている事や自分の宗教上の信心の見解を述べ、それに対して僧侶が批判を述べるというものである。これを宿の家主→妻→長男→嫁（子どもは除く）の順番で行い、宿の家族が終わるとその他の参加者の人々の御領解にうつる。

その後蓮如上人の改悔文を参加者全員が唱え、宿主の旦那寺の僧により各村々に下された本山からの御消息文が読まれた後、僧侶の説教がある。これでお待受けは一通り終了し、ここまです「一番お座」という。

翌28日は午前から同じ宿に集まり、全員そろったところでその家の仏壇の前で正信偈^{しょうしんげ}が唱えられ、御消息文が読まれた後、さらに僧侶の説教があつて終了となる。

昔は毎月27・28日の2日間にわたって行われていたお待受けだが、人々の生活の変化などによって両日行うのは難しくなり、28日のみ行われるようになった。さらに現在ではお待受け・お座・お講はどれも行われなくなっている。しかしかつては仏教行事と密接に結びついてバタバタ茶が飲まれていたことが分かる。

⁷ 正信念仏偈^{しょうしんねんぶつげ}の略。親鸞の著書『教行信証』の「行巻」の末尾に収められる偈文。

1-3-2. 各家庭の月命日・冠婚葬祭

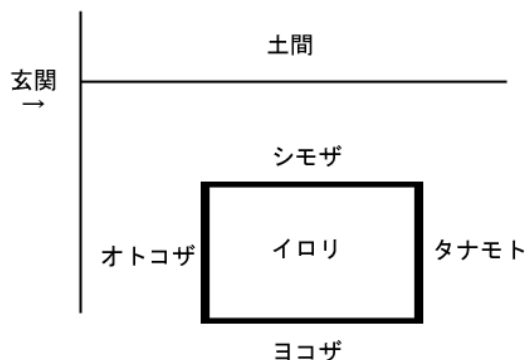


図 1. 左玄関の場合のいろいろ端の座席

(漆間元三『民俗資料選集 12 振茶の習俗』より)

昔は月命日以外にも、家の慶弔をはじめ節句や旅立ち、帰省・子供たちの誕生・入学・卒業・就職など多くの茶会の機会が設けられていた。親戚と近所に老女や子供が「茶飲みにございのー」と言って茶会を知らせてまわっていたという。招待をうけた家では、この言葉だけで今日はどこの家で茶会が行われるのか、何の茶会かがわかっていた。

招待をうけた来客は朝 8 時ごろに集まり、仏事の際の招待には、必ず茶の間から仏壇を拝んでからいろいろの周囲に座って茶を飲んだ。このいろいろ端の座り方には古くから厳格な座順があり、いろいろのヨコザ（横座）は座頭であり上座であったため、家の主人以外は座ることを許されていなかった。ただし茶会は例外で、宿の主婦は必ずヨコザに座り、主人はたとえ家に居合わせても別部屋に引き下がっていたという。ヨコザの左右どちらかをタナモト（棚元⁸）といい、普段は主婦の席だが茶会では主婦の親類たちの席となる。親類関係者は正客としての取り扱いを受けず、来客の接待をする。その都合上親類関係者は、食器や飲食物を取り出しやすいタナモトに座ることになっていたようだ。タナモトの向かいの席はオトコザ（デズマ）と呼ばれ、この席には隣近所の血縁関係でない客が家柄や年齢による順番で座る。そしてシモザ（下座）にはヨコザ・タナモト・オトコザに座りきれない人が座る。（図 1 参照）

茶会が始まると、まず主婦が泡だてていない茶を仏壇に供える。このご先祖様に初めに供える茶を「散茶」という。その後は各自のスタイルで茶を飲み、世間話を楽しむ。

このようにどの茶会においても、お茶の飲み方に特別な作法はないようだが、長い間行われてきた中で人々の間でできた決まりごとがあり、人々は暗黙のルールとしてそれを守り、伝えてきた。しかしその決まりごとにしばられず、茶会は実に和やかに行われていたようだ。

⁸ ヨコザから見て玄関が左にあれば横座の右側を、玄関が右にあれば横座の左側をタナモトと言った。タナモトは食器棚の前の座であることからタナモトと呼ばれる。

1-4. 茶葉について

一般に茶は製法の違いによって分類されるが、バタバタ茶に使われているのは「黒茶」といわれる茶である。私たちが普段飲む緑茶は「不発酵茶」と呼ばれ、茶葉収穫後に加熱処理を行い、茶葉自体のもつ酵素の酸化を止める。これとは逆に、黒茶は茶葉を加熱処理した後、微生物によって発酵させるため「後発酵茶」と呼ばれる。

蛭谷で飲まれていた茶葉は、1976 年（昭和 51 年）までは福井県三方町の A さんの作ったものだった。しかし黒茶を飲む習慣をもつ地域が限られていることから採算が合わず、それに労力不足も合わさって、1976 年（昭和 51 年）にはやむなく廃業に至った。このことについて語ってくれた蛭谷出身の 80 代女性によると、バタバタ茶文化が盛んな蛭谷では、どうか生産をやめないようにと A さんに直接頼みに行った者さえいたそうだ。

福井県での黒茶生産がなくなってしまい、一時はバタバタ茶の飲茶に支障をきたしたが、翌 1977 年（昭和 52 年）からは富山県小杉町青井谷（現在は合併により富山県射水市青井谷）の B さんが A さんから直接指導を受け、それに独自の製茶法を組み合わせることで黒茶生産を復活させた。蛭谷ではその後この青井谷の黒茶が飲茶されていたが、1987 年（昭和 62 年）になると当時一村一品運動⁹が流行したことにより、朝日町商工会は「むらおこし事業計画」としてバタバタ茶をあげ、1989 年（平成元年）には自分たちで黒茶を作ることに挑戦し始める（詳細後述）。またこの年、将来を考え特許庁に『商標名：「バタバタ・（指定商標 29 茶・その他）」権利者・清原爲芳』として商標登録を行ったり、「(株) あさひ」というバタバタ茶商品を取り扱う専用の会社もできた。

ここで福井県の A さん、青井谷の B さんそれぞれの茶葉の製作方法を表 2 に示し比較する。



写真 5. 伝承館に残る昔の茶摘み道具

⁹ 1980 年（昭和 55 年）から大分県の全市町村で始まった地域振興運動。

表 2. 福井県の A さん、青井谷の B さんの製茶方法

	A さん	B さん
茶摘み 時期	7 月上旬	7 月上旬
道具	竹ビラ、草刈り鎌	剪定鋏に 5 尺ほどの布をつけたもの（写真 5）
茶葉買い取り価格	一貫 ¹⁰ 150 円（昭和 33 年当時）	1kg80 円（昭和 57 年当時）
量	1260 貫	3000kg
加工方法	①大きな釜でゆでる ②四斗樽で水分を切る ③約 3cm に切る ④ムシロ ¹¹ で囲ったサイロ ¹² で発酵（100 貫×6 つ） ⑤約 1 週間後切り替え ⑥白カビが生じたら天日干し（2～3 日）	①蒸し器で蒸す ②乾燥機で乾かす ③粗揉機 ^{そじゅう} で揉む ④冷却機で冷やす ⑤板・コモで囲われた発酵枠で発酵 ⑥3 日後～切り替え（毎日） ⑦20～35 日～天日干し（3 日間）

両者とも茶葉は周辺の茶畑を持つ家から買い取って茶作りを行っていたようだが、その加工方法には「ゆでる」、「蒸す」という大きな違いがある。また A さんの場合は手作業で行っていたものが、B さんの場合はほとんどが機械化されていることがわかる。

A さんの製茶法に独自の製茶法を加え、バタバタ茶の危機を救った B さんであったが、愛飲者の中には「福井の黒茶と比べてやや味が劣る」という人もいたそうだ。煮るという過程を蒸すことに変えたこと、人が手作業で行っていたものを機械で行うようになったことなどが茶葉の味を変え、それに慣れていないため「劣っている」と感じたのではないだろうか。

2. バタバタ茶と人々の生活

ここまでバタバタ茶の概要について紹介してきたが、以下では現代に生きるバタバタ茶とバタバタ茶を飲む人々について見ていきたい。

¹⁰ 尺貫法による質量の単位。1 貫＝3.75kg

¹¹ ワラやイグサなどで編んだ簡素な敷物。コモともいう。

¹² 茶を発酵させるための枠。

2-1. お茶のたて方

バタバタ茶を私が初めて飲んだ時、独特な香りと渋みがあり、今まで飲んだことのない味がした。お茶をたてるのもなかなか難しく、初めはどうしても穂先を振ってしまいお茶がこぼれてしまう。蛭谷の女性たちのたてる泡はなかなか消えないうえにきめ細くなめらかで、それを話しながら器用にカタカタとお茶をたてる。その様子を見て真似をしながらなんとか泡はたっても、目の粗い泡はすぐに消えてしまう。女性たちは何気なくやっているように見えるが、毎日のように飲んできたからこそその技術なのだろう。

カタカタと音を鳴らしながら、世間話や料理の教え合いなど、お茶を飲みながら絶えず語り合い、茶会はにぎやかに行われる。この茶会には堅苦しい決まりはないが、皆口々に言うことは「自分のものは自分で」という事である。その証拠に、お茶をくむのも、たてるのも、料理をとるのも、全て自分のものは自分で行う。



写真 6. 茶筌の持ち方

バタバタ茶の語源にもなっているほど独特なこのお茶のたてかたは、昔から現在まで変わっていない。柄杓一杯のお茶を各自五郎八茶碗にくみ取り、片方の手（利き手）に夫婦茶筌、もう片方（利き手でない方）の手に五郎八茶碗を持つ。手ぬぐいや布巾、タオルなどを広げた膝の上で茶碗を固定するように持ち、茶筌を写真 6 のように軽く持ってゆっくりと茶筌を動かして茶をたてていく。茶筌の動かし方にはちょっとしたコツがあり、茶筌の穂先を振るのではなく、穂先は茶碗の底に少し押しつけるようにして持ち手の部分を左右に振る。この時穂先を振ってしまうとうまくいかず、お茶がこぼれてしまう。

茶筌を 2、30 回振ると白い泡が浮き上がってきて、茶碗 3 分目程しかなかった茶が泡で 6、7 分目程に見えるようになる。ここまできると、泡というよりもクリーム状のきめ細かなものになり、茶の温度も程よい加減になっている。最後に茶筌で茶碗の底を 1、2 回かきまわし、大きな泡を中央に集める。そして茶筌の穂先を中央からもちあげることによって先ほど中央に集めた大きな泡が消え、細かな泡が盛り上がってきて見栄えが良くなる。細かな粘り気のある泡がたった茶ほど、上手にたてられた茶といわれる。しかし先にも書いたように、コツをおさえながらやってもこのようなクリーム状の泡はなかなかできず、ある程度の経験が必要とされるようだ。

2-2. 現代のバタバタ茶

時代とともに変化してきたバタバタ茶文化だが、確実に現代でも生き続け、変わらず人々の生活には欠かせないものとされている。以下では現代に生きるバタバタ茶について述べていきたい。

2-2-1. バタバタ茶伝承館について



写真 8. バタバタ茶伝承館での様子



写真 9. バタバタ茶のペットボトル

バタバタ茶伝承館は 2010 年（平成 22 年）4 月に宝くじの普及宣伝事業として作られた施設で、月・水・金・土曜日の 10 時～15 時に開館しており、誰でも無料でバタバタ茶会を体験できる施設である。蛭谷の何人かの女性が当番制で茶受けとなる料理を作り、その日の伝承館の管理（準備・片づけ等）も務める。団体の観光客が訪れることもあるが、それ以外は写真 8 のように、地域の人々が集まり、交流の場となっている。なお、伝承館ではバタバタ茶の茶葉やペットボトル製品なども購入できる。（写真 9）

2-2-2. 茶会



写真 10. N さん宅の月命日の茶会の様子

現在蛭谷で行われている茶会は、主に月命日のみである。筆者は2012年8月22日に行われた80代のNさん夫妻宅の月命日の茶会に参加した。写真10はその時の様子である。Nさん宅の茶会のグループにはNさん夫妻、親戚、友人や気の合う者が集まり、この日は8人が集まった。Nさん宅にお邪魔すると、部屋の真ん中に脚のたたまれた正方形の机の四辺に木を置いて即席のいろりのようなものが出来ていた。その中央にガスコンロが置かれ、柄杓の差し込まれたやかんにお茶が沸かしてある。Nさん夫妻が座る場所の前には湯の入ったやかんが置かれ、側には茶碗・茶筌、割りばし、小皿がのせられたお盆が用意されていた。そしていろり風の机の四方には漬物と煮豆が置かれている。

9時半頃になると、続々と来客が集まり、集まった順に奥さんに挨拶をしていろり風の机のまわりに座る。この時の座り方には特に決まりはないが、昔と同じようにいろりのヨコザにあたる部分は宿の主人（Nさん夫妻）のために空けておく。そして来客は一番初めに座った場所が自分の場所となり、その後もそこに座るようになる。来客は座ると巾着に入れたり、タオルにくるんだりした自分の五郎八茶碗と茶筌を取り出し、思い思いに茶をたてて飲む。ある程度人数がそろってくると、奥さんが台所から次々と茶受けとなる料理を運んでくる。奥さんに「手伝います」と言っても、「これは私の仕事だから座っていて」と言われ、来客も同じように言う。奥さんが料理を運ぶのは昔から変わらない決まりとなっているようだ。

茶受けとなる料理は大変豪勢で、茶受けというよりは昼食とっていいのではないかとはいった。この日出されたのはサラダに山菜、煮物、和え物、甘味など10品以上が出された。来客たちはそれらたくさんの茶受けを小皿にとり、つまみながら茶を飲み、にぎやかに語り合う。このように茶受けが豪華になった理由として、蛭谷出身の80代の女性は「みんないろんな人の家にお呼ばれに行くので、『あの人よりもおいしいものを……』といった競争心があった」と話す。その競争心から茶受けが豪華になりすぎて、3品以上は出さないようにという決まりができたこともあったという。

おいしい茶受けを食べながらお茶を飲み、日々の生活のことなど様々なことを語り合う。静かになることは一時もない。そして11時半頃チャイムが鳴ると、奥さんはまた立ち上がり、お昼ご飯の支度をし始めた。茶会に集まった人はそのまま昼ごはんも一緒に食べるようだ。茶と茶受けでお腹がいっぱいであつたが、これからまた昼ご飯を改めて食べるという元気さに驚いた。またこの頃になると、お茶会の「はしご」に向かう人も見られる。別の家の茶会に参加しに行くのである。

月命日の茶会は現在でも毎月各家庭で行われているが、昔よりは減っているという。この日には入学や結婚、出産などめでたいことがあった時は報告し、かまぼこなどの手土産を配る。この習慣は昔から変わっていない。なお、用事などで茶会メンバーが欠けてしまうことが事前に分かる場合は、「1人でも欠けるとさびしいから」と茶会の日程自体をずらす。その他にも現在では仲の良い者少数でこっそりとお茶を飲んでおしゃべりをする「こっそり茶」というものもあるようだ。こっそり茶はもっぱらおしゃべりを楽しむことが目的で、豪華な茶受けは作らず、簡単なもので済ませるのだそうだ。なお、このこっそり茶

は、漆間元三氏の『民俗資料選集 12 振茶の習俗 (1982)』にも記述があることから、お座やお待受けなどの毎月の茶会があった頃から行われてきたようだ。

2-2-3. 蛭谷唯一の夫婦茶筌職人

以前は川をはさんだ対岸にある羽入^{はにゅう}でも夫婦茶筌は作られていたが、現在蛭谷で主に茶筌を作っているのは 80 歳の J さんだけである。そこで J さんの語りから、現在の茶筌事情について述べていきたいと思う。

J さんが茶筌を作り始めたのは、J さんの祖父（孫じいちゃん）が茶筌を作っているのを 18 歳くらいから見ており、それを思い出しながら作ったのが始まりだそうだ。直接教わったわけではないが、孫じいちゃんの代から代々作り方は同じである。また彼自身も何人かに茶筌の作り方を教えているそうだが、穂先の部分を作るのが特に難しく、上手くできる人はなかなかいないという。

茶筌に使われている竹は毎年 11～12 月に蛭谷の近くの山に J さん自ら出向いてとっている。竹は普通の竹ではなく、たけのこが成長して 4 年目くらいの「ねまがり竹」という竹を使用している。J さんによると、ねまがり竹は柔らかくて粘り強く、茶筌に向いているという。製作方法は次のとおりだ。

ねまがり竹をおよそ 30cm ずつカットし、さらに節を目安に持ち手が約 6cm、穂先が約 23cm になるようにカットする。その後カットした竹を 30 分～1 時間ほど煮て柔らかくする。この時炭酸水を使って煮ると早い。煮て柔らかくなったら、先ほど作った穂先になる部分を小ぶりの鉋のような器具で 8 つに割り、内側の硬い部分をそぎ落として薄くし、竹表面のエナメル部分もそぎ落とす。8 つに割った部分をさらに 16 本に割り、穂先になる部分を外側・内側両方から特注のナイフで 100 分の 1mm まで薄く削ったら、全部で 32 本になるように割く。先述したようにこの穂先を作る作業は難しく、大変な集中力を要するため、「穂先を削っているときに話しかけたりすると怒られる」と、J さんの奥さんという。

穂先を削り終えたら竹の片方の側面にドリルで 2.8～3mm ほどの穴をあけ、3cm くらいの竹釘で二つの竹を繋ぎ合わせ、最後に持ち手の部分を 5cm にカットして完成となる。なお、茶筌を作るのは冬のみで、年の暮に注文を受けてから 11、12 月～3、4 月頃まで製作する。J さんはこの製作方法で約 1 時間で 1 本、1 日で 6 本、最終的には 100 本ほど作る。J さんの作る茶筌は長ければ 20 年はもつといい、蛭谷の人々のほとんどが J さんから直接購入しており、そのほかにも商工会やなないろ KAN、富山市などからも注文を受けて作っている。「いつも穂先を削る部分以外は TV を見ながらここ（TV の前のスペース）に座って作っている」と語る J さんは、茶筌の他にも竹製の様々な工芸品を見せてくれた。J さんにとって茶筌作りは趣味のひとつであり、仕事だとは思ったことはないという。

2-2-4. 茶葉作り

先述したが、蛭谷では長らく青井谷の黒茶が飲茶されていた。しかし一村一品運動が流行し、1987年（昭和62年）になると朝日町商工会は「むらおこし事業計画」としてバタバタ茶をあげ、1989年（平成元年）には自分たちで黒茶を作ることに挑戦し始めた。当時の茶葉作りには、村中の人々が当番制で参加した。現在はバタバタ茶伝承館で行われている茶葉作りだが、初めは蛭谷内にあったカムヤという和紙を作っていた場所、その後自治会館の前の憩いの場所と、3回の場所移転があった。作り始めた時には、朝5時から当番制で集められた村の男女10人ほどで茶葉を煮て、いったん干してからムロという茶葉を発酵させるための板で囲まれた枠に入れる。その後何日かおきに2、3人で切り返し（切り替え）を行い、干して袋詰めしていた。

現在もバタバタ茶の茶葉づくりに参加する蛭谷出身の80代女性は、当時のことについて「私は学校の先生をしていたので、化学の授業の役に立てばと思ってお茶作りを引き受けた。初めは作り方も何もわからず、毎年試行錯誤の連続だった」と話しており、初めから現在のような形にはならず、失敗の連続だったようだ。そこで青井谷のBさんに指導を受けると、煮るという過程で茶葉にムラができ、それが失敗の原因の一つであることが分かったという。また現在もバタバタ茶の生産の中心人物である商工会のHさんは「初めは作り方が分からないから、何が間違っているのかもわからなかったが、長い間試行錯誤してきた分、教えてもらえた時に『そうだったのか！』と失敗の原因が分かることも多かった」と語っており、苦労して経験を重ねたからこそ分かったこともあったようだ。

また青井谷のBさんに加えて、香川大学の宮川金二郎教授にも菌についてのアドバイスを受け、2000、2001年（平成12、13年）頃になるとようやく形になるようになった。しかしそれでも初めは「おいしくない」といわれ、蛭谷の愛飲者には受け入れてもらえなかったという。2003年（平成15年）になるとBさんの引退に伴いようやく茶葉作りの詳細な伝授を受け、本格的に茶葉を商品として作るようになった。同時にBさんが使っていた道具も譲り受け、現在でもこれを使って作っている。

今年度も茶葉づくりは行われ、筆者も茶摘み、加工、切り返し、茶葉干しそれぞれに参加した。以下でその時の体験をもとに現在行われている製茶法を紹介したい。

(1) 茶摘み（2012年7月21日 日曜日）



写真 11. 静岡から取り寄せた茶摘み道具



写真 12. 茶摘みの様子

摘む茶葉はヤブキタという品種で、一般に緑茶にも用いられるものである。茶畑は 1995 年（平成 7 年）にならぬ KAN 前に植えられ、茶葉はバタバタ茶に使われる他、現在では紅茶などにも使われている。茶摘みは商工会の 30 代～60 代の男女 10 人ほどで行われる。5、6 人で一組になり、静岡県から取り寄せたという写真 11 の茶摘み専用の機械に大きな布を取り付け、2 人が機械を、その他の人で袋を持ち、茶畑を往復しながら茶葉を刈っていく。袋がいっぱいになったらトラックの荷台に乗せ、荷台がいっぱいになるとバタバタ茶伝承館へと運ばれる。これを繰り返し、今年度は全部で 2500kg の茶葉を摘んだ。写真 12 はその時の様子である。

機械で行うとはいえ、茶葉の入った袋はとても重く、刈り取った茶葉が袋の中で固まらないように常に振りながらやらなければならない、かなりの重労働である。加えてこの日は朝方雨が降ったため茶葉が濡れており、例年よりも重みが増していたようだ。

(2) 茶葉の加工（7 月 21 日日曜日）



写真 13. 機械で茶葉を細かくする様子



写真 14. 蒸された茶葉を冷ます様子

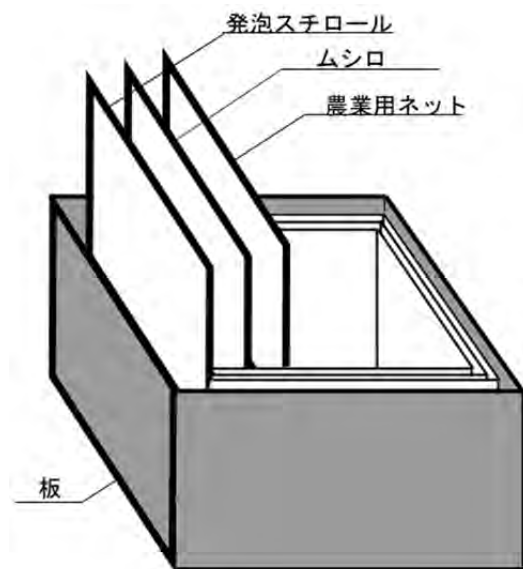


図 2. ムロの構造



写真 15. ムロに入れた茶葉に空気を入れる

茶葉の加工作業は茶摘みと同日に行われ、商工会の人と蛭谷の人合わせて 10 人ほどで行う。加工に参加している蛭谷の女性たちは、10 年ほど継続して参加しており、中には 1989 年（平成元年）から参加しているという人もいた。作業を行う人たちは皆、専用の靴下を履き、ビニール手袋をした上からさらに軍手をつける。ビニール手袋をするのは、作業を行ううちに爪の中に細かい茶葉が入るのを防いでいる。

バタバタ茶伝承館に集められた茶葉は、まず機械で細かく切られる（写真 13）。この機械によって茶葉を細かくすると同時に、重い枝は遠くに、軽い葉は手前に飛ばされる。ただしこの時飛ばされた枝も使用する。飛ばされた葉と枝を集めて蒸し器に運び、枝葉を蒸していく。この時の蒸し加減は、手で触ってみて経験的に判断している。蒸し足らないと判断した時には、不足の葉を集めておき、もう一度蒸し器を通す。蒸し器から出てきた熱々の茶葉を、広げて揉みながら軽く冷まし（写真 14）、ある程度冷ましたら、カゴに入れてムロへと運ぶ。

ムロというのは茶葉を発酵させる 1m 弱の枠のことで、外側から、木の板、発泡スチロール、ムシロ、農業用ネットと、様々な素材のものを何層にも重ねることで、温度の調節が何段階もできるようになっている（図 2）。ムロに入れた茶葉は写真 15 のように鍬のような道具でかくはんし、全体がよく空気を含むようにふわふわにする。この時押し付けたままだと茶葉の発酵がうまくいかない。茶葉を入れ終わったら、その上にさらにムシロと発泡スチロールをかぶせる。この日 2500kg 摘んだ茶葉は蒸されてかさが減り、ムロふたつに収まった。

(3) 切り返し（8 月 10 日金曜日）

茶葉のもつ菌は 70℃を超えると死んでしまうため、最高でも 65℃前後でとどめる必要がある。しかし、ムロに入れられた茶葉は夏の暑い気温の中で発酵を始め、そのまま放っておくとどんどん温度をあげて 80～90℃まで達してしまう。そこで、いったん茶葉を冷まし、温度調節をするのがこの切り返しという作業の目的である。

切り返しは商工会の人を中心に 4、5 人で行う。この日も専用の靴下・ビニール手袋・軍手をつけて作業を行った。まずムロの板、発泡スチロール、ムシロを外し、写真 16 のようにネットと茶葉だけにする。そして外した板、スチロール、新しいムシロ、ネットで新たなムロを作っておき、茶葉を覆っていたムシロ・ネットは干しておく。

次に、茶葉を覆うネットを取り外し、写真 17 のように崩していく。7 月 21 日にムロに入れた時は緑色だった茶葉もこの頃には茶色くなっており、茶葉を崩すと湯気とともにかすかにバタバタ茶の香りがした。崩した茶葉は作っておいた別のムロに 2、3 人で移していく。（写真 18）こうすることで 65～67℃ほどあった茶葉が 45℃程度まで下がる。この作業をムロふたつ分行う。



写真 16. 発酵した茶葉のかたまり



写真 17. 茶葉を崩して運びやすくする



写真 18. 茶葉を運ぶ筆者（右）



写真 19. 茶葉を踏み固める

切り返しは主に月・水・金曜日と一日置きに行われ、茶葉の状態を見ながら全部で 14、5 回行う。なお金曜日は、土・日曜日と 2 日間あけることを考慮し、写真 19 のように茶葉をムロへ移した後上に人が乗り、ぎゅっと踏み固めておく。踏み固めることによって酸素を抜いて発酵を遅らせ、2 日間あけても温度が上がりすぎないようにしている。商工会の H さんによると、切り返しをする間隔や踏み固めたりする技術は経験から習得したものだそう。

(4) 茶葉干し（8 月 24 日金曜日）



写真 20. 横一列で茶葉をひっくり返す様子



写真 21. 水分量 10%の茶葉



写真 22. 真ん中に茶葉を集める様子



写真 23. 完成した茶葉 450kg 分



写真 24. 袋詰めされて伝承館に置かれた茶葉

この日は商工会の方 4 人、蛭谷の女性 8 人ほどで行われた。朝 7 時頃からバタバタ茶伝承館の駐車場いっぱいブルーシートが敷かれ、その上に茶葉を広げて天日干しにする。干された茶葉は、15 分おきくらいに蛭谷の女性たちが横一列になってひっくり返していく。写真 20 がその様子である。ひっくり返すことで太陽に当たる面が変わり、全体的にまんべんなく水分を飛ばすことができる。茶葉の水分量は、午前 9 時の時点で約 20~30%で、最終目標は 10%である。ブルーシートに茶葉がくっつかなくなる頃が目安で、茶葉の様子は写真 21 のようになる。この写真の茶葉はほぐれてカラカラになっているが、中には塊となって乾いていないものがある。これが製品の中に入るとカビが発生してしまう。そのためひっくり返ししながら籠の中に集められ、別の場所でほぐされてから再度干される。また 80 代の女性によると、この塊のままの茶葉を五郎八茶碗に入れ、お湯を注いで飲んでもおいしいのだという。茶作りに参加している者だけの特権である。なお、この茶葉の水分量は特別な機械等で計測するわけではなく、H さんの経験に基づいて判断される。

この日は天気が不安定で途中雨が心配されたが、なんとか雨に降られず 14 時頃茶葉の水分量が最終目標に達した。商工会の H さんは、「なんとしても茶葉は雨にあてたくない。雨が降るならいったん中に取り込まなければいけない」と話し、雲の動きを長い時間観察していた。少しでも雨がかけると、それだけで味が落ちてしまうのだという。

14 時頃からブルーシートごとに干した茶葉の山を作り、3 人 1 組（袋を持つ人 1 人、茶

葉を袋に入れる人 2 人) で紙の袋に茶葉を詰めていく。写真 22 はビニールシートを器用に扱って中心に茶葉を集め、袋に入れやすくしている様子である。10 年以上茶作りに参加しているだけあって、端々に様々な知恵が詰まっていると感じた。

今年度は写真 23 の通り 31 袋分、約 450kg の茶葉ができあがった。茶摘みの時点で 2500kg あった茶葉も、最終的には 5 分の 1 程の量になる。これらの茶葉は写真 24 のように袋詰めされ、商品として商工会やバタバタ茶伝承館、なないろ KAN などの施設に置かれる。なお蛭谷には商工会が配りに出向き、1 軒につき 3 袋まで購入することができる。

茶作りに参加する蛭谷の女性は平均年齢 75 歳で、蛭谷で茶葉を作り始めた頃から茶作りに参加している人ばかりである。その中の 1 人である 80 代の Y さんは、お茶づくりについて「1990 年（平成 2 年）から商工会の依頼でお茶づくりに参加している。頼まれた時は何も分からずにやっていたけど、自分たちが飲むお茶を自分たちで作ることのできる喜びを感じる。だから毎年のお茶づくりはとても楽しみ。みんなで集まると楽しいことばかり」と語り、休憩中や茶葉をひっくり返しながらか、各々様々なことを語り合っていた。茶摘みから加工、そして干すまで、夏の暑い季節に茶葉から出てくる湯気の熱気の中で行う茶作りは私でもかなりの重労働だったが、蛭谷の女性たちは時には恋愛トークも飛び出したりするほどパワフルであった。

2-3. 年齢、出身による意識の違い

蛭谷ではあらゆる世代で普段から緑茶よりもバタバタ茶を飲んでおり、ポットなどに入れて仕事に持って行くなどという語りが調査を行っている中で多く聞かれた。しかし、茶会やバタバタ茶への意識には年齢や出身によって違いが見られた。以下では住民の語りをもとに蛭谷の人々にとってのバタバタ茶の存在について考察していきたい。

2-3-1. 蛭谷出身の女性の語り

まず蛭谷出身の何人かの女性にバタバタ茶の飲み方について伺ったところ、80 代の女性は「バタバタ茶は子供のころから飲んでいる。昔は梅干しと一緒に茶漬にして食べていた。普通のお茶で作るよりもまるやかでおいしい」と語り、また別の 80 代女性は「昔はいろりを囲んで餅などを焼きながらお茶を飲んでいた」と語っており、幼いころからバタバタ茶のある生活をしてきたため、各家庭によってそれぞれの飲み方があるようだ。なおバタバタ茶漬はその他の人への聞き取りでも何度か出てきたことから多くの家庭で好んで食べられており、また現在でも孫が好んで食べるという語りも得られた。

また 93 歳の女性は「バタバタ茶の飲み方は誰から教わるわけでもなく、自然にできるようになって今まで飲み続けてきた」と語り、80 代の女性も「飲み方を習ったわけではなく、習慣に従って飲んできた」と語っていることから、バタバタ茶の飲み方は人々の生活の中でひとつの習慣として身についたものであり、だからこそ自分の好きなように自由に飲むスタイルが現代でも維持されているように感じる。

そして 80 代女性は茶会について、「自分が若い頃は、自分の姑さんが『あそこの家は今

日茶会やけど呼びに来っしゃった?』と、毎回きっちり人の家の茶会の日を覚えているのが不思議だったけど、今自分が姑さんと同じくらいの年になったら、やっぱり誰の家がいつ茶会の日かわかるようになった」と話し、別の80代の女性は「昔は人の家に招かれて飲むことが多かったけど、伝承館ができてからはみんなそこに集まるようになった。話し相手がいるというのは心の支え」と語り、93歳の女性も「友達がいるから楽しく何杯でも飲める。1人で飲んでいても楽しくない」と、毎月の茶会は人々にとって欠かせないものとなっており、茶を飲むということよりも、メンバーに会うことが楽しみであるようだ。また「茶会に呼ばれたら必ず行くというわけではない。でも行けなかった次の日には心配して電話が来たりする」という80歳女性の語りや、「茶会になかなか来ない人には『茶会にこないから（皆の近況が）何もわからんがやね!』と冗談交じりに言うこともある」という80代女性の語りから、茶会は参加メンバーが近況を伝えあう情報交換の場にもなっていることがわかる。

また80代の女性に昔のお待受けについて聞いてみると、「茶会の当番がまわってくると、掃除とか料理の支度とかが忙しくて大変だった。当番が回ってくる日に自分が会社勤めで茶会ができない時には、前日に準備だけはしておいて、当日は隣のおばあちゃんに頼んだ。おばあちゃんは快く引き受けてくれていた。忙しくて、何でこんなことがあるの、と思ったこともあった」と語ってくれた。時代とともに女性が外に仕事に出たりすることによって、茶会に割く時間が減っていったことがわかる。

2-3-2. 蛭谷以外出身の女性の語り

次に蛭谷以外出身で、蛭谷に嫁いできたことがきっかけでバタバタ茶を飲むようになった女性たちの語りを見ていきたい。70代の女性は「昔は11時半まではお嫁さんは畑で仕事をしていた、その間姑さんはお茶を飲んでいた。だから畑仕事を終えて帰ろうとすると、お茶を飲んで元気になった姑さんが来て仕事を終えられないこともあった」と語っており、茶会に参加していたのは主に姑さんで、お嫁さんが参加するようになるのは姑さんが亡くなってからというのが一般的だったようだ。また別の70代女性は茶会について「嫁に來たての頃はこの慣習が嫌だった。村中が知り合いのようなもので、茶会で集まると姑が嫁の悪口を言っていたりすることもあった」と語り、80代女性は「茶会は村ごと（村の決まりごと）だったから、嫌でも一緒に飲まなければいけなかったし、村ごとだったから自分は嫌とは思わなかった。でも嫌という人もいた」といい、人によってはこの地の茶会という文化に戸惑った人もいたようだ。また茶会という慣習は姑から嫁へと引き継がれ、姑がない場合は近所の人から教えるが、茶会文化を引き継ぐかどうかは家によって異なっていた。

嫁いできた当初は姑という大きな存在に加え、珍しいバタバタ茶という文化に戸惑っていた人々も、現在では自らが主役として茶会を行っている。70代の女性は「このお茶は飲むだけでなく、いろんなことを教えたり教えられたりと刺激になる」と楽しそうに話し、別の80代の女性は「バタバタ茶は元気の源。鍋が持てる限り、お茶を入れ続けたい」と語っており、初めは戸惑っていた人々も、現在ではバタバタ茶はすっかり自分の生活に欠か

せないものとなっているようだ。

このように蛭谷出身とそうでない人々の間には始めた当初に意識の違いは見られても、現在では同じようにバタバタ茶を生活に欠かせないものとして見ており、また自分の一部であるかのような意識を持っている人も多い。またどちらも茶会という会自体にではなく、そこに参加して仲のいい人々と顔を合わせ、話をすることがバタバタ茶を飲む理由となっているように感じる。

2-3-3. 60代以下の女性の語り

ここまでは主に 70 代以上の女性の語りを取り上げてきたが、それに対して 60 代以下の人々はバタバタ茶についてどう思っているのだろうか。

60 代の女性はバタバタ茶について「月命日に飲むことはあっても、普段はあまり飲まない。バタバタ茶は家にあるけど同世代が少ないため、一緒に飲む人もいない」と話し、別の 60 代の女性は「夏などに冷たくして作っておけば皆飲むけど、娘・息子の世代は他に飲むものがあるし（飲まない）」と渋い顔で語っており、60 代以下の人々は 70 代以上の人々とは異なり、バタバタ茶を通常のお茶として飲んでいるにとどまっているという印象を受けた。

以上のことから、昔に比べて蛭谷で茶会を行う家が減っているのは、蛭谷では 60 代以下の人たちは外に働きに出ている場合が多く、上で述べたような準備に時間のかかる茶会を開くのも、決められた日にメンバー皆が集まることも難しくなっていることが理由の一つとしてあげられるのではないだろうか。毎月数回にわたって茶会を行うには、ある程度の時間の余裕が必要で、現代はその余裕に対する選択肢が増えたことも茶会をする人が減ったことにつながるとも考えられる。

3. まとめと考察

以上で述べたとおり、バタバタ茶は時代の変化によって形を変えてきた。それは時代の変化によって人々の生活様式が変化したため、蛭谷の人々の生活に深く根差していたバタバタ茶もまたそれに合わせて変化せざるを得なかったのだろう。時代に合わせて変化してきたバタバタ茶が蛭谷で現在まで飲まれ続けているのは、ひとつには宗教との結びつきが考えられる。しかし仏教行事と関連したバタバタ茶を飲む機会は今日ほとんど消滅してしまっている。私はむしろそれよりも、ただ単に「飲んでいて楽しいから」というのが長い間飲まれ続けている一番の理由ではないかと考える。

茶会の担い手は、以前から姑など比較的年配の女性を中心だったが、今日は女性も勤めに出たりして茶会に積極的に通うのは、より年配の人たちになってきている。そうした変化はあるにしても、今回の調査の中で最も感じたことは蛭谷の女性たちのパワフルさであった。そのパワフルさの理由を考えると、「バタバタ茶」というお茶の成分自体にも効能はあるのかもしれないが、なによりもバタバタ茶を 1 人ではなく数人で飲み、コミュニ

ケーションをとることにあるのではないだろうか。お待受けやお講、お座のように人々の生活の変化によって存続不可能になり消滅してしまったものもあるが、茶会自体がなくならないのは、人々がバタバタ茶を通して気の許せる仲間と話をすることを楽しみとしているからではないかと感じる。茶会を行う蛭谷の人々にとって、バタバタ茶は 1 人で飲むただのお茶ではなく、友人や地域の人と自分を繋いでくれる一種の道具なのだろう。

またバタバタ茶の果たす役割はそれだけではない。バタバタ茶で繋がれた人々の集まりをコミュニティと呼ぶのなら、皆で集まって語り合いながら同じ茶釜の茶を飲むことで共同意識を高め、情報交換を行うことによってコミュニティ内の人間関係の円滑化も果たしている。そして堅苦しい作法のないバタバタ茶は、コミュニティ外の者を内部に入りやすくするきっかけとしての役割も担っている。蛭谷以外から嫁いできた女性が次第に溶け込み、やがて茶会の主役となるのが良い例だろう。

蛭谷においてバタバタ茶は多くの役割を担っているが、高齢化にともない、現在唯一行われている月命日の茶会もなくなってしまうのではないかと、との危惧の声もある。人と人のつながりが薄い現代で、このような人と人を繋いでくれるバタバタ茶という文化は貴重であり、今後も受け継いでいってもらいたい伝統だ。時代の変化に流されることなく、どうか踏みとどまってもらいたいものである。

謝辞

今回バタバタ茶を調査するにあたり、蛭谷の皆様をはじめ商工会の方々などたくさんの方にお世話になりました。お忙しいところ突然声をかけたにもかかわらず丁寧に私の質問に答えていただき、本当にありがとうございました。

バタバタ茶伝承館の皆様には、行くと必ず「お茶飲んでかつしゃい！」と声をかけていただき、バタバタ茶を飲み、おいしい茶受けを食べながら皆様のお話を聞く事ができ大変楽しく調査をすることができました。調査に行く上で、伝承館で皆様と一緒にお茶を飲みながらお話することが、私の毎回の楽しみでした。おかげで思い出す顔は、皆様の笑顔ばかりです。ありがとうございました。

長崎みつお様、朝子様夫妻には月命日の茶会に参加させていただきました。文献でしかわからなかった月命日の茶会の様子が、以前よりも身近に感じることができました。また、たくさんのお茶受けは本当にどれもおいしくて、作り方を聞きそびれたのが唯一の後悔です。突然のお願いにも関わらず快くお茶会への参加を承諾してくださり、本当にありがとうございました。

長崎順一様と奥様には夫婦茶筌についてお話を聞かせていただきました。お忙しいところを毎回お宅にあげていただき、また私の納得のいくまでお話を聞かせてくださり、大変感謝しております。お土産にいただいた茶筌とトンボは、大切に保管させていただいております。ありがとうございました。

平木様をはじめとする商工会の方々には茶作りに関して、本当にお世話になりました。

茶摘みから茶葉干しまで各工程を実際体験させていただいたおかげで、茶作りへのより深い理解につながりました。暑い中皆様と一緒に汗を流しながら作業をしたこと、休憩の際にいただいた桃やジュース、お昼ご飯、茶葉の感触やにおいなど、忘れることのできないものとなりました。また平木様には茶作り以外でも、駅、笹川までの送迎や、らくち〜のにも連れて行っていただきました。大変感謝しております。お茶作りに人手が必要な際は、是非また呼んでいただけたらと思います。

至らない点もあるかとは思いますが、こうして無事に調査を終えることができたのは、バタバタ茶に関わるたくさんの方々のご協力のおかげだと思っています。今回の調査では、普通に過ごしては絶対にできないであろうことをたくさん体験させていただきました。すべて、私の一生の宝物です。この場を借りて皆様に心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

- 『民俗資料選集 12 振茶の習俗』漆間元三（財団法人 国土地理協会、1982）
『仏教民俗 バタバタ茶』清原爲芳（清原爲芳、2001）

9. 笹川の地神信仰のあり方と役割

東福寺 薫

はじめに

朝日町の笹川を歩くと、道路の脇や畑の隅に石で造られた塔や祠のようなものが見られる。それは「地神^{ちじん}¹³」と呼ばれる神様だった。昨今信仰心が薄れてきている中で、いまだいたるところに地神のような神様が残っていることに驚き興味を持ち、元より信仰にも関心があったため、私は地神を調査対象にすることを決めた。

本章では最初に、一般的・全国的な地神信仰について述べたのち、笹川の地神のあり方、特徴について、(1)地神に参る時期、(2)参る人の範囲、(3)お供えするもの (4)日常生活における地神信仰の位置づけ、主にこれら4点に着目して、笹川にある各一族の地神がどのような役割を果たしているのか、笹川の人々が地神に対してどのような意識を持っているのかを私なりに考察していきたいと思う。

1. 調査地の概要

調査地域である笹川は、JR 北陸本線泊駅から南東へ直線距離で3 kmほど入ったところにある山間の村である。村の中央には、標高1042.4mの黒菱山^{くろびしやま}を源流とする笹川が流れている。山々に囲まれた非常に自然豊かな村である。村には、1182年(寿永元年)に信州の諏訪大社の分祀社として建立されたといわれる笹川諏訪神社や真宗大谷派の寺院である正覚寺がある。

人口は平成24年6月時点で323名、うち男性164名、女性159名、世帯数は128戸である。笹川は、主に7つの苗字のいずれかを持つ村民から構成されている。7つの苗字を持つ村民については、信仰を記述する際に詳しく述べることにする。村内では今も屋号が使われており、下の名前では通じなくても、屋号を使えば通じることの方が多い。笹川は上流から下流に向かって、表向き(神向き)、中向き、裏向きと大別されるが、その表向きには折谷氏と小林氏一族、中向きには長井氏と勝田氏一族、裏向きには竹内氏と堀内氏、深松氏一族が中心となって住んでいる(図1)。

¹³地神の表記および読み方について、どの文献でも「地神」という表記は一律であるが、その読み方は、「ヂシン」であったり「ヂジン」であったり、さまざまである。ここでは「地神」の表記を、主に現地の人々の間で使われている「ヂジン」という読み方に則ろうと思う。

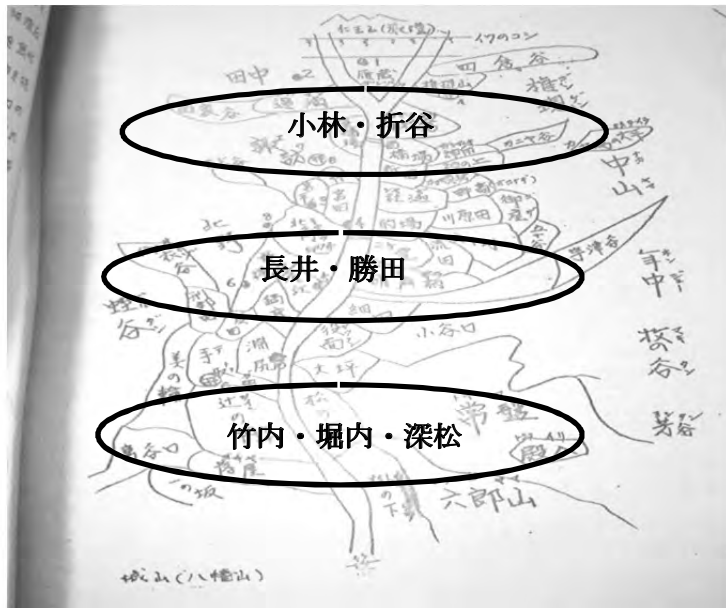


図 1. 各氏族の主な居住地

2. 地神信仰の概要

ここでは、地神とはいったいどのようなものなのか、以下で概要を説明したいと思う。

2-1. 全国に伝わる地神信仰について

地神というのはそれぞれの土地での呼称であり、学術的な名称は屋敷神である。一般的に屋敷神の定義は「個人の宅地の一隅、あるいはこれに接続した小区画、もしくはやや離れた持ち山の山林など屋敷の付属地に祀られている神社であり、家族が祭祀する私祭の神社」とされる(直江廣治、1987年)。

屋敷神の呼称は実に多岐にわたり、(1)ウチガミ・ウヂガミ(東北地方一帯から北関東)、(2)チヂン・ヂノカミ・ヂヌシ(中部日本から関東地方・九州を除く東日本)、(3)コウジン(岡山県・島根県)、(4)イワイジン・イワイガミ(祝神)・イワイデン(祝殿)(信州を中心に甲州および兵庫県)、(5)マツリガミ(愛媛県の南・北宇和郡から高知県)、(6)チンジュ(鎮守)(全国的に点々と)、(7)ダイジョゴ・ダイジゴ(福井県の三方郡から敦賀郡)、(8)小一郎ガミ(大分県の国東半島を中心に宇佐・大分の両郡・熊本県の肥後地方)、(9)祭神名によって呼ぶもの(稻荷・神明・祇園・熊野・天王・白山・愛宕・秋葉・八幡・天白・若宮・不動・山ノ神など)というものがある。つまり、屋敷神信仰は全国的に存在する。

屋敷神の神格について、一般神・自然神¹⁴を祀るとする土地も多いが、祖先神を祀るとする土地もある。また、家代々の死者が屋敷神になる、としている土地があつたりと、その神の性格や祀

¹⁴ 自然現象や事物を特別な力を備えた存在として崇拝し神格化したもの。例えば風神や雷神。

り方はまちまちである。

祭祀者の範囲について注目したとき、次のような 3 つの類型が指摘できる。(1)部落内の各戸に祀られている「各戸屋敷神」、(2)特定の旧家に限って祀られている「本家屋敷神」、(3)本家の屋敷神を同族が一体となって祀っている「一門屋敷神」である。以上の 3 つの類型は全国的な規模で分布している(直江廣治、1987 年)。

2-2. 笹川の地神信仰について

笹川の地神について、一族で 1 つ地神を祀っており、上の(3)本家の屋敷神を同族が一体となって祀っている「一門屋敷神」の形式をとっている。祀る場所は、7 家とも屋敷の隅か、背戸¹⁵山際にあって、その傍には巨木が植えられている。

2-3. 五輪塔とは

一族の地神の中に「五輪塔」というものが頻繁に出てくる。仏教で、地・水・火・風・空を五大主要元素、すなわち五大と呼ぶ。五輪塔はその五大を、下から角形の地輪、球形の水輪、笠形の火輪、花形の風輪、宝珠形の空輪を積み重ねて仏としたものである。時代が下ると、五輪塔は浮彫りの板石五輪や、本尊の梵字(大日如来)だけを刻む板碑となった(岩波仏教辞典、1989 年)。

3. 各一族の地神

ここでは、各一族の持つ地神について詳しく見ていこうと思う。

3-1. 笹川の開拓者 7 人の同苗について

笹川を開拓したと伝えられる 7 家を「7 人の同苗」という。初めに土地に入って居住したのが「亮」と「佐衛門」の二人である。二人は土地の領有を定めた境界を仕切が谷と名付け、これをのちにシギヤラ谷と呼んだ。亮は仕切が谷の北に住み、佐衛門は南に住んだ。佐衛門は佐渡から来たため自分の住む地を佐渡谷と名付けた。続いて 3 番目に「三郎佐衛門」、4 番目に「與兵衛」、「五郎右衛門」、6 番目に「六郎右衛門」、7 番目に「七郎佐衛門」が村に来た。これら 7 人が入村した時期は正確には不明であるが、亮と佐衛門の居住後、保元(1156 年~1158 年)・平治(1159 年)の頃にのちの 5 人が村に入ったのではないかと推測されている(笹川村学友会、1941)。亮は竹内氏の祖先、佐衛門は長井氏の祖先、三郎佐衛門は小林氏の祖先、與兵衛は堀内氏の祖先、五郎右衛門は深松氏の祖先、六郎右衛門は折谷氏の祖先、七郎佐衛門は宇津氏の祖先とされる。現在宇津氏は笹川には住んでいないが、系図を見ると宇津氏から勝田氏が出ている。現在中向きに住んでいる勝田氏が宇津氏から出たという説は有力だと思われる。

ちなみに、入村した順番によって各一族の権威が違うということはない。

¹⁵ 家の裏口、または裏手。

3-2. 折谷家の地神

現在折谷家には明確に「地神」と言われているものはないようである。以前は表向きに位置する「雁蔵^{がんぞう}」地区にあったと言われる。「前、上の方(雁蔵)に地神があるっていうから調べたことはありましたけどねえ。半日かけて大変な思いをして探したけれど見つからなかったねえ。折谷家は2つの系統に分かれていて、うちともう1つなだけけど、そのもう1つの家は絶えてしましましてね。その家があったところを見ても、(地神は)見当たりませんよ」とのことだ。

地神を持っていた家が絶えてしまうと、地神に参る人もいなくなり、行方も分からなくなってしまうということだろう。「地神と言うのは、(笹川の)開祖の墓かもしれないし、その開祖が石の仏様みたいなものを自分達の守り神として祀ったかもしれないし、(地神に対して)いろんな説があって、地神というものがいったいなんなのか、よく分からないのですよ。ただ、私は五輪塔を地神ではないと思っています。五輪塔は鎌倉時代のもので、地神はそれよりもっと前のもの」と語る。男性は、自宅の庭にある五輪塔と石の仏様を見せ、「これは五輪塔(写真1)。こっちは顔みたいに見えるでしょう(写真2)。昔の人はこんなような仏様みたいな石を神として祀っていたんじゃないかと思っています(以上全て70代男性)」と語った。



写真1. 庭先の五輪塔



写真2. 人のように見える石

3-3. 小林家の地神

小林家の地神は、表向きの「田中」地区に存在する。舗装されていない細い道を上った小高い丘の上にあるため、参るのが少々大変である。地神は五輪塔3基(写真3)で、周りには大きな杉の木が植えられている。地神が建ったのは、鎌倉～室町時代にかけてだと言われているが、定かではない。

小林氏の地神を管理している人に話を聞いた。まず参る時期や参る人々の範囲について、「参る時期は主にお盆で、普段参ることはあまりない。富山市に住んでいる息子や孫は、笹川に来たときだけ参るよ。昔から自分たち以外の一族の人が参っているというのも聞かないなあ」との語りを得た。お供えするものについて、「お花、お線香、ろうそくかな。場所が場所だけに、猿に

荒らされてしまうので食べ物はお供えしていないよ。お供えするものとか、とくに誰かに教わったとかではなくて、見よう見まね。小学生時代に親に連れられて何をお供えしていたか見ていたから」と語った。

周囲の人々の意識や、地神についてどのような意識をもっているのか、また今後についてなど心配なことはあるのかを尋ねたところ、「息子(50代)は地神についてあまり重要だとは思っていないみたいだ。粗末にすると罰が当たるとは言っているけれども。地神の周りの杉の木も大きくなった。私が中学生のときはまだ背丈も低かったけれど、今ではこれでもかというほどの大きさ。地神を参るにもちょっとした山道を通らなければならなくて大変だけれど、土地神だし安易に動かさない。それともしこの土地が他の人に渡ってしまったら、地神はどうなるのか？(以上全て70代後半男性)」と心配している。



写真 3. 小林家の地神

3-4. 勝田家の地神

勝田家の地神は、中向きの「北角地」地区、管理している人の住居から少し上がって、道路に面したところに存在する。道路になる以前は、雑木林であつたらしく、楓、紅葉などが地神の周囲に植えてあつた。地神は五輪塔 2 基と石の祠(写真 4、5)である。五輪塔が建ったのは室町時代とされている。うち 1 つは古くなって新しく作り直したもので、大きい五輪塔がその作り直したものの、小さい五輪塔が古いものだという説もある。作り直したのがいつ頃の出来事なのかは不明である。石の祠が作られたのは「おじいちゃんの曾祖母の代にできた」と聞かされている(富山市在住 40 代男性)」とのことから、150~200 年ほど前のことと思われる。また、その石の祠の中には梅の木で作られた天神様(菅原道真)が祀られている(写真 6)。この天神様は地神信仰とは関係のないものだが、「一緒に祀って少しでも権威が高まればいいと思って(70 代男性)」ということで、石の祠の中に祀っているそうである。またある方は、「勝田家の地神の石の祠の中に新鎌の地神が入っているのを見たことがあるような気がするな。地藏様みたいな石でできたのが(70 代男性)」

と語った。この新鎌の地神というのは、後に記すが、竹内家の地神のことである。五輪塔と石の祠は、そのままだと風化してボロボロになってしまうということで、現在管理している家の者がゴム素材のものでコーティングし、壊れないように保護されている(写真 7)。

参る時期や参る人々の範囲について、勝田家の方に尋ねたところ、「お参りをするのは、大体お正月とお盆。お供えするものは、御神酒とか自分の家で作ったお餅とか^{さかき}榊の葉っぱ。お花はあんまりあげないねえ。あと、何か作ったら御仏壇にお供えしたりするでしょ？ あんな感じに何か料理を作ったら地神にお供えしたりするよ。笹川には他の土地から嫁いできて、地神があるってこともそこで初めて知ったんだけど、嫁いでくる前から御仏壇にお供えしたりする習慣はあったし、地神にお供えをすることも当然やるものだと思っていた。特別に教えられなくても見ていればできたから、地神のことで苦労したことはないよ(70 代女性)」という語りを得た。

地神のおかげで助かったとか、何か良いことがあったというようなエピソードはあるかと尋ねると、「20 年くらい前、免許を取って車に乗り出して間もないころ。地神が建っているところに少し崖になっているところがあるでしょ。あの辺で車をバッグさせようとしたらハンドル切り損ねて崖の下の方の畑の方に車ごと落っこちそうになったんだけど、思わず『地神様、助けてー！』って言ったら、地神のところちょうど引っかかってコトンって止まったの。崖の下に落ちずに済んだ。見に来た保険会社か何かの人も『うまい具合にはまりましたね~』って感心していた。私は『地神様が助けてくれたんだ』と思っている。それから車で出かけるときは地神に手を合わせてから行くんだよ(前出 70 代女性)」と語った。また、「地神の話はおじいちゃんからよく聞いていた。『地神の場所を動かしてはいけないよ』とは言われていたなあ。小学校低学年くらいのときは、地神のことを(私たちが普段参るような)お墓だと思っていたなあ。私が地神のおかげで助かったとかいうようなエピソードはとくに思いつかないけれど、おじいちゃんは『戦争でシベリアに行っていた自分が無事に帰ってこられたのは、地神のおかげだと思っている』と語っていたよ(前出 40 代男性)」という語りも得た。

地神について何か心配なことなどはあるかと聞くと、「これから(世の中の動きや自分たちの家が)どうなっていくかは分からないけれど、やっぱり地神をお参りする習慣は途絶えてほしくない。車のことで助けてもらったこともあるし、思い入れがあるから.....(前出 70 代女性)」と語った。



写真 4.5. 勝田家の地神(全体図)



写真 6. 石の祠の中にある天神様



写真 7. コーティングされた五輪塔

3-5. 長井家の地神

長井家の地神は、中向きの「宮 平」地区、地神を管理している人の畑のすぐそばにある。住居ともさほど離れていない。現在は地神の周囲に木や切株は見当たらないが、60 年ほど前は杉の木が株があった。地神は五輪塔 1 基と、右手に蔵の鍵、左手におにぎりを持って両手をあげた百姓の姿の石像 1 基からなる(写真 8、9、10)。これは長井家の方(80 代女性)の話で、他の人は「いや、あれは蔵の鍵じゃなくて、草刈りの鎌だ」と言っていたり、「右手に草刈り鎌を左手に玉をもって……(宮崎村誌編集委員会、1954)」のような記述もあったりするため、どれが真実なのか定かではない。地神が百姓の姿であることから、米俵を入れておく蔵の鍵とその米を使ったおにぎりを持っていると考えれば、しっくりくる気もするが、写真を見ると草刈りの鎌と玉の方が、形は近いように思う。

地神が建ったのは、南北朝から室町時代だと言われている。写真のとおり、石の扉は新しく作ったもので、以前は木製の格子戸の向こうに地神が隠れていた。普段は、格子戸の替わりにつけられた石の扉の向こうに地神は隠れている(写真 8)。

地神に参る時期および参る人々の範囲について尋ねると「お盆と春祭り¹⁶と秋祭り¹⁷と山祭り¹⁸かな。基本的に地神に参るのは、(地神を)祀っている長井の本家と分家の人ということだけど、昔は分家のお年寄りも参ってお賽銭をあげていたりしたけれど、今はあんまり(長井家の分家の人間は参らず、本家の人間くらいしか参らない)ね(前出 80 代女性)」との語りを得た。またある人は、「本家と分家の付き合いもあんまりないし、分家になればなるほど(地神に対する)意識はあんまりないねえ(70 代後半男性)」と語った。そして、地神にお供えするものを尋ねると「御神酒、御鏡、たまにお花かな。そういうのをお供えするのは、だいたい私(前出 80 代女性)」と答えた。

¹⁶ 以前は、3 月 12 日におこなわれていたが、現在は 4 月第 3 土曜日におこなわれている。

¹⁷ 以前は、8 月 27 日におこなわれていたが、現在は 8 月第 3 土曜日におこなわれている。

¹⁸ 2 月 9 日におこなわれている。



写真 8. 長井家の地神(普段の姿)



写真 9. 扉を開けた様子



写真 10. 百姓姿の石像

地神のおかげで助かったとか、何か良いことがあったというようなエピソードはあるかと尋ねると、「長井家にとって地神は心の拠り所みたいなもん。私はバイクで家を出るとき、必ず地神にお参りする。信仰が 1 番あついのは息子(東京在住 60 代男性)。じいちゃんの影響じゃないかなあと思っているけれど、『笹川史稿』もよく読んでいたし。研究に行き詰ったり、(息子さんの)奥さんが体調を崩したりして、地神にお参りすると良い方向に道が開けるって言っていて、そんな風に思っているとは思わなくてびっくりした(前出 80 代女性)」と語った。

地神様について今後気がかりなことはあるかを尋ねたところ、「(地神は)石(の祠)に入っているし、息子も地神に興味があるみたいだし、少なくとも息子の代までは続いて、途絶えることはな

いんじゃないかと思っている。じいちゃんに大事にしろって仕込まれているから。たとえ途絶えたとして、他の身内(長井の分家)に地神を託すっていうことはあんまり考えたことはないかな。地神を守っていかなければならないっていう責任があつてちょっと重くも感じるけれどね(前出 80 代女性)」と、少し笑って語った。地神を少し重く感じているということは、それだけ地神が長井家を守る神として、大きな存在であるということだろう。

3-6. 竹内家の地神

竹内家の地神は、裏向きの「尻江」^{しりえ}地区、県道 102 号線に面したところにある。そのため、他の地神のなかで最も分かりやすい場所に地神が建っていると言える。

ただ、これまで竹内家の「地神」と述べてきたが、結論からいうと、これは「地神」ではない、という(ただし便宜上、地神と呼ぶことにする)。五輪塔等の集合体と、五輪塔が並んでいるが(写真 11)、実はもう 1 つ隣に現代風の墓が並んでいる。道路ができる以前(45, 6 年前)は、五輪塔 3 つの墓だった。道路を作るにあたり、墓を現在の位置にずらしたり、最近になって新しく墓を作りなおしたのである。現在地神とされている 1 番左側のもの(写真 12)は、村の人が様々な場所から拾ってきて自然と集まったものである。五輪塔以外の自然の石なども、家に置いておいたら不幸なことばかり起こるので、ここに集めたい。どうやらあまり関係のないもののようなのだ。そして、そこには笹川村と地神に関する説明が記された看板が建っている(写真 13)。

では、本物の地神はどうなったのか。民話をまじえて、説明したい。その民話とは「やんちゃもん^{へいべえ}平兵衛」というもので、内容は以下のとおりである。

「昔、笹川に平兵衛というやんちゃもんがおったそうである。『太陽が東から出る』といえば『西から出る』と押し通すほどだったから、村のおやっさま²⁰たちにたてついたり、村の風習などにはことごと反対した。力は強く暴力もふるうので、村では寄りつく者もない鼻つまみ者だったそうである。—中略—さしものやんちゃもん平兵衛にも、とうとう寿命がきて、八月のある日息をひきとった。村の火葬場でもやされたが、よく朝、家のもんが骨を拾いにいくと、骨のかけらも灰もなくなっていたそうである。地獄から来て、骨をみんな持っていったちゅうことである。それから、平兵衛のことを『平兵衛新釜(地獄の新しい釜)』というようになったということである(笹川の民話 原文ママ)。」

これが、「やんちゃもん平兵衛」のおおまかな内容である。この平兵衛というのは、およそ 300 年前、泊から竹内家に婿養子に來た人である。民話のとおり、平兵衛はそうとうな乱暴者であつたらしく、桑の木に座って鎌を持っては、薪を海の方で魚と交換してきた人々から盗っていたという話もある。民話の中では「新釜」となっているが、「新鎌」ではないかとも考えられる。『新しい鎌ほど良く切れる』から『平兵衛新鎌』(よそから新しく村へやってきた平兵衛が頭のよくきれる者であつた)っていうんだ(70 代男性)」という話もあるため、以降「アラガマ」の表記を「新鎌」とすることにす。また、平兵衛は竹内家にまつわる大切な文書を燃やしてしまい、現在竹内家の本家がどこなのか分からない。これは平兵衛が村の貧富の差をなくそうとしたため

¹⁹ やんちゃもんとは、①横暴者②粗暴者のことである。

²⁰ 村の顔役のことをさす。

ある。竹内^{はちじゅうろう}八十郎、又^{またえもん}右衛門、新^{しんざえもん}左衛門のどこかが竹内家の総本家であると言われていて、今、八十郎が本家であるとされているが、文書が消えてしまったため、実際は定かではない。「本物の地神は平兵衛新鎌が持っていたんだけど、もう家が絶えてしまったから、(本物の地神が)どうなってしまったのかわからない。昔は(今の地神がある場所より)もっと上の方(表向き)にあったんじゃないかなあ。今地神だって言われているのは普通のお墓。地神を持っている他の家は、地神の他にご先祖様のお墓を持っているけれど、うちはこれだけ。今のお墓(地神)がいつできたのかもわからないねえ。私が聞いているのは、今お墓がある場所は死んだ新鎌の骨があったところだっていうこと。地神は戦で手柄をたてた家がもらえたっていうことも聞いたことがある(70代女性)」勝田家の地神の石の祠の中に新鎌の地神が入っているのを見たことがあるような気がするな。地蔵様みたいな石でできたのが(前出 70代男性)」と竹内家の地神の持ち主は語った。墓として参っているということで、「参るのはお彼岸とかお盆。お供えするものはお線香、ろうそく、お花。(地神の周りの)草を刈ったり、花あげたりするのも私(前出 70代女性)」と語った。つまり、元々は平兵衛が地神を持っていたが、家が絶えてしまって、その地神の行方ははっきりとは分からないということだ。現在竹内家の地神とされているものは本物の地神ではないのである。



写真 11. 竹内家の地神とされているもの



写真 12. 五輪塔、板石五輪などの集合体



写真 13. 看板

地神と五輪塔

深い山に囲まれ、激しい戦の絶えなかつた城山のふもと、笹川は祈りの村であった。

鎌倉時代から、特定の家（長井、竹内、折谷、小林、宇津、堀内、勝田の七氏）には、守護神として屋敷のすみやこれに続く山すそや河岸で祖先を祭る地神を持つようになった。

地神には、仏教でいう五大をあらわす五輪塔が建てられ、神の依代とし、叢林が育て守られて、一家の神聖な祭場となっていた。

五輪塔は下から角形の地輪、球形の水輪、笠形の火輪、花形の風輪、宝珠形の空輪を積み重ねて仏とぼん字（大日如来）だけを刻む板碑となつた。

この地神は竹内氏のもので、笹川の古い地神信仰遺跡の一つである。

看板の文

3-7. 深松家の地神

深松家の地神は、裏向きの「北野」地区にあり、電気柵を 1 つ越え、またもう 1 つ越えるとうまく到達できる。現在、深松家の地神はないのではないかという話も耳にしていたのだが、柵を外して見せていただけのことになった。かなりわかりにくい場所にあり、電気柵もあるため、自力で探すのは難しい。地神は、四角い土台に自然の石と五輪塔の 1 番上だと思われるものできている。いつ頃建ったものかは不明である。

地神を参る時期や参る人々の範囲について、「お盆だけお参りしている。普段は(地神を意識することは)あんまりないね。参るのも私ぐらい(70 代男性)」という語りや、「昔は母に連れられて参っていたけれど、今はもうしていない。誰も参らずに草だらけになっているんじゃないかな。(地神がある)場所は知っているけれどね(深松姓が身内にいた 80 代男性)」という語りを得た。やはり、どこの一族とも同様、地神の持ち主の家から遠くなってしまうと、お参りする機会もない

ようだ。地神にお供えするものは、ろうそく、線香、お花である。

地神が建っている場所に関して、次のような語りを得た。「今、地神として祀っているものは、地神でもあったし一族の墓でもあった。昭和 17、8 年頃のことかな。山崩れが起き、地神が崩れてしまった。墓でもあったわけだから、骨がいっぱい出てきたよ。山崩れがあつてから、正覚寺の裏に移したんだけど、20 年くらい前に、山崩れがあつた場所がコンクリートで固められて安全になったからまた地神を元あつた場所に戻したというわけ。この際だから、地神は地神、墓は墓で別々にしようと思って、先祖の墓を新しく作って、それは今正覚寺の裏にある(前出 70 代男性)」

地神様について今後気がかりなことはあるかを尋ねたところ、「深松家の守り神として、大事にしなくちゃいけないという気持ちはある。自分の子どもは、地神がある場所を知ってはいるけれど、自分がいなくなったら、お参りすることもなくなるんじゃないかと思っている(前出 70 代男性)」と心配していた。

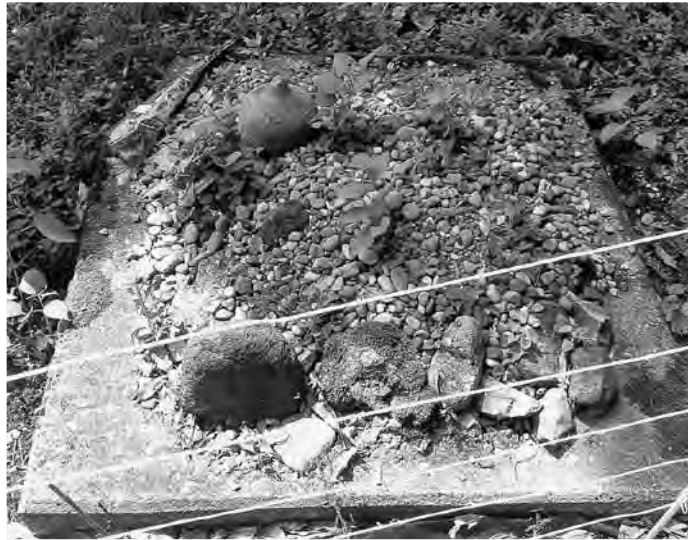


写真 14. 深松家の地神

3-8. 堀内氏の地神

堀内家の地神は、裏向きの「北野」地区にあったと言われている。堀内家の方に地神について尋ねてみたが、「今は本家が絶えて笹川から出て行ってしまったし、詳しいことは分からないなあ。家が絶えて地神もなくなったんじゃないかな(70代女性)」とのことである。堀内家の本家である堀内九郎兵衛氏の家だった場所の裏に、地神があったのではないかとされる箇所があった。地神のある場所は、たいてい屋敷の隅か背戸の山際だということで、この辺りにあったのではないということだが、はっきりしたことは分からなかった。



写真 15. 堀内九郎兵衛氏の家



写真 16. 地神があったと推測される場所

3-9. 宇津家の地神

現在、笹川に宇津姓の方は住んでおらず、詳細は不明である。宇津姓が勝田姓になったというが、宇津家の地神が勝田氏のものになったという話も聞かない。以前は裏向きの「宮田」にあったらしい。現在は竹藪となっていて、跡地のみである。正覚寺の裏にある墓地に移して、石碑だけが建っているとも言われているが、それらしきものは発見できなかった。

4. まとめと考察

以上のことをまとめて、地神への人々の意識について考察したいと思う。以下にそれぞれの項目について表 1 にまとめる。

表 1. 各氏族の地神

氏族名	折谷氏	小林氏	勝田氏	長井氏
建立時期	不明	鎌倉～室町時代	室町時代(石の祠は江戸時代？五輪塔の 1 つは建て直されたか、その時期は不明)	南北朝～室町時代
参る時期	不明	盆	正月、盆、車で外出時	盆、春祭り、秋祭り、山祭り、外出時
参る人の範囲	不明	管理する家	管理する家	管理する家
供えるもの	不明	花、線香、ろうそく	御神酒、餅、榊の葉、料理	御神酒、御鏡、花
氏族名	竹内氏	深松氏	堀内氏	宇津氏
建立時期	不明	不明	不明	不明
参る時期	彼岸、盆(お墓として)	盆	不明	不明
参る人の範囲	管理する家	管理する家	不明	不明
供えるもの	線香、ろうそく、花	線香、ろうそく、花	不明	不明

各一族で、地神の祀り方は様々である。地神の形から始まり、参る時期、供えるものなど、それぞれ似通っているところもあるが、皆思い思いに祀っている。

建立された時期は、室町時代付近というのが1番多い。石でできた地神は大分丸みを帯びている。参る時期については、どの一族も盆に参るというのは共通している。その他、正月であったり、祭りの時であったり、各一族参る時期はさまざまである。ただ、地神のみを祀るための祭りという日は、どこの一族にもない。勝田氏や長井氏のように、地神が比較的住居から近いところに祀られている家は、普段外出時に参ることも多いように感じる。

笹川の地神は一門屋敷神の形式をとるとされているが、地神を参る人々の範囲を見ると、どの一族も、一族で祀っているというよりは、地神を持つ本家でのみ祀っているという印象を受ける。「昔は分家の年寄りも参っていた」という語りもあり、以前は一族で参っていたこともあるようだが、現在では、分家は関わらないようだ。中には、本家が絶えてしまって、それと同時に地神の行方も分からないという一族もあり、本家が絶えて、村からいなくなってしまうと、地神が他の人にわたり受け継がれていくということもなさそうだ。

以上のことから、現在では一門屋敷神というよりも、特定の旧家に限って祀られている、本家屋敷神の形式の方がより近いものなのではないか。

供えるものについても、各一族さまざまだが、小林氏、竹内氏、深松氏は線香、ろうそく、花が共通しており、勝田氏、長井氏は御神酒のような口に入るものであることが共通している。前者3氏は地神が五輪塔の形式をとり、後者2氏は五輪塔に加え、石の祠や石像といった特殊なものが地神であることが何か供えるものに関係しているのかと考えた。

話を聞くうちに地神が何を祀っているものなのかについても、様々な説があるということが分かった。笹川の開祖の墓であるとも、開祖が自分達の守り神として祀ったものだとも、その土地を守るものだとも言われ、地神の定義は非常に曖昧である。個人主義化が進んだ現代では、一族という意識は薄れ、地神を一族のものではなく、本家のものと考えようになったのではないか。

「笹川では『一村一家』といって、村を笹川という1つの家族と捉えている考え方があるけれど、どんどん薄れていっている」という話もある。地神を持つ人の中には、「子どもが村には住んでいない」という人も多い。「自分がいなくなったら地神はどうなるのだろう」という声が多く聞かれた。「思い入れもあるし、お参りする習慣はなくなってほしくない」「自分達の守り神だから」という語りもあった。地神を今ある場所から笹川以外の場所へ移す、という可能性は低いと、もし村で受け継ぐものがいなくなってしまうと、地神も絶えてしまうかもしれない。本来は別々のことではあるが、家を継ぐということと、地神信仰の継承は関連してくるのではないか。

謝辞

最後に、今回笹川で調査するにあたり、協力していただいた方々に感謝の言葉を記したい。突然の訪問、幾度にもわたる訪問にもかかわらず、嫌な顔をせず私を温かく歓迎してくださり、話を聞かせてくださった方々、「あの人なら知っているんじゃないか」と教えてくださったり、忙しい中その方のお宅にまでわざわざ連れて行ってくくださった方々、貴重な資料を貸してくださった方々、本当にお世話になりました。話を聞かせていただくたびに、「お茶でも飲んでかれ」「このお菓子持ってかれ」と様々なおもてなしをしていただいた方もいらっしゃる、申し訳なさと同時にありがたさもありました。感謝してもしきれない次第です。無事調査を終えることができたのも、皆様の協力あってのことだと改めて感じています。こうして皆様と調査を通して出逢い、交流ができ、皆様の温かさに触れられたことを本当にうれしく思います。笹川の皆様のますますの発展を祈っております。本当にありがとうございました。

参考文献

笹川村学友会、1941 年、『笹川史稿』

竹田聰洲、1957 年、『祖先崇拜』

宮崎村誌編纂委員会、1954 年、『宮崎村の歴史と生活—船と石垣の村—』

直江寛治、1987 年、『民間信仰の比較研究』

笹川小学校閉校時記念誌編集委員会、1994 年、『さゝ郷の流れとともに』

笹川青年団獅子舞研究委員会、1970 年、『溪谷の村 笹川の獅子舞』

朝日町、1984 年、『朝日町誌—文化編—』

中村元 福永光司 田村芳朗 今野達 編、1989 年、『岩波 仏教辞典』

笹川の民話

10. 限界集落 朝日町^{だいら}大平における生活

阿知波 理子

はじめに

朝日町の大平という地域は、過疎化が進み住民が十数人という限界集落²¹である(図 1)。初めてこの場所を訪れた時、筆者は大平の小ささ、人口の少なさに驚いた。先に訪れていた笹川などでも集落の小ささに驚かされたものの、大平はその比ではないほどに小さいのである。郵便局や商店などもなく、家と畑からなり、川と山に囲まれた集落だ。初めて訪れたのは6月の祭りの時であったが、「祭り」という大勢の人が集まる時でさえ、そこにいる人の数は数えることが可能なほどであった。

家に帰って“大平”とインターネットで検索してみると、驚いたことに1件もひっかからなかった。『朝日町史』などを調べてみてもその名前が出てくることはなく、私はそんな、公的書物に名前さえ載っていない場所に深い興味をひかれた。そしてそのような場所で人々は何を思っ、どのように暮らしているのかに大きな興味を抱いた。

本報告では初めに大平の概要に触れたあと、現在の大平の住民の生活、大平の過疎化、大平のコミュニティについて報告しそれぞれにおける考察を述べ、最終的に大平という地域について考察したい。



図 1. 朝日町の中の大平の位置

²¹ ここでは限界集落を「過疎などによって、65 歳以上の高齢者の割合が 50 パーセントを超えるようになった集落」(大辞泉)のこととする。

1. 大平の概要

1-1. 現在の大平

大平は、図 1 でわかるとおり朝日町の東端、新潟県との県境を流れる境川沿いに位置している。集落はとても小さく、歩いて見て回っても 10 分ほどの時間があればすべてを見ることができる(図 2)。山に囲まれた集落で日が隠れるのが早く、気温も低い。

人口は 2012 年(平成 24 年)時点で 15 名(うち男性 4 名、女性 11 名)の 13 世帯である。このうち一人は泊にある家で過ごすことが多いため、実質毎日大平にいるのは 14 名である。また超高齢化社会であり、1 人を除いた住民全員 70 歳以上である。

公共施設として存在するのは公民館と消防団第六分団所のみである。集落内には十二社の神社が一つあり、また公民館の奥が寺を兼ねている。この公民館は水力発電施設周辺地域交付金により 2002 年(平成 14 年)に建設された比較的新しいものである。元々寺があった場所に公民館が建てられ、その名残としてお寺が公民館の中に併設される形となった。公共交通機関としては、町営のバスが週に 2 回、月曜日と木曜日の午前中に 3 本ずつ来るのみである。しかしこのバスは雪が降り始めると運行を休止することから 12 月の初め頃から春先までの運行はない。その他にも住民は、JA から週 2 回、火曜日と金曜日のバスも使用しているが、このバスは JA までの専用バスである。

1-2. 大平の歴史

もともと、大平は源平合戦の際、倶利伽羅峠^{くりから}の戦いにおいて敗れた落ち武者が平家復興までの隠れ里として作った集落とされ、“大平”という名前は、平家の落ち武者であり初代里長の大良左エ間から大を、平家であることから平をとって名づけられたとされている。周辺にいくつかの集落があったと言われているが、洪水等によって今は大平以外の集落は無くなっている(『大平の長き若衆の旅路』/福平仁次郎)。

戦前までは炭焼き等の山仕事もしくは土方等で人々は生計を立ててきたが、戦後の出稼ぎによる男手不足、また高度経済成長期の化石エネルギーへの転換によってこの地に仕事がなくなっていったこと、洪水等の災害により家が流されたことなどで人口が少しずつ減っていった。戦後少したつと、大工等の職人になる人が増え、大平から出ていく人がますます増え過疎化の進展に拍車をかけた。その過疎化についてはあとに取り上げる。かつては境小学校の分校として 4 年生まで通う小学校が 1 つあったが、生徒がいなくなったことによりすでに取り壊されている。また、集落内に唯一あった商店は雑多な物を扱う店であったものの、店主が病に倒れたことにより無くなった。今でも建物と看板だけは残っているが、現在集落の中に 1 軒の商店もない状態である。

現在暮らしている人々が幼少だった戦前の頃は 60~70 軒ほどの家があったというので、当時は 300 人あるいはそれ以上の人口があったとみられる。つまり 20 分の 1 ほどに激減してきた。この 70 年ほどの間に極度に過疎化が進んできたことは間違いない。

1-3. 大平の住民

現在の大平の人口は1節1項のとおりであるが、話を聞くことのできた限り大平の住民は皆大平で生まれ大平で育った人々ばかりであった。男性の場合働きに出るために外の地域に住むこともあり、男女問わず戦時中に満州に行っていた人も数人いたようだが、生まれは大平の人ばかりで、女性は全員がそろって大平生まれ、大平育ちである。これは大平では集落内で婚姻関係を結ぶことが多かったためで、また女性の場合はよそに嫁げば出ていくのは当たり前であるし、昔は貰い手がない場合も集落を出ていくことが多かった、ということである。

2. 大平の生活

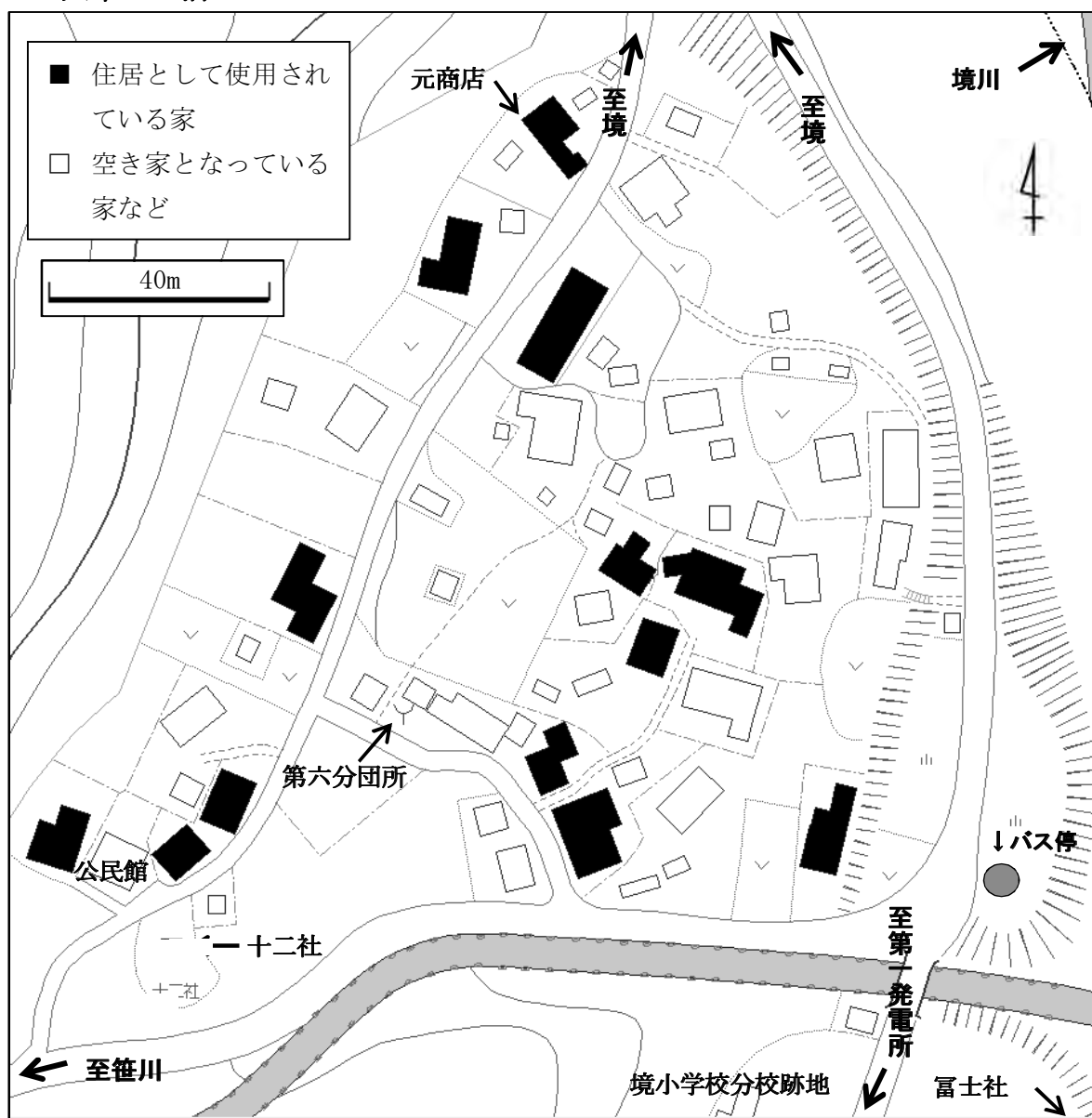


図 2. 大平集落地図(2012 年時点)

現在、この集落の人々の中で働きに出ているのは1名のみで、また集落内の役職についているのは区長のみである。その他の人々は皆年金暮らしとなっている。ほとんどの人は畑を持ちそこ

で野菜を作り暮らしている。基本的に集落を頻繁に出ることはなく、日々の生活は畑仕事をしたり、近所の人々と会話をしたりすることによって過ぎていく。週に2日ある町営のバスや農協のバスで買い物や病院に行き、時々やってくる子どもや孫を迎えることが暮らしのなかの主な出来事となっている。また、村の約半分の女性の間で「朝のお参り」が生活に組み込まれている。

冬には雪かきが大きな仕事となる。しかし豪雪地帯であることや、足腰を悪くしている人が多いため、独り暮らしの人々は泊の方から人を雇って、雪かきをしてもらうことが多いという。

大平を訪れる人は基本的に家族、親族が多く、例外として挙げられるのは郵便配達員や公共料金の集金員、もしくは解体工事などの業者である。

ここから大平における生活について詳しく見ていく。朝のお参りについては別項目で記述する。

2-1. おしゃべり

大平を尋ねると、家の軒先や畑仕事の道具が置かれている小屋などで、数人で座って会話を交わしている光景をよく見ることができる。大平の住民は、暇な時間に隣人を訪ねたり、畑仕事の合間に座って話したり、もしくは畑仕事をしながら話したりしている。

「(話をしたいときは)oooー、あーそーぼーって言えばいい」(70代女性)

「暇な時とか、気が向いたら話しに行って、忙しそうだったら帰ればいい」(80代女性)

このような語りを聞く事が出来た。

こうしたわけで、おしゃべりをしに家を訪ねるとき、事前に約束などをするのではないという。



写真 1. 集落内



写真 2. 畑

2-2. 畑仕事

生活の中で、大平の人々の中心に存在しているのは畑仕事である。数名を除いて、多くの人が一年を通しての期間、毎日の暮らしの中に畑仕事を組み込み生活している。

夏にはナス、ピーマン、キュウリ、冬には大根、白菜を主に作っている。また秋ごろには集落外にあるミョウガ畑にミョウガを取りに行くが、ミョウガは世話をして作るわけではなく自生しているものを採る、という形にしている。畑仕事をする時間を決めているわけではないが、春、秋は昼過ぎから、夏は涼しくなる時間帯である夕方に作業することが多いようである。

山に囲まれている地域のために、サルやイノシシ、ハクビシン等による被害は大きいようで、

後述する町内会の際には獣による被害はどうにかならないかという話が出た。

収穫した農作物は売り物にするわけではなく、あくまでも自分たちが食べるためであり、また子どもや親類に配るくらいのものである。ただ1人か2人で生活するためには作る作物の量がかかなり多いために、漬物等になっている場合が多い。たくさん取れるためか、筆者が訪れると大平の人々から「食べ切れないからもってけ」とその日とれたものを袋いっぱい貰う事が良くあった。

畑仕事についての話を聞いていた際に「暇つぶし」という語りを2,3人の人から聞く事が出来た。ある70代の女性は、「やることがないからやっているだけ」と語っていることから、畑仕事が大平の人々にとって、食料確保のためだけとは言い難い。

2-3. 買い物

現在の太平で車を所有している、もしくは所有者の配偶者であり車で町に出掛けられるのは5人のみである。それ以外の住民は週に2本でている町営のバスと、JAから出るバスで人々は他の地域に買い物、または病院に行く。こうしたバスで買ってくるのは主に肉や魚といった生もの、消費期限の短いもの等が主である。バスでの買い物について、このような語りを聞く事ができた。

「暇だし、買い物行こかてなる」(70代女性)

「魚や豆腐は買うけど、調味料なんかは買いためしてあるからめったに買わない。それにもしなくなっても、近所で借りられる」(80代女性)

この語りから、太平では近所での物の貸し借り等が当たり前におこなわれていることが分かる。

2-4. 客人の迎え

太平にやってくる人々の大半を占めるのが、住民の子や孫、親類といった縁者である。盆や正月に帰ってくる時以外、彼らは頼まれたものを届けたり、畑仕事を手伝ったりといった理由で太平に来ることが多い。

「俺も定年になってから時間できたしな、なるべく様子を見がてら母さんの畑手伝いにいこうかって思って来る」(男性60代/富山在住)

この語りから、交通手段が少ないこと、また高齢者が多い地域ならではの理由が伺える。

2-5. 考察

太平の人々は現役を引退している人が多いせいか、生活の流れに余裕があるように感じられた。しかし、それだけであれば他集落や都心部に暮らしている仕事を退職した人々と変わらない。

太平の生活と他の集落の生活との違いとして、全体を通してやはり高齢者が多いという点、また地域の交通の便が悪いことから買い物が満足にできず、他の集落では少なくなった貸し借りや、物を届けるためといった理由での里帰りがおこなわれていることが考えられる。

話の中で筆者はまず、太平の生活において、住民の「暇」という語りに注目した。2節2項、2節3項、2節4項において、すべての語りの中で「暇」という単語が出てくるのである。暇なときに、ちょうどバスが出る時間であるからおしゃべりをしにいく、暇だから畑仕事をする、暇

だから買い物にいく、というように、この単語が頻繁に登場する理由を考えると、やはり大平という地域の土地柄、娯楽が少ないことがあげられるだろう。

車を持っていないければ、バスの来る月曜日と木曜日にしか町には行けないし、バスの時間も午前中で終わるために午後まで町にすることができない。地域の中に気軽に楽しめるような施設もなく、また毎日のように来客がある訳ではない。こういった要素により、大平の住民はたくさんの空き時間ができる。この「暇」という語りに関して考えるのならば、おしゃべりにおいても畑仕事においてもどちらかと言えば会話を楽しむためであったり食料確保であったりというよりは、時間をつぶすためという意味が大きいのではないだろうか。しかしそれだけの理由で大変な農作業を毎日続けるというのは難しい。もともとは時間をつぶすという理由づけがあったのかもしれないが、現在まで続けられているのにはそこに「楽しい」という感情が存在するからではないだろうか。

大平を訪れるたびに、住民がそれぞれの生活を楽しんでいるように感じる。友人たちと話しているときに彼らの間にはよく笑い声が上がり、また作物を息子等に渡すときの顔はとても楽しそうであり、筆者がいただいたときもお礼を言うと嬉しそうに笑っていた。こういった友人や親類、子どもらとの関わりを生活の中で楽しんでいるというのも、間違いないだろう。

3. 過疎化

1 節 2 項で挙げた過疎化についてここから記述する。

前の節で説明したとおり、現在の大平において、過疎は続く一方であり避けられない現実でもある。多々ある過疎化集落のなかでも大平は過疎化の進みが激しく、極端な限界集落であるといえる。大平においては 65 歳以上の人口の割合が 90 パーセントを超えている。ここでは、大平の過疎化について、現住民、元住人から話を聞いた。

3-1. 住民の語り

大平に現在住んでいる人々に過疎化について尋ねた際に、このような語りを聞く事ができた。

「あと 2,3 年したらみんななくなるわ」(80 代女性)

「(出て行った人が)戻ってきてくれたっていいことないわ」(70 代女性)

「家も古いし、交通の便もない」(70 代男性)

「仕事なんてない」(70 代女性)

「亡くなった旦那の墓は、息子の住んでいる土地に作った。こっちだと世話できないし、いずれはそこに入るつもりだ」(70 代女性)

この様に、返ってくる意見は、過疎化を是とはしないが、非ともしない言葉ばかりであった。語りの 1 つに、墓を大平ではなく息子の住んでいる土地に作った、というものがあつたが、これはこの女性だけに限ったことではなく、大平では半分ほどの人が既に墓を子どものいる土地に移しているという。

3-2. 元住民の語り

大平で調査しているときに、何人かの集落の外の人が大平を訪れていることがあった。彼らのほとんどは中学校を卒業すると同時に大平を出ていった人である。そうした人々は大平の過疎についてどう考えているのか。筆者が大平を訪れていた際に出会えたのは数名であったが、彼らからも話を聞くことができた。

母親が大平に住んでいる男性(60代)は現在富山市に住んでいるが、畑の手伝いなどをしに時々大平に戻ってくる。彼は「戻ってくるのは無理だ。町に慣れているし、ここは交通の便が悪い」と語った。

15歳で大平を出て、それから1度も大平に住んではいないという男性(60代)はこう語る。

「自然も綺麗だから好きだが、戻って来たって仕事もない。よそにいつて暮らしたら、戻ってきたい人はいないだろう。大平は静かで、落ち着くしゆっくりできる。けれど、静かすぎる。1回よそにいつてきたら、ここに住めやしない」

しかし、その後彼はこうも語った。

「もしも戻ってくるとしたら、5,6年して引退したら、家を建てるかもしれない」

この語りから、集落の住民が挙げた交通の便が悪い、仕事がないこと以外の理由が1つ出てきた。戻ってきたい、と願う人がいたとしても、家がないということが分かる。大平では、多くの家がすでに潰されて畑となっている。この男性が幼少期に暮らした家も今は無くなり、男性の従姉の畑になっている。また現存する空き家は古くいつ崩れてもおかしくないものばかりとなってしまうっており、そこに住むことは難しい。こうした現実も、交通の便や仕事が無いこと加えて、大平への戻りにくさを助長しているといっても過言ではない。

3-3. 村を出て町に住むことについて

過疎化については上記のような意見が多かったために、今度は交通の便もよく仕事もある町に住むことはないのかを尋ねた。するとこれに対しても似たような意見が多かった。

「息子が町におり、一緒に住まないかと呼んでくれてもいる。けれど、行きたくない。行った人はぼけてしまう。大平から町に行った人の話を聞いたことがあるが、「おはよう」「おやすみなさい」しか会話がなかったと言っていた」(70代女性)

「息子は訪ねる度に(自分と一緒に)住めと言ってくれる。けれども住みたくない。知らない人ばかりだし、(大平には)畑もある」(80代女性)

ほとんどの人が、町に行きたくないという意見であった。後期高齢者が多いために、子どもから心配されることが多いというが、住民の中には町に行くとボケてしまう、という認識が共通しているように見受けられた。それと同時に、自分が野菜を育てている畑を理由に行かないという意見も多かった。

3-4. 考察

人数が少なく、1人の考えがすぐに集落の中に伝わるためか、それとも大平で暮らした経験として共通しているためなのかはわからないが、住民の考えが似通っているように見受けられた。

大平から出ていきたくないという意見の中で多くの人が語ったのが「ボケたくないから」というのを窺わせることと「畑があるから」ということであった。町は大平と違い近所でも顔見知りでないことや大平の住民同士であるようなおしゃべりを楽しむことができないこと、畑仕事などのやることもなくなってしまうことが、彼らに「ボケたくないから」と語らせたのだろう。「畑があるから」という理由は、住民が畑を重要視していることを伺える。3節5項で記述したとおり、畑は昔から代々引き継いでいるわけではなく、住民はその土地を耕すことを大切にしているのではないだろう。畑を重要視する理由は、2節5項でも述べたように、住民が畑仕事を「楽しい」と感じていること、またそれを失ってまで町に行きたくはないと思わせるような「生きがい」を畑仕事に見出しているということがあげられるのではないだろうか。

過疎化することに対して、筆者自身は嘆きの言葉が多いのではないかと考えていたのだがそのようなこともなく、どちらかといえば過疎が進むことを既に受け入れているようでもあった。活気にあふれてほしいだとか、人々に戻ってきてほしいといった意見の前に、戻ってくることが不可能である、どうせ戻ってこないだろう、という心境が感じられた。

この心境を表すかのような、このような語りも聞く事ができた。

「東日本であった震災のように、都会がどうにかなるでもない限り、戻ってくる人はいないだろう」(70代女性)

4. 大平のコミュニティ

大平村はその面積の小ささ、人口の少なさから地区住民全員が顔見知りである。また、今大平に暮らす人々は生まれが大平の人ばかりのために、半世紀を超えた長い付き合いの人々である。その大平村の中には、どのようなコミュニティが存在しているのだろうか。筆者はコミュニティとして小さいものから順に、夫婦、隣家、親戚・兄弟、朝のお参り、住民全体で集まる機会の5つの項目にわけて考えた。

以下でそれぞれを詳しく説明していく。

4-1. 夫婦

大平に暮らす13世帯のうち、夫婦が揃っているのは2世帯のみである。一組は畑仕事等、夫婦共同での作業が多いが、もう一組は2012年(平成24年)時点で夫が区長を務めていることもあり、畑とともに仕事をしている姿はあまり見られない。

4-2. 隣人

畑仕事の合間や、朝方の暇な時間には“距離の近さ”を目安に会話がおこなわれることが多い。畑に出ていない時間帯は家が隣であるから、そこに遊びに行く、という形がとられることが多いようだが、畑仕事をしている合間の休憩時間などのときは場合は、畑が隣どうしの人と話したり、自分の畑の目の前にある家の人の軒先で話したり、という光景がよく見られる。2節1項で記述した語りのように、気軽な付き合いをしている。

4-3. 親戚、兄弟

大平は小さな集落であるために、少し遡れば親戚であったり、もしくは従兄弟や兄弟であったりすることも少なくない。しかし集落自体が小さくコミュニティが小さいために、集落内全員が顔見知りであり、親戚であるという理由だけで集まることは現在無いように思われる。むしろ多くが親戚や兄弟と変わらない頻度で会っているために、血のつながりを理由に親しくする必要は無いようである。

4-4. 朝のお参り

2節でもとりあげた朝のお参りについて、ここで詳しく説明する。

大平では、朝方に未亡人たちが公民館(写真3)に集まる。これは公民館に併設されている寺にお参りをするためであり、春から秋にかけては7時前に集まり、冬になると日照時間に合わせて遅い時間に集まる。集まった人たちは蠟燭に火を点けたり座布団を敷いたりして準備をし、7時になると代表者がお坊さんの役をして20分ほど真宗の勤行集のお経を読み上げるのである。

この集まりはバスで病院に向かう人が多い木曜日を除いて毎朝おこなわれている。配偶者を亡くした人々がお参りをする、というもので、現在大平には未亡人が9人いるが、そのうち7,8人が集まっている。この集まりは強制ではないため、配偶者を亡くしてはいるが参加していない人も存在する。また、何か用事があったり客人が泊まりに来ていたりする場合などは毎朝参加している人でも何も言わずに欠席してかまわない。男女どちらでも参加して構わないものの、昔から女性の参加が多かったという。現在は女性のみ参加であり代表者は女性であるが、男性がいる場合は男性が代表者としてお坊さんの役目を果たすこととなっていた。

お参りが終わった後、彼女たちは各々好きに会話をして、情報を交換したりたわいもない話をしたりして楽しむ。ここでの会話内容は殆ど、大平と大平住民の話、またはテレビのニュースなどで報道された事件のことに集中する。そして8時前には話を切り上げ、それぞれ家に帰っていく。

これは昔から仏様を守る形で毎日行っている。このお参りが始まった年は正確には分からないが、現在の住民が自分たちの祖父のころにはも



写真3. 公民館正面

うあったと聞いているため、100 年以上は経っていると考えられ、人が多かった時期からの慣習だと思われる。このお参りがいつ何のために始まったのかはわからないが、「昔から仏様を守る形でおこなわれていたらしい」「何もない所におられるんはかわいそう」というような語りがあったため、こういったことが現在おこなわれている理由として存在していると考えられる。

4-5. 町内会

住民全員が集まる機会は年に数回のみで、そのうちの 하나가町内会である。

朝日町からの説明会等、公的なものがおこなわれるときに随時開催され住民が集まる。筆者が参加させていただいた 2012 年 10 月 10 日におこなわれた大平町内会では、朝日町からの来年度予算等における説明、また住民の朝日町に対する要望の聞き取りなどがおこなわれた。

4-6. 祭り

もう一つの住民全員が集まる機会として、祭りがあげられる。

大平の祭りは現在 1 年に 2 回、6 月 10 日に近い日曜日に春祭り、10 月 21 日に近い日曜日に秋祭りがおこなわれている。その際は皆で祭りを見物し、その後公民館で食事をするのが恒例となっている。祭りは地域のコミュニティ形成の場であることが、多くの論文において議論されている。筆者は大平の場合もそのような役割を果たしているのではないかと考え調査した。ここから祭りについて、少し詳しく見ていきたい。

4-6-1. 祭りの歴史

大平における祭りの始まりは、鎌倉時代の後期であると考えられている。初めは田植えが終わった後のお休みの時期に、個々にお参りをして休憩をするというとくに催しもないものであった。それが変化したのは、寛文年間の中ごろに 4 人の住民が、江戸の麻布にある武家でおこなわれていた獅子舞等一連の太鼓や笛を修得して持ち帰ってきてからだと言われている。この後、あらゆる行事で獅子舞、神楽がおこなわれるようになった(『大平の長き若衆の旅路』)。

昔は休日に合わせず、春祭りは 6 月 10 日、秋祭りは 10 月 21 日に行うと決まっていた。また、山祭りという 2 月 9 日におこなわれる祭りもあった。そのころは働きに出ていた人は冬期の仕事が無い時期に帰ってきて、数か月かけて獅子舞や神楽の練習をし、山祭りに最初の本番を向かえるという流れであった。

しかし、人口の減少や時代の進歩によりこういったことが難しくなり、現在は春祭りと秋祭りの 2 回のみである。一時は高齢化などによりそれぞれの祭りにおいても獅子舞も無くなるかと危ぶまれたが、数年前に獅子舞をこれからも続けて行こうと、獅子舞保存会が発足した。保存会については後述する。

4-6-2. 祭りの流れ

春祭りと秋祭りは以下の流れで行われる。

・春祭り

- ①十二社にてお参り、②十二社の前で獅子舞、獅子乗り、③公民館に集まり、村人全体で食事、
④翌日、富士社にお参り

・秋祭り

- ①富士社にお参り、②富士社の前で獅子舞、獅子乗り、③十二社にてお参り、④公民館で食事

十二社、富士社のお参りでは、朝日町宮崎の鹿嶋神社の神主によって執りおこなわれる。基本的に春祭りは十二社のための祭りで、秋祭りは富士社の為の祭りであるという。そのために獅子舞はそれぞれの社の前でおこなわれ、また住民の殆どが出席するものも、春祭りでは十二社でのお参りのとき、秋祭りでは富士社でのお参りの時だけで、もう一方のお参りの際は参加しない人もいる。富士社については後述する。また大平の祭りはとても小さいものであるため、屋台など出店があることもなく、地域の人々のためだけの祭りである。

4-6-3. 獅子舞、獅子乗り

元々は25歳と42歳の厄年に厄払いに舞うものだったと言われているが、現在は年齢を問わず参加できるメンバーでおこなわれている。

大平の獅子舞は上記のとおり武家で踊られていたものが発祥であり、近隣と比べても変わったものである。例えばこの報告書で前田や林が報告している朝日町草野や朝日町宮崎の祭りの中での獅子舞は子どもが担っており、また報告書内には載っていないが、笹川の獅子舞も子どもが舞っている。それに比べて大平では、大人が担い仕切ってきたなど、違いを見ることができる。かつては朝から晩までかけて獅子舞と神楽が各家を廻り、それぞれの家で踊り御馳走をいただいていたというが、人口が減少した今それは無くなっている。

なお、大平の獅子舞の中でも獅子乗りは他に見られないものである。獅子乗りとは、正服袴を着、刀を持った人間が獅子に乗り、討伐する流れを持つ舞いである(写真4,5,6)。獅子舞は毎年の祭りでおこなわれているが、獅子乗りは2012年の春祭りにおいて十数年ぶりに復活した。獅子乗りがおこなわれる年に決まりはないらしく、基本的に獅子乗りを行う人々によって決められる。



写真 4. 獅子乗りの様子



上写真 5. 獅子乗り

下写真 6. 獅子舞

4-6-4. 獅子舞保存会

高齢化と過疎化により獅子舞の存在が危うくなってから、大平出身の人々が数年前に保存会を発足させた。現在は保存会が主導して獅子舞がおこなわれている。

獅子舞保存会は、2010 年(平成 22 年)頃に結成された。メンバーは、大平出身ではあるが独立して町に出て現在も町に暮らしている人のみで構成されており、現在大平に住んでいる人は参加していない。そのために、仕事の都合などでメンバーが祭りの日に大平に帰ってこられない場合は獅子舞、獅子乗りはおこなわれない。実際に 2012 年の秋祭りではおこなわれなかった。

毎年開催している獅子舞とは別に、2012 年に久しぶりにおこなわれた獅子乗りの練習は、仕事が休みの日に大平に集まりおこなわれた。元々幼いころに獅子乗りや神楽を習っていた人はそれを思い出したり、昔におこなわれた祭の際に住民が録画していた映像記録を見たりして練習した。また、現在大平に住んでいる住民のうちの 1 人が昔に獅子乗りをしていたということで、獅子乗り役についてはその住民から習ったということである。

4-6-5. 富士社

富士社はイワナガヒメ巖永姫様を祀った社である。

この神様は器量が悪く器量が良い妹に嫉妬し女性が嫌いになったと言われており、女性が入ると腰を抜かすとか、赤い雨が降る、または青天だった天気がガラリと変わるなどと言われてい

た。富士社は元々、境川を挟んで向いにあった瀬波^{せなみ}の集落の所有地であった。しかし、瀬波が1326年(嘉歴2年)に洪水によって流出してしまってから、川向いのその社を大平の人間が世話するようになり、現在大平の所有地となったと言われている(『大平の長き若衆の旅路』/福平仁次郎)。この由来や、図2から分かるとおり富士社は大平集落から少し離れている場所にある。富士社が明記されている地図を見つけられなかったため文章で説明する。まず大平から第一発電所に至る道をのぼっていき、発電所前の橋を渡る。そのあと南側にある道を下りていくと、右手に富士社の鳥居に続く階段を見つけることができる(写真8²²)。

社は最近まで女人禁制で女性が立ち入ることはなかったが、人口の減少により世話する人がなくなったために、10年ほど前に女性の住民が掃除の為に入るようになり、女人禁制の場所ではなくなった。しかし、現在でも大平の女性は祠のある場所に行くことを厭っており、秋祭りの際も鳥居の前の森の入り口に座って見物するだけにとどまっていた(写真7)。



写真7. 鳥居の下で待つ住民



写真8. 富士社入口

4-6. 考察

全体を通して、大平のコミュニティは日常生活を送る上で必要な、どの集落にもあるものが多かった。例外として朝のお参りと、祭りがある。朝のお参りは「仏様を守るため」という理由づけがあったものの、それだけとは言い難い。この集まりは、日常生活の中で住民の半数程の人が集まり言葉を交わすことができる唯一の場所である。ここで会話することで、お参りに来ている人々はお互いの状況や現状を知ることができるため、この朝のお参りは参加住民にとって大事な時間だと言えるだろう。

また、祭りを通じてのコミュニティ形成は大平においても存在するのかと考えたが、コミュニティの形成はおこなわれていないと結論付けた。なぜならば大平の祭りは、現在大平の中で存在しているコミュニティをほとんど出ることなくおこなわれ、また大平と関わりのない人が祭りのために訪れることもないため、大平では祭りを持って新しいコミュニティが生まれることは今現在ではないからである。しかし祭りに際して大平の人口は増え、また獅子舞がおこなわれる際は

²² この鳥居の奥が女人禁制の場所であり、山を少し登った場所に祠が存在する。

神楽等を含めて保存会のメンバーが大平に集結し、その家族などの見物客も集まってくる。このように町に住む人間が帰ってくるという点では、大平を出ていった人と住民とのつながりが復活する時間となるため、大平にとってこの祭りは、新たなコミュニティの形成こそはしないが、大のコミュニティを維持するためには十分に必要なものであるだろう。この祭りがなければ町に出て行った人々が戻ってきて、なおかつその人々と村人達が集まって食事をする、などといったことは起こりえない。この祭りが大平の旧交を温め、つながりを維持していくという重要な役目を担っているのではないだろうか。

5. 考察とまとめ

冒頭に記したとおり、最初に大平を目にしたとき、筆者はその集落の小ささや人口の少なさにとても驚いた。そして調査していくうちに、もっとたくさんの驚きを知ることとなった。

大平は集落の小ささや人口の少なさは群を抜いているとしても、それ以外において一目見ただけでは他の過疎化しつつある集落との違いはないように思われる。しかし話を聞いていくうちに大平という地域のお集落との違いがだんだんと分かった。調査に基づいて、大平という地域についてここではまとめた。

まず大平の特徴としてあげられるのが、畑仕事である。畑仕事は大平の住民たちにとって欠かせない、大切な生活の一部となっている。畑仕事を生活の生きがいとし、楽しみとしているといってもいいだろう。

もう1つ、大平における特徴として重要なのは、この地域の孤立性である。基本的に、集落外の人々がふいに訪れるなどといったことはまずない。商店や郵便局、小学校などといった公共の施設が存在しないために、新しい人が集落を訪れる機会自体が設けられていないのである。祭りなどの人を呼び込みやすい行事の際も、大平にやってくるのはお盆や正月に戻ってくる親戚ばかりであるために、大平に初めてやってきた、というような人はまず見受けられない。こうしたことは、大平の人々が現在自分たちの生活の場の公共的な意味での発展、つまり町おこしなどでの集落の活性化はとくに望んでいないことを示しているのではないだろうか。

大平の人々は皆、自分の生活スペースを作ってゆっくりと流れる時間を過ごしている。15人という少人数であることや、高齢者が多いという事情もあるだろうが、大平の人々は集落の発展という事柄よりも、今現在の自分たちの生活を続けていくことを大事にしているように見受けられた。これは大平という集落について住民たちの関心が向いていないという意味ではなく、住民1人1人が幼少期から過ごしてきた地域を、幼少期のときと同じように自然に暮らすことで、集落をそのままの形で守り続けているという意味である。つまり、大平の人々は4節4項で記述したように過疎が進むことを受け入れているようではあっても、集落が無くなってしまう事を是とは考えていないのではないだろうか。大平という地域の立地や交通の便などの理由から過疎化を仕方ないと考えても、自分たちの故郷が無くなってしまう事を望んでいないことが、彼らの話から伺えるだろう。また、こうした気持ちは町を出て行った人々も持っているように考えられる。昔から続いてきた必要なことだけは最低限続けていきたいという気持ちがあったからこそ、町おこ

しなどのことはしなくても、例えば獅子舞保存会などが発足したのではないだろうか。

かつては 70 軒近い家があり、数百名ほどの人が日々を過ごしていただろう大平も、人口が減っていき現在は数 10 分の 1 の人口となっている。それでも昔と変わらずに続いてきた日々を暮らしている人々が存在するこの大平という集落が、これからも存続していくことを願わずにはいられない。

謝辞

今回大平を調べるにあたって、大平に住むすべての方に大変お世話になりました。突然訪ねて行ったり、畑仕事の最中に声を掛けたりと多大な迷惑をおかけしましたが、聞きたいことに対して親身に答えて下さったり、昔のことを一生懸命に思い出そうとしてくださったりしてくれた人々のお陰で、このように 1 つの報告をまとめることができました。

小さな集落で、余所者がコミュニティに入り込み、多くのことを尋ねることや祭などの行事に入りこむこと、また生活に踏み込むことを許して下さった皆様にこの場を借りて改めて感謝の意を伝えます。本当にありがとうございました。

参考文献

『大平の長き若衆の旅路』 福平仁次郎(未出版文書)

11. 地域の自然、文化資源を活用した教育の試み

—蛭谷の夢創塾のあゆみ—

野田 美貴

はじめに

私が^{びるたに}蛭谷に調査に訪れ、蛭谷にはどのような文化があるのか聞いて回っていた時、多くの住民から長崎喜一さんを紹介された。長崎さんは夢創塾という施設の塾長をしているという。それが夢創塾を訪れたきっかけである。夢創塾では様々な自然体験教室を開いており、その中では蛭谷の伝統産業である紙漉きや炭焼きを行うこともあると長崎さんから聞き、いくつかの自然体験学習に参加させてもらうことにした。その中でも、小学生の体験学習の授業に興味を持ち、この体験学習で子どもたちがどのようなことを感じ、学んでいるのかについて興味を持ち、調査を行うことにした。

1. 夢創塾

夢創塾は北陸自動車道朝日インターチェンジから車で約 15 分、北アルプス・朝日岳のふもと、富山県朝日町の蛭谷地区にある、長崎喜一さんによって管理される施設群を指す。また、施設群のうち、最初に建てられた丸太小屋を指して夢創塾という場合²³もある。

現在、夢創塾では長崎さんの指導のもと、小学生の体験学習授業、親子での里山体験、都市部の修学旅行生を迎えての林業体験教室、大人向けに農業・里山生活体験教室などを開き、様々な環境教育を行っている。ただし、後述するように設立当初からこうした活動が行われていたわけではなく、徐々に現在のかたちになってきた。夢創塾の運営は木炭や飾り炭、花炭²⁴を販売した時の売り上げ、講演を行った際に出た謝礼金などで賄われている。

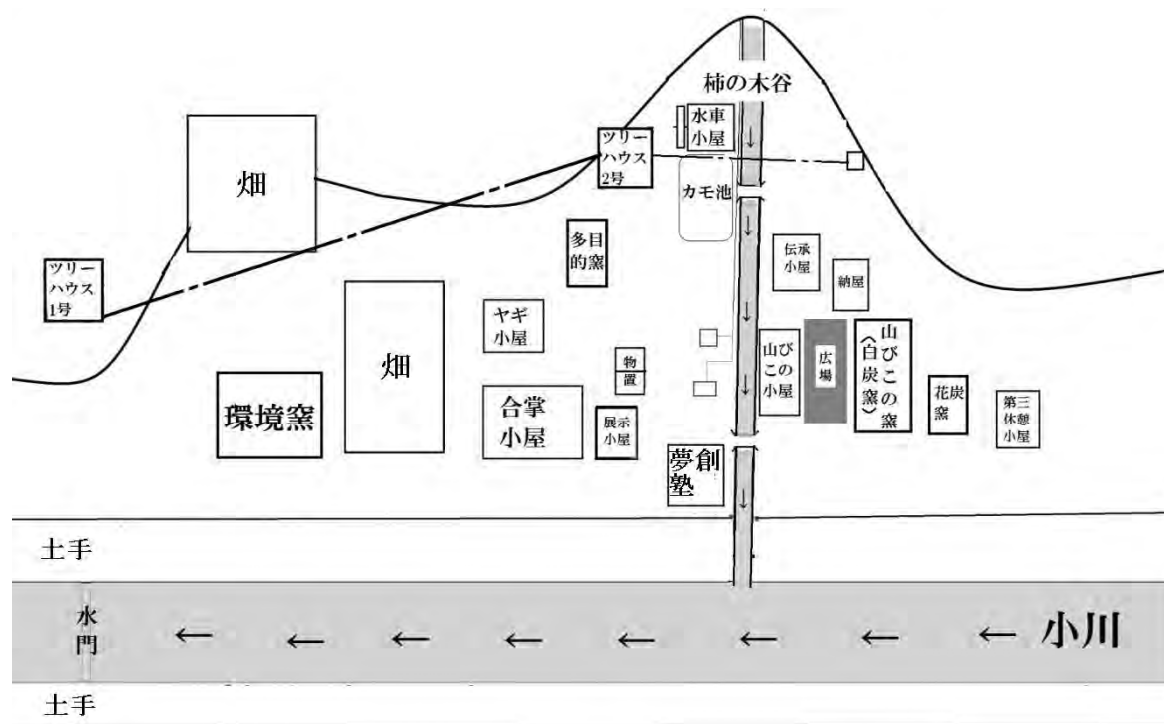
1-1. 夢創塾の施設

夢創塾にある建物はすべて、長崎さんやその友人たちの手によって製作されたものである。夢創塾の原点となった丸太小屋「夢創塾」は、囲炉裏を囲みながらバタバタ茶を飲んだり、語り合ったりすることができる小屋である。他にも紙漉きをする合掌造りの小屋や、炭焼き窯の隣には囲炉裏のある広場、休憩や体験作業ができる小屋もある。現在夢創塾に窯は 4 台あり、花炭窯、かつての炭焼き職人たちによって造られた山びこの白炭窯、料理などに使う多目的窯、廃材など

²³ その場合は「夢創塾」と書き記す。

²⁴ 飾り炭、花炭に関しては第 5 章を参照。

を炭にする環境窯である。2 棟のツリーハウスの間はジップライン²⁵で繋がれ、空中遊泳を楽しむアスレチックとなっている。他にも、高い木にブランコがつけられたり、間伐材を使ったシーソーが設置されたりしている。水力発電を行う水車小屋があり、その下にはイワナの養殖池、アイガモの池がある。夢創塾では他にもヤギを 3 頭飼育している。夢創塾の活動区域の広さは約 7000 平方メートルで、現在夢創塾にある建物は用具をしまっている納屋などを含めて 16 棟である。



ハーブ園

図 1. 夢創塾縮図

1-2. 夢創塾の来歴

1-2-1. 夢創塾の誕生

夢創塾は長崎さんが定年を迎えたあとに、趣味の登山の拠点を作ろうという考えから始まった。1993(平成 5)年 5 月 5 日より、家族から受け継いだ山に夢創塾へと至る林道づくりを開始した。この林道には 111 歳(皇寿)まで生きたいという願いを込めて、桜の木を 111 本植え、花見ができるようにした。1994(平成 6)年 6 月 6 日より、この林道を使って、現在夢創塾がある土地へ長崎さんが自分で間伐した丸太を 222 本運び込み、製材機で加工した。最初の施設である丸太小屋「夢創塾」を友人たちと協力し建設し始めた。建設当初、長崎さんには現在のような体験教室を開くつもりはなく、趣味の登山をする時の拠点にしつつ、朝日岳を見ながら山登りや山菜とりの話ができる場所を目指していたという。小屋が完成したあとには、外に五右衛門風呂を造り、間

²⁵ 木を利用して行う空中トレッキングコースのこと。ハーネス腰に取り付け、地上高く設置されたケーブルを、プラットフォームからプラットフォームへと移動する。

伐材を薪として利用して湯を沸かし、現在も仲間たちと交流を深めている。

「夢創塾」の中には囲炉裏が設置されており、それで暖をとったり、お茶を飲んだりするのだが、そのためには炭が必要になる。そのうち、用意してあった炭が底をついたため、長崎さんは幼い頃に父親の炭焼きを手伝った経験を活かし、炭焼きに挑戦し始めた。1995(平成 7)年 4 月 1 日から約 1 年かけて、四季の花も炭にできる花炭窯を製作した。当時 40 数年ぶりの窯づくりの噂をききつけた、蛭谷のかつての炭焼き職人たちが夢創塾に訪れ、作業を手伝い、その指導の下で最初の炭窯が完成した。この炭窯づくりを契機に 1996(平成 8)年にはかつての職人たちは自分達が炭焼きをするための窯を 2 週間ほどで製作した。職人たちが夢創塾で炭焼きを行っているとその家族が昼食を運んできたり、世間話をしたりと夢創塾に通ってくるようになった。「夢創塾はまさにサロンのような状態になっており、集落よりもこちらの方が活気があるようだった」と、長崎さんは当時を振り返って語った。この年から炭焼きを行う間に休憩したり作業をしたりする小屋や、世間話をしたり、食事を皆でとったりする広場などの施設が造り足されていった。

1-2-2. 地域教育の場への転換

夢創塾で炭焼きを行うようになると、それを知った当時の朝日町内の小学校教諭が興味を持ち、炭焼きの体験をするために訪れた。これをきっかけとして 1997(平成 9)年から夢創塾は地域教育の場としても利用されるようになった。当初は今よりも施設が少なかったため、炭焼き体験や山遊び、小川の探検が中心として行われていた。炭焼き体験では、児童らが持ち込んだ流木や廃材などを使って炭を造った。焼いた炭は燃料として使うというよりは、飾りにしたり、土壌改良剤として畑にまいたり、消臭剤として使ったりといったように身の回りで使えるものとして活用させていた。長崎さんはこの体験学習で、児童らが自分の身の回りの物がどのような工程を経て作られてきたのか、資源がどのように循環しているのか学ぶことを目標に行っていたという。夢創塾では体験教室の対価として感想文をもらっている。児童らが書いた感想文の内容を分析し、さらに教育効果を高めることができる体験プログラムを作り、改善してきた。これは現在も続いている。2000(平成 12)年には谷川の水を利用したイワナの養殖池や、アイガモの池を設置し、飼育体験もできるようになった。特にアイガモは子どもたちのアイドルとしてかわいがられている。

2001(平成 13)年には地域住民の協力を得て、3 つ目の窯である多目的窯を製作した。この窯では熱を利用して、パンやピザを焼き、煙突の排熱で海水から塩やニガリの製造に挑戦した。「みんなで造ったことは、自分も仲間であるという証となり、末永い交流の源として大事である」と長崎塾長は語った。また 2001(平成 13)年には杉林の林間で木材を組んでジャングルジムのような遊具も作製したという。2003(平成 15)年から 1 棟目のツリーハウスを造り、そのツリーハウスにジップラインをつけ空中遊泳を楽しむ遊具も造られた。2009(平成 21)年には 2 棟目のツリーハウスも完成した。ツリーハウスはアスレチックとしての役割だけではなく、夢創塾内を縦横無尽に駆け回る児童らの行動を見守るためにも使われている。2003(平成 15)年には雨天時にも体験学習ができるように、合掌造りの小屋を作製した。この小屋は現在では紙漉き小屋として利用されている。2005(平成 17)年には環境窯を製作した。この窯では杉の間伐材や廃材を炭にして、土壌改良剤や脱湿・脱臭剤として使っている。2006(平成 18)年から 5 年計画で「風の道」

森づくり活動を開始し、児童らの体験学習にもりこまれるようになった。「風の道」森づくり活動については後述する。2007(平成 19)年には、川の水を利用して発電ができる水車小屋を作製した。発電した電気で虫をおびき寄せ、下の養殖池のイワナがそれを食べるという仕組みを作った。2009(平成 21)年から現在までは施設の拡大よりも既にある建物の老朽化が進んできているため、その修繕と併せて機能の向上を図っている。

2. 体験学習

夢創塾では、朝日町内の 2 校の小学校(さみさと小学校及びあさひ野小学校)の児童を招き、体験学習を行っている。この体験学習は総合的な学習の時間²⁶にあたり、この体験学習は 5 月から 12 月の間に 6 回にわけて行われる。児童らは 9 時から 12 時までの約 3 時間を学校から離れて夢創塾で過ごす。1 度の体験学習の中では、「風の道」森づくり活動や卒業制作の掛け軸台紙の準備などいくつかの活動を班に分かれて行う。

夢創塾での体験学習自体は様々な内容で、小学生だけではなく、幼稚園生や大人、都会からの修学旅行生に対しても開かれているが、本報告では、あさひ野小学校の 6 年生 37 名の授業に参加した経験から記述する。なお第 4 回以降の活動には参加できなかったため、長崎さんと児童らの聞き取りにより補完する。

2-1. 「風の道」森づくり活動

夢創塾のある山の一部は杉の人工林である。人工林を放置しておくと荒れ果ててしまい、せっかくの資源が台無しになってしまうので、適度に間伐を行い管理していく必要がある。そこで、長崎さんは間伐を行うことによって風の通り道を作り、人工林を健康的に維持し、森の資源を守る活動を計画した。これが「風の道」森づくり活動の原点である。現在では人工林から間伐された木材などを利用した物づくりの工程を含め、自然との共生や資源の循環、蛭谷の紙漉きやバタバタ茶などの伝統的な文化を学ぶことを総合した体験学習を「風の道」森づくり活動と称している。実際に小学生が山に入り、間伐を行うのは危険なので、間伐自体は長崎さんや塾員たちが行い、児童らは間伐材の加工を行う。塾員というのは夢創塾での体験学習を支援する協力者たちのことを指す。塾員は体験学習の準備を手伝うほか、授業の際には講師になることもある。

2-1-1. 第 1 回「風の道」森づくり活動

2012 年 5 月 13 日に開かれた第 1 回「風の道」森づくり活動では、杉の間伐材を用いたシーソーづくりをメインに行った。このシーソーは、支点になる木材の上に 8 メートルの杉の丸太を乗せただけのもので、掴まるための取っ手などはついていない単純なものである。児童らは支点

²⁶ 総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとすることから、思考力・判断力・表現力等が求められる「知識基盤社会」の時代においてますます重要な役割を果たすものである。(文部科学省ホームページより)

から離れた場所にある杉の丸太にロープを結びつけたクサビを打ち込み、全員で協力してロープを引いていく。今回の活動では2班に分かれ、交替で木を引いた。ただ引くだけでは、丸太が重くて動かないので、丸太の下に竹や直径10～15センチメートルほどの木の枝を挟み、「ころ²⁷」として使った(写真1)。「ころ」の本数は限られているので、班員は進行方向に向かって後ろから前へと「ころ」を移動させなければならない。班のリーダーは「ころ」の数や進行方向を確認しながら指示を出し、班員はそれに従い、木を引くスピードを調整したり、進むのをやめたりしていた。第1回の活動ではシーソーの作成のほかに、別の団体の体験学習に向けて、杉の樹皮剥きも行った。また、蒸した楮^{こうぞ}の皮剥きも行い、卒業制作の掛け軸台紙の材料とした(写真2)。



写真1. 「ころ」を使って木を引く様子



写真2. 楮の皮剥きの様子

2-1-2. 第2回「風の道」森づくり活動

2012年6月7日に開かれた第2回の活動では自然の力を利用した発電、「エコ発電」を体験した。この回の活動では3班に分かれて、ローテーションを組んで学習を行った。ソーラーパネルを使った太陽光発電、水車による水力発電(写真3)、小型の風車を回して行う風力発電、残雪と炭窯の天井との温度差を利用した熱発電、夢創塾で作られた木炭に塩水に浸した和紙とアルミ箔を巻いた木炭電池を用いた発電の5つの方法でLEDライトをつける実験を行った。発電機やライトは自然のものではないが、自然の力を借りてエコ発電を行うことによって、児童らは自然との共生をより身近に感じる事ができたようである。



写真3. 小水車を使った水力発電体験の様子

²⁷ 鉄や木材で作った円柱体で、重いものを運ぶときその下に置き、すべり摩擦を小さなころがり摩擦に変える(百科事典マイペディアより)。

2-1-3. 第3回「風の道」森づくり活動

2012年7月2日に開かれた第3回の活動では、間伐材を用いて夢創塾内の水路にダムを造った。この回の活動は2班に分かれて行った。まず、登山口から第1回目の活動のときのように丸太を引き出してくる。水路の幅を測定してから丸太をチェーンソーで切断し、水路の底に設置した。また、細い木の端を三角形にして、丸太の両端に楔として打ち込むことによってダムを強固にした。丸太は1つのダムに間隔をあけて2本設置し、副ダムとすることで水の勢いを殺し、主ダムとなる丸太が流出するのを防ぐ仕組みになっている。その後、大きめの石や砂利、砂を敷き生物の住みつける環境を整え、ダムは完成した(写真4,5)。

また、ダム造りの他に、塩の精製も体験した。この塩は別の団体が自然体験を行ったときに持ち込んだ海水から作られる。体験学習の際にはこの小学校の児童らも朝日町の宮崎港から海水を



写真4. ダム作りの様子



写真5. ダム作りの様子

汲んできて、これがまた別の団体の体験学習に使われるといったように、夢創塾での塩作りは「循環」を意識して行われている活動のひとつである。海水を煮詰め、ある程度水分をとばして塩を結晶化させ、それを袋に入れて叩き、にがりと塩とに分離させたあと、天日干しにする。この工程を授業中に行うには時間がかかるため、児童らはここまでの工程の説明を受けたあと、最後の精製の工程だけを体験する。精製は石臼を用いて行われ、手作業で塩を挽く。精製した塩は活動の成果として各自持ち帰る。

2-1-4. 第4回「風の道」森づくり活動

2012年10月16日に開かれた第4回の活動ではネマガリダケを用いて、バタバタ茶の茶筌と竹筆、笹団子作りを行った(写真6)。ネマガリダケとはイネ科タケ亜科ササ目にチシマザサの別名であり、幹部の太さは太い物で直径約2センチメートル、竹筆用に使う細い物は直径約5ミリメートルから1センチメートルほどである。バタバタ茶の茶筌ではネマガリダケの幹部の先端を10～12分割したあと、1本ずつ外に曲げて内肉部を剥ぎ、穂先が約0.1ミリメートルになるまで割いて完成する。竹筆にはネマガリダケの細い部分を使用し、固い台の上に置いて金槌で先端を叩いてほぐし作成する。最後に団子を笹でまいて笹団子を作り、蒸して食べた。



写真 6. 竹筆作りの様子

2-1-5. 第 5 回「風の道」森づくり活動

2012 年 11 月 21 日に開かれた第 5 回の活動は小学校内で行われた。この日の活動は卒業制作に向けて、紙漉きの材料となる楮をパルプ化する活動だった。パルプ化とは繊維を砕いて細かくする作業のことを指す。長崎さんによって既にほぐしやすくされている楮の皮から、児童らは芽や枝の痕、皮についた傷、変色した部分やゴミを取り除き、木槌で叩いて繊維をほぐし、さらにミキサーにかけて攪拌^{かくはん}を行った。

2-1-6. 第 6 回「風の道」森づくり活動

2012 年 12 月 3 日に開かれた活動では、ついに卒業制作の掛け軸用の台紙の紙漉きを行った(写真 7)。この回の活動では 2 班に分かれて活動し、片方の班が台紙の紙漉きを行っている間にもう片方の班は、次の年の紙漉きに使用する楮の皮剥きを行った(写真 8)。この日の活動であさひ野小学校の体験学習は終了した。



写真 7. 紙漉きの様子



写真 8. 楮の皮剥きの様子

2-2. 児童らの語り

6 回に渡る「風の道」森づくり活動を通して、あさひ野小学校の児童らはどのようなことを感じ、学んだのだろうか。

聞いてみると、単純に「楽しい」という感想が多かった。詳しく聞くと自然の中で、普段体験することができない活動ができることや、思い切り体を動かせること、動物とふれあうことに児童らは楽しさを感じていた。体験学習のほとんどのカリキュラムが、楽しみながら授業を進められるように設計されているだけでなく、難しい工程を学んだり、大変な作業をしたりするものでもあるため、単純に遊ぶことが楽しいという感想の他にも、「自然と共生することの大切さを

学びながら楽しむことができた」や、「物づくりの工程は難しくて、失敗してしまったが、達成感でいっぱいだった」、「実際に物づくりをやってみてはまった。この経験を大人になっても活かしたい」という感想を聞くことができた。

また、1年の集大成として卒業制作の掛け軸台紙の紙漉きに関して語る児童は多く、「僕は世界でたった1枚の和紙を漉いた。この台紙に真剣に一生懸命将来をたくした、漢字を書きたいと思う。そして、何十年後、『そういえば、と思い出す』作品にしたい」という語りや「初めての紙漉きで失敗しないかと心配したが、無事に漉きあげることができて嬉しかった。漢字を書くのが楽しみでたまらない」という語りからもわかるように、自分で物を作り上げた達成感は非常に大きく、同時に児童らの心に強く印象付けられたようである。

2-3. 塾員の語り

夢創塾での体験学習で長崎さんと共に講師を務める塾員は、主に長崎さんの奥さんや友人、前の職場の関係者である。彼らから子供たちの体験学習についての語りをえることができた。

70代(推定)の男性の塾員は「年のこともあり、子どもたちの相手をするのは大変な時もあるが、教えるのは楽しいし、子どもたちから元気をもらえる」と語った。これ以外にも「子どもたちから元気をもらっている」という語りを得ることができたことから、夢創塾での活動は、子どもたちの学びの場であると同時に、塾員にとっても楽しみのある場であるのではないかと考えられる。

また、40代(推定)の男性の塾員は「子どもの頃に実体験として地域の文化を学んでおくことは、将来的に彼らのためになるだろう」と語り、30代(推定)の女性の塾員は「人間関係の希薄化が進む現代において、地域全体で子どもたちを育てていくことが求められている」と語っていたことから、これから先の未来を担う子供たちの育成の場として、夢創塾に期待を寄せている。

3. まとめと考察

3-1. 夢創塾の発展と利用者の拡大

現在でこそ地域教育・自然体験の場としても利用されている夢創塾だが、設立当初は長崎さんの趣味の一環として建てられたものであった。本項では、それぞれの段階において夢創塾が利用者にとってどのような場であったのかについて、今まで述べてきたことをもとに考察する。

1-2で述べた通り、当初の夢創塾は長崎さんの趣味の一環として建てられた山小屋で、友人たちと山登りや語りあいを楽しむための場だった。この段階での夢創塾は、個人の趣味の場にすぎないといえる。そこに炭窯を造るという噂を聞きつけた地域住民たちが集まり、個人の趣味の場であった夢創塾がサロン化し、蛭谷の地域住民たちでにぎわった。炭焼きはかつての職人たちに生きがいを与え、他の住民たちにとっても共同で作業をしたり、世間話をしたりといった楽しみの場として利用されるようになった。この段階での夢創塾は蛭谷の住人たちのコミュニティの要としての役割をもっていたと考えられる。

そこに炭焼きの活動を知った朝日町の子供たちが、蛭谷の伝統的な生業や生活を学ぼうと夢創塾を訪れるようになった。また、子どもたちだけではなく、大人も炭焼きの体験に興味をもち、訪

れるようになった。この段階で夢創塾は、蛭谷の伝統的な生業を学び、蛭谷でおくられてきた生活を体験するための教育あるいは体験の場となったといえる。それが現在では、さらに富山県外からも体験学習に人々が訪れるようになっている。彼らは「蛭谷の」文化や生活を学びにやってくるというより、むしろ一般的な林業体験や里山での生活体験のためにやってくる。現在の夢創塾は、地域教育・自然体験の場であるが、それは蛭谷で営まれてきた伝統的な生活を伝えるだけではなく、一般的な里山の生活のモデルとしてもみなされているようである。このように夢創塾は個人の楽しみのひとつという小さなところから、蛭谷のコミュニケーションの場となり、いつしかより外部に向けて利用者の層を広げるようになった。その中で様々な体験プログラムを楽しむことができるように施設も拡大していったと考えられる。

3-2. 体験学習が子どもたちに及ぼす影響

あさひ野小学校6年生と共にに行った「風の道」もりづくり活動は、人工林から間伐された木材などを利用した物づくりの工程を含め、自然との共生や資源の循環、蛭谷の紙漉きやバタバタ茶などの伝統的な文化を学ぶことを目標とした体験学習である。参加した児童らの語りからわかるように、この体験学習の目標を達成しているといえるだろう。それだけではなく、活動を通して仲間と協力することの大切さや、自分で試行錯誤することの楽しさを学んだようである。夢創塾の体験学習では長崎さんや塾員の指導のもと、物づくりの多くの過程を体験する。単に用意された物を組み立てるだけではなく、材料の準備から自分の手で行うので達成感も大きく、特に卒業制作の掛け軸台紙は、体験学習の集大成ということもあり、愛着を感じているようだった。

これらのことから、夢創塾での体験学習は児童らにとってそこでしか体験できない豊かな経験を得られる時間であり、場所であったといえる。

謝辞

今回、調査を行うに当たり、多くの方々のおかげで、大変充実した調査を行うことができました。特に夢創塾を管理している長崎喜一様をはじめとする塾員の皆様。突然の訪問にも関わらず、快く体験学習に参加させていただき、本当にありがとうございました。一生の記憶に残るすばらしい体験をたくさんさせていただきました。この場を借りて心からお礼を申し上げたいと思います。

12. 泊に住む子供達の生活から見る文化の変遷

松元 湧樹

はじめに

富山県の自動車普及率は2009年時点で約98%、全国第3位である（都道府県別統計とランキングで見る県民性・2012）。それは雪国であることや、公共交通機関が未発達であるため、必然的に移動手段を自動車に頼ってしまうからだと考えられる。大人は自動車で問題なく移動できるのかもしれない。しかし、移動手段を徒歩または自転車に依存している世代、主に小中高校生はどのようにして移動し、欲しいものを手に入れたり遊んだりしているのだろうか。そして年代別に整理した場合、年代によってなんらかの移り変わりが無いだろうか。今回朝日町を調査するにあたり、私はその疑問に取り組むことに決め、様々な年代から自身の小中学生時代の頃を語ってもらい、そこから世代間による違いが見いだせないか考察した。

1. 調査概要

泊は富山県朝日町の地区の一つである。人口は2012年時点で5910人である。地名の由来は江戸時代初めの慶長の末ごろ、この地に訪れた足輕が漁業を始め、その後別の浪人が宿屋を始めたことから泊と呼ばれるようになったとされている。江戸時代には宿場町として栄え、松尾芭蕉の『奥の細道』にも登場した。明治以降は現在の朝日町最大の商店街を抱え、地域内での経済の中心だった。現在では商店街の一部であった総合商業施設あさひプラザがJR泊駅前に移転し、旧国道8号線が泊駅の南に移るなど、経済の中心が移動している。

筆者は泊在住の児童に対しては泊の玩具屋や児童館など、児童の主要利用施設について聞き取りを行い、それ以上の年代に対しては泊町内をフィールドワークすることにより子供時代の遊びや利用店舗、行動範囲について聞き取りを行った。

調査は2012年4月より断続的に行い、9月20日より26日までの調査合宿の際に集中的に行った。聞き取りに応じていただいた泊町民の人数と性別を表1にまとめた。なお20代男性、60代男性、70代女性、80代以降の男性がの意見が得られなかったため、分析結果と実際の傾向に差が生まれる可能性が懸念される。

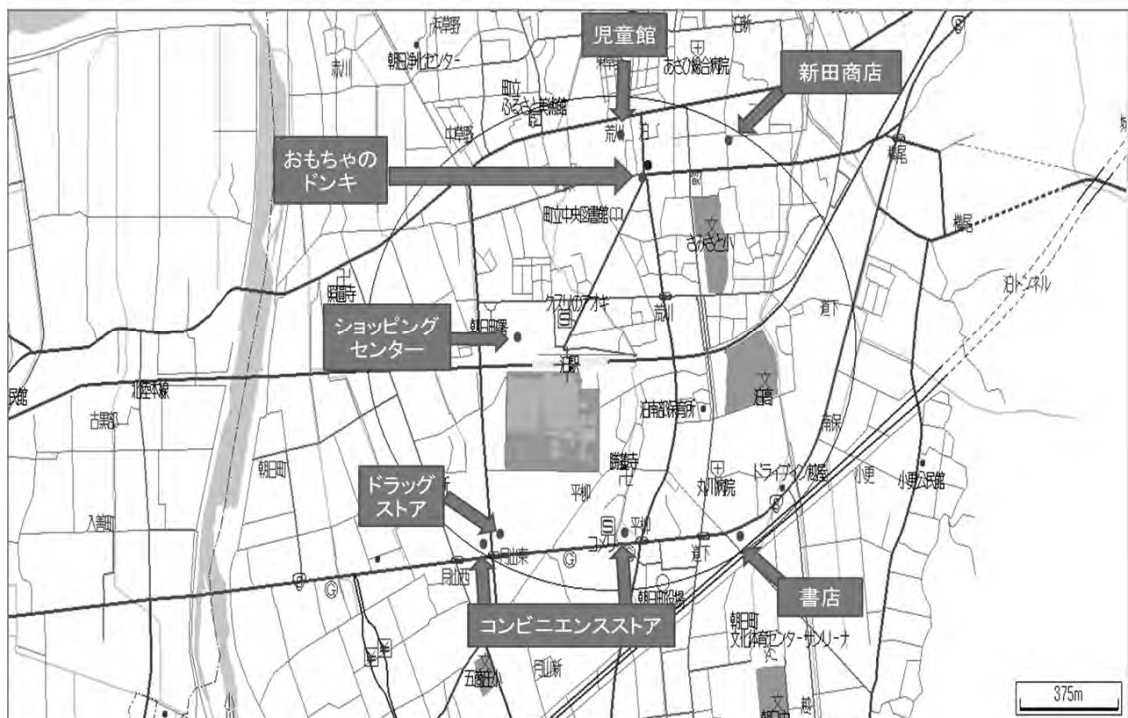


図 1. 泊地区内の主要施設

表 1. 聞き取りに応じてくれた人の人数

性別	男性 (人)	女性 (人)	計 (人)
年代			
10 歳以下	7	12	19
11~20 歳	3	4	7
21~30 歳	0	1	1
31~40 歳	1	4	5
41~50 歳	2	1	3
51~60 歳	2	1	3
61~70 歳	0	4	4
71~80 歳	1	0	1
81 歳以上	0	1	1
計	16	28	44

2. 年代ごとの主な遊び

まず10代以下はドッジボールやバレーボール、跳び箱など何らかの遊具を使った遊びと、パソコンやゲームなど、一人から少人数での室内の遊びが意見の多数を占めた。10代及び20代は「平日は大体部活してる」(中学生男子)、「クラブで忙しい」(中学生女子)、「友達と帰るのが楽しいから、行きと帰りで違う道を通ったりする」(中学生女子)と、クラブ活動に自由時間を圧迫されているため遊ぶ時間を取ることは難しく、登下校中などに楽しみを見出すとの聞き取りを得た。「それでも時間が出来た時にはパソコンなどをする」(中学生女子)「友達の家で遊んでいた」(20代女性)と、遊びの傾向には10代以下と明確な差異は見られなかった。

30代以上の世代から石投げなどの拾ったものなどを利用した遊びが急増する。30代の意見にあった石投げに始まり、年代を遡るにつれて竹トンボ、笹舟、缶けり、木くずを川に流して競争させるなど、自然のものやその辺りに落ちている物を利用しての遊びが目立った。「公園で石投げやゴム跳びで遊んでいた」(30代男性)、「石やあずきでお手玉、缶けりやかくれんぼをしていた」(60代女性)、「とにかく金がなかったため、金のかからない遊びをしていた。道端に落ちている銅線を売って金にしたこともあったし、ビー玉は道に落ちているのを拾ったり、10個数円で売っているのを買ったりしていた」(70代男性)など、年代をさかのぼるにつれて拾ったもので遊んでいたとの意見が目立っていた。

また40代頃から年代をさかのぼるにつれ、主に男性から、「テトラポットの真下に潜って(遊んだりサザエを獲った)、上がるときにテトラポットに引っかかって上がれない時もあった」(40代男性)「男の子たちは浜辺での肝試しで、わざと波の高い日に波乗りをしたり、砂や石を積み立てて手製の要塞を作って波に耐える度胸試しをしていた。木の枝で木刀を作ってチャンバラをしたりしていた」(60代女性)、「二人一組で馬の形を作って、その胴体の人のにしかかって根性を試す遊びをしていた」(70代男性)など、現在では危険なため禁止されるような遊びをしていた。

3. 性別による遊びの差異

本項は調査時点では調査項目に加えていなかったため、あくまで泊町民からの聞き取り内容からの推測、および児童館での観察調査の結果をまとめた。

10代以下、特に小学校低学年頃までは、特別男女に別れて遊んでいるという印象は受けなかった。俗にいう仲良しグループ単位では異性が混じることはないが、ドッジボールや鬼ごっこなど人数が必要な遊びをする際は男女問わず集まっていた。遊びの違いに際しても、「児童館で一輪車をこいだりする」(小学生女子)などといったくらいで、明確な聞き取りを得られてはいないが、筆者に柔道の技をかけようとしてきた小学生男子がいたなど、性別により多少の差異が見られた。児童館においては運動をしている小学生の男女比はほぼ同じだったが、お絵かきなど椅子に座って絵を描いている小学生は女子の方が多かった。

また、10代、20代では聞き取り人数の少なさにより、差異は確認できなかった。

30代以上ではゴム跳びなど男女に共通した遊びは見られるものの、「家で姉とケンカや話をしていた」(30代女性)など、室内で会話など、大きく動かない遊びをしているという明確な聞き取りは、男性からは得られなかった。

男性は全年代にわたり外で運動していたという意見が全員から上がっていたが、女性では、同年代の60代の意見を二つ並べてみても、「あまり外に出ない、室内で一つの事に没頭していた。買い物も嫌がり、物は基本的に親が買ってきていた」(60代女性)という聞き取りがある一方、「夏は毎日海に行って遊んでいた」(60代女性)など、多様な聞き取りが得られた。

4. 日常生活での遊び場所

調査の結果、平日と休日の間で遊び場所に大きく差が出た世代が存在するため、本稿ではこれを平日の遊び場所と休日の遊び場所の2つに分けて説明する。

4-1. 平日の遊び場所



写真 1. 児童館



写真 2. おもちゃのドンキ



写真 3. 新田商店

10 代までの児童には現在利用している場所を、20 代以上の方には子供時代に遊んでいた場所を挙げてもらった。

20 代までの町民は遊び場としては学校のグラウンド、児童館²⁸（写真 1）、自宅や友人宅、公園などを挙げた。30 代から、神社や海という意見が挙がり、それ以降の世代には特に目立った違いはない。30 代を境に遊び場所に変化が見られる。

物品を販売している店舗で分類すると、20 代まではおもちゃのドンキ²⁹（写真 2）や新田商店³⁰（写真 3）、国道 8 号線沿いに複数あるコンビニエンスストア、書店など多岐にわたる。こちらでも 30 代ごろからは泊駅前立地するショッピングセンター、アスカの前身となる朝日プラザが話題に上がり、年代を遡るにつれ、貸本屋や駄菓子屋、商店街内にかつて 3 軒あったとされる映画館など、やはり 30 代を境に利用店舗が大きく分かれる結果となった。なおこれらの聞き取りを地図にまとめたものが図 1 である。主要施設を円で囲ってみたところ、直径約 1.9km の円内

²⁸ 児童館

2005 年 4 月開館。朝日町によって運営されており、希望者は誰でも無料で利用することができる。日祝日の休館日を除き、連日中学生以下の児童で賑わっている。設備は児童書の本棚や机とパソコンにテレビ、遊具として跳び箱や土俵、フラフープに一輪車、卓球台など、内外問わず遊具が充実しているので運動したい子もゆっくりお絵かきがしたい子も満足することができる。ちなみにゲームの持ち込みは禁止されている。主な利用児童は小学校低学年で、中学生以上は数える程度である。

²⁹ おもちゃのドンキ

創業は 22 年前の 1990 年。泊町内では一等地とされる、泊駅前五叉路に店を開く。創業当初からおもちゃやプラモデル、駄菓子などを並べ、カードゲームの大会も開いているため、休日には滑川や石川からも客が来店する。創業から 20 年近く経営しているため、親子 2 代に渡って来店しているという泊町民も多い。

³⁰ 新田商店

1957 年創業。創業当時は雑貨屋だったが、20 年ほど前から駄菓子屋に転向した。品ぞろえは 200 種類以上。そのほとんどを並べる棚はご主人が自ら作った。創業当初は生活拠点が周囲に 5,6 軒あったが、今は向かいの雑貨屋との 2 軒のみ。泊駅前の商業地域は老人には遠いため、地域の支えになっている。

に収まった。だが泊の子供達がこの円の中で日々の生活を営んでいるわけではない。地区内唯一の小学校であるさみさと小学校の校区は朝日町のほぼ全域に及んでおり、各地区から子供達が親に送迎してもらいながら登下校をするため、子供達が円の中で日々の生活を営んでいるという確証は得られなかった。

4-2. 休日の遊び場所

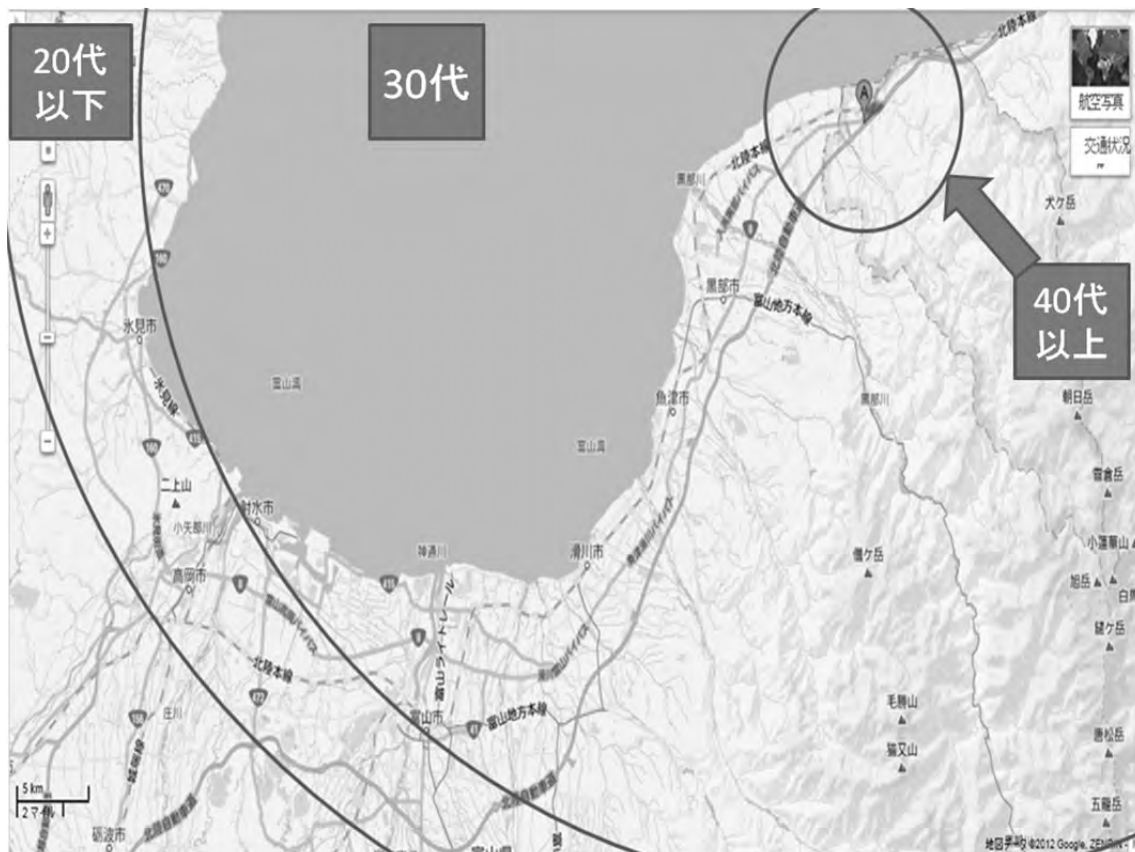


図 2. 年代別の休日の行動範囲



図 3. 富山市近郊の商業施設

20 代以下のほとんどが、休日の遊び場所として富山市郊外や高岡市のショッピングセンターを挙げ、次に魚津や黒部のショッピングセンターが続いた。富山市総曲輪の百貨店に行ったことがある子供もいたが、名前を知らなかったため、富山郊外ほど利用してはいないようだった。

「休日はあまり泊にはいない」（中学生女子）との聞き取りもあったが、もちろん全ての子供が泊を離れるわけではなく、スポーツの練習や試合のために泊に残る子供も存在した。

30 代はまだ富山市郊外の開発が始まる前に子供時代を過ごしていたため、休日は富山市総曲輪や西町に行っていたという意見が多かった。次点は 20 代以下と同じく魚津、黒部、入善の各種ショッピングセンターが挙げられた。40 代頃から休日でも海で遊んでいたなど、週末の行動も平日とあまり変化がないという意見が目立ってくる。50 代頃からマイカーブーム経験世代だが、あまり泊の外には出なかったとの意見だった。60 代以降も休日の行動は平日とあまり変化が無く、泊から外に出る場合も年に数回総曲輪に行く程度の様子だった。

5. 年代別の主な行動範囲

10 代以下は「小学校の教育方針で小学生だけで朝日町の外に出ることは禁止されている」（小学生女子）との通り、朝日町外に出たという聞き取りは得ることができなかった。記録としては泊地区から笹川へと抜けるトンネルまでや、国道 8 号線沿いのコンビニエンスストア辺りまでだった。

10 代から 30 代は、入善市内の中学校に進学した方が多いため、泊町内から入善中学校及び入善西中学校までという意見が最多であった。

40 代と 50 代にそれぞれ一人ずつ、自転車で富山市内まで行ったとの意見が聞き取れた。「富山駅にロッテリアが開店した時、シェーキを飲むために二人乗りで朝から夕方まで走った」（40 代男性）「富山市内までヒッチハイクで行ったり、当時は電車がストライキを起こすこともあったので、電車に乗れなかった場合は富山市内の高校まで自転車で 2 時間半かけて行った」（50 代男性）

60 代以降になるとまだ自転車が普及しきっていないため、主な移動手段は徒歩となり、正確な聞き取りは得られなかった。

なお、「最近友達と電車を使って（富山市内まで）行く」（中学生・女性）との意見もある通り、手段は違えど最長の移動距離に差は見られなかった。

6. まとめと考察

以上をふまえた結果、児童の行動パターンの変化には、3 つの軸があることが判明した。

6-1. いざなぎ景気

いざなぎ景気とは高度経済成長期中の 1965 年 10 月から 1970 年 7 月に発生した好景気の一つである。1964 年の東京オリンピック終了後に発生した不景気を改善するため、政府が建

設国債を発行して景気を刺激したのが始まりである。当時の経済界は貿易や資本の自由化に対応するために国際競争力の強化を行った結果国民の所得が増えたことと、トヨタや日産などの各種自動車工業が低価格の大衆向け自動車を販売したことで、一般家庭に自動車が普及し、この時代の3種の神器と呼ばれるほどの生活必需品となった。このマイカーブームを経験したのは現在の40~50代が子供だった頃である。今回の調査では明確に休日に泊を離れるという意見が得られたのは30代頃からだった。これは、このマイカーブームは初期には都心部で起き、その波が次第に地方各地に広がっていったためと考えられる。その結果、40代頃までは休日にも泊内で過ごしていたのが、30代を期に休日を過ごす場所が泊の外へと広がったと考えられる。

なお、泊地区には1910年頃から泊駅が開通していたが、休日は泊から離れるという意見は少なく、年数回という意見が多数だった。

6-2. 泊地区内の店舗開店

おもちゃのドンキの開店が1990年、新田商店が雑貨屋から駄菓子屋に改装したのが1992年頃。「この町におもちゃ屋がないから作ろうと思った」（おもちゃのドンキ店長夫人）と言うように、おもちゃのドンキが開店するまでは朝日町内にはおもちゃ屋がなかった。開店当初は連日大賑わいだったそうなので、開店当初からその店が泊地区の住民に受け入れられたのは想像に難くない。この泊地区内での経済の変化を経験したのは、2012年現在から約20年前に10代であった30代からである。上記のマイカーブームにより当時は西町や総曲輪で泊地区内では手に入らないものが買えるようになったことと合わせて、泊地区の町民の遊びが変化を始めたのは上記2店の開店も関わっていると考えられる。

6-3. 富山市郊外の開発

現在泊町民が最も休日に訪れる施設である富山市郊外のショッピングセンターは2000年に創業した。次いで2002年に高岡市にもショッピングセンターが開店し、それまで聞き取りにて名前の挙がるが多かった富山市西町の百貨店が2006年に閉店した。そのいずれも2000年代に固まっている。その当時未成年であったのは現在は20代の人達であり、聞き取りに応じてくれた方から下の世代10代と10代以下では必ずと言っていいほど両者の名前が上がり、同時に富山市総曲輪や西町は急激に減少した。

これらの軸をもとに、時代の変遷による子供の行動の変化について考察していく。

まず遊びであるが、30代を境に、ゲームや遊具などのいわば金銭を支払って手に入れる玩具が台頭し、逆にゴム跳びやお手玉、石投げなど、金銭を支払わずとも手に入る玩具を使った遊びは姿を消した。これはショッピングセンターの台頭や、泊地区におもちゃのドンキが開店したことにより、金銭を支払うことでより上質な遊具を手に入れることが可能になり、遊びの選択肢が増えた結果、当時の子供にとってより魅力的な遊びが生き残ったからであると考えられる。

次に行動範囲であるが、40代までは休日にも泊で行動していたのが、これも30代を境に富山市内まで行動範囲を爆発的に広めている。これは自動車の普及とともに休日に家族で朝日町を出ることが容易になり、より経済的基盤の強固な富山市内へと余暇の消化先を選ぶようになったため

と考えられる。2002年に高岡市にショッピングセンターが創業したことにより、20代以下の行動範囲が高岡市まで伸びたことからそのことが顕著に表れている。

以上の考察の結果、泊在住の児童の生活文化は、時代情勢や地域開発に左右されていることが読み取れた。

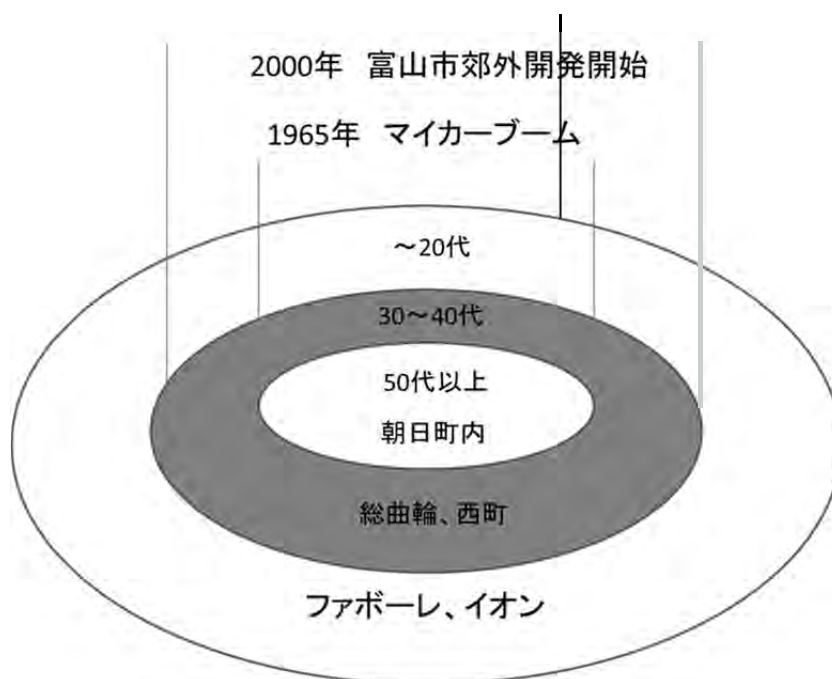


図4. 泊の子供達の周りで起きた変化と行動範囲の相関図

謝辞

最後に聞き取りに応じていただいた泊町民の皆様、ならびに敷地内での聞き取りを許可してくれ、見知らぬ人に話しかけられて警戒する子供達に事情を説明してもらうなど、今回の報告書作成に協力してくれたおもちゃのドンキの皆さん、敷地内での聞き取りを許可していただいた児童館管理人のお二人、そして自身も聞き取りに応じてくれ、迎えに来たご両親にも聞き取りをお願いするなど報告書作成に貢献してくれた子供達への謝辞にてこの報告を締めさせていただきます。ありがとうございました。

参考資料

都道府県別統計とランキングで見る県民性 <http://todo-ran.com/t/kiji/13726>

朝日町史 歴史編

All About よくわかる経済 いざなぎ超えとは？いざなぎ景気って？ (<http://allabout.co.jp/gm/gc/293430/>)

13. ビーチボールが形成する朝日町のスポーツ文化

清水 隆広

はじめに

趣味や娯楽の多様化が見られる昨今において、全国各地で人々の日常生活に根付いた、様々な文化が存在する。一般的には馴染みのないものであっても、その地域の住民からすると日常にかかせないものであり、当たり前のもので捉えられている。それはスポーツでも同じことがいえる。

サッカー、野球といったメジャースポーツが多くの人々を熱狂させるのと同様に、競技人口がメジャースポーツと比較すると少ない、マイナースポーツ³¹と呼ばれるスポーツが地域に根付いている場合がある。今回は朝日町発祥のスポーツであるビーチボールという競技に着目し、マイナースポーツに分類されるこのスポーツがどのようなものであるのか、そして地域文化にどのように根付き、影響を与えるかということを報告する。

本報告は、まずビーチボールという競技がどのようなものなのかということ、ビーチボールではどのような練習が行われているのかを見ていく。そしてビーチボールを統括するビーチボール協会の活動内容やビーチボールが行われる大会について報告する。その次にビーチボールによって形成されているコミュニティ³²及びネットワーク、そしてビーチボールが置かれている現状を述べる。それらを踏まえて最後に考察を行う。

1. ビーチボールの概要

本節ではビーチボールという競技について説明する。まずビーチボールの誕生から現在に至るまでの歴史を紹介し、次にビーチボールの競技ルールについて紹介する。そして最後にビーチボールという競技が富山県外ではどれくらい普及しているのかを述べる。

1-1. 歴史

前述したようにビーチボールは朝日町発祥のスポーツである。1977年に朝日町に文化体育センターができたことをきっかけに朝日町の教育委員会と体育指導委員協議会らによって「町民ひとり1スポーツの推進」という目標のもとにニュースポーツの考案が提案され、翌年に体育指導委員協議会によってビーチボールという競技が発案された。

³¹ マイナースポーツという言葉は一般的に使用されることが多いが、明確な定義が存在しない。本報告においては「マスメディアなどの情報媒体で取り上げられることがほとんどなく、世界的に知名度が低いスポーツ」と定義づけて述べていく。

³² 本報告では、「地区単位での人と人とのつながり」をコミュニティ、「地域を超えた」と人とのつながり」をネットワークと定義づけて述べていく。

ビーチボールはバレーボールに似た競技なのだが、これは朝日町でバレーボールが盛んであったことと関連する。朝日町町民が好きなバレーボールに似ていて、子どもから高齢者までできる競技を考案しようということから発案されたものである。また、考案された当初はビーチボールという名称ではなく「ビーチバレーボール」という名称が使用されていた。³³

その後、朝日町の体育協会を通じて各地区の体育指導員によって各地区の人々に普及され、1979年に第1回朝日町ビーチバレーボール大会が開催された。その1年後の1980年には富山県砺波市で開かれた第1回富山県ウーマンフェスティバル婦人スポーツ大会において本競技が種目として採用されており、この時点で富山県内に普及しはじめていたことがわかる。

1983年には全国の体育指導委員を統括する全国体育指導委員連合によって開催された「みんなのスポーツ全国大会」というイベントで競技の誕生とそれまでの活動内容が紹介されることとなった。

翌1984年には朝日町で「みんなのスポーツ全国大会」が開催されることと本格的な活動を行うために、朝日町ビーチバレーボール協会（現朝日町ビーチボール協会）が設立された。そして同年に朝日町町制施行30周年を記念して「第1回全国ビーチバレーボール親善試合（現全国ビーチボール競技大会）」が開催された。

1994年には全国大会の60歳以上の部門を、「第1回翡翠カップ全国ビーチボール大会」としてリニューアル開催することとなった。これは競技人口の拡大と普及した県が増えたことなどによって全国ビーチボール競技大会の参加者が増えたことと朝日町町制施行40周年の区切りの年で、朝日町に文化体育センター（サンリーナ）が新装されたことからである。

競技性が高まるにつれて、新規参入者へのハードルが高まる恐れをビーチボール協会が考慮した結果、2003年にはチーム同士の交流などを狙った初心者も参加しやすい「“フレッシュ”ビーチボールお楽しみ大会」が朝日町で開催されるようになり、現在に至っている。

また、このビーチボールは競技自体や携わった人、団体が多く表彰されている。1979年ビーチボールを考案した朝日町体育指導委員協議会が富山県教育委員会より表彰を受けたのを皮切りに数々の表彰がなされている。中でもビーチボールの普及発展に大きく貢献した朝日町ビーチボール協会廣田副会長は文部大臣賞（現文部科学大臣賞）をはじめとした数々の表彰を受け、大家庄ビーチボール愛好会は文部省（現文部科学省）により生涯スポーツ優良団体として認定されている。このようにビーチボールという競技が全国的に見ても優れたマイナースポーツと認識されていることがわかる。

1-2. ルール

ビーチボールは名称から砂浜などで行われるビーチバレーと勘違いされる場合があるが、ビーチボールは屋外ではなく屋内で行われる競技である。また、ビーチバレーは1チーム2人で行うのに対してビーチボールは1チーム4人となっている。

³³ 1991年にビーチバレーと混同することなどを理由に、ビーチバレーボールから現在の名称である「ビーチボール」に変更された。

コートはバドミントンのダブルス用と同じ大きさのもの（1240cm×610cm）を使用して行われる。ネットの高さは 180cm とバレーボールより低く、バドミントンより高いものとなっている。ただし、ビーチボール用のネットがない場合はバドミントン用ネットを使用することもある。

サーブは上からではなく下から打つアンダーサーブであり、レシーブ側は 3 回までボールを回すことが許されている。ただし、相手のアタックをブロックする際にボールに触れるワンタッチもこのレシーブ回数に含まれ、またレシーブ中に自陣側のネットにボールが跳ね返った際にはもう一度レシーブをすることが可能となっている。そして、ボールが腰より下に当たった場合は「リフティング」という反則となるため、腰より上の部位でボールをレシーブする必要がある。これはバレーボールにはない、ビーチボール独自のルールである。

得点は 1 セット 9 点の 3 セットマッチで行われる。つまり、2 セットを先にとったほうが勝利となる。得点方式はサーブ権を所持している側のチームがポイントを取った場合に 1 点が加算され、サーブ権を所持していない側のチームがポイントを取った場合はサーブ権が移行されるという方式を採用している。これは、1999 年までバレーボールで採用されていたルールと同様の方式である。両チームが 8 点同士になった場合は「デュース」となり、2 点差がつくまで続けられる。ただし、大会運営の関係で現行のバレーボールと同じサーブ権の有無関係なしにポイントをとった側に 1 点が加算されるラリーポイント制が採用される場合もある。

1-3. 普及している県

ビーチボールは朝日町のみならず全国的に展開している。ビーチボールの公式球は日本ビーチボール協会から販売されている。各県で購入された数をグラフとした(図 1)。

販売数が 100 以上を超えている地域では定期的にビーチボールのチームが練習をしているということがうかがえる。

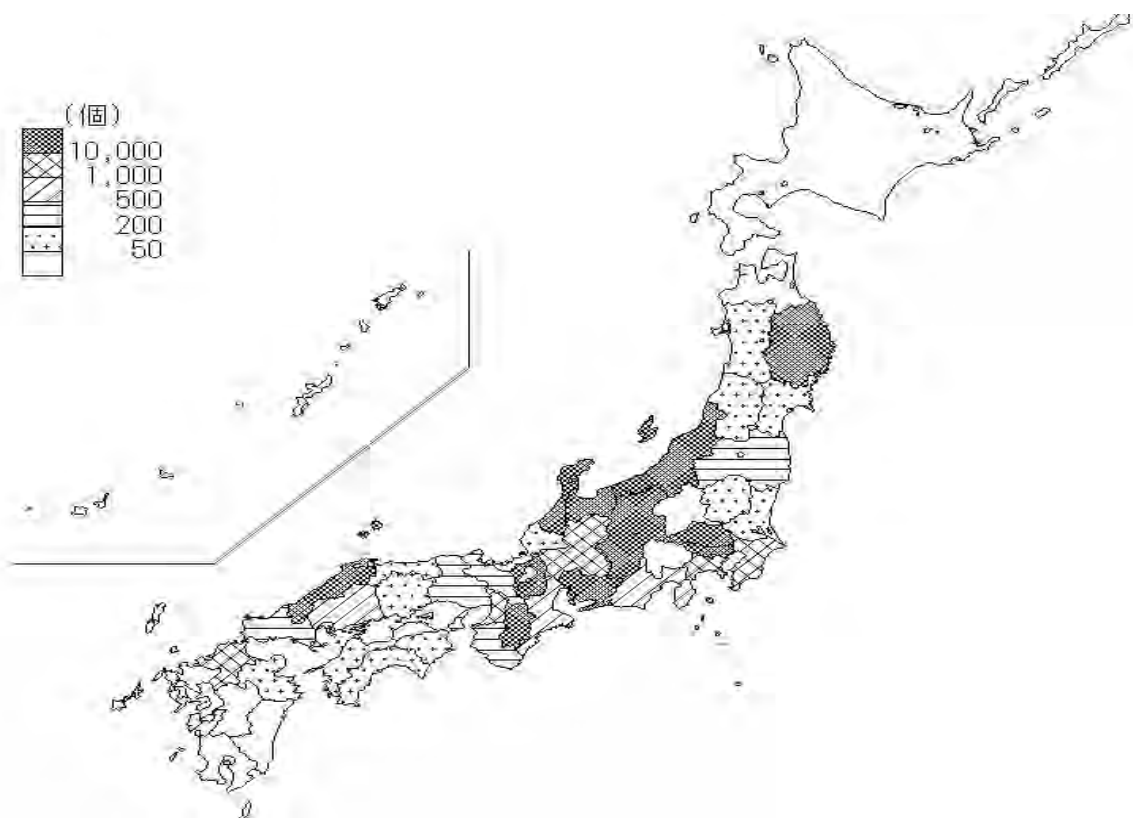


図 1. 県別ビーチボール公式球販売数

1-4. 特徴

ビーチボールの特徴として特筆すべき点はボールにある。ビーチボールは競技形式こそバレーボールとほぼ同じであるが、柔らかいビーチボールを公式球として採用しているため腕にかかる負担が軽減されている。成人男性が力強く打ったアタックを直に受けた場合でも、後々に^{あざ}に^{あざ}なることもなく受けた直後にヒリヒリするような痛みを感じる程度で済む。また、ボールが軽いことでバレーボールよりも滞空時間が長い。そのため、バレーボールをやっていた人でも最初はボールの感覚に戸惑うといったことがある。バレーボール経験者の20代の女性は「(はじめてやったときは)ボールが思った以上に飛ぶので難しいなと思った」と述べている。ボールを扱うとき、バレーボールは手を握ってしっかりとボールに当てるが、ビーチボールは手のひらを開いた形でもレシーブが可能である。

このようにボールが柔らかく、滞空時間が長いという点から高い瞬発性が求められないので手軽にできる。60代男性は「手軽にできるということは大きな魅力だと思う」と話す。他にも多くの人がこの「手軽さ」というイメージを持っていることが聞き取りからわかった。

その一方で滞空時間が長く、ボールが軽いことでボールが予想外の軌道を描くことがある。そのため、一見アウトに見えるようなボールがインになることがあり、ギリギリのボールはインになる可能性があるのを見逃さずにレシーブすることとなる。また、滞空時間が長いことで、走っていくとボールに間に合うかもしれない、飛び込めば間に合うかもしれないという思いが芽生え

て飛び込んでまでレシーブをするというプレーが多くなる。こういった部分から激しさというものも見られる。50代女性は「バレーボールだと速い球がきて反応できなかったり、どうやっても間に合わないコースに打たれたら諦めたりするが、ビーチボールの場合だと反応ができるし、諦めずに取りに行こうとする。そういった部分では非常に激しい競技だと思う」と語っている。このようにボールの衝撃が軽いことから手軽にできるという側面を持つ一方で、滞空時間が長いことやボールの軌道が変化しやすいということから逆にギリギリのプレーが増える、激しさが出るという側面も持っていることがわかる。

1-5. 服装

ビーチボールをする際の服装は、特に規定はない。練習では動きやすい服装と屋内用のシューズであれば練習可能である。レシーブする際に飛び込むため、膝と肘を守るためのサポーターをつけて行うことが多い。

大会に出場する際には試合中に混乱を及ぼさないために、チームメンバーは服装を統一する必要がある。同じ服装で背中に背番号をつけて識別できるようにする。

2. ビーチボールの練習

ビーチボールという競技の背景やルール、そして普及活動を紹介したところで、ビーチボールの練習について紹介したい。ここでは、朝日町宮崎地区で練習を行っているチーム「みやざき」を例に述べていく。

「みやざき」は宮崎地区にあるカルチャーセンターみやざきで毎週2回（月、金曜）練習を行う。練習時間はおおよそ午後8時から9時半の1時間半である。20代から50代までの女性が主なメンバーで、近所に住む高校生や男性が練習に参加する場合もある。

練習は開始時間の30分前ほどからビーチボール用のネット張りやボールの準備を始める。準備が終わると個々で準備体操を行い、おおよそ開始10分前から円状になってボール回しを開始する。このボール回しはこれといったルールがあるわけではなく、ただ、パスを回していく。これにはボールの感覚やボールへの力加減を調整するという目的がある。また、ボール回し中に世間話などでコミュニケーションを取り合う場にもなっている。

ボール回しが終わるとそのまま実戦形式の練習に入ることもあれば、レシーブやトス、アタックの役割を決めて基本的な動作を確認するといった練習を行ったのちに実戦形式の練習に移る場合もある。

実戦形式の練習は、1チーム4人で9点先取の1セットマッチを行う。ルールも試合に準拠した形で行われる。実戦形式の練習では、基礎的技術が問われると同時にチームとしての連携を深めるという意味合いを持つ。

練習中は「サーブでしかポイント入ってねえじゃんか」といった冗談の掛け合いがあって和やかな雰囲気である一方でプレーに関しては厳しい指示が飛ぶこともある。

このように練習としては準備体操、基礎練習、実践練習というように他のスポーツ競技の練習

と大きく違いはない。

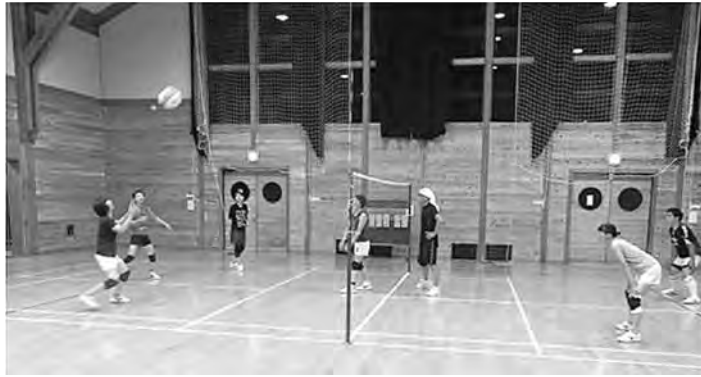


写真 1. みやざきの練習風景

3. ビーチボールの運営

現在、ビーチボールは全国各地にあるビーチボール協会によって管理・運営がなされている。ビーチボール協会の役割は主に大会運営、ビーチボールの普及活動、ビーチボールの審判育成の3つに分けられている。

3-1. 大会運営

ビーチボールの大会には普及している県、地域において独自に開かれる大会や全国大会の予選会有る。各協会はこれらの大会の日程、チームの登録募集、組み合わせなどを決める作業を行っている。大会前には各コートの準備に参加し、大会中の対応などを行っている。

3-2. 普及活動

誕生してから四半世紀ほどしか経過していないビーチボールは現在でも富山県外の地域にビーチボールを知ってもらうための普及活動がなされている。

ビーチボール協会としては、朝日町ビーチボール協会を軸に各地にある都道府県ビーチボール協会が近隣の県に職員やプレイヤーを派遣してビーチボールという競技のデモンストレーションを行うことにしている。そして審判講習やルール説明といった講習を行い、交流大会などを開催する。この大会に隣県のチームや朝日町のチームが招待され、地域を超えた交流を行うことが可能となっている。そういったつながりやビーチボールを知ることによって各地域に普及していくこととなる。また、協会では高齢者や障がいを持つ人などにレクリエーションの一環としてビーチボールを使った遊びなどを各団体や施設に紹介して生涯スポーツとしてのビーチボールを普及させる活動も行っている。

協会以外にも個人による普及もある。朝日町やその他ビーチボールが行われている地域の住民が仕事の転勤などを理由に他地域に移動し、その地域住民にビーチボールを紹介したことによってビーチボールが普及した例があるという。

普及活動とは若干意図がずれるが、朝日町内でもビーチボールをやりたいと思って入ってくる新規加入者に対して練習の場や他のチームの情報提供といったことを行っている。

3-3. 審判育成

新しく普及した地域においては競技者にルールを教えることと同時に大会や練習試合をするにあたっての試合を裁く審判を育成する必要がある。審判を育成するために各地域の協会では審判講習を年に数度開講している。富山県では富山、高岡、砺波、新川の4つのブロックに区分してB級審判の資格認定試験とC級の審判講習会を年に2度、A級の審判認定試験及び講習会を年に1度ずつ行っている。

4. ビーチボールの大会

ここからはビーチボールの大会について述べていく。ビーチボールは大会が月に1度は開催される、かなり活発な競技でもある。ここでは朝日町で開催されたビーチボールの大会について述べていく。

4-1. 大会日程

まず、朝日町で2012年度に開催されている大会は朝日町ではおおよそ1か月に1度大会が開催されていることがわかる（表1）。また、大会の時間は翡翠カップと全国大会以外では夜に行われることが多い。これは、競技者に学生や社会人がいることを考慮して、学校や会社の勤務を終えてからでも参加できるようにという配慮である。朝日町以外でも県や地域で交流大会が開催されている。また、ジャパンカップという3月に開催される大会がある。これは富山県朝日町で毎年開催される全国大会と違い、開催地が固定されておらずビーチボールが行われている地域で順番に開催されていく。2012年度に行われる第19回大会は2013年3月30、31日に愛知県一宮市で行われる。ここからは朝日町で開催された大会について述べていく。

表1. 朝日町で開催される大会及び主だった大会

日時	大会名	会場
4月26, 27日	第15回スプリングカップビーチボール大会	朝日町文化体育センター
5月24, 25日	ジャパンカップ新川ブロック朝日町予選	朝日町文化体育センター
6月3日	第59回群民体育大会ビーチボール競技	朝日町文化体育センター
6月21, 22日	春季“フレッシュ”ビーチボールお楽しみ大会	朝日町文化体育センター
7月7, 8日	第19回翡翠カップビーチボール大会	朝日町文化体育センター
7月19, 20日	第29回全国ビーチボール競技大会朝日町予選	朝日町文化体育センター
8月25日	夏休み小中学生ビーチボール大会	朝日町文化体育センター
9月8, 9日	第29回全国ビーチボール競技大会	朝日町文化体育センター
10月18, 19日	第28回協会長杯ビーチボール選手権	朝日町文化体育センター
10月28日	第25回新川ブロックビーチボール大会	朝日町文化体育センター
11月8, 9日	秋季“フレッシュ”ビーチボールお楽しみ大会	朝日町文化体育センター
12月13, 14日	県レディースビーチボール大会朝日町予選	朝日町文化体育センター
3月30, 31日	第19回ジャパンカップ愛知大会	愛知県一宮市

4-2. “フレッシュ”ビーチボールお楽しみ大会

“フレッシュ”ビーチボールお楽しみ大会は、毎年春と秋に開催される大会である。2012 年度は 6 月 21、22 日に春季大会、11 月 8、9 日に秋季大会が開催された。

本大会は年齢フリーの部と小学生の部に分かれている。年齢フリーの部は中学生以上のメンバーで構成されたチームが年代、性別を問わず（男女混合チームでも可）勝負する部門である。小学生の部は小学生で構成されたチームで勝負する部門である。春季大会では、小学生の部は必ずスポーツ少年団に所属する 3 チームのみの参加であった。

参加資格は、「協会登録者又は朝日町に在住及び勤務（通学）するものであること」となっている。しかし、この資格に該当しない人でも個人参加料を別途支払うことによって参加することが可能である。

本大会は 2 日間にわたり行われ、1 日目は事前に割り振りされた予選リーグを戦い、2 日目にその予選リーグの成績で再度振り分けを行い、決勝リーグを戦う。そして予選リーグ 1 位だったチーム同士の決勝リーグで 1 位、2 位になったチームを表彰する。試合数の兼ね合いから 1 試合 10 分で得点が多い方を勝者とするルールになっている。また、他の公式試合とは異なり、作戦タイムは設けられていない。その一方で選手交代は自由におこなってもよいとされている。

本大会の目的は「ビーチボール競技を、男女及び年齢を問わず、多くの方に楽しんで頂き、チームの交流とビーチボールの普及をより図る事」である。試合形式を 1 セット 10 分にしているのも参加しているチームにできるだけ多くの試合数を重ねてもらいたいからであり、それと男女混合チームも可としていることは男性同士、女性同士だけでは 1 チーム作るのが難しい人たちが手を組んで参加できるようにという運営側の意図がある。また、他の大会であれば大会に参加登録するためにはビーチボール協会に選手登録を行わなければならないが、本大会においては協会に登録していない人でも参加が可能となっている。これは大会で上位を目指すといったことではなく、チームの人たちとのコミュニケーションを取るためであったり、体を動かしたいというレクリエーションのためであったりする人たちにも気軽に参加してもらえるようにという意図からである。大会に参加していた 40 代の女性は「(競技性の高い) 全国大会の予選に比べるとこっちの方は参加しやすい」と述べていた。また 30 代男性は「体を動かすのが楽しいのでビーチ（ボール）をやっている。ただ、それだけだとモチベーションを保てなくなってしまう。そういうことを考えるとこういった大会があるのは何勝するぞとか何位になるといった目標ができて、普段の練習のモチベーションが上がるのでいいと思う」と述べている。このように、協会が意図した狙いに即した大会運営ができていることがうかがえる。



写真 2. 春季大会の様子

4-3. 翡翠カップビーチボール大会

翡翠カップビーチボール大会は先に述べたように 60 歳以上の選手たちの全国大会である。場所は朝日町にある文化体育センター（サンリーナ）で行われる。7 月に開催されることが多く、2012 年度は 7 月 7、8 日に開催された。

翡翠カップビーチボール大会は 60 歳以上男子、60 歳以上女子、70 歳以上男子、70 歳以上女子の 4 つの部門に分かれている。参加チームは県外からの参加者が増えている（表 2）

1 日目にそれぞれの部門で 3、4 チームに構成されたグループリークで総当たり戦をする、「お楽しみふれあい予選リーグ」を行う。2 日目は各グループリークでの順位ごと、つまりグループリーク 1 位のチーム同士、2 位のチーム同士、以下 3 位、4 位という形でブロック分けをし、トーナメント形式で戦う（わくわく決勝リーグ）。1 日目は 10 コートで 146 試合、2 日目は 10 コート 99 試合が行われた。2012 年度大会では 70 代男性のチーム数が少なかったことから特別に 1 つのリーグで総当たり戦を行い、順位を決めるという形式を採用した。

1 日目では、相手を圧倒する試合のように、実力差が出る試合が何試合か見られたが、順位毎に割り振った 2 日目の試合では実力が均衡し、僅差の試合が多く見られた。そのため 2 日目の方では 1 つのミスが大きく試合の流れを変えてしまうこともあり、ミスをしない技術の高いチームが勝ち上がっていった。1 位のリーグに出場した 60 代女性は「(2 日目の決勝トーナメントは負けると敗退になってしまうため) 緊張する。緊張するとミスがでてしまう。そのミスをいかに減らしていくかが大事」と述べている。ミスをせずに着実に点を重ねていくためには高い技術が必要であり、そのためには日々の練習から向上心を持って取り組む必要がある。この大会ではそういった競技性の高さを垣間見ることができた。

その一方で、他県からきた人たちと朝日町の人たちとの交流も重視している。それはグループリークで上位になれなかったチームがそのまま敗退せず、2 日目のトーナメントに参加できるという点からうかがえる。また、1 日目の日程が終了した後に歓迎レセプションが開かれ、出場した選手同士が交流を深めあう場が提供されていた。そこではこのレセプションや試合開始前や試合後の挨拶時、試合の合間などで知り合った人々で会話が行われていた。岩手県から参加していた

60代女性は「毎年ここ（朝日町）に来て、（ビーチボールで知り合った）友達と会うことが楽しみの一つ」という語っていた。

表 2. 第 19 回翡翠カップビーチボール大会の参加人数

区分 部門	県外 チーム数	県外 選手数	県内 チーム数	県内 選手数	合計 チーム数	合計 選手数	前回比 チーム数	前回比 選手数
男子60歳以上	8	41	21	122	29	163	-4	-21
女子60歳以上	20	96	45	228	65	324	-6	-40
男子70歳以上	1	4	4	20	5	24	5	24
女子70歳以上	1	5	8	38	9	43	4	21
合計	30	146	78	408	108	554	-1	-46
前回比	6	28	-7	-44	-1	-16		

4-4. 全国ビーチボール競技大会

全国ビーチボール競技大会は朝日町で開催される全国大会である。9月に開催されることが多く、2012年度は9月8、9日に開催された。

18歳以上、30歳以上、40歳以上、50歳以上の4つの年代を男子、女子の性別で分けた8つの部門に分かれている。参加者の内訳は以下の通りである（表3）

1日目に各部門で予選リーグを行い、各リーグ上位2チームが2日目の決勝トーナメントに進出できる。上位2チームに入れなかったチームは予選敗退となる。2日目は各部門の決勝トーナメントが行われ、各部門の優勝と準優勝のチームが表彰される。

本大会に出場するためには地域の予選会を突破しなければならない。予選会は各都道府県の市町村単位で行われ、そこから各部門1チームのみが出場することができる。ただし、富山県内の富山市、高岡市、南砺市、射水市、朝日町は各部門2チームが出場することができる。また、前年度大会の優勝、準優勝チームはビーチボール協会推薦枠として出場できる。

参加チーム数を見ると非常に多くのチームが参加している。そのため、会場がサンリーナ（写真3）のみでは運営進行が困難となるため、朝日町泊地区にあるさみさと小学校の体育館、またサンリーナに隣接する朝日中学校の体育館（写真4）も会場として使用する。

優勝、準優勝チームは、大会が始まった1984年からの5回（第1回大会～第5回大会）では第1回大会で30歳以上の部（当時35歳以上の部）で広島県大柿町のチームが優勝した以外は富山県内のチームが優勝ないし準優勝を飾っている。その中でも朝日町のチームは毎年多くの部門で決勝進出を果たしている。

しかし、第9回大会（平成4年）にはじめて朝日町のチームが全部門で優勝を逃して以降は、朝日町外の富山県チームが多く優勝を飾っている。また県外のチームの活躍が目立つようになり、第14回大会（平成9年）では男子18歳の部の決勝の対戦カードが東京都と広島県となり、はじめて決勝進出の2チームが富山県外のチーム同士になった。それ以降、県外のチームが決勝に進出することが多くなっている。そして、ここ10年は朝日町チームが全部門で決勝を逃すことが増えており、今回の第29回大会は、男子30歳以上の部において朝日町のチームが優勝したことを除けば、朝日町のチームが準決勝進出を逃している。

このことから、全国大会がはじめられたころは富山県外のチームは普及が始まったところで先に普及が進んでいた朝日町や富山県内の市町村のほうが強かったことがわかる。しかし、それ以

降になると県外のチームが強くなっていき、全国大会でも優勝、準優勝を果たしていくようになっている。このように、朝日町だけではなく、それ以外の地域でもビーチボールの競技性の高まりがみられる。

本大会は予選リーグの上位2チームになれば1日目で敗退してしまうことや、2日目の決勝トーナメントも1回も負けられないということからか、緊張感のある試合が多く見られた。どのチームも1つでも多く勝ちたいという思いでプレーしていることが伝わってきた。

表 3. 第 29 回全国ビーチボール競技大会の参加人数

部門	県外	県外	県内	県内	合計	合計	前回比	前回比
	チーム数	選手数	チーム数	選手数	チーム数	選手数	チーム数	選手数
男子18歳以上	29	139	19	96	48	235	-4	-18
男子30歳以上	25	121	19	96	44	217	-1	-9
男子40歳以上	35	177	19	96	54	273	7	33
男子50歳以上	24	117	17	96	41	213	7	35
(男子 合計)	113	554	74	384	187	938	9	41
女子18歳以上	30	149	17	86	47	235	1	-4
女子30歳以上	21	99	19	101	40	200	3	9
女子40歳以上	40	183	18	102	58	285	4	21
女子50歳以上	35	174	18	94	53	268	1	5
(女子 合計)	126	605	72	383	198	988	9	31
合計	239	1159	146	767	385	1926		
前回比	16	76	2	-4	18	72		



写真 3.全国大会 2 日目 (サンリーナ会場)



写真 4.全国大会 2 日目 (朝日中学校体育館会場)

本大会はビーチボールの観戦に来る人がいるという点で特徴的である。他の大会だと観客はほとんどいないが、本大会ではサンリーナの体育館に設置されている 780 席ある観客席が満席になるほどの観客がいる。その内訳は次の試合まで余裕のある選手たちが多くを占めているが、その中でも試合がないのに観戦している人たちも数十人単位でいる。観戦している人たちは、朝日町や隣接する市町村の予選会で敗退してしまった人、出場している選手の知り合いを応援するために来た人である。2 日目ではそういった人たちに加えて 1 日目敗退者が決勝の様子を見に来る人もいる。朝日町の 60 代女性は「(自分は) 翡翠カップに出場してたけど、今回は知り合いが出場してるので観にきた」と語っていた。

4-5. 夏休み小・中学生ビーチボール大会

夏休み小・中学生ビーチボール大会は小・中学生を対象にした大会である。小・中学生が参加しやすいように夏休みに開催されることが多く、2012年度は8月25日に開催された。

朝日町では小・中学校でビーチボールが授業に取り入れられることがある。それは体育館を9月の全国大会の会場としているため、各学校にビーチボール用の器具があるということも関係している。そのため、子どもたちは授業でビーチボールを体験していることが多い。

小学生1~3年生の「下学年」、4~6年の「上学年」、そして中学生の3つの部門に分けられる。ただし、2012年度の大会では中学生部門のチームがなかったため、2つの部門のみとなった。ルールは公式ルールに則って行われるが、下学年の部門のみ、ネットを155cm（バドミントンのネットの高さ）にし、引率で来ている保護者が助っ人として参加することなどが許可されている。

大会の雰囲気としては家族揃っての体育大会のような雰囲気であった。保護者の方が子どもたちのプレーに対して時には暖かい声援を、時には熱の入った指示を出していた。試合の間には親子でお菓子を食べていたり、他の家族と仲良く談笑していた。チームの引率者としてやってきていた30代男性は「夏休みの行事の一環と思ってる」と述べていた。このように、本大会は勝つことを第一目標にした大会というより親子が一緒になって楽しむ行事という意味合いが強いことがうかがえる。

参加者である子どもたちの意識としては自発的に参加する子どもが少ないということも分かった。男子小学生は「近所のおっちゃんに参加しないかと誘われてきた」と述べていたように、子どもたち自身がこの大会があることを知って、子どもたち同士でチームを作って参加することはないようである。また、子どもたちは普段からビーチボールをやることはないということもわかった。ビーチボールをやり始めてどのくらいになるかという問いかけをしてみたところ多くの子どもはこの大会に出るときだけちょっと練習してくるという回答がかえってきた。それでも、男子小学生が「(試合で) 勝つとうれしいし、楽しい」と述べているようにビーチボールを楽しんではいるようであった。

4-6. 小括

ここまで朝日町で開催された大会をみてきた。翡翠カップや全国大会といった競技者個人またはチームの技術力を披露する競技性の高い大会、“フレッシュ”ビーチボールお楽しみ大会のような試合を楽しむ、他の競技者との交流を目的とするレクリエーションの意味合いが強い大会、小中学生大会のように子どもたちにビーチボールをする場を提供し、そして家族や地域住民と子どもが一緒になって楽しめる行事という意味を持つ大会などがある。ビーチボールの大会と一括りにいっても、様々な種類の大会が催されていることがわかる。スポーツ大会というと1位を目指す競技性の高い大会をイメージしがちではあるが、ビーチボールでは、様々な種類や性質の大会を設けることによって地域間交流や年代を超えた交流の一助となることに成功している。

5. 朝日町住民におけるビーチボール

これまで見てきたようにビーチボールは朝日町だけでなく、全国規模で行われている。本節では朝日町の住民、特にビーチボール競技を行っている人々がビーチボールをどのように捉えているかについて述べる。

70 代男性は「ビーチ（ボール）は朝日（町）が生んだスポーツ。手軽にでき、奥が深い。多くの人にやってもらいたい」と語っている。ビーチボールを朝日町発祥のスポーツであるということを認識し、好意的にとらえていることがわかる。この男性以外にも筆者がビーチボールについての調査を行っている際に、複数人がビーチボールを多くの人に紹介してほしいと述べていた。

また、ビーチボールをはじめて 1 年の 20 代女性は、ビーチボールをはじめて理由として「(友達と) 集まって何か(運動ができるものを) しようと考えたときに丁度よかった」と語っている。このように若い世代が仲の良い人たちと何かしようと考えたときに思いつくものとして捉えられていることがわかる。

さらに、町内の各地区内の交流にも一役買っている。大会や練習では年代関係なく接する機会が多い。若い年代がビーチボールで同地区の他の年代の人と知り合い、交流を深めることによって、その地区で開かれているイベントや祭りに参加していくということがあると朝日町ビーチボール協会の男性は述べていた。

6. ビーチボールと人々の交流

ビーチボールを通して様々なコミュニティやネットワークが形成されていく。ここからは、競技者同士の交流、ビーチボール協会の協会員と競技者との交流の 2 項目に分けてビーチボールと人々の交流をみていく。

6-1. 競技者同士の交流

ビーチボールはチームスポーツなので、練習をするにしても試合をするにしても他の競技者がいないとできない。他の競技者とチームを組むことでビーチボールを楽しむことができる。そのため、まずはチーム内のメンバーとの交流が大切となる。

ビーチボールでチームを組む人は必ずしもチーム結成前から知り合いであったとは限らない。20 年近くビーチボールを続けている 50 歳女性は「10 年ほど前に（現在の）チームに参加した。それまでは違うチームでやっていた」と語るように、初めは違うチームの一員であったが、途中で違うチームに移ってプレイするということがある。違うチームに移ってプレイする理由としては、練習時間が自分の都合に合わなくなってしまっただけで参加できなくなってしまうことやチームメイトとの技術レベルの差があってなかなか試合に出られないからということ、また所属していたチームのメンバーが減ってしまい活動ができなくなってしまうということもある。特に女性チームでは、結婚をし、妊娠、出産という過程のなかでビーチボールの練習に長い間出られなくなり、子育てをしながらはじめてさらに疎遠になってしまうことからビーチボールを辞める人が多くいる

ため、チームが存続できなくなり、メンバーが他のチームに移ることがある。しかし他チームに移った場合でも 60 代女性が「他から来たといってもこのメンバーもビーチ（ボール）で既に知ってるメンバーだったからね」と語るように、大会や練習試合で対戦していて相手を知っているということがあるので、すんなりチームに入っていくことが可能なようである。

また、1 チームだけは作れる人数、つまり 4 人以上はいるが、実戦形式の練習をするために必要な 8 人はいないというチーム同士が合同練習することがある。朝日町に住む 40 代男性は「練習の人数が足りないので近くにあるチームと合同で練習させてもらっている。お互いに練習日を合わせて練習しているよ」と語っていた。合同練習という形をとっているチームは多く、同性の同年代に限らず、性別や年代に関係なく合同練習を行っている地域もある。このように、チームを超えて競技者同士が合同で練習を行うということがある。

大会では各年代別で試合を行うが、会場が同じということもあって、年代が異なる競技者同士の交流も見られた。大会では試合と試合の合間に他の部門の試合の様子を見て応援をしていたり、談笑したりしていた。

地域の大会や全国大会で知り合ったチームと練習試合を行うことで交流を深めることもある。これは、朝日町内のみならず、他県のチーム同士での練習試合が行われる。さらに、他県で開催されている大会に朝日町のチームが特別枠として出場を頼まれるということもある。朝日町から近い新潟県や長野県はもちろん、広島県、福岡県といったかなり遠い地域からも誘いがくるときがある。

ビーチボールの練習、大会以外の場合でも交流はある。大会が終わった後や練習後、あるいは休日にチームメイトとどこか出かけたり、食事をとったりする。大会が終わった後にある男性チームでは「今日は一杯いこうか?」「いいねー!」といった会話がなされていた。

6-2. 協会員と競技者との交流

ビーチボールの大きな特色としてビーチボール協会の協会員と競技者との交流があることが挙げられる。他のスポーツの場合、先に挙げた競技者同士の交流、チーム間交流といったものはあるが、協会の人と競技者に交流があるというスポーツはあまり見られない。ビーチボール協会の協会員が朝日町あるいはその近辺の市町村に住んでいるからという理由もあるだろうが、それ以上に大会を開催している際も協会員の人たちが会場にいて気軽に話せるということが大きく作用しているように考えられる。また、ビーチボールの普及指導をビーチボール協会の協会員が直接行っているため、全国大会では朝日町内の人のみならず他県の人とも会話をする場面も見られた。朝日町ビーチボール協会に属している 30 代男性は「ビーチ（ボール）で知り合った人に町で声をかけてもらうことがある」と語っているように、ビーチボール以外の場においても交流が生まれているということが見られる。

7. ビーチボールの現状

朝日町という小規模の行政区から誕生したビーチボールは全国的に広がりを見せ、様々なコミュニティやネットワークを作り、また交流を生み出してきた。ここからは、ビーチボールの現状について競技性と競技人口の2点から見ていく。

7-1. 競技者の二極化と問題点

ビーチボールの大会の項でも見てきたように、大会でも純粋な強さを競う競技性の高い大会から競技者同士の交流を目的とした大会がある。様々な種類の大会を開催する背景には競技者たちがビーチボールに対して求めるものが二極化しているということが見られる。

ビーチボールは「町民ひとり1スポーツの推進」を目的とした生涯スポーツとして考案された。その目的の通り、子どもから高齢者まで楽しめる競技として朝日町だけにとどまらず全国に普及していった。そして現在も手軽に楽しめるレクリエーションとしてビーチボールを楽しんでいる人は多くいる。70代男性は「身体を動かすのに最適。ビーチボールで身体を動かすことで健康維持にもつながる」と語っている。

しかし、ただビーチボールを楽しむだけではなく純粋に技術を高めて試合に勝ち進んでいきたいという競技としてのスポーツを求めている人とする人が次第に増えていく。バレーボールをやっていた人たちがビーチボールのルールやボールに慣れていくとバレーボールと同様試合に勝ちたいという競技性を目指していくというのは想像できる。バレーボールをしていたという50代女性は「試合に勝つ喜びがビーチボールの魅力だと思う。（自分の）チームは大会で上位を目指す競技チーム」と語っている。また、バレーボールをやっていなかったとしても大会を勝ち上がっていききたい、そのためにもっと技術を高めたいと考える人は多くいる。40代女性は「最初は気軽に楽しめるという点が（ビーチボールを続けたいと思う）魅力だったが、続けていくにつれてこういう場面でもっとうまいプレーができたと思うようになったり、大会で1勝、予選リーグ突破といった目標が出来てきた」と語っている。ビーチボールのような球技スポーツは勝敗を競い合うという側面を持っているため、勝ちたいと思うこと自体は自然であり、そのためにうまいプレーができるように練習に励むことも何ら問題はないことである。こういった高い競技性が出てきたことによってビーチボールのルールや設備が整備されていっているという側面もある。

しかし、競技性が高まることによって競技者の技術だけではなく審判の技術も高まっていく必要が出てきた。プレーに激しさが出てくることによって判定が微妙になってきて、審判がどう判定を下せばいいのか困ってしまうことが発生する。審判が競技者たちのレベルに追いついていないという問題が生じてしまったのである。そのために、審判が判定に迷わないようにと配慮してルールが改正されていく。すると、ルールが改正されていくことによってルールが複雑化してしまふ。例えば2012年度サーブの際の足元についてのルールが改正された（しかし競技者との意見交換の結果、いったん見送りとなっている）。これはサーブの際に軸足は動かしてはいけない一方で軸足ではない方の足は動いてもよいというルールを逆手にとった効率のよいサー

ブをする人が多く現れたことに起因する。こういったルール改正は、新しくビーチボールを始めようとする人たちにルールが複雑だという印象を与え、ビーチボールを敬遠してしまうという問題を起す恐れがある。競技性が高まることで、新しく始めようという層がいざ対外試合を行ったとしてもなかなか勝てなくて、続けていこうという意欲が低下し、そのままビーチボールから離れてしまうということもある中で、ルールの複雑化がそういったことに拍車をかけてしまう可能性がある。

そういった現状に対してビーチボール協会は先に述べたように“フレッシュ”お楽しみ大会という、試合を楽しむことと他の競技者との交流を目的とした大会を開催することでビーチボールを始めたばかりの人たちにビーチボールを楽しんでもらえる環境を提供するといった取り組みを行っている。また、全国大会に出場する際はチーム内に2人以上のC級審判員を帯同させること、といった義務付けをすることで審判の母体数を増やし、ルールの浸透や競技者からの視点をより多くするといった動きも行われている。しかし、一方でルールの改正といった部分ではまだ問題が山積しているというのが現状である。

7-2. 競技人口の変動

できて30年も経過していないビーチボールは何度も述べているように今でも全国各地で普及活動が行われている。各地に普及活動を行い、そこで普及していくことによって今現在も競技人口は増加している。今後も四国、九州地方にも普及していくことによってさらに競技人口が増加することが見込まれる。

その一方で、発祥の地である朝日町では競技人口が減少しつつある。翡翠カップの朝日町からの参加チーム数を見ると第16回大会の22チームをピークに少しずつ減少して、2012年の第19回大会では19チームに減っている。朝日町ビーチボール協会の30代男性も「朝日町内では競技者は減ってきている」と語っている。原因として挙げられるのは、朝日町自体の少子高齢化がある。ビーチボールが出来た当時からプレーしていた人たちが年齢を重ねていき、70代80代になり辞めていっている。全国大会に観戦にきていた70代の女性は「昔は自分もビーチボールをやっていたんだけどねえ、身体が思うように動かなくなってきたから今はやってないのよ」と語ってくれた。この女性のように、高齢になるにつれて身体的な衰えがあらわれ、レクリエーションとしても継続が難しくなり、ビーチボールを辞めてしまうという人がいる。

ビーチボールを辞めてしまう人に対して新しくビーチボールを始める人が減っているということも競技人口が減っている原因の一つである。新しく始める人が減っているのは子どもが少なくなっていることと、その子どもたちの生活スタイルの変化にある。朝日町だけに限らず日本は少子化である。少子化によって朝日町内で新規にビーチボールを始める人たちが減ってきていることは容易に想像ができる。また、昨今の不況、就職難を見てきた保護者たちが子どもたちにいい大学に入学させていい会社に就職させたいという思いから、小学生から塾へ通わせるという選択をするようになった。塾へ通わせないにしても自宅で勉強をしっかりとするというようになった。塾通いや勉強に割く時間の比重が大きくなり、また、子どもたち自身遊びの選択肢が増えた結果、ビーチボールに触れる機会も減ってしまっている。親も子どもにスポーツをやらせる

なら将来プロ選手になる見込みのある競技スポーツを習わせるという傾向もみられる。

このようなことから、朝日町の競技人口は減少傾向がみられる。しかし、急激な減少ではない。ビーチボールの発展の上で重要である競技者の人口を減らさないためにも、今いる競技者たちに続けてもらえるような取組みが必要となってくるであろう。

8. まとめと考察

ビーチボールの特徴は、出来てまだそれほど時が経っていないスポーツであるのにもかかわらず全国的に普及していること、そして朝日町に大きく根付いた文化であるという点である。

この2点からビーチボールという競技の持つ他にはみられない特殊性、そしてビーチボールがもたらす交流の可能性について考察していく。

8-1. ビーチボールという競技の特殊性

ビーチボールでは様々な大会において10歳毎を区切りとした部門に分けて組み合わせを行う。他の競技では、高校生までは、小学生の部、中学生の部、高校生の部という区切り方を行われるが、大学生以上においては成人の部という括りで扱われることが多い。しかし、20代以降10年単位でも体力、筋力の衰えがみられ、プレーに差が出てくる。ビーチボールはそういったことを考慮したうえで10歳毎の区切りを行っている。この区切り方によって、競技者同士の実力の均衡を作り上げ、競技へのモチベーション維持につながっているのではないだろうか。もし、10年単位の区切りではなくもっと大きな年単位であったり、成人の部として区切られていたとしたら、30代以降の人は10代、20代の体力や筋力の差を感じてしまい、ビーチボールを続ける意欲を失ってしまうかもしれない。競技性という側面でなくレクリエーションとしてのビーチボールでも試合に勝つことは喜びであり、ビーチボールを続けていくことのモチベーションへとつながっていく。

さらに、朝日町町長がビーチボール協会の顧問を歴任している。他のスポーツにおいて、衆議院議員のようないわゆる政治家個人が顧問をしているということはあるが、特定の行政区の首長が顧問をするという例は見られない。このように、朝日町町長が顧問として協会の役員に加入することで、ビーチボールは朝日町役場からの継続した支援を受けることに成功している。朝日町役場には「ビーチボール発祥の地 あさひ」というモニュメントが建っており、朝日町役場側からもビーチボールで町おこしをできればという気持ちがうかがえる。

ビーチボール自体にも特殊性が見られる。1節で述べたようにボールが柔らかいことで受ける衝撃が軽くなり、負担が少なくなる。そのため、高齢者でもプレーしやすい。一方で、ボールの軽さによって軌道が不規則になり、ボールの軌道が思わぬ変化をする場合がある。そのため、高い瞬発力が求められ、さらにライン上ぎりぎりを狙ってポイントを獲得しやすいようにするために高い技術も必要となり、競技性の高まりにもつながった。このように生涯スポーツと高い競技性を持ったスポーツの二つの側面を持つことで幅広い層が楽しめるレジャースポーツとして朝日町から日本各地に普及していったと考えられる。

8-2. ビーチボールがもたらす交流の可能性

先に述べたようにビーチボールでは様々な年代、地域の人同士が交流する場として成立している。なかなか他地域の人と実際に出会って知り合うということは仕事や学校の関係で難しいであろうこの現代社会において、朝日町と他地域をつなぐ媒体としてビーチボールは確固とした地位を築き上げている。

また、ビーチボール協会の男性が述べていたように、ビーチボールから離れた場所でもビーチボールで知り合った人と交流することができる。同年代のみの横のつながりではなく、年代を超えた縦のつながりというものは、近年失われてきつつある地域コミュニティを維持することに大きく影響を及ぼすものではないだろうか。5節で述べたように、若い年代がビーチボールで同地区の他の年代の人と知り合い、交流を深めることによって、その地区で開かれているイベントや祭りに参加していくきっかけとなっている。地域内での交流が希薄になっている今、若い年代が同地区の人と交流を深めることで、同地区の人たちがどのような人であるかということを知り、イベントや祭りに参加した際に自分は地区の一員であるというアイデンティティを強く持つことができるようになるからではないだろうか。

このように朝日町においてビーチボールは同年代の交流（横のつながり）、地域内での年代を超えた交流（縦のつながり）、そして年代、地域を超えた交流（空間のつながり）という3種類の交流を可能とする競技であると考えられる。

9. 今後の課題

今回の報告ではビーチボールという競技がどのようなものであるか、そして朝日町という地域にどのような影響を与えているかについて述べてきた。今後の課題はこの考察をさらに検証していくことと、朝日町の各地区での傾向、経験者と未経験者でのビーチボールの認識の仕方、朝日町外の地域でどのようにビーチボールが普及しているかといったことを考えてみたい。今回は朝日町内でも宮崎地区と大会の調査が主となっていたため、他の地区の調査を行っていくべきであろう。また、朝日町内でもビーチボールをしていないという人たちの語りを聞いて、ビーチボールに直接かわからない人たちにとってビーチボールというものはどうとらえられているのかということも考えていきたい。また、競技者が楽しむ「レジャースポーツ」としては発展を遂げたが、他の人が観て楽しむ「観るスポーツ」としてはどうであるかという部分も調査できる可能性があると考えられる。

このビーチボールは文化人類学あるいはスポーツ人類学における調査がなされていない。ビーチボールの調査を深めることによって、日本で1970年から1980年代にかけて生み出された多くのニュースポーツというものが地域文化にどのように影響しているのかといった部分の研究の足掛かりになるのではないだろうか。

謝辞

最後に主観的な感想とお世話になった多くの方々への感謝の意を述べていく。

朝日町で調査をはじめるとき、不安と恐怖が私に渦巻いていた。私にとって朝日町は何の接点もない地であり、誰も知り合いがいないという状態であった。そんな私が調査とっていろいろな話を聞いたり、ビーチボールを経験させていただいたりしたいなどと頼んで果たして大丈夫なのかと思っていた。しかし、そんな不安は杞憂に終わった。突然あらわれてビーチボールについて調査したいと言ったにもかかわらず非常に親切にビーチボールの大会概要や歴史、魅力を教えてください、廣田直人さん。同様に突然あらわれてビーチボールの練習を見学したいと言ったにもかかわらず快く迎え入れてくださっただけでなく練習に参加させてくださった水島靖子さんをはじめとした「みやざき」チームのみなさん。いろいろな大会でお会いするたびにお菓子や飲み物をくださり、練習に参加しないかとお誘いくださった水島美津子さん。調査を応援してくださった永井嘉隆さん。ビーチボールの発足当初からの話など様々なことをお話ししてくださった廣田誼さん。その他お話を聞かせていただいたビーチボール競技者のみなさん。本当にありがとうございました。

多くの人の力添えによって拙いながらも一つの報告書として完成させることができました。

ビーチボールもバレーボールもほとんど経験のない私は、判断ミスや技術的なミスばかりを繰り返してしまい、練習中、皆さんに気を遣わせてしまったり、足手まとい以外の何物でもなかったりと散々な結果ばかりで申し訳ない気持ちでいっぱいでした。それでもやはり練習に行くのが楽しみでした。ただ見ているだけでなく、やってみることで楽しさや奥深さをより感じ取ることができたように思えます。スポーツの楽しみを再確認できた調査であったように思えます。

また、ビーチボールがある場所でみなさまとお会いできることを祈りつつ、報告書を締めさせていただきます。

参考文献

全国ビーチボール協会監修、2006.『はじめてのビーチボールレッスン』、株式会社マガジンランド。127p.

朝日町ビーチボール協会、年代不明『ビーチボール競技の誕生と普及 朝日町ビーチボール協会の経過』3p.

14. 朝市の変遷とその役割

木谷 祥

はじめに

朝日町には、朝市としては唯一の「なないろ朝市」がある。初めてこの朝市を訪れたとき、朝市というイメージにはあまりないお菓子やお寿司等の商品の数々、朝市後の抽選会やラジオ体操、そして何より店と客の距離の近さに驚いた。朝市といえば観光地というイメージがあった私はこれまでに経験した朝市とは違う和気あいあいとした雰囲気に魅力を感じた。なないろ朝市では、他にはないゆったりとした時間が流れている。何度か訪れるうちに、この朝市がどうして今の形態になったのかと疑問と興味を持つようになった。朝市に関わっている人々にお話を聞いていく中で、なないろ朝市には主に朝日町や入善に住む常連の客が多く訪れていることがわかった。このことから、観光というよりは地域住民の生活の中でなないろ朝市が存在しているのではないかと考え、調査に至った。ここでは、朝日町で唯一のこの朝市がどのようにして生まれ、現在人びとの生活のなかでどのような役割を持っているのかということを明らかにしたい。なお、主に朝市に訪れる客と出店している朝市組合員、地域住民を対象に聞き取り調査と観察を中心に4月から10月末にかけて調査を進めた。

1. なないろ KAN について

1-1. 周辺地域

なないろ朝市は、なないろ KAN の入り口にあるもぎたて館で行われている。ここで、なないろ KAN について紹介しておきたい。なないろ KAN は、JR 北陸線泊駅から南方に歩いて小一時間ほどの朝日町横水地区に位置する。周辺には朝日町歴史公園、不動堂遺跡、^{いづぶく}百河豚美術館、まいぶん KAN といった朝日町の歴史と文化を感じさせる施設がある。周辺は農家が多く、田んぼや畑が広がっている。なないろ KAN の建設地ももともとは田んぼであった。先に建てられた歴史公園や不動堂遺跡などの近くに建てることで朝日町の歴史文化施設をまとめた場所となっている。この場所は、「歴史の里」として、なないろ KAN を初めとした施設が隣接し、歴史と文化を感じさせるエリアとなっていることや個々の施設が地域の自然、歴史を活かし地域の魅力を創出していることが評価されている。

1-2. 施設

1997 年 7 月 31 日に有限会社あさひふるさと創造社が設立、同時期に町からの提供により現在のなないろ KAN が建てられた。コンサートにも利用できるレストランの「あじわい館」、朝日町出身の絵本作家である井口文秀の絵本原画が展示されている「みごたえ館」、昔懐かしい蓄音機や 1920 年代のラジオ、レコードプレイヤーが展示されている「ふれあい館」、赤川焼の陶芸

体験や吹きガラス体験ができる工房が併設されている「てづくり館」、講演会や研修会に利用される「まなび館」、朝日町の大工職人の大工道具を展示している「たくみ館」、朝市が開催される広場の「もぎたて館」の7つの館から成り立っている。また、売店では朝日町の特産加工品や土産物が売られており、土日祝日は朝日町を訪れた観光客が多く利用する。平日には地元住民が昼食時にレストランを利用し、子どもたちは学校帰りに寄る憩いの場ともなっている。



地図 1. なないろ KAN の位置と周辺の施設

2. 朝市

2-1. 朝どり市の庄

朝日町にはもともと朝市というものがなかった。なないろ KAN 周辺の横水地区や大家庄地区の農家の女性が自分たちの家で採れた新鮮な野菜を地元の方に売りたい、という地産地消をコンセプトにした動きがあり、現在のなないろ朝市の元である「朝どり市の庄」が1993年（平成5年）に始まった。町は朝市による地域農業の振興として、歴史公園を活動の場所として提供するかたちとなった。この「朝どり市の庄」は1993年から1995年（平成5年から平成7年）までの約2年間、朝市組合（後述）が主体となって運営していた。当時は、7・8月の夏季のみ毎週日曜日の開催であり、当日の朝に収穫されたナスやスイカなどの野菜や果物、切り花、押し寿司など何十種類もの商品が並び、地域住民が多く訪れ、にぎわっていた。出店者は2~3人の個人グループであり、朝日町山崎地区・南保地区・蛭谷地区・^{びるだん}大家庄地区から集まっていた。「朝どり市の庄」は、歴史公園の広場で行われていたこともありテントを各自で建て、机を並べ商品を売っていた。販売スペースには番号が振ってあり、くじを引いてその日の自らの場所を確保して

いた。「客の目に留まりやすい場所や売りにくい場所があるため、それを競うのも楽しみの一つだった。」と当時朝市組合に所属していた 60 歳代女性は語ってくれた。

2-2. 農産加工品の開発活動の側面

当時の朝市について、「今のなないろ朝市よりも加工食品が多く並んでいた。」という語りが得られた。というのも、朝日町には「金糸瓜の粕漬け」など商品化された農産加工品がごく少数だったため、農村女性活性化グループが地元食材を使った特産品を開発しようと活動していたことによる。このときは買ってもらった漬物やうめぼしなどの商品をビニール袋に入れて客に渡していたが、回を重ねるごとに独自のパッケージの開発も進めていった。こうして地域の中での女性活動が活発になる中、町の呼びかけにより地域農業の振興と特産品開発を目標に平成 7 年 4 月「朝日なないろ特産会」が設立された。「朝日なないろ特産会」は朝市組合と連携しており、両方に所属するグループもあった。平成 13 年には、朝日町の各地区の農村女性グループ、農産物生産者団体、漁協関係者等の約 26 組織、200 名が参加する規模となっている。これらのことから、朝どり市の庄は地産地消の村おこしの動きとともに朝日町の特産品開発という意味も強く持っていたと考えられる。こうした動きのなかで、いくつかの農家女性グループはのちに「食彩あさひ」というグループに合併した。そしてこの「食彩あさひ」は 1995 年のなないろ朝市開始時から現在まで出店しており最も長く朝市に関わっている。

2-3. 食彩あさひについて

ここで、朝市に長く関わっている食彩あさひの概要を紹介しておきたい。先述したように「食彩あさひ」は朝市に出店していた複数の女性グループだったのが、合併してできたグループである。このグループは、町の加工施設建設をきっかけとして 2005 年（平成 16 年）5 月から本格的な特産品加工の活動を始めた。加工施設には、みそ加工部門・仕出し加工部門・菓子加工部門の 3 つがあり、それぞれに分かれて活動をしている。味噌や仕出し弁当、切りもち、草だんごなどを販売しており、近隣のスーパーや入浴施設、なないろ KAN などへ卸している。また、地元小学生や幼稚園児に対する食育活動も活発に行っている。これまでに、味噌やたまねぎやの粕漬けなどが特産品としての認証を受けている。

3. なないろ朝市

3-1. なないろ朝市の概要

歴史公園内での朝市を経て、現在は 4 月から 12 月の毎週日曜日になないろ朝市が開催されている。営業時間は午前 8 時 30 分から 9 時 30 分までと厳密に決まっており、主に周辺地域の個人農家の季節の新鮮な野菜や山菜のほか、個人事業の店による焼き鳥、押し寿司や漬物、おはぎなどの加工品（写真 1）やシフォンケーキ、ジャムなどの菓子類（写真 2）などの商品が並んでいる。また、時期によっては、宮崎でとれた魚介の乾物が売られるが出店回数は少ない。客数はお盆の時期と 12 月末に多い。その理由として、切り花やしめ縄を買い、山菜の塩漬けや餅を正

月のおせちに利用する客が多いということが挙げられる。一方で、田植えや稲刈りの時期は客、出店者ともに少なくなる。



写真 1. 地元でとれた山菜を使った押しずし



写真 2. 朝市で売られる焼き菓子

朝市の会場責任者として毎週二人の組員が当番を務める。表 1 にその役割を記載した。組員にはそれぞれの都合で出ることができない週がある場合は、各自の交渉で当番に穴をあけないようにしている。当番の仕事として、販売開始の合図であるベルを鳴らすことや抽選会の司会がある。朝市事務局は、組員と客が気持ち良く始めることができるように通路の掃除やあじわい館の整備をする。

表 1. なないろ朝市タイムスケジュールと当番の役割（2012 年 9 月 23 日の場合）

時間	作業
7:30	朝市会場の掃除
7:50～	8:30 の開店に向けて準備を始める店が続々と集まる。
8:00～	客も続々と訪れ、この時間から売り買いが始まる。
8:30	朝市開始のベルを鳴らす。
8:45	各店にその日の売上と来週の出欠を明記するための売上票を配布する。
8:55	ラジオ体操と抽選会の放送案内をする。
9:00	晴れていれば外で、雨なら館内でラジオ体操を始める。
9:10～	抽選会の開始。
9:30	販売終了。

3-2. 朝市後のお楽しみ会

朝市の後のお楽しみ会としてラジオ体操と抽選会が行われている(写真3、4)。ラジオ体操は晴れていれば芝生の広場で、雨であればもぎたて館もしくはあじわい館で行われる。あじわい館はレストランでもあり、買い物を終えた客がコーヒーや朝食を頼み、ゆったりと過ごすことができる。さて、2006年(平成18年)に多くの人に朝市を楽しんでもらうため、これらのお楽しみ会がはじめられた。当初は、朝市に来た人に無料抽選券を一枚ずつ配っていた。抽選会の景品は出店の際に朝市組合の各店によって出品されるものである。2010年(平成22年)からは、朝市の商品を購入するともらえるスタンプを3つ集めて、名前を書いて応募するというスタンプ制の有料抽選会となる。有料にしたきっかけは、朝市の売上げの向上である。有料にしたことで一人が何枚も応募できるようになったため、一人に複数の景品が当たることもある。過去に4回当たり、最後の特賞も当たった人がいたという。これには他の客からの苦情があり、2か月に1回開いている朝市組合会合で、現在は一人で複数枚出せるものの、2回目以降の当選は無効というルールに決められた。

朝市に訪れる客には抽選会を楽しみに来ている人も多い。子どもたちに話を聞くと、朝市といえば抽選会という声が多く聞かれた。抽選会について聞いてみると「昔は無料で抽選券がもらえたけど、今は300円(正確には3回)買わないと抽選できない」「朝市に行くけどあんまり買わない」と語る。子どもたちにとっては野菜や加工品はなじみ難いと考えられる。したがって、抽選会に参加するためにはより安く手に取りやすいものを買って、スタンプを集める。お小遣いで買い物をしなければならぬ子どもたちにとって、無料抽選会は大きな楽しみだったのではないかと考えられる。一方で、抽選会によく参加するという40代女性は「スタンプ制にすることで、店の売上げがのびるからいいのではないかな。買った分だけ応募できるからいいと思う」と言う。抽選会を楽しみにしている大人にとっては、買い物ができてかつ抽選会にも参加できるというお得感を感じているようである。



写真3. ラジオ体操



写真4. 抽選会

3-3. 朝市組合について

3-3-1. なないろ朝市組合

ここで、なないろ朝市組合について説明したい。現在、24 組がなないろ朝市組合に在籍している。朝市出店者は組合員として登録し、自ら対面販売することを原則としており、原則事前の組合員の下承を得てからの加入となっている。販売するものには厳しい決まりはなく、節度を守ったものであればおおむね何でも許可される。過去には、カブトムシを売っていたこともあるという。2000 円を朝市年会費として、また売り上げの 5 パーセントを事務手数料としてなないろ KAN に納めることになっている。また、今年度からなないろ KAN や JA みな穂など 7 つの企業から協賛を得て活動している。協賛にしたことで、抽選会で特別賞を設けることができた。これまでには、フィットネスジムや大浴場がある朝日町ふれあい施設「らくち〜の」の入浴券や JA みな穂のメロンなどが特別賞として出品され、参加者から好評価を得た。

3-3-2. なないろ朝市組合と地域コミュニティ

出店者は朝日町に限定されておらず、黒部市や入善町などの店も何組もある。現在も朝市に出店者を公募で募集している。「友達から教えてもらって応募した」という入善町の出店者は 5 年前から参加し、現在副組合長である。出店者を朝日町出身限定という規則にしなかったのは、客数の減少と大きく関係していると考えられる。なないろ KAN の周辺地区は農家が多く、家庭で採れる野菜と朝市に並ぶ野菜が同じようなものになってしまう。したがって、周辺の住民は「家で採れるから」という理由で、朝市で売られるものに興味をあまり持たない傾向がある。以前朝市に通っていたが、現在は行っていないという 70 歳代女性は、「(朝市が) 珍しかったからいっぱい買っていたけど、そのうち飽きてしまった。いまはスーパーで食彩あさひの物が買えるから、(朝市には) 行かなくなった」と語った。また、なないろ KAN の近くに住む女性は「こちら辺は、百姓ばかりで野菜は自分で作っているから、朝市では買わない」と語る。この状況を改善するために、朝市組合は朝日町に限らない範囲から出店者を募集し、これまでの朝市では見られない商品も取り入れようとした。このことについて、他の町から朝日町の朝市組合に入ることに抵抗はなかったのだろうか、と思い聞いたところ、抵抗がまったくないというわけではないが組合からの承認があるから、あまり気にならないという声が他町、朝日町在住の両方の出店者から聞くことができた。このことから、朝日町という地域コミュニティの枠は寛容になっていることがわかる。

毎回の朝市で 24 組のうち、多いときは 11、12 組程、少ないときは 7、8 組程が朝市に出店する。店が少ない日は町のお祭りや農協の行事に出店しているためということが多くこのような場合は、前の週に欠席することを伝えているようである。休むことで次の週から出づらくなることはないのか、と聞いたところ「農家で出店している人は野菜が採れない時期はどうしても、出られないから休むこともある」、「毎週絶対に出なければならないというものではないから、次回から出づらいと思うことはない」と語った。このような語りから、朝市組合は出店者に対して強く束縛しないという印象を受ける。

4. 朝市に対する人々の語り

4-1. 常連客の語り

朝市に来る客の多くは常連客である。常連客には入善町から来ている人も多い。常連客にとって朝市はどのようなものなのか、を明らかにしたい。

泊地区在住の女性は、朝市に出店している女性の親戚である。最近、親戚同士の集まりで会い、朝市に出ていることを知って訪れたという。泊地区在住の30歳代の女性は、5年くらい前から月に2回ほど朝市を訪れる。「好きなお菓子のお店が朝市に出店していると聞いて、それを買うことを目的に行く」、また「一度行くと癖みたいになって、何回もいくようになった」と語った。入善町在住の女性は、「友達の口コミで知り、来るようになった。新鮮だから、野菜がおいしくていつも買う」、また「毎週来るのが楽しみ。買い物して、友達としゃべって、情報交換みたいなもの」と語る。入善町在住の40歳代女性と黒部市在住の60歳代女性は「入善にも朝市があるけど、小さいし、こっちの朝市は終わってからゆっくりコーヒーが飲める。こういう場所は近くにあまりないから、ついついこっちに来てしまう」、また「常連になってくると、客同士も顔見知りになる」と語った。また、10年以上朝市に通っている女性二人と最近通い始めたという夫婦は入善町在住で、「同じ村出身で家が近い。今日は、偶然朝市で会ったから、一緒に抽選会に参加していた」女性二人は毎週抽選会のために訪れているという。また、70歳代の横水地区在住の女性は、「朝市は親睦やと思う」と話す。

朝市に来るようになるきっかけは、友達からの口コミや知り合いまたは知っている店が出店しているからという理由がある。朝市での買い物だけでなく、終わった後に一息できる場所があることがまた来たいと思う要因となっている。また、常連客にとって朝市はコミュニケーションの場である。また、朝市は朝日町民だけのものではなく、他の町を含めた周辺地域の交流の場となっていることがうかがえる。

4-2. 朝市出店者の語り

朝日町に店を経営している出店者は朝市で商品を売るようになって3年以上になる。「お店で売っている値段より少し安くしているから、そういうことを知っているお店のほうの常連さんも来るし、朝市ではじめて知って買ってくれるようになる人もいる」、「朝だから、さわやかだしお客さんと仲良くなるのが楽しい」と話す。また、別の出店者は「常連さんでずっと来てくれたお客さんが来なくなったから、どうしたのかと思う」と語る。「知り合いが来てくれるのがうれしい、仕事というより道楽。楽しむために来ている」と話す泊地区に住む方は、「孫が手伝いをしたいといったので、客とのやりとりをすべてさせる。なんでもやらせてみる。」と語る。また、自分の畑で採れた野菜や山菜を売っている女性は、「自分はもう年だから、ボケないように毎週出店している」と話す。出店者にとって朝市はたんに商品を売る場所ではなく地域の人との会話やふれあいを楽しむ場であり、また子どもたちに学ばせることが出来る場所として存在しているといえよう。

5. なないろ朝市の課題

客数の変動について、客や朝市組合の方に語りから明らかにしたい。「なないろ朝市が始まったころは、すれ違うのが大変というほど人でいっぱいだった」と語る人が多かった。また、「富山市や魚津市からも客が来てくれていた。今よりも、たくさん売れて楽しかった。今は人が減ってしまって寂しい」と語る人もいる。なないろ朝市が始まって、数年はとても混雑し人で溢れていたようだ。なないろ KAN という新しい建物、その中での朝市という珍しさから今よりも多くの人が訪れていたと考えられる。また、入善町や黒部市の朝市が始まったため、人が各地に散ってしまったということも考えられる。

また、10 年前までは朝市に行っていたという 30 歳代女性は「おばあちゃんを車で送るのに行っていた。食彩あさひのおはぎとかおいしい」、70 歳代女性は「食彩あさひのかいもちが好きで買いに行っていた。今はアスカ（地元スーパー）で買えるから朝市にはいかない」と語った。長く朝市に出店している「食彩あさひ」は販売事業を拡大し、町のスーパーや農協でも商品を販売するようになった。お話を聞く中で、食彩あさひのおはぎや草もちといった商品の知名度が高いことが分かった。朝市を訪れていた人がしだいに離れるようになった背景として、人気商品のおはぎや草もちが朝市以外の場所でも手に入れることが出来るようになったということも考えられる。また、現在は行かなくなった人からは車がないから、足が痛いからという声もいくつか聞かれ、なないろ KAN は車がないと行きにくい場所にあるという要因もあると考えられる。



写真5. 始まったばかりの頃のなないろ朝市



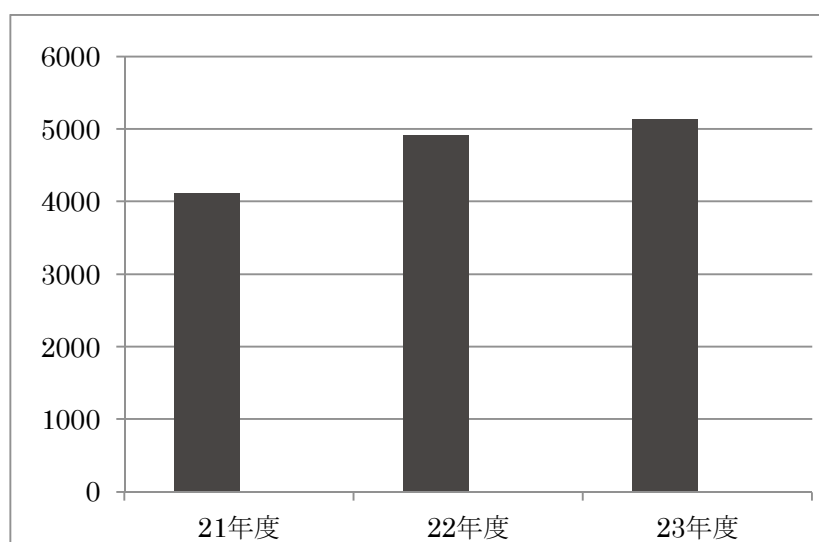
写真6. 現在のなないろ朝市

なないろ KAN 朝市事務局は抽選会の参加人数を大まかな朝市の来客数として考え、その統計を取っている（表 2）。表は 2009 年度（平成 21 年度）から 2011 年度（平成 23 年度）の抽選会参加人数である。これは回収した抽選券をもとに作られている。先述したように、2010 年からはスタンプ制の抽選会になったため、買い物をしていない人は抽選に応募できないことや一人で複数枚出すことが出来るようになった。そのため、実際には朝市に来ているが抽選会に参加していない人は含まれない。つまり、厳密な人数を把握することはできないが、大まかな客数の変動をつかむことができる。表 2 を見ると、落ち込んでいた来客数は徐々に回復していることがわか

る。このような客数の回復の一つの要因として、朝市組合やなないろ朝市事務局による PR 活動が考えられる。朝市組合は近隣の町だけでなく、朝日町全体から来客が欲しい、朝市を知ってもらいたいと考えている。というのも、この周辺地区を離れるとなないろ朝市でどのようなことをしているのかを知らない人が多いからである。朝市に行ったことがない人に話を伺う中で、なないろ KAN という場所と朝市の存在は知っているが何を売っているのか知らない人が多いという印象を受けた。こうした対策として、もぎたて館通路の各店の看板を平日も掛けておき、なないろ KAN に訪れる客に朝市の存在を知ってもらうことや地元小中学校へのチラシ掲示などの他、公共のネットワークを使った PR を行っている。また、これらに加えて秋には感謝祭で地元食材を使った鍋が無料で客にふるまわれる。このように朝市の宣伝効果をねらい様々な工夫がなされている。

表 2. 抽選会の参加人数の推移

(年ごとの 4 月~12 月の参加人数合計、なないろ KAN 事務局資料より作成)



6. まとめ

なないろ朝市は、歴史公園で行われていた農家の朝市が始まりであった。その当時は、地産地消の村おこしの動きとともに朝日町の特産品開発という意味も強く持っていた。しかし、現在では、並ぶ商品が野菜や農産加工品から焼き菓子や焼き鳥など種類に富んだものになってきた。その大きな要因には、朝市組合が朝日町という地域に厳しく限定されず、出店に関して強い束縛がないところはこの朝市の特徴といえるのではないだろうか。また、客の中には常連の客も多く、朝日町以外の地域から来ている人も少なくない。そうした客の多くは買い物だけでなく知り合いとの交流をかねて来ている。これは出店者側も同様でたんに売るだけではなく、朝市に来る客との交流を楽しみにしている。こうした交流が楽しいという声がある中で、常連客ばかりではいけないという声も聞かれた。新しい来客を増やすことは今後も朝市を盛り上げていくうえで重要な課題であるといえる。

また、朝日町というコミュニティ内での村おこしという側面が強かった朝市は、他町を含めた

地域住民の生活の一部へ変遷したということがわかる。そのため、朝市がはじまった当初に掲げていた「朝日町」という独自性は強くなってしまっているように感じる。今後も来客を獲得するためには朝市で「朝日町」をアピールすることも重要なことのひとつだと思うが、常連客や朝市組合員のニーズに応えることも必要である。何度も朝市を訪れて、特に感じたのは、常連客にとって朝市は人との交流の場であるということだ。朝市で始めた抽選会やラジオ体操は、地域住民の楽しみの一つとなっており、主催の朝市組合の人々やなないろ KAN 事務局員にとっても地域住民との交流をはかる重要な場となっている。今後、朝市の形態は流行や社会状況などにより少しずつ変化していくことは十分考えられる。しかし、変化しながらも朝市が長く、地域の住民の交流の一助となり続けてほしいと思う。

謝辞

最後に、今回朝市の調査を行うにあたり、たくさんの方々にお世話になりました。水島様には宿泊所や調理場をはじめ、合宿中何から何まで用意していただき本当にお世話になりました。なないろ KAN 事務局の坂口様、赤川様、朝市組合の皆さま、朝日町産業課の平坂様、食彩あさひの弓野様、その他多くの方にお話を聞かせていただきました。突然訪問することもあり、多忙にもかかわらず、快く迎えていただきました。この調査ではこれまでにない多くの人と出会い、いろんな体験をすることができ、楽しかったです。本当にありがとうございました。

地域社会の文化人類学的調査22
かわりゆく地域とともに生きる—富山県朝日町の文化と社会—

発行日：2013年2月20日
編集：藤本 武
発行：富山大学人文学部文化人類学研究室
〒930-8555 富山市五福3190
Tel.： 076-445-6185
E-mail： anthro@hmt.u-toyama.ac.jp
印刷：(株)なかに印刷
〒939-2741 富山市婦中町中名1554-23